

---

# ポケモン世界に来て適当に(ry

kuro

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ポケモン世界に来て適当に（ry

### 【Nコード】

N1655P

### 【作者名】

kuro

### 【あらすじ】

目覚めたらそこは、ふしぎなふしぎないきもの、ポケットモンスターの世界でした。『元の世界に戻る』、ことはなく、現実世界で培った『廃人』としての知識を使ってその世界を大いに楽しんでいく。そんな主人公の物語です。

そして（ほぼ？）最強のトレーナーになった主人公。彼がシンオウ地方を旅していたとき、とある新人トレーナーである少女と出会います。

ゆっくり進行、主人公組最強系、ポケモンプラチナ主体、外伝の一

部はBW仕様、ゲームとアニメの融合世界観、シロナさんはビミョーにダメナさん、というより、クロナさんですか？バトル要素は少ない、けどリーグ以降では増えます。主人公の伝説ポケモン無双はありません、登場人物の性格が違う。伝説をバトルに使うのは邪道です（ほら、お前だよm9。聞いてるか、そのダークライ使い）

## 第1話 + 第2話（前書き）

思うところがあり、第1話と第2話をつなげました。

## 第1話 + 第2話

「私と……シテください！」

いったい何をですか？

詳しい説明と謝罪と賠償を求めるニダ！  
じゃなかった。

ところで何をナニに変換してもいいですか？

あ、ダメですか、そうですね。

でも、思うくらいはいいよねッ？

ところでディスプレイの前の大きなお友達のみんなはナニを想像したのかな？

あとでオニーサンにコツソリ教えてほしいな。

とまあ、冗談はこのくらいにして。

いったいどうしてこういうことになってるか説明しないとね。

あ、まず自己紹介をしようか。

オレの名前はユウト。

ホウエン地方、恥告げたうん……じゃない、ハジツゲタウン出身のポケモントレーナー。

現在16歳です。

尤も、中身を考慮すると既に40近いんだけどね。

でも、外見は16なんだからオニーサン、いや少年なのです！

この前親戚のちっちゃい子にオジサンって言われて思わずOHANASHIしてしまったんだけど、それは大きなお友達の皆さんとオレとの秘密ということだ。

中身が云々っていう話からだいたい皆さんも分かる通り転生者です、現実からの。

いや、当時はビックリでしたよ。

だって知り合いの人のお店で夜通し飲んで帰ってきて朝そのまま寝て起きたら、赤ん坊だったんですから。

リアルでポルナレフ降臨ですよ。

何を言ってるのかわからなーがボクも何をされたのかわからなかった状態ですよ。

まあ赤ん坊の頃の話は恥ずかしい思い出が多いので省きますけど、重要だったのはここがポケモンの世界だったことですよ。

ポケットモンスター、略してポケモン。

オレは初代からやってました。

初代青・黄、2代目金、3代目エメ、4代目プラチナ、5代目黒とやってきましたよ。

H G S Sはやってなくて、黒はシロナ様の「水着の色はどっちがいい？」で止まっています。

なので、ある程度は知っています。

ポケモンの技とか特性とか性格ね。

で、ポケモンと言えば個体値・性格・努力値の廃人ゲーじゃないですか。

オレもやってましたよ、たくさんタマゴ産ませて、性格・個体値の厳選。

それからダブル用とシングル用でやってたりとかしたんで、ボツクスがいつぱいになったら選考から外れてしまった残念賞なポケモンは逃がしまくっていました。

しかし、それをこの世界でやってたら、「オレってロケット団やゲーチスなんて目じゃないほどのクズじゃね？」と悶々としてました。

ただ5歳の誕生日でしたか、近所にホウエン地方での『ポケモン預かりシステム（パソコンを使ったポケモンの転送等を行う）』の管理を一任されているマユミさんというおb……（ゲフンゲフン）、

キレイなお姉さんがいるのですが、その人にタマゴをもらったんですよ。  
子供心で孵化するのを楽しみに待ってて、いざ孵ると吃驚仰天でした。

かわいい……

プリティレボリューションとでもいうべき衝撃でしたよ、ホントに。それまで捨てることに対して悶々と葛藤してたんですけど、そんな汚物綺麗さっぱり水に流しました。  
たしかジヨウト四天王のカリンのセリフでしたか、

『強いポケモン、弱いポケモン、そんなの人の勝手。本当に強いトレーナーなら、好きなポケモンで勝てるよう頑張るべき』

これを少し弄って人生の至言にしようかと思いました。  
あ、ちなみに、好きなポケモンの1匹であるラルトス だったこともテンションupに拍車をかけていました。

で、なんだかんだいいつつ、8年ほどでハウエン・ジヨウト・カントー・ナナシマを旅してきました(ナナシマ地方はFRLGという1〜7の島、アニメでいえばオレンジ諸島にあたります)。  
んで、しばらくぶりにマサラタウンのオーキド博士に会ったら、

「シンオウ地方に一緒に行かんか？」

と言われてそのまま拉致られました。

や、だって返事聞かずにフシギダネのねむりごなを浴びせられて、気がつけばシンオウに向かう船の中っておかしくないですか？  
文句を言ったら、

「お前のママさんとラルトスには了解を取ってある」

って返ってきました。

や、なんでラルトスに聞くの？

オレに聞いてよ、そういうのは。

それにラルトスも母さんも勝手にそう言うのは止めてくれない？

や、ここまで来たらどうしようもないけどさ。

ちなみになんでオーキド博士と知り合いかというとオレがハウエン  
図鑑を（ほぼ）完成させたからなんだよね（ちなみにハウエン図鑑  
もらったのはセンリさんに相談したから／さすがにデオキシスやジ  
ラーチとかはムリだったんだけどラティ兄妹なら仲間にしたんだな  
！）

話を元に戻して、やってきました、シンオウ地方。

船が着いたのはマサゴタウンという町の一つ。

町の名前とかって正直あんまりよく覚えてなかったんですけど、博  
士の知り合いの研究所がこの町にあると聞いて把握。

あのダンディーなオジサマですね。

たしかデパートの地下でフェンセンベイが売ってないとかで涙した  
り、別荘で家具を買ったら勝手に上がり込んでくる人たちの1人。  
そんなことを思い出しながら博士の後を付いていくと、大きな研究  
所に到着。

そのまま研究所の主であるナナカマド博士を紹介されました。



それから、どうも新人トレーナーが最初のポケモンをもらっていたようでした。

ヒカリちゃんにジュンくん、コウキくんの3人です。

ブラチナをやったことがある身としてはこの3人より年上ということに何とも言えない感じがしました。

尤も、RSE・FR・LG・HG・SSの男女主人公とライバルさんたちがみんな年上なので、そっちについてもアレですけど。

「今まで旅した地方の図鑑はほとんど完成させている上にポケモンリーグでも上位に入賞するとっても素晴らしい腕を持っておるトレーナーなんじゃぞ」

博士、できればそういう紹介はしないでください。

あゝ、ほら、こう『すごい』とか『憧れる』みたいなキラキラした目で見られるとこっちがすっごく恥ずかしいから。

「(ユウトったらいい加減慣れたら?)」

「こおら、また勝手に出てくるんじゃない」

「(だってヒマだったんだもん、いいでしょ?)」

「あゝ、ハイハイ。わかったよ」

普通にラルトスと会話が成立してそうな雰囲気醸し出すオレたちに吃驚仰天な一同。

その場は「なんとなくわかる」ということにしておいた。

すると、先程にもまして尊敬の視線が入り混じっていました。

とにかく、その場は図鑑もらってトットとトンずらしました、恥ずかしかったので。

ちなみにラルトスとは意思疎通出来てます。

ラルトスの声が何やら頭の中に響くんですよ。

んで、ラルトスも“きもちポケモン”だから、オレの言葉を感じ取  
つてくれんですよね。

ちなみにこのことは誰にも話していません。

なんとなく、知られれば将来厄介な事柄に巻き込まれそんな予感が  
したりしますからね。

それからラルトスも普段はずっと外に出しています。

話し相手がいない旅つてのは滅茶苦茶寂しいですからね。

つと、随分導入が長かった気がします、そんなこんなでシンオウ  
地方で図鑑を集める片手間にジムバッチを集めながら、ハクタイシ  
テイのポケモンセンターでポケモンをチェックしてもらっていると、  
いきなり後ろから声を掛けられて、

「私と……シテください！」

と言ってナナカマド博士の研究所で出会ったヒカリちゃんが腰を9  
0°まで折るほどにお辞儀して頼み込んでいる、という今の状況に  
つながったわけです。

\*

「なるほど、そういうことね」

ひとまず昼食を摂りながら事情を聞いてみると、あれからクロガネシティとこのハクタイシティ、2つのジムを回ってジム戦をしたらしいが、どうやらコテンパンに負けてしまったらしいです。その際、いろいろと厳しいことを言われたようで、出会ったところのような快活さはすっかり生りを潜めていました。で、そんな折、このハクタイシティでオレを見かけてオレに特訓を施してほしいんだそうです。しかし、ポケセンで見かけて即アタックしてくるとは……。

「（即断即決なんて凄い子ね）」

確かに、この決断力はこの子の武器だね。

「じゃあ、いくつか大事なことを聞こうかな。まず1つ目、キミはポケモンは好きかな？」

その質問に体育会系もかくやというぐらいの気合いの籠もった返事をしてくれませう。

でも、周りのことも考えてくれると助かるかなあ。

ヒカリちゃんの声のおかげで『なんだなんだ？』とこのテーブルに注目が集まっています。

恥ずかしいから指摘したいんだけど、こんなことで話の腰を折るのもアレだし……。

「（いい加減その恥ずかしがり屋はなんとかしなさいよ。ホント、何年経つても変わらないわね）」

「……次、キミの手持ちのポケモンたちは好きかな？」

隣に座るラルトスのボヤキを意図的に黙殺しつつ、この質問を投げ

かけると、先程同じ返しをしてきました。  
だから、周り……。

「でも、ポケモン勝負には勝てないんだよね？ それでも好きなの？」

「それでも好きです！ だって、こんなあたしのことを慕って  
くれているし、一緒に居てくれるから……！」

これなら……なんとかかなりそうかな。

「（そうね、ユウトの方針に反発するようならユウトが監督する  
とかムリなもの）」

ラルトスも頷いてくれる。

ここまでポケモンに真摯に向き合えるならきつといいトレーナーに  
もなってくれるにちがいない。最後の失礼な質問を陳謝してオレは  
この格言を持ち出した。

『強いポケモン、弱いポケモン。そんなの人の勝手。トレーナーな  
ら、自分の好きなポケモンで勝てるよう努力するべき』

「これはオレの中の格言の1つなんだ。ポケモンというのは本当に  
奥が深い。トレーナーの育て方1つで星の数ほどの違いを見せてく  
れる。ただ、その中で絶対に必要なものというのがトレーナーのポ  
ケモンに対する愛情なんだ。それがなければたとえどんなに育て  
方をしたところで、ポケモンは強くなれない。いや、そのポケモン  
が持つ真価を發揮出来ないと言っべきかな」

「あら、何やら興味深い話をしているようね」

オレの話に突然乗ってきた声。

そちらを見ると黒いドレスのようなコートを身に纏って膝まであり  
そんな長い金髪を特徴的な髪留めでとめている1人の女性が……っ  
て!?

「シロナ……さん!？」

吃驚です。

いきなりなんだもん。

そりゃあ彼女とのファーストコンタクトはハクタイシティだけどさ  
あ。

まあでも、「シロナさま!？」とか言わなくて(言いそうだったけ  
ど)良かった……。

「(ユウト、その思考は変態よ?)」

(やかましいわ! つか、勝手に人の頭の中を読むんじゃない!)

「(わたし、“きもち”ポケモンなのよ? その辺は察しなさい)」

なんていうやり取りを脳内で繰り広げつつ、周りを見てみる。

すると、ただでさえヒカリちゃんのおかげで注目の的だったのに、  
ここにシンオウチャンピオンのシロナさんが来たら……

ざわ……ざわ……

ざわ……ざわ……

ざわ……ざわ……

なんだかいろんな視線がこちらに向けられて大変なことになってい  
ます……。

ヒカリちゃんも周りの様子に気がついたようで、啞然+アワアワしている様子。

しかし、当のシロナさんは、

「ねえ、その話、もっと聞かせてもらえる？」

全然気にしてねえ。

あんだ、こんなに周りが騒がしいのに気にしないのか。  
前世小日本人なオレはすぐさま逃げ出したい。  
ということミッシヨンスター。

「モウカザル、キミに決めた！」

するとベルトにつけられていたモンスターボールから出てくるモウカザル。

ちなみにお分かり人はお分かりの通り、サートシ君の丸パクリです。  
ちなみにサートシ君のモデルのレッドさんはゲーム通りだったので、  
被ってはいません。

「モウカザル、悪いけど後片付け頼む。すぐ迎えに来るから。ラルトス！」

「ラル。ラル〜！（ハイハイ、わかったわ。テレポート！）」

そのまま、モウカザルを残して全員テレポートでその場を離脱。  
その後食器等をかたしたモウカザルをラルトスがまたテレポートで回収しました。

\*

「すみません、シロナさん、ヒカリちゃん。勝手にこんなところに連れて来ちゃって」

レポートしてきたのはハクタイの森の一角でした。

ちなみに薄暗い森の洋館のあるところではなく、ゲームで抜け道のようになっているところです。

「それはいいですけど」

「そうね。私も構わないけどどうして？」

いや、人込みが苦手なんですよ。

あんな注目の的とかは特に……。

シロナさんはよく平気な顔してますよね。

「周りはもう気にならなくなっちゃった。それにそう思うなら、

周りは人間などという俗的なものではなくて全ておイモか何かだと思えばいいのよ

」

……オイ、なんだこのシロナ様は……。

確か部屋の片付けが苦手でお茶目で恥ずかしがり屋で子供っぽいところがあるけど、明るい性格じゃなかったのか？

なんでこんな黒いんだよ。

おまけに最後のセリフのときの笑みはまるつきり悪女じゃないか。これじゃあシロナ様じゃなくてクロナ様じゃないですか。

オレの中のシロナ様のイメージが絶賛崩壊中なんだけど……。

「(ねえ、ユウト、本当にストーカーとかしてないわよね?)」

……ワザとだよな?

うん、口が吊りあがってるからワザとだな。

だいたい、オレはお前とずっと一緒にいるんだから、そんなことはしていないってわかってるはずだし。

ということ、また無視を決めつつ、これ以上シロナさんのイメージを壊されたくないため、話題を他のに変えます。

「そついえばどうしていきなりオレたちに?」

「うーん、一つはあの言葉かな」

あの言葉と言えばオレの至言かな。

「それから、もう一つはキミ自身に興味があつたんだよ」

「オレに?」

「そう。ホウエン・ジユウト・ナシマリーグチャンピオンでカントー準チャンピオンであるユウト君、キミにね」

あれ、なんでそんなこと知ってるんだ?

ポケモンってその地方外の情報って普通はなかなか入ってこないみたいだし、いくらチャンピオンといえども……。

てかなんでオレの名前を知ってるんだ?

「この前ナカマド博士とそれからオーキド博士という方にお会いしてね、キミのことを聞いたんだ」

さいですか。

博士エ。



「それに知ってる？ オーキド博士が仰ってたんだけど、キミのあの言葉は今じゃキミの旅した地方では大流行だそうよ。チャンピオンやそれに近い人が言う言葉だし、アナタ自身もそれを実践してるみたいだしね。その言葉を聞いた人にとってはよっほど衝撃的だったらしいわよ」

えっ、そうだったのか。

「（自覚なかったのね。ちなみにその言葉ってポケモンたちにとっても、嬉しい言葉よ。その言葉を実践してくれるトレーナーなら、きつとどんなトレーナーでも、ポケモンたちはついていくわ。だから、その言葉が流行ってくれるなら、一ポケモンとしては嬉しい限りね）」

そーだったのか。

とにかく、リーグ優勝したら、とりあえずそそくさとその地方を脱出して旅に出たりとかしたからそんなことは知らなかった。

や、なんとなく人ごみという点でマズイかなという予感がしたからね。

事実、チャンピオンのシロナさんは街中で現れるだけでちょっとした騒ぎになるみたいだし。

ていうか、これってもとはカリンさんの言葉なのに……カリンさんゴメン。

「で、いろいろな地方のリーグを制覇し回っているキミのことだから、きつとこの地方のリーグにも出場するのかなって思って、各地のジムを回ってキミのことをジムリーダーに聞き回って探してたら、ここで見つけたってわけ」

意外にアグレッシブだな、この人は。  
神話研究の考古学者ってみんなこうなのか？

「あら、よく私が考古学者だって知っているわね」

その筋では若いのに一角の研究者だと評判のようで……ん？ どうかした、ヒカリちゃん、口をそんなアングリ開けちゃって？

「いえ、まさかユウトさんがそんな凄い人だとは知らなくて」

まあ、極力そういうことは人には言わないようにしてるからね。

ま、そんな話はあとにしてとりあえず本題の方に行きますか。  
ヒカリちゃん、手持ちのポケモン全部この場に出してくれる？

「ハイ！ みんな出ておいで！」

空に放りあげられた3つのモンスターボールから出てきたのは、

「ふむ、ポツチャマにムツクル。あら？ このヒトカゲはどうしたの？」

確かに。

ヒトカゲはシンオウ地方にはいないポケモンだし。

それに幾分普通のヒトカゲより小さいし、なんだか様子がおかしいような？

「その子なんですけど、ケガをして置き去りにされていたところを介抱してあげて、ただものすごく元気がない感じだったので、その

ままサヨナラするのも気が引けて、とりあえず手持ちにいられているんです」

ポツチャマとムツクルもヒトカゲを気にかけてます。というより、なにやら励ましているような？

「（ポツチャマたちの話から推測して、どうやらあのヒトカゲはバトルに勝てないからとトレーナーに捨てられたようね）」

「そうなのか、かわいそうに。そんなのはトレーナー自身の責任なのにな」

「（腕のないトレーナーでそこまで自覚出来る人間は少ないわ。でも、それにしてもあのヒトカゲ、かなりの潜在能力がありそうよ。きつとヒカリのポケモンの中で間違いなくエースになれるわ）」

なるほど。

元から、まずやってもらうことは決まっていたけど、益々その重要度が増したかな。

ヒトカゲに近づくとビクツと震える。

ヒトカゲと目線の高さを合わせて頭に手を置く。

「ヒトカゲ、お前のトレーナーはお前を捨てたりなんか絶対にしないから、心配なんかしないでいいんだぞ。むしろ、困ったときにはお前を頼りにするようになるんじゃないかな」

できるだけ優しく声を掛けたつもりだったのだが、なお怯えている。ただそのまま逃げ出すことはしてないから、ぬくもりは求めているのでしょうか？

とすると、この子はちょっと寂しがり屋なのかもしれないね。

「あの、今の話ってどういうことなんですか？」

事態を飲み込めていない様子のヒカリちゃんにオレはラルトスの翻訳した話をきかせた。

シロナさんはなんとなく想像がついていたようだった。

「ゴメン、ゴメンね……」

ヒカリちゃんはその話を聞いてすぐさまヒトカゲを抱き寄せていました。

この『ゴメン』にはきつといろいろな意味があるんだろうな。

「さて、オレがヒカリちゃんに出す1つ目の課題。それはこのハクタイの森で、3日間ポケモンをモンスターボールに入れずに、ポケモンたちと協力して過ごすこと」

なぜ、モンスターボールに入れないのかというと、それぞれのポケモンの性格だとかになが好きだ嫌いだといった個性を知るため。

本当なら期限を区切るということはしたくはないのだが、自分のポケモンたちが大好きなら、だいたいならば把握出来るだろう。

その3日間の過ごし方は、必要ならば町に買い出しに出てもいいし、ヒカリちゃんに全て任せる。

「わかりました。精一杯やってみせます！」

ハクタイの森に元気な声が響き渡りました。

\*

「シロナさんは自分のポケモンたちの個性とか知ってますか？」

興味本位でハクタイシティへの帰り際、シロナさんに聞いてみた。

「うーん、そうねえ。なんとなく、この子はこんな感じなのかなっていうのはわかるんだけど……何か秘密があったりするの？」

流石にチャンピオンだけはあつたりしますね。

いや、実際この着眼点ってこの世界にはないみたいなんだよな。アレがしたいとかアレが食べたいなんていうのは、ポケモンたちはトレーナーに言ったりとかはしなかったから、そういう部分に目が行ってないみたいなんだよね。

「ポケモンには技の得意不得意があつたりします。実はそれが性格や個性の影響を強く受けたりするんですよ」

その言葉に目を見開いたシロナさん。

年上の人を驚かすのってちょっと楽しいですよ。

ちなみにアニメの方はその辺はよくはわからないが、この世界ではゲームとアニメが混在していて、ゲーム準拠な部分も多い。

尤もレベル差があると氷や水4倍の相手にふぶきやハイドロポンプをしても、効果が全くないってこともあつたりする。

「（相変わらず、趣味悪いわよ？）」

ラルトスは年上云々のことを言っているようだった。

「いや、じゃあお前はどなんだよ？」

「（パートナーとのスキンシップは大切よ？）」

「はあ、ああ言えばこう言う。昔はこんな性格じゃなかったのに」  
「（特に親しい人間以外には昔の性格のままよ？ 女は使い分けが大切なのよ）」  
「どこで覚えた、そんな言葉……」  
「（ユウトのママ）」

種族は違えど女の繋がりはどこに行っても変わらないってことですか……。

「すごいわね、本当にラルトスの言葉がわかるんだ？ それに今の性格とかの話つてもものすごい発見なんじゃないの？」

「その件はあまり人に話さないでください。それから、今はあくまでオレの経験と推測のみなので。証明とかも難しいですよ」

「ね、3日後私も行っていい？」

「知りたいんですか？」

「そりゃあね。それにキミがあの子に何を仕込むのか気になるし」

「彼女はダイヤの原石ですからね。そのまま曇らせておくには勿体ない」

「そうね。じゃあ、私も3日後にハクタイの森に来るわ。ヒカリちゃんを待ってる」

そのままモンスターボールを1つ取り出すと、それを投げるシロナさん。

出てきたのは

「ウォーグル、ですか？」

「あら、シンオウ地方にはいないポケモンなのによく知っているわね」

イツシュ地方に住むポケモンで、BWではトゲキッスの代わりにパ

「ティー入りしてましたもんね。  
尤も、実際に見るのは初めてですが。」

「そう。じゃあね、3日後楽しみにしてるわ」

そう言ってシロナさんはウォーグルに乗って飛んでいったのでした。

さて、この間にオレもハクタイジムをクリアしてバッチをもらうか。

## 第1話 + 第2話（後書き）

図鑑の完成とは『出会ったポケモンの数』で計算しています。

また、シダケとハジツゲを今の今まで勘違いしていて、ミツルを（話の上だけでも）登場させていたのですが、ハジツゲということでもユミに変更しました。



## 挿話 1

その人と出会ったのはあたしがナナカマド博士からポケモンを貰ったときだった。

その人は、オーキド博士というカントーという地方の偉い博士と一緒に紹介された。

オーキド博士曰く、その人はポケモンリーグでも上位入賞出来るほどの腕前なのだから。

あたしは、お母さんがポケモンコンテストでの優勝常連者なためか、娘のあたしもコンテストを目指すものだと思っただけで、あたしは、コンテストよりかはリーグの方に心引かれた。理由は、何故かはわからないけどそうだった。

ただ、ポケモンを貰ったばかりのあたしにはまだまだリーグは遠い。だから、彼がポケモンリーグの上位に食い込めると聞いて、素直に憧れたし、あたし自身もいつかそうありたい。そう心から願った。

そうしてあたしは博士に貰ったポケモン、ポッチャマといっしょに旅に出た。

正直、1人旅っていうのはちょっと不安だったけど、ポッチャマが居てくれたから、あまり寂しくはなかった。

そして自力での初ゲット。

これはやっぱりものすごく嬉しかった。ポッチャマと一緒に抱き合っただけで喜んだ。

そこからはあだし、ポツチャマ、そしてムツクル。  
この3人での旅が始まった。

ポケモンリーグに出場するためには、ポケモンリーグが開催される  
その地方で8つ以上のバッジを集めなければならない。

あたしはまず、一番近くにあるクロガネシティに向かうことにした。  
雨が降りしきる中、クロガネシティに通じるクロガネゲートの手前  
で、傷つき見るからに弱っているポケモンを見つけた。

図鑑で調べようにもエラーが出て、このポケモンがどういうポケモ  
ンなのかわからなかった。

でも、放っておくことなんかは絶対にできなかったので、あたしは  
とりあえず手持ちの傷薬を全部使った後、近くのポケモンセンター  
に駆け込んだ。

ポケモンセンターのジョーイさん曰く、このポケモンはヒトカゲと  
いうポケモンで、尻尾に点いている炎が消えると死んでしまうらし  
く、そのまま怪我を負ったままこの雨の中にずっといた状態では、  
死んでしまっていた可能性が高かったそうだ。

誰かのポケモンではなかったようなので、私はこのヒトカゲを引き  
取ることにした。

そしてクロガネシティに着いてからは初のジム戦に挑んだ。

結果はもうどうしようもないというほど、コテンパンに負けてしま  
った。

悔しくて涙が出たのは生まれて初めてだった。

そしてそれはあたしのポケモンたちも同じだったらしく、あたした  
ちはクロガネシティの外れやクロガネ炭鉱で特訓をした。

道行くトレーナーとの模擬戦や技の練習、新たな技の習得とかだ。

そうして新たに挑んだジム戦。

しかし、結果はまたも同じであった。

ジムリーダーのヒョウウタさんに、「クログネだけでなく、違うジムも回るといい」と言われ、そのまま失意のまま、今度はソノオタウンからハクタイシティを目指すことにした。

道行く途中、ヒトカゲの様子も見てみたが、イマイチ元気がないように見える。

それに何やら少し怯えているような気もしないでもないが、よくはわからなかった。

途中、ギンガ団とかいう変な格好をした連中とのいざこざがあったりはしたが、ハクタイシティに着いてあたしたち。

草タイプのジムと聞いて、ムックル・ヒトカゲという草タイプに相性のいい2人で挑んだのだが、それでも、ナタネさんに勝つことは叶わなかった。

それどころかヒトカゲで負けたとき、その怯えた様子のヒトカゲを見て、ナタネさんに『どういう風にヒトカゲと接して来たのか。これではあまりにヒトカゲがかわいそうだ』的なことを言われて怒られた。

あたしは何がなんだかわからず、ただただ謝ってばかりであったため、終いには「トレーナー辞めた方がいい」とまで言われてしまった。

そのまま、ポケモンセンターに戻ってポケモンを預けた後、その日は1日ポケモンセンター内の宿舎のベッドで横になっていた。

翌日も寝ていようとは思ったのだが、なんとか体を起こして外に出てみた。

でも、何もする気にはなれず、ポケモンセンターに戻った。  
すると、一度見たことのある背中を見つけた。  
どこで見かけたのかというと、ナナカマド博士の研究所でだ。

あたしはいてもたってもいられず、というより、何も考えられず、  
だが、

「ユウトさん!!」

その背中に声をかけていた。

\*

あれからユウトさんはあたしに稽古をつけてくれることになった。  
途中、シンオウチャンピオンのシロナさんも現れてビックリしながら  
らも、あたしたちはハクタイの森に来た。  
あたしはそこでヒトカゲについてのことをユウトさん（正確にはユ  
ウトさんのラルトスからユウトさんが聞いたこと）からを聞かされ  
た。

何でも、このヒトカゲは、以前は誰か他のトレーナーの手持ちだっ  
たのだが、普通のヒトカゲより小さく、バトルでも勝てなかったこ  
とから、散々罵られ、捨てられたのだそうだ。

あたしは思わず、ヒトカゲを抱きしめて、「ゴメン、ゴメンね」と  
口にしていた。

そんな人がいたことに。

出会って僅かのユウトさんにそれがわかって、どうしてあたしがわからなかったのか。

そんなあたしのトレーナーとしての未熟さに。

ユウトさんのあたしに出した一つ目の課題。

それはポケモンをモンスターボールに入れずに、3日間このハクタイの森でポケモンたちと協力して過ごすことだった。

人間という生き物にはいろいろな個性を持った人がいて、いろいろな種類の人間がいる。

ならポケモンたちだって同じ生き物ならそれらがある。

だから、トレーナーなら自分のポケモンのそれらは知っていなければならぬ。

「でも、そんなのは一朝一夕では出来ないから、とりあえずはより深く、ヒカリちゃんとポケモンたちが分かり合うことが目的かな。

それが、今言ったことに対してのキツカケになっていくから」

やり方はあたし自身の自由らしい。

というかそれを考えろということなのかもしれない。

シロナさんとユウトさんが去った後、みんなで輪を囲んだ。

ヒトカゲは不安そうにしていたが、2人はやる気に満ちていた。

あたしはヒトカゲを抱き寄せる。

「泥臭いけど、とにかく頑張るしかないわよね」

ポツチャマとムツクルは強く頷く。

それからポツチャマには水場、ムツクルには薪や寝床になりそうな

場所を探してもらい、あたしは一度ハクタイシティに戻った。  
ヒトカゲはずっと肌身離さず、抱えていた。  
そうしてあたしは特にヒトカゲには常にはりつき、常に語り掛けて  
過ごすことを決めた。

\*

久しぶりにトレーナーになってから、そして方面は違えど研究者として、大変お世話になったナナカマド博士の研究所を訪れた。  
するとちょうど客人が来ていたようなので紹介されたのだが、なんとその方はポケモン研究の権威として著名なオーキド博士だった。  
そして研究者としては天と地ほどの違いがあるのを感じながらも、  
2人の博士と同席することになった。

その中でオーキド博士の話は、ある1人の少年の話に終始していた。  
なんでも、その少年はハウエン・ジヨウト・カントーのポケモン図鑑を殆ど完成させてしまったらしい。

ポケモンは全部で600種以上いると言われている。  
その中でシンオウ・イッシュ以外の地方には少なく見積もっても300種以上いるのは難くない。

だから、私も以前シンオウ図鑑の作成に協力していたが、完成とは言わずとも完成に限りなく近づけるだけでも諸手を挙げて賞賛するに値するものであった。

だが、さらに驚くべきことがあった。  
なんと16という若さにしてハウエン・ジヨウト・ナナシマ地方のポケモンリーグを制覇。

カントーでも準チャンピオンにまで上り詰めるという偉業を成し得

たそうだ。

最年少でカントーチャンピオンになったレッド少年の記録は破られてはいないものの、これだけのリーグの頂点に立った人物はいないのではないかと思う。

しかも、ナナシマ以外は行く地方ごとにポケモンを一から育て上げていたらしい。

リーグではそうでもないようだが、それでも捕まえたばかりと言ってもいいポケモンでジムを勝ち抜くとはいったいどういう育て方をしているのか。

一トレーナーとしては非常に興味をそそられる。

彼は今、この2人が依頼したシンオウ図鑑作成のために、シンオウ各地を旅しているらしい。

論文の方は粗方ケリをつけていたため、私は彼に会ってみたいと強く思ってしまった。

各地方のリーグに出場している彼なら、おそらくこの地方のバッチも集めているはず。

ならば、闇雲に探しても仕方がないと各地のジムがある街に飛び、ジムリーダーに聞き込みをすることにした。

ミオシティにはまだ来ておらず、クロガネシティには来たらしい。

その後、ヨスガ ノモセ トバリというルートを辿ったようだ。

ちなみにナギサシティは停電トラブル中で入れなかつたらしい。

ナギサ以外はいずれもジムバッチは貰っているようで、次に確実に現れるのはハクタイシティかキツサキシティのどちらかだろうと思つた。

ただキツサキシティは雪で覆われているため防寒対策が必須な上、シンオウ地方の袋小路の一角であるため、ハクタイシティに向かう方がまだ訪れていないミオシティに向かいやすいという利点があった。

ということでハクタイシティに飛び、ジムリーダーのナタネに会っ

た。

するとそのようなトレーナーはまだここには来ていないらしい。期待半分不安半分で、ちょうどお昼時だったため、久々にポケモンセンターの食堂に行くことにした。

周りの視線を気にしないように、席を探していると、

「強いポケモン、弱いポケモン。そんな人の勝手。トレーナーなら、自分の好きなポケモンで勝てるよう頑張るべき」

そんな言葉が聞こえてきた。

この言葉はオーキド博士の言う少年のポリシーだったらしく、その少年が旅した地方ではその言葉がブームとなつて席卷しているらしい。

シンオウでは終ぞ聞かないそれを聞いたことで、私の足は自然そちらへ向き、

「ねえ、その話、もっと聞かせてもらえる？」

即その少年に声をかけていたのだった。

\*

その少年、お目当てのユウト君の話に私は衝撃を受けていた。正直今まで考えたこともなかったからだ。彼の話には引き込まれる。

新たな世界が開けそうな気がする。



彼はヒカリという女の子を鍛えることになったらしい。

この子は私の勘だけど、素晴らしい才能を持っていると思われた。それこそ将来シンオウのチャンピオンに輝くと言っても不可能ではない気がする。

それが、彼のような人物に師事されたら、どうなるか。

久々に子供の頃のワクワクとした思いを抱いた。

心躍るバトルに思いを馳せながら、私自身、この3日間で彼女に渡された課題を自分でも取り組んでみようと思った。

### 第3話

さてさて、3日が経ちました。  
約束通り、ヒカリちゃんに会いにハクタイの森に向かいます。

ちなみにハクタイジムのナタネさんですが、勝ちました、ほんのつ  
いさつき。

や、いきなり挑むのも負けそうなので、やっぱり対策も考えて特訓  
しないと。

アニメのサートシ君みたく猪突猛進に行くのはちょっと感心しませ  
ん。

ということとで難なくとは言えませんでした、突破した次第です。  
やっぱりジムリーダーはどこに行っても強いですねえ。

ついでになんでか知りませんが、ナタネさんオレのこと知ってまし  
た。

なんで知ってるのか聞いてみると、どうやらシロナさんがあちこち  
のジムリーダーにオレのことを聞き回っていたらしく、すでに評判  
になっているとのことです。

ねえ、あの人なんでそんなにアグレッシブなの？

シロナさんのおばあちゃんがそう育てたんですか？

シロナさんのイメージ（という名の勝手な幻想）がまた崩れた瞬間  
でした。

別にオレは有名になんかなりたくはないので、しっかり口止めはし  
ておきました。

「（わたしも偶にはジム戦やりたいわ）」

とラルトスがオレの頭の上で愚痴を零していますが、彼女以外のジム戦に参加した面々は（と言っても、ラルトス以外の全員が参加したので）一度ポケモンセンターに預けてきました（ちなみにラルトスは7kg近く体重があり、普通なら頭の上に乗った段階で首に致命的なダメージを受けますが、ラルトス自身それを考えて自分をサイコネシスで浮かせているので、オレ自身荷重は掛かっていません）。

なので、今の手持ちはラルトスを含めて、シンオウに来る前にいっしょに旅をしていたポケモンたちです。

まあ、そんなこんなでハクタイの森に入り、適当にさまよっていると、1匹のムックルが飛んでいるのを見つけました。

この森にはムックルは生息していないため、トレーナーのポケモンだと当たりをつけていると、向こうも此方に気づいて下りてきました。

「ムックルムックルー！」

「（ヒカリのムックルよ。付いてきてって言ってるわ）」

ムックルはゆつくりと飛び始め、ラルトスの言葉通り、ムックルの後を付いて行きました。

すると、やや開けた広場のような場所に出ました。

焚き火の後もあり、近くに川も流れていて、野営には絶好の場所でした。

「あっ、ユウトさん！」

「待ってたわ、ユウト君」

倒木のベンチに腰掛けていたヒカリちゃんとシロナさんが、ムック

ルのおかげでこちらに気づいたようでした。

ヒカリちゃんのポケモンで一番気になっていたヒトカゲですが、

「カゲ、カゲ」

ヒカリちゃんがヒトカゲの頭に手を置くとスリスリとヒカリちゃんに頬ずりをしていました。

オマケに3日前とは比べ物にならないくらい生き生きとじていて、楽しそうに笑みを浮かべてすらいました。

「3日前とはエライ違いだね。いったい何があったわけ？」

で、ヒカリちゃんに聞いてみたら、アニメによくあるゲットにまつわる友情秘話（集団で襲われる ヒカリちゃん、ヒトカゲをかばう ヒトカゲ感激 仲間の助けが入り生還 ヒトカゲ、ヒカリちゃんに心酔）があったようです。

\*

まあ、そこらは置いて。

ヒカリちゃん、ついでにシロナさんも参加することになった第1回ポケモン講座。

今回はポケモンの技と能力、性格について。

「マリル！ キミに決めた！」

このマリルを例にを使って説明していくことにします。

まず、ポケモンの能力について。

ポケモンは体力(Hit Point)の他に攻撃(Attack Point)、防御(Block Point)、特攻(Contact Point)、特防(Defence Point)、素早さ(Speed Point)という能力値があります。これらの高低はバトルの行方を左右します。

特攻・特防はそれぞれ特殊攻撃・特殊防御の略です。

これらを念頭においた上で、次にポケモンの技について。

ポケモンの使う技には大きく分けると3つに大別されます。

「物理攻撃技、特殊攻撃技、変化技。この3つです」

では、それぞれについて実演を交えながら簡単に説明しましょう。

「マリル、あの木に向かってアクアジェット！」

水流に乗ったマリルが凄まじいスピードで突撃。

指示した木はマリルと接触したと同時に根元がポッキリと折れて(というか粉碎)されてしまったため、激しい音を立てて横倒しになりました。

ヒカリちゃんはその様子に口をアングリ開けてポーズとっていたので、気付けで元に戻す。

「とまあ、こんな感じで相手に直接接触する技が物理攻撃技です。

物理技の威力は『攻撃』の高さに依存します。続いてみずでっぼう！」

同じくらいの隣にあった木に向かって、みずでっぼうが発射される。今度は倒れるでなく、ただ大きく木を揺らすに留まった。

「これが特殊攻撃技です。もういいよ、マリル。おいで」

すると、オレのマリルは嬉々としてオレの胸に飛び込んでくる。

や、でも、軽い突進気味で突っ込んでくるから受ける方としてはちよつと痛い……。

今度からそこら辺もなんとかしよう。

「とにかく特殊技の威力は『特攻』の高さに依存します。最後に、変化技っていうのはこれら2種類の攻撃技以外の技のことを言います」

例えば『まもる』とか『いやなおと』とか『しびれごな』とかですね。

まあ、相手に直接ダメージを与える技以外の技は全部変化技って認識してもらえば結構です。

「ところで、みずでっぽうにアクアジェット、この2つは威力的には同じ技です。でも、一方は木をなぎ倒し、もう一方はただ揺らしただけ」

さて、どうしてこの2つに違いが生まれたのでしょうか？

「『攻撃』が高かったとかかしら？」

そうです。

さすがはシロナさん。

シロナさんの指摘通り、実はこの子は『攻撃』の方が高かったため、同じ威力の技でも、あれだけ威力の差が出たんです。尤も、この子

の場合は特性の影響もあつたりしますけど。

「特性ですか？」

「ああ。マリルの特性には『あついしぼう』と『ちからもち』の2つの特性があつて、この子は『ちからもち』の方なんだ。『ちからもち』は物理技の威力が2倍になるんだ」

ちなみに『あついしぼう』の方は氷技と炎技の威力を半減させます。ヒカリちゃんもトレーナーに成り立てだから、こういう知識も追々覚えていかないといけないからね。

あ、ついでに言っておくと、ポケモンの同タイプの技を使った場合、その技の威力が上がったりすることも覚えておきましょう。

「例えば『れいとうビーム』は氷タイプの技だけど、同じ『れいとうビーム』でも、水タイプが使うときと氷タイプが使うときだと、後者の方が、威力が高いつてことです」

尤も、だからといって他のタイプの技を覚えさせてはダメということはありません。

いろんなタイプの技を使えた方が戦略に幅が出ますからね。

さて、最後にポケモンの性格について。

「結論から言いますと、実はポケモンの性格は能力に直に影響します」

例えば、この子の性格はちよつと意地っ張りな部分があるんですけど、この性格は『攻撃』の高さが上昇して『特攻』の高さが減少するんです。

だから、さっきの技の実演では特性の影響もあつたりしたんですけど、性格にも左右されていたりするんです。

「自分のポケモンの性格を把握することは、ポケモンとの友情や信頼を深め、バトルに於いては戦略を組み立てる重要なファクターにも成りうるんです」

ポケモンとも仲良くなれて、それが、お互いをより高めへと導いてくれる。

素敵だよね。

「ということで、初回のポケモン講座は終わりです。ご清聴ありがとうございました」

\*

その後、いろいろあり、オレはヒカリちゃんの旅に同行することになりました。

いや、女の子に拝み倒されたら断れないでしょ？

ということで、講義については旅の途中で追々やっていくことにして、それから数日間は、このハクタイの森でヒカリちゃんの特訓漬け（バトル漬け）でした。

戦略 実践 検討・反省 戦略 以下 ループ……。それからちよつと変わったことといえば

「（モウカザル！ ビルドアップ！）」

ラルトスが擬似トレーナーとしてポケモン相手に指示だしています。



戦えない（許可されない）からとトレーナーの代わりをして発散だ  
そう。

その辺がオレには未だによくわかりません。

ちなみに、ラルトスがモンスターボールを投げてゲットしたポケモ  
ンもいたりします。

ソイツはオレの言うことも聞きますが、ラルトスの言うことの方が  
よく聞いている気がします。

ちなみにそんな感じなので、一人旅のときはラルトスとポケモン勝  
負をやったこともありました。

今思いましたが、「俺に10万ボルト！」とか「俺にボルテッカ  
ー！」とかそんなマゾいことはしてませんからね。

オレは某マサラ人みたく、人間はやめていないので。

つと、話がズレましたね。

特訓はバトルばかりではなく、バトル以外の点でも、例えば技の  
充実のために技マシンも貸してあげました。

ちなみにこの世界の技マシンはBW方式の使ってもなくならないタ  
イプのものみたいなので、使い放題です。

ただゲームのように覚えた技をすぐにフルパワーで使えるのではな  
く、練習が必要だったりします。

熟練度（仮）といったものですかね。

それが上であるほど成功率、威力、応用が効いてくるといった具合  
です。

なので、合間合間にその練習も繰り返してました。

それから、シロナさんにライブキャスターを貰いました。

これはBWで出てきた携帯型のチャット式テレビ電話ですね。

これでいつでも連絡が取れるから、ポケモン講座のときは呼べとい  
うことらしいです。

それからヒマなときは私も同行するから現在地を把握するのにも必要なのだそうです。

まあ、ヒカリちゃん曰くギンガ団関係のトラブルに巻き込まれたらしいので、いずれ必要になるときが来ることになるかもしれない。ゲーム通りなら、3人で手分けした方がいい場面があった気が……？よく覚えていませんが、もしそうだったときに連絡を取り合う際、必要になるでしょう。

それに、そうになるとヒカリちゃんもギンガ団幹部たちとある程度戦えるようにしなければなりません。

となると、特訓にも気合い入れて取り組まないといけない、ということでも少し変わったものを見せようかと思いました。

「マリル！ ムクバードに向かってアクアジェット！」

「ムクバード！ 体当たりで突っ込むわよ！」

ヒカリちゃんはアクアジェットとのぶつかり合いを意識したようです。

あ、ヒカリちゃんのムクバードは、昨日ムツクルから進化したんですよ。

さて、ヒカリちゃんの考えとして、此方は空に向かってアクアジェットのため、重力とマリル自身の体重の影響で、威力が弱まる。

逆にムクバードは空からの突撃のため、タイプ一致で威力上昇の体当たりでムクバード自身の体重×重力加速度による力が働く関係で、マリルを押し返せると計算したようです。

や、昨日の教訓がちゃんと生きていますよ、何よりです。

ホント、水が砂に吸い込まれるような勢いで成長していきますね。

教えている身としては嬉しい限りなのですが、しかし、オレのやることは変わりません。

「マリル！ アクアジェットタイプA！」

それを聞いたマリルはアクアジェットの矛先を空中とは全く関係のない地面に向け、そのまま衝突。  
そのまま、そこでクルクルと回転しだす。

「!?!? ウソでしょ!?!?」

マリルを包んでいたアクアジェットの水流が不規則に竜巻の渦のごとく、それが幾筋も巻き上がり始め、それらがムクバードを襲い始める。

ムクバードも必死に避けていたのだが、動きが不規則過ぎたため、読み切れなかった。

「ムクツバードッ!」

一本が避けた隙に直撃したムクバード。

その後、立て続けに水の竜巻を食らい続けて、ついにはダウンした。

ちなみに今の技は偶々見たアニメのサートシ君の技を参考にさせてもらいました。

水の勢いが強かったのは、アクアジェットの勢い+水を出すホースの先を摘むと水流が激しくなるのを応用したものです。

成功させるのに相当苦労しましたけどね。

さて、今日はこれで終わりにして明日一日休んだ後ジム戦といきましようか。

### 第3話（後書き）

ゲームでも不思議に思っていました。

『どうして覚えたばかりの技が100%の威力で出せるのか』と。  
なので、オリ設定として、『技には熟練度がある』というものを加えました。

また、マリルのアクアジェットはタマゴ技ですが、タマゴ技は遺伝ではなくとも覚えられるとしています。

## 第4話

久々ですね、皆さん。

オレです、ユウトです。

現在はミオシティにいます。

や、あれから時間が経ちました。

凶鑑も順調に集まってきましたよ。

それからバッチの数は7つで、残すはナギサジムのみとなりました。ちなみにヒカリちゃんとは今も同じ旅路です。

で、そのヒカリちゃんですが。

ふう。

才能って怖いね。

いや、順調といった言葉では表せないほどに軽快にジムをクリアしていつてます。

既にバッチの数がオレといっしょという。

破竹の勢いとは当にこういうことを言うのでしょうか。

今のところ負けるのは、オレやときどき来るシロナさんぐらいですね。

それから驚いたのが、この前シロナさんがシンオウ四天王の一角を担うキクノさんを連れてきたんですね。

当然勝負したらヒカリちゃんのボロ負けでした。

ヒカリちゃんはキクノさんが四天王だということを知らないようで

(キクノさん自身も四天王という肩書きは公以外では使わないため)、あくまで、シロナさんの知り合いの普通のトレーナーに負けたも

のと思っています。

シロナさんは『あまりに勝ち過ぎて勘違いして歪んでしまっても困る』ということをコツソリ教えてもらいました。

や、オレもそれは考えていたことではあるのですが、シンオウには初めて来たため、そういつた知り合いがいなかったので、正直助かりました。

それからシンオウ地方の危機についてですが、順調(?)にギンガ団イベントが進行中です。

カナナギタウンではギンガ団のアカギに出会いましたし、ちよくちよくギンガ団下っ端や国際警察のハンサムさんとも遭遇したりしました。

ゲームの展開とは些が変わったところがあるようです。

その一例として、このミオシティにはいないはずのハンサムさんと遭遇したことでしょうか。

その彼と現在半ば協力関係を結んでいたりします。

情報の交換として、ギンガ団の狙いがシンオウ地方の3つの湖に眠るユクシー・アゲノム・エムリットという3匹のポケモンらしいということを教えてくれました。

それからテンガン山に異様に執着しているということも調べあげたようです。

正直ゲームだと、「なにこのマヌケ」と思っていたんですが、実際は素晴らしく優秀さんでしたね。

と、そんな折、シンオウ地方全体を揺るがすような凄まじい地震のような揺れを感じました。

これはゲームのミオ図書館イベントのアレですね。

オレたちは早速、行動に移ることにしました。

とりあえず、ヒカリちゃんとハンサムさんには、一足先にシンジ湖に飛んで貰いました。

さて、ここでライブキャスター、出番です。

「シロナさん、シロナさん、応答してください」

【あーあー、こちらショッカー、本日は晴天なり。まいっー】

いや、誰だよ、アンタ……。

もう完璧シロナさんのキャラ崩壊してきてますよ。

といっても実際にはオレが教えたんですけど、今はかなり場違いです。

「シロナさん、真面目にやってください。緊急事態です」

そう前置きした後、今までの経緯＋シンオウ地方の伝説のポケモンであるディアルガとパルキアによるシンオウ時空伝説とその再現のためにギンガ団が動き出した、いや、そのための最終段階に既に入ったということを簡潔に伝えました。

ちなみにギラティナに関しては神話から削除されているらしく、その形跡が残っていなかったため、あえて伏せています。

「既にヒカリちゃんとハンサムさんにはシンジ湖の方に飛んでもらっています」

【そう。なら、ユウト君はリッシ湖に飛びなさい。そこからエイチ湖に行くよりは時間はかからないはずよ。私はちょうどカンナギに戻っていたからエイチ湖に向かうわ】

ということ、空を飛ぶでリッシ湖に向かっています。

もし、本当にシンオウ時空伝説の再現が成されてしまえば、世界崩壊にも繋がりにかぬない上、ギンガ団上層部たちのポケモンにケーシ

イ系列のポケモンが追加されていたり、ハクタイやトバリ以外にもアジトが存在していたり、空中要塞のようなものの所有も確認され、ゲームの展開とは剥離し始めていたので、現在オレのポケモンは信頼とともに、最強の強さを誇る超ガチパ編成です。尤も、オーキド研究所の守りもありますので（貴重なポケモンや珍しいポケモンがたくさんいます）、自重はしていますが。

「見えた！ ポーマンダ、高度を下げてください！」

たしかリツシ湖はゲームでは爆弾の影響で干上がっていましたが、現実にはそんなことは起こっていませんでした。

ただ、湖の中央部に渦のようなものが出来ていて、しかし、ただの水の渦ではなく、何やら異空間への扉のような感じがしました。さらに、渦の中心に浮かんでいたのは 意思を司るポケモン、

「アグノム！」

ミオ図書館にあった神話の一節によると、『始まりの話』の中で最初のもの（アルセウス）により生み出された3つの命の内のもので、傷付けると意思を消されて動くことも出来なくなるらしいです。アグノムはまだ微妙に封印状態な感じ？のせいか、眠っている感じがしました。

まあ何はともあれ、まだギンガ団に捕まっているな

「うあああああ！！！」

いきなり体中を駆け抜けた電撃。

その後体のそこかしこから黒い煙を上げながら、よろめき、ポーマンダから真つ逆さまに湖面に発生した渦に向かって落下していつてしまいました。



「（ユウト!!!）」

「マングァー!!!」

ラルトスもボーマングァも電撃は食らったようだが、至って無事なようでした。

2人ともオレのことを助けようとしてくれるのだが、

「2人とも！ 後ろだ！」

電撃の塊がオレたちの間を遮ろうと、いくつも飛来してきました。

2人は避けようとしているが、どうやら必中技のでんげきはらしく、2人をホーミングしています。

「ぐあああああ！」

そして内一発がオレに直撃。

このままだと、オレはあの渦の中に沈んでいくでしょう。

あの渦は普通のモノではない。

そんな所にポケモンたちを巻き込むのはマズイ。

真つ暗に沈んでいく視界の中、オレはバックと腰に付けてあったモンスターボールを切り離すことになんとか成功させました。  
そして

「アグゥー!!!」

そんな声を遠くの方で聞いた気がしたのです。

\*

それは突然のことだった。

いきなりわたしたち3人が電気技を食らったのだ。

わたしやボーマンダなら耐えられるけど、生まれがちょっと変わってるだけの普通の人間であるユウトにしてみれば、たまったものではないはず。

案の定、ユウトは苦悶の声を上げながら、ボーマンダから落下してしまった。

「（ボーマンダー!! 追ってー!!）」

「（わかっている!!）」

ユウトはこのリッシ湖に発生している渦に向かって落下していた。

あれは普通の渦じゃない。

エスパタイプとして、そして、一ポケモンとしてアレに触れてはいけない。

そう感じていた。

このとき、わたしもボーマンダも焦っていた。

バトルのときなら絶対に犯さないだろう、周りに気を配るといってことを忘れていた。

「2人とも! 後ろだ!」

ユウトのその声で振り向くと、電気の塊のようなものがわたしたちに迫っていた。

「(ポーマンダ!)」  
「(言われずとも!)」

ポーマンダはそこから急旋回して、それをかわそうとした。ところが、それは追尾機能があるらしく、しつこくわたしたちの後を追ってきた。

さらに、その数も増えていた。

「(うざったい! ポーマンダ、かき消すわよ!)」  
「(心得た!)」

そしてクルツと反転するわたしたち。

「(サイコキネシス!)」  
「(かえんほうしゃ!)」

ホーミング性能付きの電気技(おそらく必中技のでんげきはでしょう)はわたしたちの技に拮抗することなく消し飛んだ。

「ぐああああ!」

「(しまった!!)」  
「(まずい!!)」

ユウトの悲鳴を聞いてそちらを見ると、ユウトが渦に落下する寸前だった。

「(ユウト!!)」

わたしはもういてもたってもいられず、ポーマンダの背から飛び下

りた。

だけど、ユウトとの距離はかなり開いていて縮まりそうになかった。ユウトはバックとモンスターボールを宙に放り出す。

きつと、わたしたちをアレ 異界への扉 に巻き込まないようにするつもりなんだろう。

異界などに引きずり込まれた此方に帰って来れる保証なんてないから。

でも！

わたしたちはあなたとはぐれるくらいなら！

どこにだつてついて行く！

地の果てだろうが、異なる世界だろうが！

わたしは！

わたしたちは！

あなたと共にありたいから！！

だけど

ユウトは渦に飲み込まれ

「（待つて！）」

いつの間にか目覚めていたアグノムがユウトにくっ付き

2人の気配が忽然と消え失せた。

わたしは構わず、後を追おうとしたけど、

「（待つのだ、ラルトス！）」

その口にくわえられ、落下が止められた。

\*

ユウトのバックとモンスターボールを回収したボーマンダはわたしを背に乗せ、岸に向かい飛んでいた。

「（どうして、どうして止めたのよ、ボーマンダ！）」

「（それが一番いいと思ったからだ）」

「（一番いいですって？ ユウトを見捨てるのが一番良かったとでも言うの！？）」

「（ラルトス、口の聞き方に注意しろ。幾ら、お前が主のポケモンの最古参で我らのリーダーであるうと言っていていいことと悪いことがある）」

「（でもねえ！！）」

「（でも何もあるか！ 普段のお前を取り戻せ！ いつもの冷静なお前がなぜ気がつかない！）」

「（……どうということ？）」

「（いいか。このシンオウ地方の神と呼ばれし伝説の二大ポケモン、それは何だ？）」

「（ディアルガとパルキア）」

「（ならば、その2匹はそれぞれ何の神だ？）」

「（たしか、時間と空間……ハッ、そうか！）」

「（そういうことだ。そちらに会う方があのまま突っ込むより建設的じゃないか？）」

「（そうね。じゃあ、まずは）」

「（ああ。あそこの岸辺でまだアグノムを探しているクソツタレなギンガ団の小僧どもに聞こうではないか）」

「（（パルキアとアカギの居場所を！））」

\*

「(さてと、これからどうする?)」

ギンガ団のサターンとかいうやつをはじめ、下っ端全員を拷問にかけたわたしたち(モンスターボールから出したラティ妹やゲンガーのサイコネシスで全身を捻りちぎる一歩手前まで持つて行ったり、ギャラドスやヘラクロスで物理的に痛めつけたり。ちなみにでんげきは放ったのはそこで瀕死になっているスカタンクの仕業だったみたい)。

そうして粗方聞き出したいこともなくなったときに、発せられたボーマンダの言葉だった。

「(そうね。じゃあ三手に分かれましょう。まず、わたしとラティアスでシンジ湖に行つてヒカリたちに事情を説明するわ)」

「(ハイなの、お姉さま)」

「(ボーマンダとゲンガーはエイチ湖に向かつて。そのとき、あのギンガ団幹部とユウトのカバンを持って行けば、勘のいいシロナのことだからある程度はわかるはず。詳しいことはライブキャスターを通してヒカリに説明してもらおう)」

「(うむ)」

「(わかりました)」

「(ギャラドスとヘラクロスはここでコイツラの監視をお願い。ハンサムあたりに言えば、きっとここに人間を回してくれるはずよ。それまでね)」

「(おう!)」

「（了解しやしたぜ、アネキ!）」

「（情報の共有が終わった後、テンガン山のカンナギ側で合流しましょう。じゃあ、散開!）」

そうしてわたしはラティアスの背に乗り、リッシ湖を後にした。

「（……ありがとね）」

わたしはさっきの醜態と彼のことを思い出し、そつとその言葉を口にした。

「（どうかしたの、お姉さま?）」

「（何でもないわ。さ、シンジ湖に急ぎましょつ）」

聞こえてなどいないと思うけど。

「（フツ、素直に受け取っておこつ）」

「（どうかしたのかしら、ボーマンダ?）」

「（いや、何でもない）」

お前とは主と同じく一番付き合いは長いんだ。  
わかるぞ。

お互いがお互い、離れた空で相手が思った心を感じ取っていたの  
だった





## 挿話2

ユウトさんの特訓を受けてから初めて、挑んだハクタイジム戦。そこであたしはあれだけコテンパンにやられたナタネさんに快勝することが出来た。

たった一週間でここまで違うなんてとナタネさんは大層驚いていた。尤もあたしは驚きと喜びで半分、あたしのポケモンたちなら、あたしが信頼しているあたしのポケモンたちなら、絶対に勝てるという半ば確信が半分、といった感じであった。

ナタネさんに以前言われたことについて謝られたけど、あたしとしてはトレーナーとしてもっとたくさんのことを勉強しなければならぬと感じていたので、そのことは全然気にしていなかった。

それからここ数日のことを話していたのだが、

「ポケモンがポケモンを指揮してバトル!?　ワア、なんか面白そう!」

やっぱり、普通ではありえないような、そんなバトルを体験してみたいとユウトさんとユウトさんのラルトスに頼み込むナタネさん。ちなみにユウトさんが答える前にラルトスが、勝手に彼のベルトに付けているモンスターボールを全部奪っていったのには思わず、クスリとしてしまった。で、結果はというと、

「……私、ちょっとジム休んで修行の旅に出てきます」

ああ、うん。

その気持ちよく分かります。

あたしも最初はそれを感じてました。

トレーナーとして、いや、下手をすると、人間としての何かが粉碎されますよね。

尤もそれは最初の内だけで、何回かやってるとドーデもよくなってきました。

ええ、まだラルトスに勝てたことありませんが何か？

ていうか、トレーナーならポケモンにどんな指示出したのかわかるから対処のしようがあるけど、ラルトスの場合、それが全然わからないだもん。

でも、ラルトスはこちらの指示がわかる。

なんとという卑怯なムリゲー。

まあ、ラルトスもそのところを察してるみたいで指示出すときに合図みたいなことをしてくれるから、それを参考に技を読んでいます。その部分をナタネさんに話したら、

「つつしゃあああ！！　んなろおおおお！！」

3日目にして勝つことが出来た。

さすがジムリーダー。

ただ、その間ジムに挑戦に来た人やジムトレーナー全員を追い返すのはジムリーダーとしてはいろいろ考えなきゃいけないと思う。

それから、その雄叫びは女の子が出す声じゃないので気をつけてください。

ということ、ハクタイジムクリア後もそこで3日ほど足止めを食らいましたが、ようやくクログネシティへ。

クログネジムでもヒョウタさんへのリベンジが叶いました。

そこからテンガン山を通り、ヨスガシティへ。

ヨスガシティには大規模なポケモンコンテスト会場があるので、ジム戦前の寄り道がてら覗いてみると、

「つつそお！　ママ！？」

あたしのママに出くわした。  
何でも、これからコンテストのマスターランク決勝に出場するんだとか。

確かに家にはママの賞状がたくさんあるからすごいコーディネーターなんだとは知ってたけど、それが改めて実感させられた。

ちなみにユウトさん曰く、ママみたいな人のことを“トップコーディネーター”というのだそうだ。

そしてまるでそれが既定路線だともいつかのごとくママが優勝し、ママもあたしのジム戦を見守るためについてきた。

「ねえ、ヒカリ。ユウトくんとはどこまで進んだの？ 手？ それともキス？」

あー、ママ。

ユウトさんとはそんな関係じゃないから。

あくまでユウトさんはあたしの目標であり、師匠だから、勘違いしないように。

尤も、将来はどうなるかは分からないけどね、とは言わなかった。

ヨスガジムのメリッサさんはコンテストに出場するようなゴージャスな衣装だった。

尤もママ曰く、コンテスト優勝の常連らしいので、強ち間違っていない？らしい。

で、肝心のジム戦はハクタイの森で仲間になったムウマの活躍もあって快勝した。

3つ目のバッチをゲットしたあたしたちは東からズイタウンの方に

向かうのではなく、南からノモセシティに向かうことにした。  
特に理由はない。

まあ強いて言えばユウトさんもそう回ったらしいので、あたしもそうすることにした。

ママは「もう少しヨスガにいる」ということで別れた。

その後、ノモセ トバリ キツサキ ミオと回り、無事にバッチを手に入れることが出来た。

トバリに向かう途中ナギサシティに行くつもりだったが、何やら通行止めで入ることが出来なかつたりした。

そうして寄り道としてズイや他の町、名所なども回つたりして、あたしのポケモンたちも増えてきた。

今のあたしの手持ちのポケモンはポッチャマ、リザードン、ムクホーク、エルレイド、ムウマ、レアコイルだ。

他にもベトベターやギャラドスなんかがいるのだが、その子たちはユウトさんとオーキド博士という人の厚意で博士の研究所に預かってもらっている。

尤も、みんなあたしに会いたがってくれているらしく、頻繁に交換して旅をしている現状だ。

じゃああたしのポケモンの紹介。

まずは言わずもがな、ポッチャマ。

あたしの一番の相棒でエースの一人。

最近はユウトさんのラルトスみたいにボールから出していることがほとんどだつたりする。

次にリザードン。

一番のエースといっても過言ではないほどで、ジム戦で困ったときは一番にお世話になってたりします。

3番目にムクホーク。

もはや特攻隊長とでもいふべき存在で、その強力な技で苦手な鋼タ

イプにも果敢に立ち向かっていきます。

続いて、ニユーフェイスの紹介。

まず、エルレイド。

この子についてはユウトさんのラルトスからタマゴを貰い、孵したのだ。

で本人はエルレイドになりたがっていたので（ラルトス談）、頑張ってめざめ石を探して進化させた。

あのラルトスの子供というのは伊達ではないらしく、素晴らしく頼りになる子の一人だ。

ベトベターやコイル、ギャラドスなんかはナギサシティの近くにナギサシティの電力を賄う火力発電所があり、その近辺で仲間になった。

そのせいなのか電気、火にそこそ耐性がある、これまた頼りがいのある子たちばかりだ。

特にコイルは火、ギャラドスは電気に滅法弱いのに、それがあまり通用しない。

ユウトさん曰く、「マジでチート乙！」だそうだ。

あたしは否定出来ずに苦笑いした。

ちなみにコイルはスズナさんとのバトルの最中にレアコイルに進化しました。

この旅の中でギンガ団とのトラブル？もかなり進行した。

あたしたちの前にはギンガ団下っ端はもちろん、ギンガ団幹部、果ては、シロナさんの故郷カンナギタウンで、ギンガ団トップのアカギも現れた。

マーズやジュピターら幹部のポケモンたちとはなんとか渡り合うことは出来たが、アカギのポケモンは今のあたしには強すぎた。

経験というかパワーが違いすぎたのだ。

ユウトさんが追い返してくれたのだが、そのときあたしは、もっとポケモンと自分自身を鍛えなければならぬと痛感した。

そんなこんなでミオシティで7つ目のバッチを手に入れた後、ミオ図書館でハンサムさんと出くわした。

彼は単独でギンガ団を追っている国際警察の人だ。

ギンガ団に関しては彼と共同で事に当たった経緯から、半ば共闘関係にあるからか、ハンサムさん自身が調べ上げた情報を教えてくれた。

逆にこちらでもユウトさんが、ミオ図書館で調べた神話関連の話や今までのギンガ団関連の出来事から、アカギの狙いがシンオウ地方の伝説の再現にあるのではないか、などと推測を交えた話をしている最中だった。

体の中心に向かって響いてくるような強い揺れ。

それが収まったすぐ後、図書館のテレビで『今の激しい揺れはリッシ湖周辺が震源地』と報じられたときだった。

「ヒカリちゃん！ ハンサムさんも！」

あたしの手を握り走り出すユウトさん。

いつものどこか余裕のある様は完全になりを潜め、焦燥感が全身からにじみ出ていた。

「どうしたんだね、ユウトくん!？」

ユウトさんのその様子に、たまらずあたしたちの後を走るハンサムさんが問いかける。

「世界崩壊の始まりです！」

「世界崩壊!? いったいどういことですか!？」

「詳しいことは後で話す! とにかく、ヒカリちゃん、ハンサムさ

ん！ 頼みがあるんだ！」  
「い、いつたいなんだね！？」  
「2人は今すぐシンジ湖に飛んで、シンジ湖にいる伝説のポケモン、ユクシーの無事を確認してくれ！ その際、ギンガ団がいたら全力でぶっ潰してくれ！ 頼んだぞ！」

そのままなし崩しにあたしたち2人はシンジ湖に飛んだ。

\*

シンジ湖上空に到達したあたしたち。  
湖面にはユクシーがいた。  
まだ無事なようであった。  
そのまま湖岸に視線を移すと

「あれは、ギンガ団！？」  
「コウキも！？」

あたしたちはそのまま湖岸に飛び降りた。

「ありがとう、リザードン」  
「戻れ、ドンカラス！」  
ハンサムさんは乗ってきたドンカラスをボールに戻したようだった。

「コウキ！」  
「ヒカリか！」

コウキは地面に膝をついてうなだれていた。

「ああら、いつもながらジヤマしてくれるガキンチョの一人じゃなあい。もう一人の坊やはどうしたのかしらあ？ そ・れ・にい、お仕事ご苦労様でえす、国際警察のお・か・た」

ギンガ団幹部の一人、ジュピターが相も変わらずなイヤミっただし口調で立ちはだかった。

「少年、ここでいったい何が起きたんだ？」

見たところ、周辺が荒れている。

とするとコウキとジュピターがポケモンバトルでもしていたのだろうか？

「なっさけないわね。そんな無様にやられちゃってえ。弱いつて罪よお？」

「くっ！ 卑怯だぞ！ 一对多数なんて！」

「卑怯お？ なんて素敵な言葉なのかしらあ。わたしその言葉だあいスキ。だつてえ、勝ちやあ何でもいいわけなのよお。勝てば官軍つて言うでしょお？」

なるほど。

おおよそ見当がついた。

ジュピターとコウキがポケモンバトルで戦う中、ジュピターの後ろに控えるギンガ団員たちが横やりを入れたのだろう。

「ちくしょう。このままじゃユクシーが……！」

見るとさっきまではいなかった夥しいほどのゴルバットの群れ。それから、



「ドータクン。エスパークタイプのユクシーじゃ厳しいもいところ  
ね」

それから、相性有利とはいえ、あれだけのゴルバットの群れなら、  
手数で圧される危険がある。

「リザードン、ムクホーク！」

2人に湖のユクシーの援護に向かうよう言った。

「ドンカラス、お前も行ってくれ！」

ハンサムさんもドンカラスをユクシーの援護に向かわせた。  
しかし、

「ゴルバツ！」

「ゴルバツ！」

「ゴルバツ！」

「ゴルバツ！」

たくさんのゴルバットに行く手を阻まれる。

「素直に行かせるわたし達だと思っう？」

この何とも耳につくイヤミったらしい言い方は、前からそうだが、  
あたしのイライラに拍車がかかる。

「全員、出てきなさい」

すると残りの4つのボールからポツチャマ・レアコイル・エルレイド・ムウマが出てくる。

「みんな、あのバカ女には頭きてるでしょう？」

全員一斉に力強く頷いてくれる。

どっかの年増がブチ切れているみたいだけど、ムシムシ。

「みんな、あたしたちはユウトさんたちと厳しい特訓を繰り返してきたわ！ それを思えば高々数で劣るなんて屁でもないと思わない！？」

これと同じくみんな力強く頷いてくれる。

「なら、あの年増の「だあれが年増ですってえええ！？」っさい！ すっこんでろ！ あの年増ポケ女のポケモンを筆頭に、全員ぶっ飛ばしてあげなさい！」

あたしの号令に合わせて6人全員が一斉に飛び出した。

### 挿話3

私はユウト君から連絡を受けた後、カンナギの長老を務めるおばあちゃんに現状を説明した。

それを聞き、おばあちゃんはシンオウ各地の都市長に連絡を取り、ギンガ団の一斉摘発を要請するそうだ。

元々ギンガ団については私が話していた話を参考に、各地に当たりをつけていくべからしい。

更に私はリーグ本部にも連絡を入れ、私の『要請を受け入れる』という形で動いてもらうことにした。

トゲキツスの背に乗っている途中、ライブキャスターが鳴りだした。

【シロナさん】

「ゴヨウ！」

【シロナさんの要請を受け、全部署が動き出しています。ポケモンリーグ本部には僕が残り、リーグの総指揮を取ります。3つの湖には、それぞれ近くのジムリーダー数名で向かうよう通達を出しました。他の四天王のお三方にはテンガン山に向かってもらっています】  
「そう。何かあったら連絡を。私は今エイチ湖に向かってるから」

私はエイチ湖への道程を急いだ。

\*

いつ来ても真っ白な雪に覆われているシンオウ地方北部に存在する湖、エイチ湖。

湖面はただ風の通り過ぎる道と化している以外、何もなく、私は何か痕跡がないかと岸边周辺を搜索していた。

「ん？ 洞窟でもないのにあんなにたくさんゴルバット？」

それらを見かけ、そちらに歩を進める。

するといくつかの人影が見えてきた。

そこにいたのは、

「あなたたち、ギンガ団？」

「そういうアンタはもしま、シンオウのチャンピオンさまか。やれやれ、そのガキだけなら大したことはなかったけど、面倒なのが来たわね」

地面に一人座り込んでうなだれているのはたしか……。

「ちつくしよめ、ギンガ団！」

たしか、ヒカリちゃんの知り合いの何だか慌ただしい子だったかしら。

ここら一帯が踏み荒らされたり、雪がなくなっている部分があるので、彼はギンガ団を止めるためにポケモンバトルをしたのだろう。だが、結果については彼の様子を見れば見当はつく。

「マーズ様、撤収準備完了いたしました」

「わかった。そういうことだから、チャンピオンさま、失礼しますね？」

「待ちなさい。エムリットはどうしたの？」

「エムリット？ アレのことかしら？」

マーズとやらの顎の指す先には

「くっ！ 今すぐ、エムリットを解き放ちなさい！」

透明なケースに入れられてもがき苦しむエムリットの姿。  
私はスツと腰の辺りに手が伸びた。

「全員出てきなさい！」

ごく自然に手持ちの6体、ガブリアス、ミロカロス、ルカリオ、トゲキッス、ミカルゲ、ロズレイドを出していた。

「ホントは手荒なことはしたくないんだけど、この際は仕方がないわ。エムリットをここに置いて、すぐさま警察に自首しなさい。既にシンオウ各地の警察や、ポケモンリーグ本部がギンガ団壊滅に動いている。もうあなたたちに逃げ場はないわ」

「果たしてそうかしらね？ 出てきなさい、フーデイン、ブーバーン、ゴルバット！」

出てきたのは3体のポケモン。

ギンガ団員のゴルバットも合わせると数の上ではあちらが多いが、  
つてゴルバットたちを戻した？

「いたい……まさか！？」

「ブーバーン、えんまく！ ゴルバット、くろいきり！」

しまった。

彼らは視界を塞ぎ、脱出するつもりなのだ。

彼らはエムリットさえ手に入れれば、もうここには用はない。

「くっ、マズい！ 全員でくろいきりとえんまくを吹き飛ばしなさい！」

「フリーデイン、テレポート！」

黒く視界を覆う煙の中で、そんな声が聞こえた。

そして、それらを吹き飛ばした後に残ったものは白い雪上に多数残る様々な足跡だけだった。

\*

その後、スズナ、そしてなんとメリツサさんが来て（キツサキシテイのコンテストに出場しているときにスズナに連れ出されたらしい）粗方の事情を説明しているとライブキャスターが鳴りだした。

「ハイ、こちらシロナ」

【あたしです、ヒカリです！ シロナさんは今はどこに！？】

「エイチ湖よ。ユウト君からはある程度聞いたわ。ヒカリちゃん、今はシンジ湖よね？ ユクシーは？」

【スミマセン、連れ去られてしまいました】

「そう。こちらもよ。とにかく、今は情報を摺り合わせましょう。

ユウト君はどうしたのかしら？」

【そのことなんです、実は大変なことが起きたんです！】

そこから私はユウト君のリツシ湖での顛末を聞いた。

正直信じられないようなことだったのだが、話の途中、ボロボロのギンガ団幹部をくわえ、ユウト君のバックを持って現れたポーマンダとゲンガーを見て、ヒカリちゃんの話が本当のことであると認識した。

「そんな……！ あのユウト君が……！？」

「オウ、とても残念ネエ……」

「マジかよ……」

他の3人もライブキャスターからのヒカリちゃんの話にショックを受けていて私の様子にはあまり気づいていなかったと思うが、

「本当に……本当に……残念ね……」

私は思わず、ポロリと零していた。

正直、彼にはかなり好印象だったので、年下だが、狙ってみてもいいかな、と考えたりもしていた。

【それで、シロナさん！ これからテンガン山のカンナギ側に来てください！】

「何かあるの？」

【ハイ！ ギンガ団の目的であるディアルガとパルキアを出現させる場所がテンガン山にある、やりのはしらという神の祭壇なんだそうです。やりのはしらに行くには、テンガン山のカンナギ側から行くのが一番近いんだそうです】

「わかったわ」

ふうー、と一息つく。

何だか心がモヤモヤとしていて晴れ渡らない。

【あの、シロナさん】

「なに？」

私は暗い気持ちを抱きつつ、何気なく、ヒカリちゃんに先を促した。

【あたしたちもパルキアに用が出来たんです】

「パルキアに？」

【ハイ】

その先のヒカリちゃんの話は、聞いているうちに自分の眼が次第に大きく見開かれていくことになった。

ユウト君は異空間にアグノムと共に取り込まれたという。

シンオウ地方の伝説のポケモン、ディアルガ・パルキア。

ディアルガは時間の神。

そしてパルキアは『空間』の神。

ついでに言えば、湖の三体、アグノム・ユクシー・エムリットは互いに影響し合う三体である。

そのうちアグノムがユウト君と一緒に異空間に取り込まれ、ユクシー・エムリットがギンガ団と共に居り、その二体がパルキアに関するやりのはしらにも向かう。

ということは、ひよっとすると

「ヒカリちゃん」

【はい？】

「ありがとう」

【いえ、あたしも似たような気持ちですから】

うん？

似たような気持ち？

……

……あー、今はいいや。

後で考えよう。



ジムリーダー2人をエイチ湖に残して私はユウト君のポケモンたちと共にテンガン山に向かった。

\*

シロナさんたちと合流したあたしやラルトスたち。

ちなみに、リッシ湖にいたというユウトさんのポケモン2匹も合流し、ユウトさんのポケモンは6体すべて揃っていた。

「さて、世界の危機とやらを止めに行きますか！」

「あなた、相変わらず軽いわね」

この赤いアフロの愉快な人は四天王の一角をなすオーバさんだ。たしかにシロナさんの言うように若干軽いかもしれないが、下手をすれば重くなりガチな現状を考えると、こういう場面でこのような人は貴重だと思う。

なお他の四天王の人たちやジムリーダーも来ていますが、他の出口から入り、空以外の脱出路を遮断しているそうです。

ちなみにハンサムさんも其方に参加しています。

あたしたちはアカギやパルキアたちに用があるため、やりのはしらに向かうのですが、ハンサムさんが自分のポケモンでは足手まといになるんだとか。

【こちらゴヨウです。捜索隊の一隊がギンガ団のものとされる大型ヘリの一団、といっても3機ほどですが、発見し、捕獲しました。見張りについていた団員についても同じです】

「そう。引き続き頼むわ」

【しかし、彼女も連れて行くというのは……】

「大丈夫よ、心配ないわ。私やオーバがキチンと面倒見るし、いざとなれば頼りになるボディガードもいることだし。だいたいヒカリちゃん自身、相当なモノなのよ？ あなたもウカウカしてられないほどね」

【なるほど、そういうことなら。とにかくお気をつけて。オーバさんもキチンとレディをエスコートしてくださいね】  
「おうよ！ 任しとき！」

シロナさんはこちらを向いて笑顔でウィンクした。  
あたしは腰を深々と折り、お辞儀をした。

「さあ行きましょう。ヒカリちゃん、道わかる？」

「ラルトス、お願いできる？」

「（ある程度まで出来るわ）」

「じゃあ、お願い」

シロナさんの質問に対して、あたしはラルトスに聞くと、頭の中にそうラルトスの声が響き渡った。

「コイツは……テレパシーってヤツなのか？」

「そうね、初めて感じたわ」

初めてのそれに2人はさっきのあたしみたいにビックリしている。  
尤もそれは今は後にしたい。

そしてラルトスがサイコネシスで浮き上がると、あたしたちの前をあたしたちが走る程度の速さで飛び始めた。

あたしたちも辺りを霧が立ちこみ始める中、ラルトスを追いかけて始めた。

\*

「（ヘラクロス、かいりきからのかわらわりであの大岩を粉碎しなさい）」

「ヘラクロス！」

あたしが思ったこと。

それはユウトさんのポケモンのレベルについてだ。どのポケモンも凄まじいまでの強さを秘めている。

先ほどはギャラドスのアイアンテールで塞がれていた入り口を邪魔な大岩ごと粉碎。

崖を越えるためにラルトスやゲンガーがサイコネシスを器用にコントロールして崖上まで浮遊させる（狭い場所だったので、飛行タイプのポケモンでそらをとぶことも難しかったため）。

そして今だってあたしの身長の2倍くらいの大きさはある頑丈そうな大岩をヘラクロスがかわらわりで粉々と言っても差し支えがないくらいに粉碎させた。

この中であたしが持っているポケモンはギャラドスだけだけど、あたしのギャラドスにアレはまだムリだろう。

「つええなあ、このポケモン」

「まったくね」

「くうく、こりゃありーグでの対戦が待ち遠しいぜ！」

その強さはチャンピオンや四天王すらも認めている。

改めて、ユウトさんがすごい人なんだと実感した。

「おっと、ここから先は行き止まりだ」

大岩が砕け、先に進もうとすると何やらそんな声が聞こえた。煙が晴れてくるとあたしたちが知らないギンガ団幹部と思われる人物がいた。

「あなたは？」

「オレか？ オレの名は」

「そっ、じゃあね」

「ってうおい、待ちやがれ！ まだオレの紹介が済んでねえ！」

何やら若干コントじみたやり取りで、彼が塞ぐ道を抜けようとするシロナさん。

どうでもいいけど、シロナさんってやっぱり天然？

「オレの名は」

「ジバコイル、優しく10万ボルト！」

あたしもシロナさんに乗っかってみようと思い、ジバコイルに10万ボルトをするよう指示。

ちなみにこのジバコイルは、レアコイルがテンガン山内という特殊な環境で戦わせていると進化するとユウトさんに習っていたので、それを実践しました。

ちなみにそのときオーバさんが「すげー珍しいな！」みたいなこと言っていたのですが、このことってあまり知られていないのかな。シロナさんは研究以外の時間はだいたいあたしたちと一緒にいて、ユウトさんのポケモン講座を聞いてるから知ってるだろうし。

「て、テメエら……！」

うわ、10万ボルト食らっても平然としてる！

「もう許さねえ！ 行け、ドータクン！」

出てきたドータクンは浮遊していた。  
ということは特性はふゆうか？

「ここを通りたかったら、このオレ様を倒してからにしろ！」

そう名も知らない彼が言い放ったのだが、

「（うざったい）」

そんなラルトスの声が響いてきた。

そして光に包まれたと思ったら、彼の後方に移動していた。  
これはひょっとしてテレポート？

「好都合ね、このまま走り抜けましょう！」

「ハイ！」

そうしてあたしたちは先に見える明かりに向かって走り始める。  
おそらくあそこがこの洞窟の出口で、かつ、ギンガ団の幹部らしき  
人がいるということは、アカギがこの先にいるのだろう。

「そうはいくかよー！」

「おっと！ そこまでだ。こっから先は通行禁止だよん」

彼の足はオーバさんが止めてくれるらしい。

「頼んだわよ、オーバ！」

「わかってます。すぐに追いついてみせますよ」

やっぱり彼は頼もしい。

「オーバさん、頑張ってください！」

「OK！ こんなかわいい子ちゃんに頼まれたら張り切るしかないなあ！」

そうしてあたしたちはあの出口に向かい、この洞窟を駆け抜けた。

## 第5話

「う……ん……」

誰かに揺すられている気がする。

「……、ー、グー、アグー」

なんかアグーって聞こえる。

そういや、オレはどうしていたんだっけ。

あー、確かギンガ団がリツシ湖にいるアグノムを連れ出そうとしていて、それを食い止めるために、リツシ湖に来て、アグノムを無事を確認したら、でんげきはが飛んできて、それを食らって異次元に落っこちて

「て、そっだよ！ ヤバいじゃんオレ！」

事の重大さに飛び起き、周囲を確認。

「アグー」

「ってアグノム？」

頭を抱えてうずくまるアグノムを見つけて抱きかかえた。

「（うー、痛い、ユウト）」

えっ？

今声が……？

「アグノム、まさか今のはお前が？」

「（そう、ユウト。とりあえずいきなりで痛かったから謝って）  
「え？ あ、ご、ゴメン」

何かなにやら訳が分からなかったのだが、とりあえずオレは謝るとにした。

「（いい。許す）」

ラルトスとは違い、抑揚があまりないその声で、だんだんと冷静になってきた。

「そっぴゃ、なんでお前はオレの名前を知ってるんだ？ それにここはいつたい？」

その疑問を発してすぐだった。

「ギゴガゴゴオー！」

その鳴き声と共に目の前に現れた存在。  
その存在にオレは驚愕した。

\*

「これは？」

オーバに足止めを頼み、走り抜けた私たち。  
そこは、



「うう、寒い！」

雪が降りしきる雪原に出た。

「ラルトス、ここは？」

「（ここはテンガン山の奥。一年中降りしきる雪によって、この雪は永久に解けることはないらしいわ）」

つまりは万年雪ってことか。

テンガン山にこんなところがあったなんて。

私はここには来たことがなかった。

「（こっちよ、ついてきて）」

私でも少しは道がわかるかと思っていただけ、これはラルトスに頼りきりになりそうだ。

それにしても、

「ジバコイル、お願い！」

「ジBRRRRRR！」

こんな雪深くともポケモンはいるみたいで、今ヒカリちゃんのジバコイルがユキカブリを鎧袖一色のごとく退けていた。

今までレアコイルとジバコイルは、関係があるとはわかっていても、進化については謎に包まれていた。

しかし、以前ユウト君が講義の中で言っていた内容。

それがその通りの現実として起こった。

これには些か驚きを覚えた。  
そして彼の知識はまだ奥がありそうだった。  
未知の知識への渴望と彼への興味が私をさらに前へ突き動かす。  
こんなところで彼を失うことは様々な意味であってはならない。  
絶対にアカギに、そしてパルキアに会う。  
会わなければならない。  
そう新たに決意を秘めて、視界が悪い中を突き進む。

\*

「お前はもしかして……」

黄色い突起物がムカデのように体の横から生えている特徴的なフォーム。

「……ギラティナ。ということはここは……！」

ギラティナがオリジンフォームで存在し、ヒカリちゃんたちがいる世界でもないここは

「やぶれた世界、ということか」

「（ギラティナがあなたをこの世界に呼んだ）」

お前が？といった感じで視線をギラティナに合わせると、ギラティナはコクリと頷いた。

「いったいなぜ？」

「（あなたにはフシギな感じを覚える。なんて言うか、この世の人

間じゃないような。表の世界とこのやぶれた世界は表裏一体の世界で、どの生物もどちらかの世界に、例外なく、絶対属している。ただ、ギラティナ以外は皆表の世界にいる。だけど、あなたはそらちらにも属していない、そんな気がして仕方がない。だからアグノムもギラティナもあなたに興味を持った」

アグノムの言葉にギラティナも頷いてみせる。

オレの素姓に神と呼ばれることもある2体のポケモンたちがそこまで興味を抱くなら、とオレは自分のこれまでのことを話すことにした。

\*

「（あそこよ！ あの光の先にやりのはしらがあるわ！）」

薄暗い洞窟を抜ける中、そうしてラルトスに導かれた場所。

「ここが……！」

「やりのはしら、ね。確かに言い得て妙ね」  
なるほど。

私やヒカリちゃんの両腕を回しても届かないほどの太く、そして柱の先がまるで見えない様が、恰も槍のようにと、形容させる。それほど長さ誇る柱。

それらが何やら、何かを囲むように特別な並び方で並ぶ。

しかも、ご丁寧なそこは祭壇のごとく、他よりも数段高くなっている。

何かを召喚するにはうってつけというわけだ。

「おやおや、結局アンタ達も来たのか」

「ここから先はちょおっと通せませんわよん。通りたいたらあ、ワタクシ達を倒してからねん」

ギンガ団幹部のマーズにジユピター。

彼女らが最後の障壁ということね。

「全員行け！」

マーズが繰り出すはブーバーン、ゴルバット、プニヤット、フーディン。

「こっちもよん」

ジユピターはエレキブル、ドータクン、スカタンク、フーディン。

「言つとくけど、アタシらはトレーナーってわけじゃないからね」

「1対1い？ なぁにそれ、おいしいのお？」

ジユピターとかつてのは初めて会ったけど、なんだかイラツとくるわね。

「上等よ、私たちの本気、見せてあげる。行きなさい！ ルカリオ、ミカルゲ、ミロカロス、ガブリアス！」

「こっちも！ ポツチャマ、リザードン、エルレイド、ジバコイル」

こちらもそれぞれ4体ずつにしたのは、これ以上だとそれぞれのバ

トルに支障をきたす恐れがあったからだ。  
さて、とりあえず相手の手持ちの中で面倒そうなものは、と。

「エルレイド！ つじぎりで相手のフーディンを沈めなさい！ 他  
のみんなはエルレイドが邪魔されないように援護！ それからエレ  
キブルに電気技は厳禁よ！」

ヒカリちゃんもやはり最優先でフーディンを落とそうとしていた。  
素早さと特攻が非常に高いフーディン。

その高さはイッシュを除いて493種類いるらしいポケモンの中で  
上から数えて10番目くらいに入るのだという。  
そこから繰り出される特殊技の数々は脅威だ。

「ガブリアス、エルレイドを援護なさい！」

しかし、反面それ以外の能力が、ユウト君の言葉を借りれば『紙』  
だ。

一撃当てれば、ほとんど落とせる。  
物理技なら特にだ。

「ムダよ！ フーディンの素早さに勝てる奴なんかいないわ！ フ  
ーディン、サイコキネシス！」

ユウト君の講義で初めて習った概念、種族値、個体値、性格、そし  
て努力値。

個体値や性格についてはいまさら遅いが、努力値については木の実  
を食べさせて一から育てなおした。  
種族値上、ガブリアスは素早さでフーディンに劣っているが、素早  
さに努力値を極振りしているため、

「なんですって！ フーデインより速い！」  
「今よ、ガブリアス！ ドラゴンクロー！」

努力値の概念などを知らないフーデインの速さを抜くことは可能。私のガブリアスはがんばりやな性格のため補正はないが、攻撃の種族値は高い上、こちらにも努力値をかなり振ってある。

しかもタイプ一致物理技のドラゴンクローなため、それを食らった紙耐久なフーデインは起き上がることはなかった。

そして、もう一方のフーデインも片方が倒されて動揺した隙をついて、エルレイドのつじぎりが決まって、地に沈んだ。

「ポツチャマ、ブーバーンの特性に気をつけなさい！」

「特性ばかり目を取られてもダメよおん、かえんほうしゃ！」

「ハイドロポンプで撃ち返しなさい！」

「なあんですってえ！ なあんで進化もしていないポツチャマがハイドロポンプなんて使えるのよお！ でも、進化してないポケモンなんかの技でやられるわけがないわおん！」

今まで、進化をすると技の威力が上がると信じられてきたが、ユウト君曰く、実際は能力値が大幅にアップしているからダメージが増えるだけなのだ。

そして、進化をすると自力で習得する技に対しては覚えるのに時間がかかるという欠点がある。

また、覚えてたの技については十全に威力を発揮するのは難しい。ヒカリちゃんのポツチャマはかなり前にハイドロポンプを習得していた。

そして努力値についてもきちんと学習し、振ってあるから、

「ブー、バーン！」

タイプ一致相性有利なハイドポンプが、かえんほうしゃと拮抗することなく押し返してブーバーンを倒した。

これであと厄介そうなのは、特性が『あついしぼつ』か『じゅうなん』のプニャットのみ（ドータクンは浮いていることから特性はおそらく『ふゆう』）。

「ミカルゲ、ルカリオ、それからエルレイド、サイコキネシス！」「ジバコイル、じゅうりよく！」

エルレイドは私のことを知ってくれているので、私の指示にも従う。そうして、身動きを封じて一か所に固めた。

「リザードン、準備は良い？」

「ガブリアスも大丈夫？」

すると、2体とも力強い返事が返ってきた。

「よし！ リザードン、ブラストバーン！」

「ガブリアスはだいもんじ！」

力をためた状態のブラストバーンにだいもんじ。

それらが、じゅうりよく下（命中率が1.66倍上昇）で、かつ、サイコキネシスで身動きを封じられている相手のポケモンたちにクリーンヒット。

プニャットを残して全員が戦闘不能になった。

どうやらプニャットは『あついしぼつ』の方だったようで、まだ、かるうじて立っている状態だった。

「とどめよ！ ジバコイル、ラスターカノン！」

そこに容赦なく、ジバコイルのその高い特攻からのタイプ一致特殊技のラスターカノンが突き刺さり、プニヤットは倒れ伏した。

「ほう、なかなかやるではないか」

不意に、上から掛けられた声。

そこを見ると

「アカギ！」

ギンガ団ボスのアカギだった。

アカギの周りにはユクシー、エムリットが浮かんでいた。

だが、その2体は目が正気ではなく、何やら操られているような感じであった。

「アカギ様！」

「申し訳ありません」

「お前たちは下がっている」

「「ハイ……」」

気落ちした様子の2人を冷たい目で以って下がらせると、私たちに向き直る。

「なにはともあれ、ようこそ、お二人さん」

「あなた、ユクシーやエムリットに何をしたのよ!？」

「なに、わたしの野望、新たなる宇宙の創世に必要なことをしたままで。安心したまえ、命までは取らない」

「そういうことを言ってるんじゃないわよ!」

「まあ、ここで不毛な言い合いをしても仕方あるまい。私と君たちとは決して交わることはない平行線なのだ。さて、せっかくここま



で来たんだ。キミたちにもイイモノを見せてあげよう」

そうして彼はやりはしらの中心に供えられたしらたま、こんごうだ  
まに手をかざし始めた。

## 第5話（後書き）

ヒカリのリザードンのプラストバーンは主人公君に教わりました。

## 第6話

「ふ、ふは、ふはははは！ すばらしい！ これが！ これが神と呼ばれしポケモン、ディアルガにパルキア！」

あたしたちの目の前に空間の裂け目から現れた2体の存在。シンオウ地方の伝説のポケモン。

時間の神、ディアルガ。

空間の神、パルキア。

圧倒的すぎる威圧感が辺りを支配する。

「ディアルガよ、パルキアよ！ これを見たまえ！」

アカギの手を包むグローブにはなにやら赤い結晶のようなものが備え付けられていた。

それらを見た瞬間、ディアルガ、パルキアの2体の身体に赤い稲妻のような鎖のようなものが絞めつけられた。

それがつけられた瞬間、2体が激しく雄叫びをあげ、苦しそうにもがき始めた。

「ハハハハ！ アグノムがいなかったおかげで不安はあったが成功した！ これでもうディアルガもパルキアも私の思うがままだ！」  
「やめなさい、アカギ！ ディアルガもパルキアもあんなに苦しもうにしているのよ！」

アカギはつまらなそうに振り返り、一言零した。

「それが？」

!!

「あんたッ!! もういい! ポツチャマ、ハイドロポンプ! リザードン、かえんほうしゃ! あの紅い鎖を壊しなさい!!」

「ガブリアス、りゅうせいぐん! ルカリオ、はどうだん!」

一度ポケモンたちをボールに戻していたあたしたちは再び、ボールから彼らを外に出し、指示をする。

「させん! ディアルガ、ときのほうこう! パルキア、あくうせつだん! ユクシーとエムリットはサイコキネシス!」

苦しみもかく2体はそれから逃れたい一心で、またユクシーとエムリットは操られているため、あたしたちが繰り出した技に対して、それらをぶつけてきた。

そしてぶつかり合ったそれらは一瞬拮抗するも、押し返されてしまふ。

「ええ!?!」

「まずいわ!」

シロナさんはあたしを庇うように抱きしめる。だが、無情にも、それは迫ってくる。

「(くっ! ラティアス、ゲンガー! 出て来なさい! わたしといつしよにまもる!)」

ラルトスがユウトさんのバックから出てきたその2体はラルトスの

指示通り、半球体状にまもるを展開した。  
それからすぐさまその壁に衝突する攻撃。

「（サイコキネシスで分解しながら斜めに逸らすわよ！）」

「フアアアウウ！」

「ゲゲンガ！」

そうして伝説のポケモンたちによる激しい攻撃をなんとか退けた。

「す、すごい……！」

「これが……！」

あたしたちは安堵と共に驚きを露わにしていた。

「（アルセウスの鎖でディアルガとパルキアのパワーが増してみた  
いだから、技のぶつかり合いには勝てなかったのかしらね）」

アルセウスの鎖？

いったい何のことだろうか？

そう思ったが、すぐにそれは忘却の彼方に飛んでしまった。

「さて、時間を司るディアルガ、空間を司るパルキアよ。お前たちの秘めたる力を解放し、ここに新たなる宇宙をつくりだすのだ！」

そして2体が吐き出したエネルギー。

それらが、ぶつかり合い「、混ざり合う。

そうして

「おお、すばらしい！ 宇宙だ！ 新たなる世界が誕生したのだ！」

信じられないことに宇宙空間が出来上がった。

さらにアカギに寄り添うようにユクシーとエムリットが集まる。

「（いい加減、目を覚ましなさい、ユクシー、エムリット!）」

そうしてラルトスが放ったスピードスターが2体の頭部に命中すると、ガラスの割れるような音がし、ユクシー達の目に正気が戻った。

「これで、これで私の野望は!！」

アカギの歓喜の声がやりのはしらに響き渡った。

残念ながらそうはいかない

しかし、同時にアカギとは違う声も響き渡った。

この、聞き覚えのある声は、まさか

ディアルガとパルキアのさらによ、そこにまた次元の歪みのようなものが出来上がった。

\*

「久々だな、アカギ。カンナギでアンタをぶちのめして以来か」

アカギを始め、ここにいる全員が、パルキアやディアルガすら見下ろすような位置に現れたオレやアグノム、そして

「きさま……な、なんだ、ソレは……！」

オレを乗せているポケモンに驚きを隠せていない様子です。

「コイツはギラティナというポケモンだ。ギラティナ、頼む」

ギラティナはオレを下ろすと、パルキアやディアルガに向き直る。

ちなみにはつきんだまをやぶれた世界で見つけて、それを持たせているため、フォルムチェンジはしていません。

や、オレがオリジンフォルムが好きで運良くはつきんだまを見つけたため、お願いしたらOKもらえました。

そのギラティナはディアルガとパルキアに向き直るとあやしいかげで、紅い鎖にヒビを入れて、その後、きりさく攻撃で粉碎させてました。

2体はあの鎖でかなりダメージを負っていたのか、そのまま落下し、地面の身体を横たえていました。

「（ユウト……）」

「ん？ おお、ラルトス！ 無事だったか！」

「（ユウト、ユウト……）」

10年以上ずっと一緒にいるラルトスがオレの胸の飛び込んできた。した。

ちよっと泣いているようだったので、ちゃんとあやしますよ。

「マन्दラー！」  
「フアアアウウ！」  
「ゲゲンガー！」  
「ヘラクロス！」  
「グオオオオ！」

ボーマンダやラティアス、ゲンガー、ヘラクロス、ギャラドス。  
連れてきた全員がボールから出てオレに寄り添ってくれています。

「みんな、心配掛けてごめんな」

その様にちよつと涙ぐんで声が震えてしまったのは仕方のないこと  
だと思つた。

オレはこいつらに囲まれて幸せだ。  
本当にそう思えて堪らなく嬉しかった。

「ユウトさん！」  
「ユウト君！」

ヒカリちゃんやシロナさんも駆け寄ってきてくれる。

「ユウトさん、心配しました！」  
「まったくよ」

この2人にも相当迷惑かけたようので、

「ごめん、ヒカリちゃん、シロナさん」

素直に低姿勢で謝罪。



でも、ちゃんと受け入れてくれました。

「それで、あのポケモンはなに？」

シロナさんの視線の先。

そこはディアルガにパルキア、そしてギラティナの3体のポケモン。

「アルセウスの話は？」

「そういえば、さっきあなたのラルトスがそんなことを言っていた気が？」

「どういうことなんですか？」

オレ以外はアカギやシロナさんすらも状況が把握できていないと思われたので、神話からのおとぎ話も交えて説明する。

初めにあつたのは

混沌のうねりだけだった

全てが混ざり合い

中心に卵が現れた

零れ落ちた卵より

最初のものが生まれ出た

最初のものは

二つの分身を創った

時間が回り始めた

空間が広がり始めた

さらに自分の体から

三つの命を生み出した

二つの分身が祈ると

「物」と言うものが生まれ

三つの命が祈ると

「心」と言うものが生まれた

世界が創り出されたので

最初のものは眠りについた

「シロナさんはミオ図書館にあるこの『始まりの話』は知っていますよね？」

「ええ、一応これでも神話とポケモンの関連性、人間とポケモンの歴史を研究している考古学者だからね」

「これについてですが“2つの分身”はディアルガとパルキア、“3つの命”はアグノム、ユクシー、エムリットを指します」

「まあ、それについては学会でもそう推測されているからね」

「では次。この“最初のもの”、これはこの世界を生み出したポケモン、創造神アルセウスを指します。このアルセウスがこの5体のポケモンたちを生み出したんです。そして実はこの神話、間違っている、というか真実が欠けてしまっている部分があるんです」

「なんですって!?!」

「なんだと!?!」

全く知られていなかった事柄、そして正しいと信じられてきた神話自体の欠損。

いきなりこれらを提示され、神話について造詣の深いシロナさんにディアルガとパルキア復活のために動きまわっていたアカギには特に衝撃的な内容だった。

「本当はアルセウスが生み出した分身は3つなんです。そして、最後の分身はそこにいる3体目のポケモン、ギラティナ」

全員の視線がギラティナに集まる。

「世界を創るにはディアルガとパルキア、この2体のポケモンが必要です。しかし、世界を創り出すことは可能でも、その世界を安定させることは出来ないんです。創り出した世界をプラスとすると、同じくマイナスという要素がなければ0にならず、安定はしません」

例えば化学で習う原子は、陽子と中性子が原子核を構成していて電氣的にはプラスの性質を帯びている。

だが、それだけでは安定しないため、マイナスの電氣的性質を帯びている電子を原子核の周りをいくつか飛び回らせることによって、電氣的にプラスマイナス0の状態にして安定を図っている。それと似たようなものだ。

「そのマイナスの要素がギラティナであり、ギラティナが支配する“やぶれた世界”という世界です。そのやぶれた世界が、いわば、この世界と表裏一体、プラマイ0の関係となっていて、世界の安定を図っているんです」

だから、アカギがディアルガとパルキアを使い、この世界に新世界を創り出そうとしたとき

新世界はそのままだと、この世界を蝕み、いずれ消滅させることになる。

この世界はやぶれた世界と表裏一体の関係なのだから、新世界の侵食が進むとやぶれた世界もまた蝕まれて、消滅する。

その前兆が先程やぶれた世界にもきちんと現れていたのだ。

「ギラティナは“こちら側”には滅多に出てこないために、過去に神話を残した人々はギラティナの存在を知らなかったんでしょ」

だから、世界創生についての不完全な神話が生まれたのだと補足した。

「世界を創り出した神々たちは世界の消滅など望んでいない。だから、ディアルガ、パルキア、ギラティナ、この3体がそろえば」  
「見るといつの間にか起き上がっていたディアルガとパルキアが、ギラティナと共に、自ら創り出してしまった世界を

「ああ！ 世界が！ わたしの世界が！！」

まだ言ってるよ、あのオツサン（怒）。  
とにかく、あの3体がこの世界にあってはならない“世界”を消滅させていきます。

「わたしの……！ わたしの世界……！！」

アカギの嘆きをBGMにして、消えていった世界。  
消えた後、ディアルガとパルキアは空間に穴を開けて帰って行きま  
した。

ギラティナと、それから湖の3体がオレの元に寄ってきます。

「（ギラティナはあなたを元の世界に戻すことは出来ないと言っている。アグノムたちやディアルガ、パルキアもそれは出来ない。だから、ごめん）」

アグノムのテレパシーがオレの頭の中に響き渡る。

（いや、さっきも話したときに言ったけど、別にオレとしてはこの

世界でも十分楽しくやってるから、大丈夫だって。謝るほどのものじゃない)

尤も、それを悲しんでくれたことには『ありがとう』の気持ちは抱いています。

ちなみにこのテレパシーはアグノムとオレとだけにしか通じていないみたいなので、シロナさんたちにオレのことを説明しなければならぬという面倒な事態は発生しない。

「ギラティナ、お前はもう自分の世界に帰りな。それでいつかまた会おうな」

それにコクリと頷くギラティナ。

そしてシャドーダイブでやぶれた世界に戻っていく。

それからアグノムたちもそれぞれが眠る湖に戻っていった。

「わたしの……世界……わたしの……野望が……不完全なこの世界を……」

「アカギ、何を以ってあなたはこの世界が不完全だと判断するの？」

両手を地面について頂垂れるアカギにシロナさんが声をかける。

「決まっている。心だ。心があるから人間もポケモンも争いが起こる。それはなんと醜いことか。もはやそれは罪なのだ、だから」

「そんなことはない!!」

アカギの言葉をヒカリちゃんの絶叫が遮った。

「あたしはポケモンたちが好き。あたしのポケモンたちが大好き。」

だから、旅を続けることが出来てる。つらいことがあっても乗り越えることが出来てる。それは、みんながいてくれるから、みんながこんなあたしといてくれるから。この感情は間違いなんかじゃない！ だから！」

ヒカリちゃんのポケモンたちがボールから出てきて雄叫びをあげる。皆、アカギの言うことに反発しているのだろう。彼らはヒカリちゃんのことを大好きだから。

「アカギ、1つ言っておきたいことがある。人間やポケモンに問わず、生き物は太古から争うことにより進化をしてきた」

どこその漫画に『この世は所詮、弱肉強食。強ければ生き、弱ければ死ぬ』という言葉があるが、まさにその通り。

生き物は絶えず、その時代で相争い、そしてその時代に適した進化を遂げたものが生き残り、繁栄を続ける。

そうしてまた争い、進化をつづけていく。

その繰り返しだ。

この世界ではその辺のことはよくわからない。

だがしかし、それでもその“争う”ことが生き物であることに課せられた使命でもあるのだ。

「アンタの言う“心”、つまり、“感情”がいらないうのなら、そんなものは単なる“ロボット”に過ぎない。それをアンタは知るべきだな」

「みんなにだいたい言われちゃったけど、私からも一つ。あなたのそのくだらない野望が自らの正義だとも言うのなら、そんな人様に迷惑をかけるものなんてクソくらえって感じね」

「ついでに言えば、アンタのその野望、それすらもアンタがそれを望む“感情”から生まれたものだ。アンタがそれを否定したら、ア

ンタ自身が自分を否定することになる。そのことに気づくべきだっ  
たな」

こうしてシンオウ地方を揺るがした破滅の危機は、ここに終息した。

第6話（後書き）

ギンガ団・シンオウ地方の危機編はこれにて終了です



## 第7話

アカギの野望消滅、そしてギンガ団壊滅よりはや2ヶ月近くが経ちました。

そして今、オレたちはある大きなイベントに参加するために、シンオウ地方のスズラン島という島にいます。

地理的にはナギサシティの北に存在している島です。

ナギサシティとこの島の間には223番水道やチャンピオンロードといった難所が存在し、並のトレーナーとポケモンが通り抜けようとすれば、間違いなくそれらが容赦なく彼らに牙をむけることとなるでしょう。

よって、ここをトレーナーとポケモンのみで乗り越えるには『最低でもシンオウ地方で8つのジムバッジを持ていなければならない』という暗黙の了解があり、それを利用して行われるのが、今回の一大イベントです。

あ、ちなみにこの島の名前ですが、クナシリにするかスズランにするかで激しく争った経緯があるそうです。

現実世界ではシンオウが北海道をモデルにしているため、この場所は、現実では、だいたい国後島のあたりに位置しています。

うん……、なんていうか笑えない。

ヒツジョーに笑えない。

アバガイト・ヘイシャーズみたいな方法でうまく解決できていればいいのだが、と思ったりしていたが、既にどうなっているのかなんてオレにはもうわからない。

「どうしたんですか、ユウトさん？」  
「いや、なんでもないよ」

内心の憂慮を気取られないようにヒカリちゃんに接する。

「（人間の国ってというのは大変ね）」

尤もラルトスには全然隠せてなかったけど。  
ちなみに、

「ヒカリちゃん！ 僕は君と当たっても全力でやるからね！」  
「そうだけ！ 全力でやんなかったら罰金1億円だかな！」

ナナカマド博士の助手の子でもあるコウキ君に、罰金ボーイ（by  
アニメロケット弾）こと、ジュン君もこの場にいます。  
ちなみに彼らは幼馴染なんだそうです。

そしてどうやら、あの場にいた子たちは全員この場に来ることが出  
来た様子。

その才能には感嘆するし、嫉妬もしてしまいそうです。

「（わたしたちにはいろいろあって出来なかったことよね。でも、  
あの頃もなんだかんだ言っても懐かしいわ）」

たしかに。  
今ではいい思い出だ。

「にしても結構な人数がアソコを抜けてきたもんだな」  
「そうだね。ユウトさんも出ることだし、とんでもない大会になる  
かもね」

ちなみにオレのことはこの3人には黙ってもらっています。  
あんまり騒がれるのもマズイかなと思うので。

そしてここはスズラン島内にあるスタジアムの一つなのですが、  
競技場内にはたくさんのトレーナーがいます。

そして競技場内には大きな電子時計がセットされていて、それが、  
カウントダウンしています。

競技場の入り口から外を見ると、まだまだたくさんのトレーナーと  
ポケモンたちがいて、この競技場に向かって走ってきています。

『さあ、残り時間はもうまもなくです！ まだこのスタジアムに辿  
り着いていないトレーナーの皆さんは急いで急いで！！』

スタジアム内のスピーカーから男性実況のマイク音声がうるさいぐ  
らいに響き渡っています。

尤も、この放送は島全体にも流すため、ある意味仕方ないというこ  
とも言えるのですが。

『タイムアップまで、あと！ 5、4、3、2、1、タイムアップ！  
~~~~~プ！ 終了です！ 競技場入り口の扉が閉まりますので近く  
にいるトレーナーは離れてくださいね！ あぶないですよ！』

そうして競技場の入口に鉄格子の扉が上から落とされ、競技場の中  
と外を完全に遮断しました。

入れなかったトレーナーたちはガックリとその場で座り込むか、鉄  
格子の扉にしがみつき、泣き伏しています。

尤も、彼らは係員に連れ出されて行きました。

『ではナギサシティよりこの島まで、ポケモンと力を合わせて、海  
を渡り、山あり谷あり強い野性ポケモンありの、つらく厳しいチャ  
ンピオンロードを抜けて辿り着いた強きトレーナーたちよ、ようこ

そ！　ここがスズラン島だア！』

うおおおおお！！

トレーナーやポケモンたちの歓声上がる。

『そしてええええ、ここがシンオウ地方でポケモンリーグが開催される島、スズラン島だアアアアアア！！』

うおおおおおおおお！！

先程よりもさらに大きな歓声上がる。

もはやこれは様式美とすら言ってもいい。

ア　リカ横断ウルトラクイズ的なノリだ。

『さて、今回このスタジアムに辿り着いた猛者はなんと過去最高の200人以上！　これはかつてないほどの激戦、そして波乱に満ちた大会となることでしょう！！』

そして最後に実況が告げる言葉

『これよりシンオウリーグスズラン大会を開催します！』

これによりトレーナーたちのボルテージは最高潮に達した。

\*

「へえ、キミがヒカリちゃんっていうんだ」

「は、はじめまして！」

「ああ、そんなに硬くならなかったっていいよ。聞けばシンオウチャ  
ンピオンのシロナとだって普通に接してるんだろ？ ポクにもそん  
な感じでお願いしたいな」

「ヒカリちゃん、あとでバトルしよーよ！ ユートに師事されてた  
つてことはバトルの腕は相当なんだよね！？」

「え！？ あ、いや、その……」

「何言つてんだ、俺が先だ！ なっ、ヒカリちゃん！ コイツなん  
かより俺と先にやろうぜ！」

「ちよつとアンタ！ コイツってなにさ！」

「るっせ！ お前なんてコイツで十分なんだよ！」

「あによ～～～！？」

「コラコラ、君たち、ヒカリちゃんが困ってるじゃないか」

ここはシンオウリーグズラン大会に出場する選手のために用意さ  
れた宿の一室だ。

そしてここはオレが泊まる予定の部屋になっている。

「ヒカリちゃんがここにいるのはまあいいさ。大会にだって出場す  
ることだし、ずっと一緒に旅をしてきたことだし」

でもな

「おい、テメーラ！！ なんでこんなところに居やがるんだ！！？」

自分の部屋を開けた瞬間にこの惨状を見せつけられ、オレはいつもの自分を忘れて思わず怒鳴りつけていた。

\*

この部屋にはおかしな人たちを一人ずつ挙げていこう。

「おい、ハウエン地方チャンピオン様がなんでこんなところにいる？」

「いやだなあ、いまさらそんな敬称で呼び合う仲じゃないじゃない、ボクたち。ダイゴでいいよ。それに言っとくけど、ボクはキミが勝手に辞めたからチャンピオンの代わりをしてるだけだし」

現ハウエン地方チャンピオンで、デボンコーポレーション社長の息子。

石集めが大好きな変態であるダイゴ。

「現カントー四天王、ワタルさんに変わり4人目を務めるはずの間よ、リーグはどうした!？」

「やーね、今リーグはやってないし、ヒマだったし。レッドもどこにいるかわかんないし」

「だからあ、アンタの恋人はシロガネ山にいるって言ってんだろお!？」

カントー四天王の4人目、ブルー。

彼女はFRLGの女主人公だ。

そしてレッドとはカントーチャンピオンのことで、FRLGの男主

人公、サートシ君のモデルになった人だ。

ちなみにブルーさんとレッドさんは恋人同士なのだが、レッドさんは常日頃はシロガネ山にいて滅多に下山してこない。

彼女は恋人ということもあり、レッドさんに会いに行こうとしているのだが、凄まじいくらいの方向音痴なため、落ち合うことはないらしい。

一度、オレも付き添いで一緒に行ったら、オレの後ろを着いてきていたはずが、なぜか彼女だけ下山していたという、摩訶不思議な女性だ。

「ジョウトの四天王ってのは随分ヒマなのか？ あ？」

「ハッ！ ふらつき歩いてるお前に言われたくはないな。それに年上には敬語を使え、敬語を」

ジョウト四天王でゴールドさん（HGSSの男主人公）のライバル、シルバー。

ロケット団のボス、サカキの息子というのは公然の秘密である。

ちなみにゴールドさんもジョウトチャンピオンになったのだが、オレと同じくワタルさんにチャンピオンを任せて旅に出ている。

「グリーンさん、常識人のあなたがこんなところに来ていいんですか？ トキワのジムは？」

「ハハハ、心配ないよ。ゴールド君とたまたま会ってね。少しの間、ジムリーダーやれって、センパイ権限で押しつけてきたんだ」

オイ、いいのかそんなんぞ。

ジムリーダーってそんな軽いもんなのか？

とまあそういうわけで、トキワジムジムリーダーのグリーンさん。

レッドさんやブルーさんのライバルで一度はカントーチャンピオンに輝いたことすらある“最強のジムリーダー”だ。

「まあ、ボクたちの本当の目的はさ」

「個人的にはユートのバトルを見るためっていうのもあるんだけど

」

「リーグの公人としての仕事はなあ」

「（キミを）（ユートを）（てめえを）リーグに連れ戻すこと

（さ）（よ）（だ）！」「」

ゲッ！

マチですか……。

「まあそういうことさ。それで僕たちが君を【監視】するためにここに来た、というわけだ。ちなみに今はこの4人だけだが、後からさらに何人が派遣されてくるはずだ」

マズイな。

今までもこういうのはあったけど、ここまで人数多くなかったし。

（ラルトス、あとで何とか逃げ切る算段を考えよう！）

「（わかったわ！）」

そんなオレを若干冷たい目で見ているヒカリちゃんにオレは気がつかなかった。

\*

翌日

対戦の組み合わせが発表されるので、それを受け取るために宿を出



たオレ。

ちなみにヒカリちゃん、ジュン君、コウキ君らは先にスタジアムに向かっています。

や、俺が寝坊して置いていかれただけなんですけどね。

「ラルトス、起こしてくれてもよかったですね」

「（ヒカリもたまには彼らいつしよにいる方がいいでしょ？）」

「……それもそうか」

後から聞いたんですけど、3人ともフタバタウン出身で幼馴染なんだそうです。

「そういえば、お前との2人きりなんて久々だなあ」

「（そう、うん？ ユウト）」

オレたちの歩く先に立つ1人の少年。

「あなたが、ユウトさん、ですね？」

なぜか彼はオレの名前を知っていました。

「まあ、そんなんだけど、君は誰かな？」

尤も、口ではそういうものの、オレとしてはどこかで見たことあるような気がして仕方なかったです。

「オレの名前はシンジと言います。トバリシティの出身です」

この目つきの悪いシンジと名乗った少年。

(ああ、なるほど)

思い出した。

たしかアニメのDP編でサートシ君のライバル的な扱いされてたキヤクターだっけ。

ネットだとあだ名が廃人だとか。

なんでも能力の高いポケモンは捕まえて、そうではないのは逃がすとかしていたらしい。

うん、まさにポケモン廃人だ。

「そうか。それでシンジ君、オレに何か用かな？」

「オレ、5回戦、つまり、予選リーグ決勝であなたと戦います」

「シンジ君、オレがまだそこまで勝つなんて決まってるじゃないよ？」

「それはありえない。ハウエン、ジョウト、ナナシマチャンピオンでカントー準チャンピオンであるあなたなら」

あら、そんなことを知っているということはもしかして？

「オレはハウエン、それからジョウトを旅してきました」

やっぱり。

ん？

今の言い草だとカントーはまだ旅していないのか。

「そこでオレは行く先々である言葉を耳にしました」

『強いポケモン、弱いポケモン。そんなの人の勝手。トレーナーなら、自分の好きなポケモンで勝てるよう努力するべき』

「オレはこれには納得がいかない。好きなポケモン？ 違う！ 強いポケモンでなければバトルでは勝てないんだ！ だから、オレはあなたに勝って、それを証明してみせる！」

あゝ、なるほど。

この手の手合いは今まで何回も相手してきた。

「そうか。期待しているよ」

ゲームだったらむしろそれが正しい。

个体値を粘り、性格を粘りで（努力値なんてものは戦略の指針だから）。

実際、彼は確か育て屋をやっていた身内がいたはず。

「君とバトル出来るのを本当に楽しみにしているよ」

オレとシンジ君は180。正反対の方向に歩きだした。

\*

ポケモンシンオウリーグスズラン大会。

試合形式は何やらベスト8までは予選リーグという形でブロックごとに分けられるらしい。

またバトルフィールドが草、水、岩、砂、ノーマル（通常）とあり、ベスト8選出までブロックごとに対戦するフィールドの順番が異なるようです（例えばAブロックは岩 草 砂 ノーマル 水となるが、Bブロックは水 砂 岩 草 ノーマルといった具合になる）。

ルールについては

- ・ 1対1のシングルバトル
- ・ 使用ポケモンは3体
- ・ ポケモンの入れ替えはあり
- ・ 道具の使用はなし

と、ごくごく一般的です。

そしてベスト8から決勝リーグとなり、使用ポケモンが6体に増えること以外、予選リーグとルールは変わりません。

ちなみに、この世界はポケモンに道具を持たせるという概念がないらしく、気合いのタスキや拘りスカーフ、オボンの実なんて使ったら、下手したら反則を取られてしまう危険性があるため、なかなか使えなかったりします。

で、コウキ君たちに合流したオレは自分のブロックのトーナメント表を見比べながら、宿に戻る道程を3人で歩いていた。ちなみにヒカリちゃんは一足お先に宿に戻っているそうです。

「僕はAブロック、ジュン君はEブロックで別々のブロックになったね」

「ああ。けど……なあ」

「……そうだねえ」

一つ問題があった。

いや、オレに取って言えば二つか？

「なんで、ユウトさんがヒカリと同じBブロックになっちゃうかなあ」

そう。

罰金ボーイ、ジュン君の言うとおり、オレとヒカリちゃんは抽選の結果、同じBブロックになった。  
順当にいけば予選ブロック決勝でオレと当たることになる。

「まあ、こればかりはしょうがないさ。完全な運だもの」

教え子だからと手を抜いたら、逆にヒカリちゃんに失礼になるからやはり、全力で行く。

その辺、この2人は幼馴染だからと「ヒカリに対して手を抜いてくれ」とは言わなかった。

旅に出る前だったら、きっとそういうことも言っていただろう。

これも、ポケモンとの旅が彼らを成長させたということだろうか。

そしてシンジ君について。

彼は順当にいくと3回戦でヒカリちゃんと当たる。

おそらく3回戦は間違いなくヒカリちゃんVSシンジ君のバトルになる。

彼の試練はまずヒカリちゃんをクリアすることでしょう。

「そのラルトスを連れてきているキミ、キミがユウトという人物で合っているかな？」

オレたちの後ろから掛かった声にオレは深くため息をついた。

振り返るとえんじ色のポンチヨのようなものを羽織り、長い長髪を後ろに流して顔の左半分がその長髪で隠れている男。

「やれやれ、今日は千客万来だなあ、しかも知らない人ばかり」

ホントに誰だ、アンタ。

「ボクの名前はタクト。キミを倒す男さ」

タクト、タクトねえ。

あれ、そういえば何かこの風貌と言い、名前と言い、どこかで……。

「キミはダークライ使いの噂を聞いたことはないかい？」

ダークライ使い？

いや、聞いたことはないかな。

ただ、アニメの方では心当たりが一人……。

「ダークライ使いつてアレですか！？ あの、ジム戦とかバトルの全てをダークライ1体で切り抜けたって言う！？」

コウキ君の言葉で完全に一致した。

そうかこいつが

「そのダークライ使いとはボクのことだ」

「なんだってえ！？」

「あのダークライ使いがあなた！？」

あの催眠厨にして、伝説厨ね。

「ボクはキミの掲げる言葉については異論があるんだ。ポケモンバトルは強いポケモンで戦えば負けない。このボクのようにね。愛情だなんだかんだ言う前に強いポケモンだ」

「それで、伝説のポケモンばかりを手持ちに入れていると？」

「そういうことだ。しかし嬉しいよ。キミが僕のことを知っていてくれてたなんて」

「オレは今すぐ忘れたいな」

「大丈夫だ、絶対忘れられなくなるよ。安心したまえ。では、4回戦で逢おう」

そう言って去っていくタクト。

「ああ、言い忘れていた。ひとつ君に忠告をしておこう」

「なんですか？」

「キミのつれてるラルトスなんかじゃあ、ボクのポケモンになんか絶対敵わない。だから、入れ替えをお勧めしとくよ。ではね」

ピキッ

辺りにそんな音が響いた。

うん、なんだ、その、問題が三つに増えたとか、そんなことはどうでもいい。

「（ユウト……）」

「……ああ」

オレのラルトスを  
オレの最高の相棒を侮辱するとは

「あ、あの……ユウトさん……?」

「だ……大丈夫ですか……?」

正直、オレは2人の言葉なんか一切聞こえなかった。

いいだろう、そこまで言うのなら見せてやるわ。

この世界に蔓延る派手な技の出し合いではなく、オレの世界での、  
ポケモンバトルの真髄を

オレたちの本気を

そして

（あのヤロウを　　）

「（あのワカメを　　）」

ブチコロス!!





## 第7話（後書き）

？アバガイト・ヘイシャーズというのはアムール川とウスリー川が合流する付近の中露国境に存在していた、『解決不可能』と世界中から目されていた領土問題です。しかし、2004年に円満解決し、世界中に衝撃を与えました。このケースが全て丸々当てはまることではないのですが、経緯等々が北方領土問題に酷似していたため、自民政権時代（麻生外相以降）交渉が進められていました。

？アニメキャラのシンジとタクトが登場。いろいろフラグが立っています。ただ先に謝っておきます。この2人（特にタクト）のファンの皆さん、ごめんなさいm（――）m

## 挿話4

いよいよ、夢にまで見たポケモンリーグ。それに出場するためにあたしは旅に出た。旅に出始めてから初めて味わった、挫折。

暗闇の中での出会い。

そこからいろいろあった。

色々あり過ぎた。

だが、最終的にはジムバッチも8つ手に入れた。

ナギサシティから223番水道 チャンピオンロードを抜けて、ポケモンリーグが開催されるスズラン島に辿り着くという、ポケモンリーグに出場するための『最終予選』にも勝ち残った。

あたしはついにポケモンリーグに参加することになったのだ。

また、そこでは、あたしの幼馴染のジュンやコウキにも再会した。

2人とも最終予選をクリアしたようで、お互いの結果に喜びあいつつ、お互いがお互い本気の勝負で行くことを誓い合った。

夜、宿ではユウトさんの知り合いだという、大誤算、じゃなかった、ダイゴさん、ブルーさん、シルバーさん、グリーンさんがユウトさんの部屋にやってきてかなり賑やかだったけど楽しかった。

ただ、みんなすごい人たちばかりで、本当にユウトさんはあたしなんかよりすごい人なんだとまた実感した。

次の日、トーナメントの組み合わせが発表されるので、久々にあたしたち3人でスタジアムに足を伸ばした（ユウトさんはときどき起こる凄まじいまでの寝坊の日だったので置いていった）。

途中、旅の思い出話を3人でしているときは楽しくて面白くて、それこそあつという間にスタジアムに着いた。

そしてトーナメント表を受け取って確認する。

「おい、これって……!」

「ヒカリちゃん……」

そのとき2人の声は右から左に抜けていつていた。

「ユウトさんと同じブロック……」

そのときあたしは何とも言えない感覚に陥った。

\*

2人とは別れて1人、森の中にいた。

手頃な岩があつたので腰掛ける。

ただそこで、しばらくボーっとしていた。

「おや、キミはヒカリちゃん？」

声がした方を見てみると、

「グリーンさん」

カントー地方トキワジムジムリーダーのグリーンさんだった。

「どうして？」

「いや何、これでもジムリーダーだからね。ジムを空けて遠出するなんてことはほとんどないし、シンオウ地方に来たのも初めてだったからちょっとその辺ブラブラしてたんだ。シンオウはいいね。自然が豊かだ。それからさっきポケモンと特訓してるトレーナーも見かけたんだ。僕も昔はリーグに挑戦してチャンピオンにもなったこ

とがあるから、なんだかそのときのことを思い出して懐かしくつてね」

そういえば、昨日の晩ユウトさんが言ってたけど、グリーンさんは昔カントーのチャンピオンにもなったことがある人だから、巷だと“最強のジムリーダー”という異名を持つとか教えてもらったわけ。

……

「グリーンさん、グリーンさんはユウトさんと戦ったことはあるんですか？」

「うん？ そうだね。彼の弟子になった君ほどではないと思うけど、それでもけっこう戦ったりしたかな」

「強かったですか？」

「うーん、なんていうかね、初めて戦ったときは、ポケモンの強さ自体は正直そこまで強くなかったかな。もう何年も前のことだけど」「そうだったんですか！？」

意外だ。

正直あたしはそんなに強くないユウトさんなんか想像できない。

「たしかに、今みたいに『あり得ない』っていうぐらい強くはなかったよ。けど、ポケモンへの指示の出し方というか、戦略かな。あれが素晴らしく洗練されていたんだ。正直言って当時の僕に衝撃的だったよ。『あんなバトルがあるのか』ってね」

「そうだったんですか」

「ああ。ちなみに昨日の夜、彼の部屋にいた皆全員、彼と一度でも戦ったことがある奴らばかりなんだ」

「本当ですか！？」

「ああ。そして皆、彼のバトルで意識が変わった奴らばかりだ。君

は彼の言う『ポケモン講座』とかを聞いていたんだろ？」

「はい」

「僕も少しだけ聞いただけなんだけど、あれは世界中どこを探しても存在しない。世界中のポケモンスクールを探したって聞くことはできないし、世界中の学会の論文をひっくり返したって出てこないものなんだ。いわば、彼独自の理論だね」

これまた意外だった。

正直あまり知られていないとユウトさん自身は言っていたけど、まさかそこまでのものだったなんて。

「でも、君は彼の言う理論が正しいって身に染みてわかっているだろ？」

コクリと頷く。

正直、ユウトさんがいなかったら、あたしはきっとギンガ団幹部と渡り合うとか、とんとん拍子でジムリーダーに勝っていくなんてことは出来なかったと思う。

「それにさっきも言ったけど、彼は戦略の立て方が上手い。まあ、本人自身は基本だと言っていたけど、でも、僕たちの常識から考えると思いもつかなかったことに変わりはないんだ。1を2にするのは簡単。だけど0を1にすることはとてつもなく難しい」

「1を2に、マネをすることは簡単だけど、0を1に、それを初めて成すことは難しい」

「そういうこと。昨日監視だなんだかんだ言ってたけど、あれは正直言って建前だ。本音は、彼のバトルを見ること。僕は彼がこういうリーグに出るってときは、なるだけ、彼のバトルを見るようにしてる。彼の戦略はすごい勉強になるんだ」

“最強のジムリーダー”をしてここまで言わせるなんて……。

「それだけの戦略を生み出せる彼は天才さ。おっと、頭に努力という修飾語がつくけどね」

「なんでですか？ あの人はポケモンに関して素晴らしく才能があると思うんですけど」

「彼は君ほどの才能はないよ。彼だって今でこそ、様々な地方のチャンピオンに名を連ねているけど、昔はテンでダメだったらしいし」「えっと、どのくらい……？」

「なんでも、彼はハウエン地方の出身らしいけど、彼はトレーナーになって最初の1年間はバッチが2つしか取れなかったとか」

「ええええええ！？ そ、それって何かの間違いじゃないんですか！？」

何ですかそれは！？

あたしよりひどくないですか！？

えっ、いや、そんな負けっぱなしなユウトさんとか、ぜんっぜん想像できないんですけど……！

それから、バッチがそろっていないから当然ハウエンリーグには出場できなくて、次にジヨウトに行ったらしいけど、それでもバッチが全部そろわずにリーグには出場できなかったとか。

「ただ、聞いた話だけど、奇妙なことに戦うときと戦わないときがあったんだって」

その後今度はナナシマに行って、そこで猛特訓をして初めてリーグに出場したとか。

そして初めてのリーグ出場で優勝し、チャンピオンにも輝いたらしい

い。  
その後にかントーに渡り、ジムをめくり、カントーポケモンリーグに出場してベスト8。

「ちなみにそのときだよ、初めて僕が彼と戦ったのはね」

それからメキメキと実力を伸ばし、ナナシマ、ホウエン、カントー、ジョウトとリーグで優勝し、チャンピオン、あるいは準チャンピオンになっていったらしい。

「なんだか、意外でした。ユウトさんがそんな経歴を持っていたなんて」

「彼だって初めは強くなかったけど、それを何年も時間をかけてあそこまで駆け上がったんだ。だから、ヒカリちゃん、正直君がユウトに勝とうなんていうのはまだ無理だ」

えっ……？

「おそらくどうやって彼に勝とうかなんてずっと考えてたんでしょ？ でも、彼との特訓で一度でも勝ったことは？」

「ない、です……」

「そうだね。トレーナーになってまだ1年にも満たない君が、知識、戦略、経験、それら全てが彼に劣っている今の状況で勝とうなんてそれこそ10年早いよ」

「グリーンさんって結構ズケズケ言うタイプなんですね」

「はは、というより、物事を現実的に見てるつもりなだけなんだけどね。ただ、1つ言えることがある。君が彼から学んできたことはなんだ？」

「学んできたこと……」



理論もそう。  
知識もそう。  
戦略もそう。  
ポケモンたちへの愛情もそう。  
物事をよく観察することもそう。  
冷静に物事を判断することも……あつ

「グリーンさん」

「ん？」

「おかげでスッキリしました！」

「そう。もういいかな？」

「ハイ！ いろいろありがとうございました！ あたし、これで失礼します！」

「うん、がんばんなよ！」

そうしてあたしは気持ち良くなって、ただなんとなくだが、走り出しました。

\*

「よし、みんな出てこい！」

6つ全部のボールを宙に投げだす。  
するとそこから現れる頼りになる仲間たち。

「みんな！ あたしたちはリーグであるユウトさんとガチバトルすることになった！」

そう言ってもみんな誰ひとり動揺する仲間はいなかった。

「正直言っただけ今のあたしじゃあ、多分勝てない。でも、あたしたちは今まで、あの人やポケモンたちにいろいろなことを教わってきた」

だから

「あたしたちは勝てなかったっていい！ あたしたちが今まで習ってきたことを全てぶつけて“あたしたちがここまで成長したんだ”ってことをユウトさんたちに見せつけようじゃない！！」

全員が一斉に雄叫びをあげる。

うん、なんだかテンションも上がって気合いも入ってきた！

「そんじゃあ、あたしたちはユウトさんたちに当たるまでは絶対に負けられないわ！ だから、特訓よ！ みんな、準備は良い！？」

さつきよりも一段と大きい雄叫びが響き渡った。

みんなも気合十分だ！

あたしたちはその後、遅くまで技の練習、戦略の研究、バトルの実践などの特訓を繰り返した。

【後日】

グリーンさんに聞いた話をユウトさんに振ってみた。

「ああ、努力値のために負けたこととか戦わないことがあったんだ。そのおかげで、レベルが高くならなくてね」

ああ、そういうことですか。

あたしの感動を返してください。

あたしは心底そう思った。

### 【余談】

特訓を終え、ポケモンセンターにポケモンたちを預けてクタクタになって宿に帰ると、大誤算たちやジュンたちが一堂に会していて、

「……………」

一様に深刻そうな表情をしていた。

「おー、おかえり、ヒカリちゃん」

すると後ろからグリーンさんに声を掛けられた。

「昼間はありがとうございました。ところで、あれ、なにかあったんですか？」

その不穏な様子に思わず指を指しながら聞いてみた。

「あー、あれなあ」

そして掻い摘んで事情を説明してくれた。  
してくれただけだ、あー、うん、そのー、なんていうか。

「その人は短い人生でしたね」

「バカだけと哀れだね。ただ、問題があつてね」

わかります、ユウトさんのポケモンたちのことですよね。

「オイどうすんだよ？ ジョウトのポケモンセンターの一件なんかよりよっぽどヤバいぜ？」

「その話はボクも聞いたことがある。なんでもほぼポケモンセンターが全壊したとか」

「あ、あの、今の話つて、いったい……？」

「君たちは知らなくていいことよ。で、もし会場でそんな大惨事が起こったら洒落にならないわよ？」

「よし、ボクがハウエンのチャンピオンだつていう肩書を使って何とか本部にはたらしかけておこう」

「俺はジョウトリーグに応援を頼んでおくわ」

「あたしも。ついでにナツメとかエリカも引っ張つてこようかしら。ナツメはエスパーだし、エリカはユートにベタ惚れだけど常識はあるからストッパーになつてくれるだろうし」

そんな会話が成されていた夜の出来事。

ちなみにユウトさんたちはまだ帰ってきていませんでした。



#### 挿話4（後書き）

ヒカリの心境に主人公君たちの過去話を入れてみました。  
ちなみに主人公君一行にはいろいろな伝説がありますw

しかし、ヒカリちゃんは主人公君の指導があつたとはいえ、トレーナーになって1年以内でリーグ出場できたという自分の才能という事実に目を向けるべきだと思ふんだ。

そしてようやく次回からリーグらしいバトル。

しかし、10話以上も投稿しておいてバトルらしいバトルが未だにないっていうのは、ちょっと拙かったかなと反省してます。

## 挿話5 ヒカリ1回戦

『さあ、次の試合に進みましょう！』

男性実況の声がスタジアム内にうるさいくらいに響き渡る。

観客席にいるオレでも若干耳を塞ぎたいレベルです。

予選リーグ1回戦。

環境は水のフィールド。

ということで長方形の形をした水深数mの深いプールに水がなみなみ入っています。

水ポケモンしかダメじゃないかと思うところですが、そこはきちんと円形状の陸地がいくつもきちんとしていて、水ポケモン以外でも活躍できるになっていたりします。

ちなみに、これはカビゴンやボスゴドラが乗っても壊れないんだとか。

この世界の科学技術はよくわかりませんね。

『まずは赤コーナー！ ハクタイシティ出身、サユリ選手！！』

うん、どう見てもエリートトレーナーです。

『サユリ選手は毎回決勝リーグまで勝ち進む強者です！ そして青コーナー！ フタバタウン出身、ヒカリ選手！！』

そして両者がゲートを通り、トレーナーがポケモンに指示を出す枠の中に入る。

基本、トレーナーはこの枠の中から出ることは許されない。

「結局ヒカリちゃんとバトルは出来なかったけど、楽しみな」

「ああ。なんつったって、このうすらバカの弟子だかな」

そしてオレの周りにはグリーンさんたち。  
ちなみにダイゴは席をはずしていてこの場にはいない。  
なんでも、チャンピオンとしての仕事が入ったようだ。

しかし、相変わらず、シルバーさんは口が悪い。  
だから、年上扱いしないんだよ。  
尤も、心の底から嫌っているわけではないけどね。

「おい、シルバー」

「あ？ 年上には敬えつつてんだろ？」

口喧嘩に発展しそうになっても、

「二人ともやめないか。ヒカリちゃんの試合だよ」

グリーンさんが止めてくれる。

尤も、オレたちも本気じゃないんだけどね。  
つとそうだった。

ヒカリちゃんの持っているポケモンは、ポツチャマ、リザードン、  
ムクホーク、エルレイド、ギャラドス、ベトベター、ムウマージ、  
ジバコイル。

この中で水ポケモンはポツチャマ、ギャラドスのみ。  
リザードンなんかは水が大の苦手だ。

「まあでも、そんなに心配はしてないんだよね」

「それは君が彼女の師匠としての自信かい？」

「それもあります、彼女のトレーナーとしての才能ですかね」



『では、試合開始イイイ!!』

「きつと面白いことが起こりますよ」

\*

初めてのポケモンリーグ。

スタジアムに立って見回すと、客席を埋め尽くすさまざまな色。

そして耳を塞がんといいばかりの歓声。

こんな中でのバトルなんて、今まで一度も経験したことはない。

緊張もしてる。

でも。

緊張もしてるけど、何より

「ワクワクするなあ！」

期待感の方が大きかった。

そしてトレーナーの待機場所に立つ。

ここからポケモンたちに指示を出すのだ。

「では、改めてルールを説明します」

ジャッジの人のルール説明を聞く。

「1対1のシングルバトル、使用ポケモンは3体、ポケモンの入れ替えは認めず、道具の使用はできません。以上です」

うん、想定通り。  
今のを言いかえれば、それ以外は何をしたってOKなのだ（スポーツマンシップに反さない行為以外）。  
ということはわざわざご丁寧にごこの水のフィールドに付き合っ  
てあげることもないのである。  
尤も、この手段はまだとっておく。

「では、よろしいですね？」

相手選手、それからあたしも頷く。

「では、両者、ボールを構えて！」

あたしの最初のポケモン。

『では、試合開始イイイ！！』

それはあなたよ！

\*

『最初の1体目のポケモン！ サユリ選手はスターミー、ヒカリ選手はギャラドスを繰り出しました！ スターミーにギャラドス、どちらも水タイプのポケモンです！』

「ギャラドスね、悪いけど私のスターミーの相手じゃないわ」

スターミーは特攻、素早さが共に高いポケモン。  
しかも、10万ボルトにサイコネシスにれいとうビームといった  
多彩な技を覚える。  
だけどね。

「さあ、どうですかね！ ギャラドス、ダイビングでスターミーに  
接近！」

タイプ相性はバトルではすごく大事。  
でも、それだけで決まるわけじゃない。

「スターミー、10万ボルト！」

スターミーの放った10万ボルトが水中にいるギャラドスを襲う。

『決まったあ！ スターミーの10万ボルト！ 電気に弱いギャラ  
ドスには効果抜群だあ！』

ギャラドスは浮かんでこない。

「さあ、次のポケモンを用意なさい！」

相手はスターミーともども完全に油断していた。

「ギャラドス、戦闘不 「今よ、出てきなさい！ ギャラドス！」  
！？」

「グオオオオ！」

『な、なんと！ ギャラドス、スターミーの10万ボルトを食らっ

てもダウンしていません！ そのまま水中から飛び上がったア！』  
宙に飛びあがったギャラドス。

「そのまま反転しつづきよ！」

「くっ！ スターミー、避けて！」

ギャラドスのその高い攻撃種族値からのずつき。

性格はわんぱくだったので、特性いかく込みの物理受けを考えた戦  
略で努力値を振っていたものの、攻撃にだつてちゃんと振つてある。  
しかも落下の加速度とギャラドスの全体重が加わる。

スターミーの耐久とHPの少なさなら、

『決まったア！ ギャラドスのずつき！ スターミー、避け切れな  
かったアア！！』

そして200kg以上の体重がスターミーに乗っかり、疑似的なの  
しかかり状態になって、

「スターミー、戦闘不能！ ギャラドスの勝ち！」

\*

「かみなりとか10万ボルトでもよかつたんだろうけど、水面高く  
飛び上がってくれたんだつたら、確かにずつきの方がよかつたわね」  
「ああ。200kg以上の体重があるから、いくら電気が弱点とは  
いえ、ずつきの方が威力があるからな。つか、あのギャラドスはマ  
ジなんなんだ？ スターミーの10万ボルト食らってもピンピンし

てるとか」

「なんでも、あのギャラドスは発電所内で捕まえたらしいから、電気に耐性があるんだとか」

「ええ！？ なにその反則！」

隣では3人が今の試合の討論を活発に交わし合っている。

「でも、水タイプって2体しかないわよね？ ヒカリちゃん大丈夫かしら？」

その一言に若干ピクンときた。

「そこは大丈夫さ」

3人がこちらを振り向く。

目はどういふことか説明しろ、と口以上にものを語っていた。

「わざわざ、あのフィールドに付き合うことはないってこと。お？ どうやらそれが捧めるかもね」

オレは相手が繰り出したポケモンを見てそう語った。

\*

『サユリ選手、2体目のポケモンはキングドラだア！』

「キングドラ、弱点はドラゴンタイプしかないわ。さて、どうするのかしら？」

どうするか？

そんなものは相手の出方を見ながら考える！

とりあえず特性は『すいすい』か、『スナイパー』か。

それにギヤラドスの特攻からのりゅうのはどうは、弱点とはいえ、倒すには些か足りない。

「キングドラ、こうそくいどう！ ギヤラドスをスピードでかく乱するわよ！」

あまごいをやらないとすると、『スナイパー』の方が濃厚か。

「ギヤラドス、急所攻撃には十分気をつけなさい！ ハイドロポンプで牽制よ！」

特攻がもとも低い上に、性格でも特攻にマイナス補正が掛かっているため、あくまで足止め目的。

だけど、素早さがグリーンと上がってるキングドラにはハイドロポンプは当たらない。  
ならば、

「ギヤラドス、りゅうのまい！」

「ムダよ！ キングドラ、ギガインパクト！」

キングドラのこうそくいどうからのギガインパクトの方が先に決まった。

こうそくいどうで加速してる分、相手に突っ込むギガインパクトの威力は上がっている。  
だけど、

「な、なんと！ これはどうしたことでしょう！ キングドラのギ  
ラインパクトが全く効いていない！」

「そつ、そんな！？」

あたしのギャラドスは打たれづよいのよ。

たぶん個体値もきつと最高値の31。

それに性格がわんぱく（防御、特攻）だったから物理受けに育  
てた。

だから、いくら、じばく系列を除いて、ノーマルタイプ物理技最強  
のギラインパクトといえど、簡単には大ダメージは食らわない。

「一方ヒカリ選手のギャラドスは何やら奇妙な踊りを踊っています  
！」

へっ？

奇妙な踊り？

いや、りゅうのまいっていうれっきとした技なんだけど。

アレ？

もしかして知られていないとか？

「くっ！ そんなヘンな踊りをしてたって私のキングドラのスピー  
ドについてこれないわ！」

……多分知られてないんですね、わかります。

これは勝っちゃうかもしれません。

とはいうものの、水面を滑空するように移動しているキングドラの  
あのスピードは、いくらりゅうのまいで素早さが上がったとはいえ、  
技を当てにくいのは些か厳しい。

ならば、いよいよ作戦 K A I K I N 。

「ギャラドス、高く高くとびはねなさい！」

その指示でギャラドスはスタジアムの客席の高さより高く飛び上がった。

「縦に回転！」

ゴローニヤのころがるのごとく（あんなにグルグルとは回らないけど）縦回転を始める。

当然ギャラドスは飛べないので、落下をし始めている。

「アイアンテールを水面に叩きつけなさい！」

「グオオオオ！」

掛け声一閃。

アイアンテールが水面に叩きつけられた。

\*

『じ、これは……！』

実況は言葉を失っているようだ。

尤もそれはオレやヒカリちゃん以外、この会場にいる全員が同じような状況である。



「まあ、ざっとこんなもんさ」

オレも自分のポケモンに対してああいう手合いなら、似たようなことをやる。

「高くとびはねることによって、落下する際に発生するエネルギー、しかもそれはギャラドスのあの重い体重も合わさって相当の威力になる。さらに縦回転による遠心力、そしてそれらが全て合わさったアイアンテール。そうなればこの結果も当然だ」

ついでに言えば、ギャラドスは高い攻撃種族値を持っている上に、りゅうのまいで攻撃力もアップしていたから、ただでさえ威力の高いアイアンテールにさらなるブーストが掛かっていたようなものだ。

『な、なんと！ ギャラドスのアイアンテールにより、フィールドの水がほとんど外に溢れ出してしまったアア！』

そして水のフィールドに張ってあった水はほとんどがなくなる。別に、フィールドの環境を変えていけないなどというルールは存在していない。

だから、この戦法もアリである。

『キングドラは！？ サユリ選手のキングドラはどこに！？』

キングドラはフィールドから消えていた。

だが

フィールド上に僅かながら残る荒ぶっていた水流もだんだんと穏やかにになり始めてきた。

「!? キングドラ! しっかり!」

『あーっと、キングドラが浮かんできました! これは!?!』  
ジャッジが傍による。

「キングドラ、戦闘不能! ギャラドスの勝ち!」

あんなボコボコの様子なら、きつと荒れ狂う水流によって壁に何度も叩きつけられたに違いない。

ちなみにオレだったら、威力を弱めることによってあの水流を調節してキングドラの自由を奪い、そして波が壁に当たって反射してきたところをカウンター気味に物理技を一撃入れていたことだろうな。まあ、なにはともあれ、相手の手持ちはこれで残り1体である。

\*

「まだよ! 勝負は最後まで分からないわ! 出番よ、ピジョット」  
「!」

『サユリ選手最後のポケモンはピジョットです!』

なるほど、空からヒットアンドアウェイ戦法で来るってことね。

「ピジョット、そらをとびなさい!」

「ギャラドス、たつまき!」

飛び上がったピジヨットに対し、特殊技のたつまきを指示する。威力的にもギャラドスの能力値的にも、これでピジヨットを落とせるといふことはないが、

「ピジヨット、ピジヨットー！」

『あつと、これはピジヨット、ギャラドスのたつまきに巻き込まれた！ かなり苦しそうな声をあげている！ 効果は抜群だア！』

実況の言うように効果抜群というほどでもないが、そらをとんでいゝる相手に対しては、たつまきは通常の倍の威力を発揮する。

『ピジヨット、たつまきからなんとか脱出したア！ しかし、相当ダメージを負っているようです！』

「ピジヨット、がんばって！」

これで迂闊にそらをとべなくなる。なにせ飛んだら、またあのたつまきを食らうからだ。実際これは飛行タイプの特徴を打ち消し、相手のトレーナーに相当のプレッシャーを与えることになるだろう。

「ピジヨット、ブレイブバード！」

「ギャラドス、アクアテールで撃ち落とささい！」

ピジヨットのブレイブバードがギャラドスに迫る。

だが、りゅうのまいを1回積んでいたギャラドスのアクアテールの方が速く決まる。

急加速で突進していたピジヨットに対し、カウンター気味にギャラドスのアクアテールが決まった。

ギャラドスは、ブレイブバードのダメージをもちろん食らった。しかし、ピジヨットはたつまきやタイプ一致物理技アクアテールのダメージを負っていた。

さらにプラスして、ブレイブバード自体が使った側もダメージを受ける技であるため、その反動ダメージも合わさって、ピジヨットは墜落した。

「ピジヨット、戦闘不能！ ギャラドスの勝ち！ サユリ選手が3体全てのポケモンを失ったため、この勝負、ヒカリ選手の勝ち！！」

「決まったアアア！ リーグ強豪として知られるサユリ選手がまさかの1回戦敗退！ 打ち破ったトレーナー、ヒカリ選手2回戦進出決定イイ！ いやあ、なにかが起ると言われていた今大会！ なんと1回戦、早くもここで大波乱が起きました！ ヒカリ選手の

」

シンオウ地方フタバタウン出身、ヒカリ。  
2回戦進出。

ちなみに

「マリル、アクアジェット！」

『アクアジェットがクリーンヒットオオ！ トオル選手のマツスグマ、耐えられるか！？』

「マツスグマ、戦闘不能！ トオル選手が3体全てのポケモンを失ったため、この勝負、ユウト選手の勝ち！」

『マツスグマ、耐えられなかった！ ホウエン地方ハジツゲタウン出身、ユウト選手、2回戦進出決定！！』

ホウエン地方ハジツゲタウン出身、ユウト。  
2回戦進出。

## 挿話5 ヒカリ1回戦（後書き）

ようやくの戦闘要素。若干アツサリし過ぎな感も否めないですかね？とりあえず、これ以後はしばらくバトル三昧といった感じですかね。

次回は主人公君の2回戦。ゲストのあのキャラが登場します。それからピジョットのブレイブバードはタマゴ技ですが、タマゴ技は、遺伝じゃなくても覚えられるということにしております。

## 第8話 主人公ユウト2回戦

『さあどんどん進めてまいりましょう！ Bブロック2回戦次の試合です！』

今日はどうやら女性の実況のようです。

今までは男性の実況しか聞いたことがないので、なんだかめっさ新鮮です。

『まずは赤コーナー！ シンオウ地方キツサキシテイ出身、ノゾミ選手！』

なにやらグラサンを頭にのつけたボーイッシュな女の子が出て来ました。

『ノゾミ選手はポケモンコンテストにも出場し、そして数々の優勝を飾ってきたトップコーディネーターという一面も持っております！』

コンテスト優勝かあ。

そいつはすごい。

オレはコンテストは全然ダメだからなあ。

や、それはゲームとかの話だったんですけど、でもやっぱり実際コンテストは乗り気じゃないです。

興味がなくて……。

『次に青コーナー！ ホウエン地方ハジツゲタウン出身、ユウト選手！』

さて、いくかな。

「（わたし、出たいんだけどなあ）」

「ダメ」

「（ケチ。わたし、まだこの地方で公式戦1回も出てないんだけど？）」

「4回戦でアイツと当たるだろ？」

「（あのワカメ以外にも出たい）」

「なあ、お前、ひかえめな性格だろ？」

「（これでも十分ひかえてるじゃない！　今までだつてずっと自重してたんだから、たまにはやらせてよ！）」

『あのうー、ユウト選手、そろそろ出てきてください』

あ、しまった。

ラルトスとの口論に夢中で出るの忘れてた。

「（……急ぎましょう）」

オレとラルトスはそそくさと入場した。

\*

『え、ええ、ユウト選手ですが、1回戦はマリル、そしてペリッパ―で相手選手を下し、2回戦まで勝ち上がってきました！』

フローロー恐縮です。



「ユウト選手、大丈夫ですか？」

「は、はい、大丈夫です」

すみません、迷惑掛けて。

「では、両者、ボールを構えてください」

『じゃあ、試合を始めちゃってください！』

あ、いまのなんだかちよつとかわいい。  
て、そうじゃないですね。

「あたしの最初のポケモン！ アゲハント、レディーゴー！」

「ペラップ、キミに決めた！」

『さあ、双方最初のポケモンが出揃いました！ ノゾミ選手はアゲハント、ユウト選手はペラップです！ 相性では虫タイプのアゲハントと飛行タイプのペラップでは、ペラップの方が有利！ ノゾミ選手はどのように対抗するのでしょうか！ しかし、私、ポケモンリーグでペラップを使うトレーナーを初めて見かけました！ 個人的には、ユウト選手がどのようにペラップを使いこなすのかも注目していきたいところですよ！』

まあ、ペラップってなんというかあまり目立たないポケモンだからな。

ペラップは飛行・ノーマルタイプのポケモン。

しかし、飛行タイプならムクホークやトゲキッス、クロバットなんて有名どころがいたりするし、ノーマルタイプは強さならリングマヤケンタロス、かわいいどころだったら、ピクシーやブクリンだっていることだし。

「戻って、アゲハント！」

『おおっと、ノゾミ選手、ここでポケモンの交代のようです！ アゲハントをボールに戻します！』

「1回戦、キミのバトルを見た。正直、キミは強い。だから、不利な相性では戦わない！ ムウマージ、レディーゴー！」

『ノゾミ選手、アゲハントの代わりにムウマージを砂のフィールドに投入します！ ノゾミ選手、これが2体目のポケモンとなります！』

ムウマージ。

名前のごとく魔法使いみたいな見た目からは多彩なタイプの技を扱う。

ペラップの苦手なでんげきはやチャージビーム、パワージエムだって使ってきます（パワージエムは岩タイプ、他は電気タイプの技）。嫌らし系だったら、みちづれや（さいみんじゅつ） くらいまなざし ほろびのうたというコンボも使うことが出来る。

みちづれは使ってからしばらくの間はその使ったポケモンが倒されると倒した相手も倒れるという技。

くらいまなざしは相手を逃げられなくし、ほろびのうたで敵味方に共に時間が経つと倒れるということもできる。

交換すればほろびのうたは無効になるのだが、くらいまなざしで交換できないという罠。

ちなみに余談ですけど、プラチナのバトルタワーでルージュラがこの戦法を使ってきて（あくまのキッス くらいまなざし ほろびのうた ゆめくい あくまのキッス 交換）バトルタワー83連勝でストップ食らいました。

そのときはしばらく気が抜けていたんですけど、リベンジには一応成功しています。

「ムウマジ、でんげきは！」

ほら、きたよ。

「スピードスターで撃墜しろ！」

「ペラップ」

どうでもいいですけど、ペラップの鳴き声ってゲームと同じでなんだかすごく気が抜けます。

『ノゾミ選手、必中技でペラップの弱点でもあるでんげきはを指示！しかし、ユウト選手も同じく必中技のスピードスターでこれを撃墜しました！』

必中技ってホーミングの対象をきちんと設定すればこういう使い方もできるんだよね。

「おかえしだ！ペラップ、ハイパーボイス！」

「ペラップ」ペラップーーーーー！！！」

ちなみにハイパーボイスは音波攻撃です。

ですので、一度放ってしまえば、こちらは何もしなくても相手に届いていきます。

「ムウマジ、まもる！」

「マジ！」

といついごとで、

「ペラップ、アンコール！」

こんなこともできちゃいます。

『ムウマージ、ペラップのハイパーボイスをまもるで防ぎました！  
どちらもノーダメージ！ さあ、この後両者いかなる攻防を見せ  
てくれるのでしょうか！？』

「ペラップ、まもるが切れるまでわるだくみ！」

「ペラップ〜」

いかなる攻防を見せるのだった？

ごめん、相手はもうほとんど詰んでるんだ  
もちろん、対処法はあるんだけど、相手はそれに気づいてないと思  
う。

「ムウマージ、もう一度、でんげきはよ！ ってムウマージ？」

『これはどうしたことでしょう！ ムウマージ、いつまでたっても  
まもるを解除しません！ いったいどうしたことでしょうか！？』

……ああ。

アンコールって技知らないんですね。

まあ、この世界補助技ってあんま知られてないからなあ。

かげぶんしんとかまもるとかは相手の攻撃を防ぐのによく使われる  
から知られてるけど。

「ムウマージ！？ いったいどうしたのよ、ムウマージ！ でんげ

きはよ、でんげきは！！」

いや、ムダですよ、ノゾミさんとやら。

アンコールってのは、使われるとその直前に出した技をしばらくの間ずっと使い続けるって技です。

アンコール状態を解除するには交換するしか手はありません。

『バトルは硬直しています！ ムウマージはまもるを続けたまま、ペラップは砂のフィールドに降り立ち、首を傾げながらただただ待ち続けています！』

ちなみに砂だから重いポケモンは足を取られて思うようには動けないでしょうが、ペラップは鳥ポケモンであり、体重も2？もないので、そんなことはない。

「くっ、しょうがない！ 戻って、ムウマージ！ なら、ごめんね！ アゲハント、レディーゴー！」

『ここでノゾミ選手、ポケモンの交代です！ ムウマージを戻して、一度戻したアゲハントを再びフィールドに投入！』

まあ、命令聞かないんじゃないわな。

「アゲハント、ソーラービーム！」

「ペラップ、空に飛んでかわせ！」

しかし、あのアゲハント、ソーラービームをほぼ溜めナシで撃てるなんてスゲー。

「ペラップ」

あ、いや、もちろんそんなものには当たらないんですけどね。

この子はおだやかな性格（攻撃、特防）で特攻と素早さに努力値を極振りしています。

ほんとはひかえめかおくびょうならなお良かったのですが、育てているうちに愛着も湧きましたし、いまさら、その性格のペラップを捕まえても、という気になってます。

さて、時間的にもうペラップの特攻はわるだくみで上がる上限に達しているはず（わるだくみは特攻2段階アップ）。

「ペラップ、準備はいいな？」

「ペラップ〜」

「なら、ペラップ、最大火力でねっふう！ フィールドを覆い尽くすんだ！」

ねっふうは特殊技で範囲攻撃になりますから、フィールド全体を覆うなんて今のペラップなら余裕です。

『す、すごい！ フィールドを覆い尽くさんとするかのようにペラップのねっふうが砂のフィールドに吹き荒れます！ こんなねっふうは私、初めて見ました！』

なんていうか、この実況、いちいち私見が多いね。

それでいいんですか？

そしてねっふうが止んだフィールドでは、

「アゲハント！ しっかりして！ アゲハント！！」

アゲハントが、体のあちこちが黒こげの状態で仰向けになって倒れ

ています。

「アゲハント、戦闘不能！ ペラップの勝ち！」

\*

「わるだくみなんて積まれたら、もうあのペラップは止まんねーぞ」

「ねー。これじゃあ相手選手がかわいそうな気がするわ」

「だが、言ってしまうえば、知らない方が悪い」

「……グリーンって相変わらず、キツツイわね」

「現実的と言ってもらいたいな。尤も、僕たちはあのペラップではないが、アンコールで封じられてから、いいようにやられてしまったこともあるから、あまり強くは言わない方がいいか」

「ねー」

「ああ、苦い思い出だぜ」

グリーンさんたちも同じ経験があるんですね。

……ん？

今ふと思ったけど、あたしってユウトさんと会ってからの1年足らずで、グリーンさんたちがこれまでユウトさんに味わった戦術を見せつけられて勉強させられてたんだ。

とんでもなくハードだったんだね（泣）

いや実際、いろんなポケモンのいろんな戦術を目の前で肌で体感させられ続けたからね。

ちなみにそれと並行して行われる知識の授業でも、覚えられなかったら、ラルトスのサイキネシスとかもらい続けたし。

今思うけど、ユウトさん、ラルトスはちよっとひかえめだからとか言ってたけど、あれ絶対ひかえめじゃないよね！？

いやそりゃあ、最初はちょっとよそよそしかったけど、それやっ  
るときって結構嬉々としてやってたと思っ！  
てか、思うとかじゃなくて、断言できる！  
あれは絶対嬉々としてやってた！  
あのラルトスは絶対ひかえめじゃなくてSだ。  
いや、Sなんて性格はないけど、絶対にSに間違いない！

（ヒカリ、あとでオシオキね）

ビクッ！！

そんな声が脳内に聞こえてあたしは思わずブンブンと首を振り、周  
りを見回した。

「どうしたんだ、ヒカリちゃん？」

3人ともこちらを不思議そうに見ている。

「な、なんでもないですよ、なんでも。ハハハ……」

あたしは試合が終わったら、即スタジアムから逃げ出そうって決意  
した。

\*

「どうした、ラルトス？」

「（なんでもないわ。それよりユウト。今回は試合出るのやめとく  
わ）」



「？　そうか、わかった。じゃあ、このままペラップでいくぞ？」  
「（ええ。フフフフ）」

なんだか変なことを考えていそうだが、オレには振りかからなそうだから、今は置いておこう。  
さて、試合の方ですが

「ニヤルマー、レディーゴー！」

『ノゾミ選手、ここでニヤルマーを投入です！　これでノゾミ選手は3体全てのポケモンが出揃いました！　一方、まだユウト選手はまだ1体のポケモンしか繰り出していません！　トップコーディネーターノゾミ選手だんだん苦しくなってきました！』

「まだまだ！　勝負は始まったばかりよ！　ニヤルマー、あまえる！」

「ニヤルマー！」

『決まりました！　ノゾミ選手のニヤルマーのあまえる攻撃です！　これでペラップの攻撃力はガクツと下がってしまいました！』

「たしかに、さっきのねっぷうは凄まじい威力だったわ。でも、もうこれで攻撃技は怖くない！」

あー、うん、とりあえず。

ご愁傷様です。

いや、たしかに攻撃は下がったので物理攻撃技の威力は元のペラップの種族値、性格補正、それから努力値も振ってないから、もはや

それは紙に等しいデスよ？

でもね、残念ながらオレのペラップは特殊アタッカーなんだ。だから、能力を下げるなら、特攻を下げるような技（ゆうわくとかおきみやげとかミストボール）をやらないとね。

尤も、ゆうわくは性別が違う相手じゃなきや効かないし、おきみやげは使うと自分も戦闘不能になるし、ミストボールはラティア専用技だから、この場合は特殊耐久が高いポケモンに交換するか、ペラップの低い防御と特防を突いて一気に強力なアタッカーの技で攻め立てるのが筋なんだけど、もう3体全部フィールドに出ちゃったからそれも出来ない。

唯一、ムウマージが結構特防高いし特攻も高いけど、わるだくみでMaxまで上がった特攻のペラップの特殊攻撃には間違いなく耐えられないでしょう。

なにせわるだくみ1回積めば、現実世界では特性ふゆう防御特化ド・タクンをねっぷうで一撃で沈め、防御特化ブラッキーですらハイパーボイス2発で沈めるんですから。

そしてムウマージの特殊攻撃が来る前に、こちらの特殊技でムウマージを落とせば問題ない。

仮にペラップが落とされても、オレにはまだ2体ポケモンを繰り出せたりしますからね。

よって、残念ながら、もう詰みなんですよ。

あ、耳ふさがないと。

「ペラップ、ハイパーボイス」

「ニヤルマー、相手の攻撃はもう怖くないわ！近づいてきりさく攻撃！」

そしてペラップがタイプ一致特殊技のハイパーボイスを放ち、ニヤルマーがペラップに立ち向かっていくが、

『ぐうぐ、す、すごい、ハイパーボイスです……！ わ、私たちの方にも、このうるさいのの、影響が出ています……！』

たしかに。

この会場にいる人間全員、それこそ、観客や実況、はてはジャッジや相手選手さえ、耳を押さええている。

「（フフン、こんなこともあるうかと、わたしは耳栓を完備していたわ）」

コイツ、もはやポケモンというカテゴリから逸脱してんじゃないか？

とか、

こっちはフィールドの環境に目を配りつつ、指示出さなきゃいけないから羨ましいなこのヤロウ

なんてことをオレは微妙に思いつつ、このハイパーボイスが早く止んでくれることを願った。

そして、ハイパーボイスが止んだ後は

「ニヤ、ニヤルマー、戦闘不能！ ペラップの勝ち！」

一匹の子猫がひっくり返ってケイレンしていました（苦笑）。

『す、凄まじいまでのペラップのハイパーボイス！ 私があんな間近で聞いていたなら、きつと気絶して耳から脳汁が一部飛び出していたことでしょう！ ニヤルマー耐えられずにダウン！ これでノ

ゾミ選手は残り1体、ムウマージのみ！ 後がなくなりました！』

なんだかいろいろ問題がありそうな実況だな、オイ。  
ホントにこの人は大丈夫なんだろうか。  
クビになつたりはしないの？

「なっ、なんでさっきのより威力が高いのよ！ それにどうしてあまえるが効いてないの！？ くっ、がんばって、ムウマージ！」

最後のポケモン、ムウマージが出て来ました。

「ムウマージ、もう大丈夫よね！？」

「マージ！」

「なら、ムウマージ！ あなたが頼りよ！ レディーゴー！」

「マージー！」

さっきの汚名返上とばかりに気合が入っているムウマージ。

ムウマージはゴーストタイプなので、ノーマルタイプのハイパーボイスは効かない。

「ムウマージ、パワージェム！」

「とどめだペラップ、めざめるパワー！」

あやしいかぜがフィールドに吹き荒れる中、ペラップの体が発光し、一気にエネルギーが爆散される。

それが、フィールドを包み、そして視界を包む。

『あやしいかぜとめざめるパワーのぶつかり合い！ このフィールドの上で立っているのははたしてどちらなのか！？』

舞い上がった砂煙が晴れてきた。  
そこには

「ペラップ」

当然ペラップの鳴き声が響き渡る。

そして

「ムウマージ、戦闘不能！ ペラップの勝ち！ ノゾミ選手が3体  
全てのポケモンを失ったため、この勝負、ユウト選手の勝ち！！」

「決まりました！ ユウト選手、その圧倒的なまでの強さで、トッ  
プコーディネーターノゾミ選手をわずかにペラップ1体のみで退け、  
3回戦進出決定！！」

ホウエン地方ハジツゲタウン出身、ユウト。  
3回戦進出。

ちなみに翌日、

「リザードン、アイアンテールでスタジアムの壁までマタドガスを

吹き飛ばしなさい！」

「グオワアオオオ！」

「マタドガス、戦闘不能！ リザードンの勝ち！ テッペイ選手が  
3体全てのポケモンを失ったため、この勝負、ヒカリ選手の勝ち！  
！」

『強い！ 圧倒的に強いです、リザードン！ その強さでテッペイ  
選手の3体全てのポケモンを退けました！ ヒカリ選手、3回戦進  
出決定！』

シンオウ地方フタバタウン出身、ヒカリ。

3回戦進出。

## 第8話 主人公ユウト2回戦（後書き）

アニメからコーディネーターのノゾミが出張参加。

ちなみにノゾミはアゲハントは使っていなかったそうですが、そこはオリジナルということ。

ペラップかわいいよペラップ

## 挿話6 3回戦シンジVSヒカリ(前書き)

今話から、3回戦シンジVSヒカリを3回にわたってお送りします。  
(約1万4千字もいってしまったようなので、きりのいいところで分割しました)



## 挿話6 3回戦シンジVSヒカリ

予選リーグ3回戦。

私はシンオウ地方チャンピオンとして、タマランゼ会長の隣で予選リーグを観戦している。

『では選手の紹介をしましょう！ まずは赤コーナー、フタバタウ出身、ヒカリ選手！ そして青コーナー、トバリシティ出身、シンジ選手です！』

5つある予選リーグ会場の中でヒカリちゃんのバトルを見れる会場に当たるとはついている。

そして噂に聞いた彼。

「ダイゴ、彼よね、ユウト君に挑戦を吹っ掛けたって言う子は？」

「ああ」

そうそう、ダイゴもハウエンチャンピオンということで同席しています。

「ほほう、なかなか剛毅な者も居るようじゃな？」

ちなみにタマランゼ会長とはポケモンリーグの責任者で、全国で開かれるポケモンリーグの大会の運営を担う、ぶっちゃけていえばものすごく偉い人。

「しかし、彼もたまにはチャンピオンとしての自覚を持ってもらいたいもんじゃなあ」

だから、当然ユウト君のことも知っている。

『では、試合開始イイ!!』

彼はユウト君と戦うという。

しかし、まずはヒカリちゃんを突破しなければならない。  
重い試練になりそうである。

\*

『ヒカリ選手はムクホーク、シンジ選手はテッカニン！ 両者、最初のポケモンがこの岩のフィールドに出揃いました!』

相手のシンジというあたしと同じかやや上ぐらい少年。

「はつきりいってお前は眼中にない。このバトル、アッサリ終わらせてもらおう」

「はたしてそう簡単にいくかしらね」

聞いた話では彼はユウトさんにバトルを挑むのだという。  
名指して指名するぐらいなんだから、相当な手練なはず。

実際、ユウトさんは「彼は強いから注意しておいた方がいい」と言われた。

ユウトさんがあんな風に言うぐらいなんだから、心していかないと。

そのシンジはテッカニンを繰り出してきた。

テッカニン。

たしか伝説のポケモン、デオキシス（スピードフォルム）を除けば、

全ポケモン中ナンバー1の素早さを誇る驚異的なポケモン。  
さらに、特性が『かさく』（一定時間たつと素早さが段階的に上が  
っていく）。

本当に厄介きわまりない。

テッカニンを使う場合、まず考慮に入ってくるのがバトンタッチの  
存在。

能力変化やみがわり、かげぶんしんなどの状態をそのまま後続に受  
け継ぐ技だ（入れ替えをすると、通常それは消滅する）。

素早さが爆発的に上がった状態で後続に受け継がれたら目も当てら  
れない。

なんとしても、即退場させないと。

「ムクホーク、でんこうせっか！」

「テッカニン、かげぶんしん！」

すごくな真面目な性格なため、能力補正はないのだが、素早さに努  
力値を極振りしていても、やはりテッカニンの方が速く、先にかげ  
ぶんしんをされる。

『ムクホークのでんこうせっか！ しかし、テッカニンのかげぶん  
しんの方が速かった！ でんこうせっかは分身の一つを通過しただ  
けになってしまい、でんこうせっかは不発に終わりました！ それ  
にしても、シンジ選手のテッカニン、すごい数のかげぶんしんだ！』

たしかに10や20じゃきかない。

こうなったら、テッカニンの素早さも合わさって、ピンポイントの  
攻撃は外れてしまうだろう。

ならば、

「ムクホーク、ねっぷう！ ついでに目くらましもねらいなさい！」

『なんとすごい！ ムクホーク、ねっぷうを覚えていました！ ムクホークの羽ばたきから発生した熱い風が、この岩のフィールド全体に吹き荒れます！』

「ちっ！ そんな技まで覚えているのか！ テツカニン、まもる！  
絶妙なタイミングでまもるを使われた。  
しかし、最低条件はクリアできた。」

『テツカニン、効果抜群ねっぷうをまもるで防ぎ切りました！ ノーダメージです！ しかし、あれだけあった分身は一つ残らず消滅してしまいました！ さあ、ここから両者どうする！？』

「ムクホーク、うまくやった！？」  
「ムクホークッ！」

よし、いい返事！  
これで万が一の保険ができた！

「テツカニン、れんぞくぎり！」  
「うそ！？ ムクホーク、かわして！」

何とか逃れようとするも、回り込まれ、一撃を食らってしまっ。ていうか、そこはつるぎのまいをしてボタンタッチじゃないの！？

「そのまま攻め続ける！」

『おーっと、ヒカリ選手、何やら動揺してしまい、指示が出せない！ そのうちにテツカニンが攻め続けている！ ムクホーク、ピン

チだ!』

マズイ、頭を切り替えないと!

「ムクホーク、こつそくいどつ!」

きりさくをこつそくいどつで素早さをあげると同時に抜け出し、距離を取る。

「ムクホーク、反転してでんこつせつかからのつばさでうっ!」

「テツカニン、かわせ!」

でんこつせつかで突進し、そこからのつばさでうつだったが、これは呆気なくテツカニンにかわされてしまった。

時間的に、おそらくテツカニンは出てきたときの2・5倍くらいの速さになっているはずだから、それも仕方のないことだった。

「テツカニン、シザークロス!」

『つばさでうつを軽々と避けたテツカニン! ムクホークに対してのシザークロス! 相性は悪いとはいえ、これをまともに食らったあ! ムクホーク、手痛いダメージを負いましたあ!』

だから、なんでバトンタッチしないのよ!?

あ、いや、されると非常に困るんだけどね。

そうしている間にムクホークのバックを取ったテツカニンがそのままムクホークにシザークロスを決まってしまう。  
だが

『こつ、これは!?!』

「なんだと!？」

シザークロスをまともに受けたムクホークは、ボンという煙を立てて消え去った。

「これは、まさか、みがわり!？」

ザツツライト。

いや、保険の意味で掛けといてよかった。

「その通り、みがわりよ。さっきのねつぶうのとき、仕込んでおいたの。見えなかったでしょ？」  
「くっ!」

「なんと、みがわりだ! みがわりでテッカニンの目をくらましたムクホーク! しかし、肝心のムクホークはいったどこにいるんだ!？」

それはね

「ムクホーク、でんこうせっかからのブレイブバード!」

スタジアムにあたしの声が響き渡る。

「……………ーック!」

『なんと上だあ! ムクホークはスタジアム上空にいたあ! そのままテッカニンに向かって一直線に飛んでいる! いや、これはもはやテッカニンに向かって高速落下をしているとでも言うべきでしょー!』

「ムクツホーク！」

「かわすんだ、テツカニン！」

だが、テツカニンが動く前にムクホークとテツカニンが衝突。

『テツカニンにムクホークのブレイブバードが直撃イイ！ これは効果は抜群だアア！』

「ムクホーク、そのままテツカニンを岩に叩きつけるのよ！」

「テツカニン、脱出しろ！」

暴れてムクホークから逃げようとするテツカニンだが、ムクホークもそう易々と逃がさない。

「ならテツカニン、きゆうけつ！」

テツカニンがムクホークの喉元を噛む。

「ムクホーク、がんばって！」

若干スピードは緩んだようだが、それでもムクホークが踏ん張り、テツカニンを岩に叩きつける。

『テツカニン、きゆうけつで抵抗を試みますが、ムクホークから逃れることは出来ず、フィールドの岩に直撃イイ！ 凄まじいまでの土煙が上がリ、衝突の激しさを物語っています！ テツカニンもダメージですが、ムクホークもこれではダメージからは逃れられないでしょう！ さあ、この土煙の中から先に姿を見せるのはどちらだアア！』

\*

「うーん、テツカニンだからと安易にすぐバトンタッチをするとは限らないんだけどなあ」

まあ、『テツカニンを見たらバトンタッチがあると思え』、『テツカニンを使うなら、バトンタッチをどう生かすかが、バトルの戦局を左右する』って口を酸っぱくして教え込んだのはオレなんですけどね。

「いや、ユートさあ、この状況でよくそんなこと言ってるね」  
「とか言って、みんな冷静じゃないですか」

オレたち以外、この会場にいる観客は全員が固唾を飲んでムクホークとテツカニンを見守っています。

オレたちは観客席に座らず、最上階の部分で立ち見の状態なのであまり目立っていませんが、それでも近くの人からはオレたちのことは場違いに感じたりするかもしれませぬ。  
しかし

「こりゃあ、少しハツパをかけ過ぎたかな？」  
「どういうことだい？」

「いえ、さっきのヒカリちゃんの動揺ですが、オレみたいなやつならテツカニンは必ずバトンタッチをしてくるって教え込んでいます。で、さっき、ヒカリちゃんに『シンジ君は強敵だよ』って吹きこんだんですよ」

「オイ、バトンタッチなんてほとんどのヤツは知らねーぞ。あのシ



ンジっつーガキだつて知らないハズだぜ？」

「それを勘違いしたのはヒカリちゃんですから」

「オイ、そりゃあサギなんじゃねーか？」

その言葉に思わずクスツと笑みが零れてしまった。

「シルバーって意外にあまいんだね」

「あんだと？」

「でも、それだとヒカリちゃんのためにはならないんだよ」

「どういうことよ？」

「当たり前の話だけど、世の中には自分の知らない人ばかりです」

その知らない人の中には、自分より強い人なんかいくらでも、それこそ掃いて捨てるほどいる。

ヒカリちゃんにはそういう、知らない人に対するときのある種の緊張というものをいつでも持ち合わせていてもらいたい。

「最近はおレかラルトスかシロナさんっていう知っている人としてかバトルはやってなかったですからね」

適度な緊張は人間に刺激を与える。

そこから柔軟な発想、思いもよらない戦略なんかが浮かんでくることだつてあるんです。

「なるほど。しかし話を聞いていると、僕はシルバーより君の方がずっと過保護なんじゃないかと思うな」

「同感ね」

「だな」

「尤も、シルバーだつて似たようなところはあつたりするけどね」

「いやいや、グリーンさん、そんなことはないですよ！？」

「どっかしら?」

「あんだと、テメー!」

「あ、それより見て見て!」

「ムクツホーク!」

その嘶きが聞こえ、岩のフィールドからムクホークが飛び立つ。

『飛んだア! ムクホーク、健在です! 一方、テツカニンの方は!?!』

するとムクホークが羽ばたき始め、土煙が消え失せる。

『こっ、これは!?!』

見るとそこには倒れ伏したテツカニン。ジャッジがテツカニンの許に近寄る。

「テツカニン、戦闘不能! ムクホークの勝ち!」

まずはヒカリちゃんが1勝したようだ。

\*

「戻って、ムクホーク!」

あたしはムクホークをボールに戻した。

「ありがとう、ムクホーク。また出番があるかもしれないから、そのときまでゆっくり休んでてね」

『さあ、シンジ選手が1体ポケモンを失いました。そしてここでヒカリ選手、ポケモンの交代をしようです』

「オレは絶対に負けられない。負けられない理由があるんだ」

「それは奇遇ね。あたしも負けられない、絶対に！」

「いけえ、次のポケモン！」

『シンジ選手、ヒカリ選手、共に2体目のポケモンがフィールドに現れます。はたしてそのポケモンは……！』

### 挿話6 3回戦シンジVSヒカリ（後書き）

長いので分割します。しかし、随分とアニメっぽい話になってしまった。ま、ヒカリがテツカニンの行動に動揺してしまってるせいなんですけどね。その辺は主人公と比べればまだまだ未熟。

### 挿話7 3回戦シンジVSヒカリ

「行け、ドラピオン！」

「がんばって、ポッチャマ！」

『シンジ選手、2体目のポケモンはドラピオン！ ヒカリ選手、2体目のポケモンはポッチャマです！』

「フン、未進化のポッチャマなんかにおれのドラピオンはやられない！ ドラピオン、じしんだ！」

「ポッチャマ、真下に向かってハイドロポンプ！」

するとハイドロポンプの水の勢いによって宙に飛び上がる。浮かび上がれば、じしんなど効果はない。

『ドラピオン、両前足をフィールドに叩きつけたことによってじしんが発生！ しかし、ヒカリ選手、ポッチャマに地面に向かってハイドロポンプを指示したことによってポッチャマは空中に回避！ それにしてもポッチャマがハイドロポンプを覚えているとはすごい』

「ちっ！」

「進化してないからってあまく見ないでよね？」

「なら、これならどうだ！ ドラピオン、シャドーボール！」

ドラピオンの特攻はそんなに高くない。なら、

「ポッチャマ、そのままれいとうビーム！」

すると、ハイドロポンプがそのまま、岩のフィールドにそびえ立つ氷柱に早変わりした。

「ポツチャマ、その影に隠れなさい！」

「なんだと!？」

そしてシャドーボールが氷柱に激突。

『これはすごい！ ヒカリ選手、れいとうビームでハイドロポンプを氷の柱に変え、シャドーボールを防御した!』

氷柱はヒビこそ入っているものの完全には壊れていなかった。

「ポツチャマ、氷の柱に向かってずつき！」

「ポツチャマー！」

するとヒビの入った氷柱は完全に壊れ、かつ、ずつきの勢いに乗り、破片がドラピオンに向かって飛んでいく。

「避ける、ドラピオン！」

氷の破片を避けようとしてイヤイヤと首を振ってはいるものの、それらは容赦なくドラピオンに直撃していく。

『こっ、これは！ ずつきによって氷の破片がドラピオンに直撃しています！ これは、疑似的なこおりのつぶてといっても過言ではないでしょう！ ドラピオン、避けようとしていますですが、その巨体ゆえに、逃げ切れません！ かなり苦しそうだ！ 相当効いているようです!』

「なら、ドラピオン！ ミサイルばりで撃ち落とせ！」  
「ドオオラアー！」

目に活の入ったっぽいドラピオンが尻尾と頭の両脇から生えている腕のカマから放ったミサイルばり。

『ドラピオンのミサイルばりが疑似こおりのつぶてを叩き落していきます！ なんて強いミサイルばりだア！』

しかも、行く手を阻む岩を岩ごと簡単に粉碎する。  
とんでもない威力のミサイルばりだ。

「ポツチャマ、アクアジェットタイプB！」  
「ポツチャマー！」

ポツチャマは地面に寝そべりグルグル回転しながら、水を纏ってアクアジェットを行う。

すると、水の渦、いや竜巻がいくつも巻き起こり、それが不規則にウニヨウニヨと動いたため、それに当たったミサイルばりは撃墜されていく。

「!？ こんなことがあつてたまるか!？」

シンジの驚きの声が響き渡る。

『こっ、これはいったい!？ ヒカリ選手、ポツチャマにアクアジェットを指示しました！ しかし！ しかし、これが本当にアクアジェットなのでしょうか!？ 私にはまるで別の技のように思えてしまいます！ と、とにかく、ポツチャマが発生させた水の竜

巻によってフィールドの岩をも砕くミサイルばりがどんどん撃墜されていきます！ ミサイルばりは一つもポツチャマには届いていない！ 恐るべき水の竜巻の壁！！」

「ならば、ミサイルばり以上の威力の技であの壁を粉碎すればいい！ ドラピオン、クロスポイズン！」

「ポツチャマ、ストップ！ うずしおよ！」

アクアジェットをやめたポツチャマはすぐさま起き上がり、口を上に向けて頭上にすり鉢状に渦を巻いたうずしおを完成させる。

「ドオオラアー！」

「ポツチャマ！」

両腕のカマを交差させ発生させたクロスポイズンとうずしおが激突する。

「もう一度、クロスポイズン！」

拮抗し合うクロスポイズンとうずしおを打ち破るため、シンジはクロスポイズンを指示。

「！ そうだわ！ これはいける！ ポツチャマ、うずしおに向かってふぶきよ！」

「ポツチャマ！」

あたしはポツチャマのふぶきでうずしおを凍らせて、うずしお自体の耐久力をあげさせる。

『シンジ選手、ドラピオンに2発目のクロスポイズンを指示！ —



方ヒカリ選手はふぶきでうずしおを凍らせます！ おおっと！ 2  
発目のクロスポイズンがうずしおに直撃イ！ 衝撃で水煙がフイー  
ルド全体を覆っていきます！ こちらからは煙で視界が見えなくな  
ってしまいました！』

「ポツチャマ、今よ！」

「ポチャ！」

ポツチャマはアクアジェットで水煙の中に消えていった。

\*

「それにしてもすごい勝負じゃのう」

「ええ。さすがはユウトの弟子ってところですかね」

「うむ、これで、この地方のポケモンバトルも面白くなるじゃろう  
て」

タマランゼ会長は、ユウト君が現れてから、ポケモンバトルは奥の  
深さが増して大変面白くなったと上機嫌だった。

ダイゴもそれに同意している。

今までは、ただの技と技のぶつかり合いみたいなものだったから、  
それを何度も見ていれば、飽き飽きとしてくるのだろう。

しかし、これからは違う。

一戦一戦がトレーナーの戦略、知識、読み、駆け引きといったもの  
が試される。

まるつきり同じ対戦には2度とお目にかかれないから、一戦一戦が  
おもしろいモノとなる。

でも、毎日対戦をチャンピオンとして観戦し、さらに夜には学会で

発表するための論文を仕上げている最中だから、若干眠い。  
あくびが出そうになるけど、会長の前だからかみ殺すし、か……

そう言えばヒカリちゃんのポツチャマってたしか  
しかもこの状況なら

「今のハイドロポンプやれいとうビーム、アクアジェットだって、  
攻撃技ですけど、使い方と工夫次第であのような戦法も出来るので  
すから。正直、ハウエンチャンピオンとしてもこの対戦は見るべき  
ものがありますね」

「じゃが、シンジ君とやらのポケモンもすごいのう。こりゃあまだ  
まだわからんぞい？」

「……いえ、たぶん、この対戦はすぐ終わりに向かうと思いますよ」

「ハッ？」

私の言葉に思わず、タマランゼ会長とダイゴは同じ言葉を同時にハ  
ミングしていた。

\*

『水煙が晴れて来ました！ ポツチャマ、ドラピオン、両者どのよ  
うなことになるのか！』

水煙が晴れたそこには

『おーっと！ ポツチャマがドラピオンのカマに捕まっています！

ポツチャマ絶対絶命のピンチだ！」

ポツチャマがドラピオンの両手のカマに挟まれて身動きが取れないような状況になっていた。

「よくやったぞ、ドラピオン、チャンスだ！ そのままはかいこうせんー！」

シンジがドラピオンにしねしねこうせん、ではなくはかいこうせんを指示。

ドラピオンの口にははかいこうせんのエネルギーがみるみるうちに溜まっていく。

「ドラピオン、はかいこうせん発射ー！」

ドラピオンは首を後ろに傾けてからはかいこうせんを発射しようとした。

……

……

……

……

辺りを沈黙が支配する。

「ど、どうした、ドラピオンー!？」

ドラピオンははかいこうせんを発射しなかった。

『これは、いったいどうしたことでしょう!? ドラピオン、はかいこうせんを発射しません! いったい何が起きたのでしょうか!』

「ドラピオン! どうしたんだ、ドラピオン!？」

「ムダよ! ポツチャマ、めざめるパワー!」

カマに掴まれていたポツチャマの身体が発光する。

「ポチャチャ、ポツチャマ!」

めざめるパワーによって拘束を解かれ、自由の身になるポツチャマ。一方、ドラピオンの方は体を地面に横たえる。

「なんだと!? こ、これは!？」

『な、な、な、なんと、ドラピオン、眠っています! ここに来て眠るなんていったい何が起こったんだアア!？』

「とどめよ! ポツチャマ、最大威力でハイドロポンプ!」

眠っているドラピオンにハイドロポンプが避けられるはずもなく、ドラピオンはその激しい水流によってフィールドの岩に叩きつけられる。

だが、水の勢いが激しいため、岩の方が粉碎され、そしてまた新たな岩にドラピオンが叩きつけられる。

それを幾度か繰り返して、最後にはドラピオンをスタジアムの壁に叩きつけた。

これほどの威力はきつと本来はないだろうから、特攻に結構振った努力値のおかげなのかもしれない。

「ドラピオン、戦闘不能！ ポツチャマの勝ち！」

『ポツチャマの凄まじいほどの威力を誇るハイドロポンプがドラピオンに炸裂ウ！ そしてえ、壁に叩きつけられたドラピオンは、たまたらずダウーン！ これでシンジ選手の残りポケモンは1体！ 後がなくなっただア！』

\*

「あくびじゃと？」

「！ なるほど、そういうことか」

「おいおい、キミたちだけで納得してないで、ワシにも説明してくれ。いったいどういう技なんじゃ？」

「あくびという技は一定時間経つと必ず眠るとい技なんです」

流し技として最もポピュラーと言っている技、あくび。

あくびを食らったポケモンは、そこでボールに戻せば眠らない。

だけど、そのまま戦い続けると眠ってしまう。

眠りは厄介なので、ねごと、カゴやラムの実、しんぴのまもり、あるいは特性『やるき』（『やるき』劣化で『はやおき』）などの対策をしていない場合は交換させるしか眠らせない方法はない。

だから、効果を知っていれば、強制交代させることができる『流し技』。

知らなくても、眠り状態に追い込めば、相手は何もできずに、こちらの思うがままだ。

「おそらく、あのポッチャマはあの水煙の中、ドラピオンに接近。ドラピオンとしてはなにをされるかわからなかったから、とりあえず、拘束。そこでポッチャマはあくびを食らわせたでしょう。で煙が晴れるまでの時間と、それからはいこうせんを撃つまでの時間が合わさって、ドラピオンは眠ってしまった。そういうところでしょうか」

尤も、あのドラピオンは相当強かった。

かなり個体値がいい個体なのだろう。

正直、テッカニンがつるぎのまいをしてからドラピオンにバトンタッチをしていけば、間違いなく、ポッチャマ、ムクホークはやられていたに違いない。

ヒカリちゃんの手持ちのポケモンの中で、最強のリザードンもわからない。

相性はリザードンは炎・飛行タイプ、ドラピオンは毒・悪タイプで、可もなく不可もなくだが、リザードンはじしんを持っているため、ドラピオンとしてはリザードンは相手が悪いのだが、特性『かさく』やつるぎのまいで格段に上がった素早さと攻撃からのいわなだれを食らわせれば、4倍弱点ということもあり、タイプ一致でなくともほとんど一撃でリザードンもダウンすることになるだろう。

『それにしても素晴らしい戦いです！ とても予選リーグ3回戦とは思えません！ これが本当にポケモンバトルなのでしょう！ あぎやか、そして戦略に満ちた技の応酬に、私たちはどれほど興奮を巻き起こしたことでしょう！』

「相手の戦略ミスに救われたということかしらね」

私は正反対の判断を下していた。

\*

「ありがとう、ポツチャマ。一旦戻って」  
「ポチャチャア」

あたしはポツチャマをボールに戻した。

「それにしても今のドラピオンはあぶなかったわ」

テッカニンがつるぎのまいをしてあのドラピオンに受け継がれていたら、間違いなくポツチャマは負けていた。

いや、テッカニンのことは忘れて次のことに頭を切り替えよう。

今まであたしがこの大会で出したポケモンはポツチャマ、ムクホーク、ギャラドス、リザードン。

この中でどれも共通する弱点は電気。

彼は1回戦にエレキブル、2回戦にブーバーンを使っていた。

とすると、最後のポケモンでエレキブルを出せば、少なくとも、この試合で出したポツチャマ、ムクホークの弱点をつくことが出来る。同じ電気のジバコイルを出してもいいかもしれないけど、エレキブルの特性は『でんきエンジン』。

電気技を食らうと素早さが上がる特性。

とすると、ジバコイルは電気技を封じられた格好になる。

しかもエレキブルはあなをほる、かわらわり、きあいだま、いわくだきといった、ジバコイルの弱点をつける技を数多く覚えられる。

エレキブル自体の能力も相当高いから、タイプ一致の技じゃなくても十分怖い（もちろんタイプ一致電気技はもつと恐ろしい）。おまけにブーバーンを出されては、ジバコイルは相手のいい力モだ。ならば、出せそうなポケモンは

『さあ、シンジ選手のポケモンは残り1体！そしてヒカリ選手はポツチャマを戻しました！ムクホークを出すのか、それとも！？両者いつたいどんなポケモンを繰り出してくるのでしょうか！』

「ヒカリ、お前は強い。認めよう」

あれ、どうしたんだろう。

「今はもう、ユウトさんのことはすっぱり忘れることにする。これからは全力でお前を叩きつぶす！そして勝つ！たとえば、オレのポケモンは残り1体になると、オレは最後までバトルをあきらめない！」

うわっ。

なんつーか、すごく好感が持てる。

「いいじゃんいいじゃん、あたしだってこのバトル、絶対勝って見せる！」

「行け、最後はお前だ！」

「いつけえ、あたしの最後のポケモン！」



『両者、3体目のポケモンがフィールドに出揃います！ これがラストバトルになり、ヒカリ選手が4回戦進出を決めるのか！？ それともシンジ選手がここから大どんでん返しを決めるのか！？』

### 挿話7 3回戦シンジVSヒカリ（後書き）

結構アニメっぽい話ですが、もう少し続きます。

しかし、昔から疑問に思っていました。コイル系はなんで浮いてるのにじしんを食らうんだろ。

ということに浮いているんだからじしんは食らわないという想定（ヒカリの頭の中）でいきます。

ポッチャマのアクアジェットについてですが、最終進化形であるエンペルトが覚えますので、覚える素養はあるかなと思います、このようにしています。

タイプAが対空迎撃、タイプBが前方から飛来する技に対する迎撃です。

**挿話 8 3回戦シンジVSヒカリ（前書き）**

\*ふういんに関して

ふういんの効果が間違っていたので修正いたしました。

## 挿話8 3回戦シンジVSヒカリ

『両者、3体目のポケモンを投入しました！ シンジ選手はエレキブル！ ヒカリ選手はベトベター！ ヒカリ選手がエレキブルを破れば予選リーグ4回戦進出が決まります！ シンジ選手は1回戦で無類の強さを発揮したエレキブルの奮闘に期待したいところです！』

コウトさんに誘われてシンジの試合を見ていたが、1回戦で彼のエレキブルは相手のポケモンを3タテしていた。  
おそらく、シンジのパーティの中で間違いなくエースアタッカーだろう。

そして読み通り電気タイプで来た。  
じしん、サイコネシスは怖いけど、

「先手はもらった！ エレキブル、10万ボルト！」

『先手エレキブルの10万ボルトがベトベターに炸裂したあ！』

あたしのベトベターは

「なんだと！？ ちっ！ たたく、お前とのバトルはどうしてこうも想定外のことが起こる！！」

『なんと、ヒカリ選手のベトベター、エレキブルの10万ボルトが全くと言っていいほど効いていない！ これは驚きだア！』

電気技は効かない。

「ベトベター、シャドーパンチ！」

「必中技のシャドーパンチか！ 3回戦でユウトさんの試合を見ていてよかった、避けられないなら！ エレキブル、でんげきはでシャドーパンチを撃墜しろ！」

あ、あれって必中技に必中技を当てて落とすっていうユウトさんの技法。

一度見ただけで、しかも、とっさにこの状況で思いつくなんて。でも、あたしの戦略について、やることは変わらない。

「ベトベター、いまのうちにふういん！」

『エレキブル、ベトベターのシャドーパンチをでんげきはで撃墜！ 必中技の特性を生かして見事に相殺そっさいイ！』

「ようし！ エレキブル、かわらわりだ！」

「エレッキブルウ！」

『エレキブル、凄まじいスピードでベトベターに迫る！』

「エレッキブ……ル……？」

『ど、どうしたことでしょう！ ベトベターに接近したエレキブル、かわらわりを出さない！』

「どうしたんだ、エレキブル！ かわらわりだ！」

「エレツ、キ、ブル……」

エレキブルはかわらわりを繰り出す体勢のまま、ただベトベターの前に立ち尽くすのみ。

「ベトベター、ダストシユート！」

「ベターー！」

『技を出さず、立ち尽くしているのみのエレキブルに毒タイプの大技、ダストシユートが決まったあ！ しかもほぼ0距離からのそのダメージはことのほか大きい！』

「くそっ！ エレキブル、ほのおのパンチ！」

「エレッ、キ、ブル……」

『シンジ選手、エレキブルにほのおのパンチを指示するも、エレキブル技を出さない！ これは本当に何が起こったんだア！』

「シンジ君、なんで技が出ないのかなんだけど、それはベトベターがふういんっていう技を使ったからなの」

ふういんという技は、相手の技に制限を掛ける変化技。

具体的に言えば、相手はふういんを使ったポケモンが覚えているわざについては使えなくなる。

ユウトさん曰く「ポケモンたちは4つしか技が覚えられない、なんてことはないから隙があるなら狙うといい。ほとんどの技を完封できる」ということだ。

ふういん状態を解除するにはふういんを使ったポケモンを交換なり倒すなりして、フィールドから退場させる必要があるが、エレキブルとベトベターは覚えられる技がかなり似通っているため、それも厳しいことだろう。

「そ、そんな！？ そんな技があるっていつのか!？」

「うん、あるよ」



「ベトベター、まもる！」  
「ベター！」

『ベトベター、まもるの体勢に入りました！ しかし、それに構わず、エレキブル、激しい勢いでベトベターに突っ込んでいきます！  
エレキブルのギガインパクトだア！』

「エレキブルrrrrrr！」  
「ベターーー！」

エレキブルのおそらく渾身とっていいぐらいのギガインパクトに対してベトベターは半円形状のまもるを展開。

「エレキブルrrrrrrrrrrrr！」  
「ベターーーー！」

『すごい！ すごいぞ、2体とも！ ベトベターとエレキブルの激しいぶつかり合い！ 勝つのはどっちだ！？』

「負けるな、エレキブル！」  
「がんばって、ベトベター！」

両方拮抗しているように見えるが、

ピシ、ピシ

ベトベターのままるにヒビが入ってきている。

「ベトベターーー！」

「ベターーーーーーーーーーーーー！」



そのとき、ベトベターの全身が眩しいくらいに白く光り出した。

『ベトベターの身体が白く発光しています！　これは、まさかまさかアー！！』

ベトベターの身体は発光しながら大きくなっていく。  
そして

「ベエトオオベエトオオオン！！」

『な、なあんと！　ベトベターが進化してベトベトンになりましたアアアー！！』

「なんだって！？　クソ、次から次へと！」

「ベトベトン！」

「ベエトオン！」

シンジの焦りと裏腹にベトベトンは元気に答えてくれた。

「ようし、ベトベトン！　まもるを解除！　エレキブルに抱きつきなさい！」

「ベエトオン！」

「ツキブル！？」

まもるを解除したベトベトンがエレキブルに抱きつくると同時にエレキブルのギガインパクトが決まる。

「ベエトオオン！」

だが、エレキブルに密着し、かつ、その軟らかい体の影響もあり、ダメージをやや少なくすることができた。

「ちゃんとエレキブルを捕まえたわね！ ベトベトン、のしかかり！」

「ベエトオベエトオオン！」

「エレッキブル！？」

ベトベトンがエレキブルにのしかかり、マウントポジションをとる。

「そのままきあいパンチを振りぬきなさい！」

「ベエトオベエ、トオオン！！」

きあいパンチがエレキブルのアゴに決まる。

「エレ……キ……ブル……」

エレキブルは目を回し、起き上がる気配を見せない。

「エレキブル！ 戦闘不能！ ベトベトンの勝ち！ シンジ選手が3体全てのポケモンを失ったため、この勝負、ヒカリ選手の勝ち！」

「決まったアアア！ 予選リーグ3回戦とは思えない白熱した試合を制したのはフタバタウン出身、ヒカリ選手だアア！ ヒカリ選手4回戦進出決定イイ！」

\*

「くそっ！ オレは、オレは……！」

スタジアムの暗い廊下で待っていると、聞こえてきた声。

「シンジ君」

「……ユウトさん……ですか……」

正直今声かけるのはあまり得策じゃないと思うんだけどこの際仕方ない。

「笑いたければどうぞ、笑ってください」

「いや、笑わないさ」

「笑ってくださいよ、あなたにあんな啖呵を切っておいて、それでこの3回戦で誰も知らないトレーナーに負けて！ 笑ってくださいよ、みじめで哀れな奴だってね……！」

本格的に失敗したかもしれない。

ああもう、やぶれかぶれだ。

「正直言うとな、オレはシンジ君のスタンスは別にキライってわけじゃない」

「……は？」

「いや、実際オレも昔はシンジ君みたいに考えていた時代もあったんだよ」

「へ？ あ、いや、しかし？」

「バトルに勝つには強いポケモン。たしかにそうだ。強いポケモンでなかったらバトルに勝つのは難しい。シンジ君、ちょっとオレに付き合ってくれるかな？ オレとちょっと特別講習をしよう」

そう言ってオレはシンジ君を有無を言わず、スタジアムから連れ出した。

\*

スズラン島に存在する森の一角。  
そこでオレは臨時の“ポケモン講座”を開いていた。

「種族値、個体値、性格、努力値……」

「そう、それがポケモンの基本的な能力を決める。シンジ君は『強いポケモン』ってヤツを探してるんだろ？ オレが思うに君の手持ちのポケモンたちはこの中で言う個体値がどうやら高い傾向にあるようだ。君のポケモンたちって君自身が『コイツを捕まえよう』って思っただけで捕まえたんだろ？」

「は、はい……」

「うん、つまり君は個体値を見抜くっていう、トレーナーとして素晴らしい才能を持っているんだよ」

「ありがとうございます！」

……あの、途中からものすごく気になってたんだけど、一つ聞いていいかな。

いや、実際は聞かないんだけどさ、

“キミ、だれ？ Who are you?”



だから、トレーナー歴が浅くとも彼女に負けてしまったんだ。だが、言い換えると、それさえ克服できれば、たとえそういうトレーナーだって勝つことは出来る。君はトレーナーになってから結構経つだろう。君ならもっと強くなれるさ」

「はい！ あの！ この大会が終わるまでもいいんでオレに、教授してください、先生！」

だから、先生っていうのはやめてほしいんだけどなあ。

「じゃあ、ユウト先輩！ これでいいですか！？」

……まあいいや。

「と、とりあえずオレの3回戦の試合は終わっちゃってるから、しようがないにしても、オレ、それからヒカリちゃん。オレたちの試合は必ず見るようにしてくれな」

「はい！ 勉強させていただきます！」

「あ、そうそう。次の4回戦だけど、テツカニンを使っていくからシンジ君がテツカニンを使う際の参考にするといいよ」

テツカニンの基本的運用方法その1というところかな。

そしてあの催眠厨にして伝説厨が次の4回戦相手だが、あの程度ならたとえ伝説だろうとなんとかなる。

オレたちを侮ったことを覚悟してろよ！

## 挿話8 3回戦シンジVSヒカリ（後書き）

ようやくヒカリVSシンジが終わった。

ちなみにこの世界は別に技が4つしか覚えられないなんてことはないので、ふういんはかなりチートです。ゲームでもちようはつはかなり必要ですが、ここでは覚えられるのならば全てのポケモンに覚えさせておきたいぐらいの必須な技です。でないところな状況に陥りますからね。

次からはユウトVS伝説厨です。

第9話 4回戦タクト（伝説厨）VSユウト（前書き）

タクトファンの皆さま、申し訳ありません。



## 第9話 4回戦タクト（伝説厨）VSユウト

『予選リーグはいよいよ大詰めを迎えて来ました！ これより、予選リーグ第4回戦の試合を開始したいと思います！』

バトルフィールドへ続く暗い通路の中で実況の声がやや遠くに聞こえる。

「ラルトス、準備はいいよな？」

「（当然。言つとくけど今回はわたしもちゃんと出してよね）」  
「当たり前だ、お前の強さをアイツに分からせてやれ」

『では4回戦第1試合に出場する選手をご紹介します！ まずは赤コーナー、ダークライ使いの異名をとるタクト選手！』

観客の歓声が一段と高くなったのを肌で感じる。

『タクト選手はシンオウ各地のジム、そして今大会、この4回戦までダークライ1体のみで対戦相手を退けてきた選手です！ その強さはご覧になっている観客の皆さんもよくお分かりのことでしょう』

『！』  
「いじつ」

『続いて青コーナー、ホウエン地方ハジツゲタウン出身、ユウト選手！ ユウト選手はここまで様々なポケモンで勝利を手にしてきた』

暗い通路を眩しいほどの光が射しこんでくるフィールドへの口を潜っていった。

\*

「ユウトクン、キミはボクが倒す。そしてキミの言葉が間違いだということを証明しよう」

ダメだ。

コイツの声なんて聞きたくもない。

「……一つ言っておく」

コイツの姿なんか見たくもない。

「オレはアンタみたいな、『オレの言葉は間違っている』という人と何度も戦ってきた。そして勝ちを収めてきた」

「言っておくが、ボクはそんな有象無象の輩と一緒にたにされても困るね」

「だけど、彼らは誰であろうと対等に、人間として素晴らしい人たちばかりだった。それに比べてアンタはそうやって人を見下し、バカにして……！ この勝負、彼らの名誉にかけて、負けるわけにはいかない！ そして、ポケモンバトルの真髄つてもんを見せてやる！」

「両者、用意はいいですか？ ではボールを投げてください！」

『4回戦第1試合、開始イイ！』

\*

「テッカニン、キミに決めた！」

「出でよ、ダークライ！」

『最初の1体目のポケモン、タクト選手はお馴染みダークライ、ユウト選手はテッカニンです！』

「いくぞ、テッカニン！ かげぶんしん！」

「ムダだ！ れいとうビーム！」

『タクト選手、ダークライにれいとうビームを指示！ しかし、ユウト選手のテッカニンの方が素早かった！ かげぶんしんの完成でダークライのれいとうビームは不発！』

「ちっ！ ならば、全て破壊するのみ！ ダークライ、きあいだまだ！」

「まもる！」

すると分身全体がまもるを発動し、きあいだまを消し去る。

『ユウト選手のテッカニン、すごい！ 分身全てでまもるが発動！ ダークライはきあいだまをいくつも放っています、そのまもるの壁を越すことができません！』

「テッカニン、みがわり！」

「ならば、今度はダークライ、かみなり！」

「うまくかわすんだ、テツカニン！」

『ダークライのかみなりがフィールド全体に落ち、草のフィールドが焼け焦げていきます！ しかし、テツカニンもさるもの！ うまく雷をかわしていきます！』

「くそつ！ ちょこまかと素早い奴め！ おい、ダークライ、何をやっているんだちゃんと狙え！」

その言葉でダークライのかみなりの精度が上がり、いくつかの分身が消える。

「テツカニン、もう一度かげぶんしん、そしてこうそくいどうだ！」  
「ダークライ、ダークホール！」

ダークホールで分身が潰されたが、さらなるかげぶんしん分身によってそれらを補い、そしてさらに増やす。

『こ、これはすごい数のかげぶんしんだ！ 3回戦でシンジ選手のテツカニンが見せたかげぶんしんも相当な数でしたが、ユウト選手のテツカニンはそれを遥かに上回っております！』

そして特性とこうそくいどうで素早さはもう十分。

これでたとえ、デオキシスのスピードフォームが出てこようとこちらが先手を取れるはず。

よし、仕上げといきますか。

オレはモンスターボールを2つ手に持つ。

「テツカニン、バトンタッチだ!!」

そしてオレは2つのボールを振り上げた。

\*

「よし、いい感じでバトンタッチにつながれた!」

「ですね。おそらく、素早さはこうそくいどうも込みで最大まで上がってるはずだから、たとえ『かそく』発動込みのテツカニンが来ようとスピードでは負けてないはず。でも、どうしてつるぎのまいは積まなかったのかしら? 舞うのは定石のはずなのに」

「……なるほど。あのポケモンなら、つるぎのまいをしなくても大丈夫そうだ」

「え? ああ! そういえば、たしかに。つるぎのまいは積むだけムダでしたね」

あたしとグリーンさんは観客席の方から今のユウトさんの試合を見る。

ちなみにダイゴさんやブルーさん、シルバーさんは大会本部の方に顔を出してこの場にはいない。

その代わり、違う顔ぶれが一人いた。

「な、なあ。事情がサツパリ読めないんだが、いったいなんの話をしているんだ」

あたしと3回戦でバトルをしたシンジである。

いつまでかはわからないが、どうやらあたしと同じくユウトさんに

弟子入りしたらしい。

昨日今日の話なので、ポケモン講座はあまり進んでいないらしいが、「テツカニンを使う際のメジャーな戦法のことよ。今はわからないかもしれないけどよく見ておくといいわ。きっと驚くようなことが起こるから」

\*

「ガラガラ、キミに決めた！」

「ガラア！」

「ここでユウト選手、ポケモンの交換です！ ユウト選手、2体目のポケモンにガラガラを投入してきました！」

バトンタッチでテツカニンの能力を引き継いだ、オーバーフローで有名なガラガラの登場です。

ちなみにガラガラといえはふといホネ（カラカラ、ガラガラ限定で持たせたら攻撃が2倍になる）を持たせることが鉄板なんですけど、アレもアイテムの一部なので持たせてはいません。

「しかし、これはいったいどういうことなのでしょう？ テツカニンだった分身が全てガラガラに置き換わりました！」

……うん、なんとというか。

実況、もっと勉強しろ。

オレやヒカリちゃんの試合のときだけ、あんたらただ驚いてるだけで解説の一つもまともにこなせていないじゃん。

いや、実際はチャンピオンですら知らなかった技だから、知らないのはムリもないのか。

「こ、これはいつたい!？」

伝説厨は伝説厨で、この事態に首を左右に振って慌てふためき、ダーククライに指示を出せていない。

「ガラガラ、今のうちにはらだいこ!」

「ガラ!」

しかし、分身を含めた、フィールド上に存在するすべてのガラガラがはらだいこをするシーンは何とも言えない感覚を感じる。

『ガラガラのはらだいこが決まったア! 攻撃技の威力がグーンと上がったぞ!』

「フツ、だが、はらだいこは反面、著しく体力が消耗する。それにして随分とマイナーな技を使う。まあいい、ダーククライ、かみなりで分身をすべて吹き飛ばせ!」

伝説厨曰く、なんかはらだいこはマイナーな技らしいです(笑)。

まあ実際、使うトレーナーはあまり見かけません。

おそらく、はらだいこは体力を激しく消耗する(体力の半分を使うというのは知られていません)ため、それを嫌がるトレーナーが多いから使わないといったところでしょうか。

なので、はらだいこについてはあまり研究されておらず、さっきの実況や伝説厨の言葉通り、体力をかなり消耗する代わりに攻撃技の威力が上がるとしか知られていません。

ちなみにはらだいこは、体力を半分消費する代わりに攻撃を最大ま

でアップさせる技です。

さて、バトルの方はダーククライのかみなりが分身に当たり、分身が次々と消滅していきます。

尤も、ガラガラ自身は地面タイプなため、みがわりを含め、ダメー  
ジは一切受けませんが。

ていうか、なんでふぶきやんないんだろ？

まさか覚えていないとか？

まあ、覚えてないなら一向に構わないんですけどね。

「ダーククライ、残った1体が本物だ！ れいとうビーム！」

「ガラガラ、避ける！」

鉄火バトン（テツカニンで能力を上げてからのバトンタッチ）のお  
かげで今のガラガラは、普通のガラガラとは比較にならないほど速  
いです。

しかも、今回は特別にテツカニンで素早さ最大まで上げてからのバ  
トンだったので、比較的鈍足のガラガラだろうとダーククライの攻撃  
をかわせないハズがありません。

『きつ、消えた！？ ガラガラ、消え失せました！』

「どっ、どこだ！？」

おそらく会場中の人間がガラガラの行方を見失っていることではし  
ょうが

「今だ、ガラガラ！ かわらわり！」

「ガラガアア、ラッ！」



ダークライの頭上に現れたガラガラ。

そこからダークライの弱点であるかわらわりが決まる。

ちなみに骨で叩いているんですけど、かわらわりです。

ホネこんぼうではないです。

「きつ、決まったアア！ ガラガラのかかわらわり！ ダークライには効果は抜群だアアアア！」

「立て、ダークライ！ あんなガラガラ程度のポケモンにやられるお前ではない！」

うん、まったくもって根拠のない指示ありがとうございます（笑）

ガラガラは少しきまぐれな性格なようで、能力補正はないが、特性『ひらいしん』でダブルバトル用に育てていたため、努力値は攻撃に極振りしています。

そしてはらだいこによって物理攻撃力が最大まで上昇（おおよそ元の4倍）。

ちなみにですが、ゲームだとこの時点でふといホネを持たせると、あまりに攻撃の能力が高くなりすぎてオーバーフローを起こしてしまっていました。ここでは当たり前ですが、そんなことは起こりません。

そして弱点タイプの技であるため、さらに2倍。

総じて、通常の攻撃の8倍のダメージをダークライは食らったのだ。

「ダークライ、戦闘不能！ ガラガラの勝ち！」

防御特防ナンバー1のツボツボだってあぶないのにダークライが落ちないという道理はない。

「な、な、な、なあぁんと！ 今まで無類の強さを誇り、この4回戦まで圧倒的なまでの勝利を収めてきたタクト選手のダークライが！ 一撃！ ガラガラ放ったかわらわりたった一撃でダウウウーン！ なんとという展開でしょうか！ いったい誰がこんな事態を予測出来たでしょうか！？」

\*

「あの組み合わせで戦ったことのある僕やダイゴさんたちなら、予想は簡単につくよ」

グリーンさんの言うとおり、そういう戦略があるということを知っており、その効果を知っていれば、ああなってしまうのは自明の理だとすぐにわかる。

あたしは一度、あの型（まさに今の鉄火バトン ガラガラ）でシロナさんのポケモンが、軽々と、ほとんど一撃のもとで6タテされたのを間近で見たことがある。

切り札のガブリアスさえ、一撃で倒されてしまったことから、シロナさんがしばらく茫然自失になっていたのは記憶に新しい。

「グリーンさんもやっぱり6タテ食らったりしたんですか？」

「僕だけじゃなく、何度も対戦したことあるヤツならその全員がおそらくあの型で一度は6タテを食らったハズだ」

うわっ、すごいな、ユウトさん。

いや、この場合はポケモンが、と言った方がいいのかな？

あ、でも指示するのはユウトさんだし、そういう戦法でいくことを考えて育てるから、やっぱりユウトさん？

でも、ユウトさんの指示に従って頑張るのはポケモンたちだし。

ま、どっちでもいっか。

「でも、鉄火バトンは対策もありますよね」

「ああ。たとえば僕の場合はウインディのしんそくがあるし、ほのおのうずやうずしおなんかで閉じ込めてしまえばバトンタッチは出来ないからその間に強力な技で押し切れればいい。尤も、これも彼の受け売りなんだけどね」

納得してるあたしたちと対称に

「だ、ダメだ！ サッパリわからん！ オレはいつから日本語が通じなくなっただんだ！？ オレはいつのまに外国に来てしまったんだ！？」

予備知識がないシンジは会話についていくことができなかった。

\*

「ならば、ボクの2体目のポケモン、それはコレだ！」

そして伝説厨が投げたボールから現れたポケモンは縦横無尽にフィールド内を飛んだ後、ガラガラと睨みあう形で向き直る。

「フオウオオオオ！」

『なんとタクト選手、2体目のポケモンはラティオスです！』

2体目は予想通りラティオスが出てきました。

あ、ところで、ビルドアップやかげぶんしんなどのステータス変化技の効果やみがわり、こんらんやメロメロ状態は一度、ポケモンをボールに戻すと消えてしまいますが、この世界では、相手のポケモンを強制的にボールに戻すという技がありません。

元の世界のほえるやふきとばしといった強制交代技は、こちらの世界では、しばらくの間相手を怯ませる技になっています（尤も、怯んでいる間は相手のポケモンは行動出来ないのです、結果的にトレーナーに交代を促す技となつてはいるが、やはりあまり知られていないため、居座られることが多かつたりします）。

他には、くろいきりでも効果は打ち消せますが、相手がそれに触れなければならず、かつ、覚えるポケモンもかなり少なくなつたりします。

なので、変化技で自分のポケモンの能力を如何にして上げるか、相手に如何にしてステータス変化技を使わせない、あるいはそれを潰すか。

元の世界でも重要であつたこの要素が、この世界ではさらに大きなウエイトを占め、そこが勝敗に大きく関係してきます。

「ラティオス、ラスターパージ！」

それをあの伝説厨は怠りました。  
だから

『決まったアア！ ラティオスの大技ラスターパージ！ 衝撃でフィールドには凄まじいまでの白煙が立ち上っています！ はたしてユウト選手のガラガラは耐えられたか！？』

「フツ、この通り、ガラガラなど、他愛もない。さあ、ユウトクン、次のポケモンを出したまえ」

うん、なんというか。

ここまで来るとかわいそうというか哀れにすらなってくるんですけど。

「その言葉、そっくりそのままアンタに返すよ」

「なに？ …… な、なんだと！？」

『なんと、ユウト選手のガラガラがまた消えてしまいました！ 今度はいっただいどこに！？』

「くっ、そうか、また上だな！ ラティアス、上に向か 「残念ながら、ハズレ」 なに！？」

するとガラガラはラティオスの後ろに現れ、そのままラティオスの背中に飛び乗る。

「ガラガラ、メガトンパンチ！」

「ガアラアアア！」

「フオウオー！」

メガトンパンチを食らったラティオスはそのまま一直線にスタジアムの壁に激突。

そして倒れ伏すラティオス。

スタジアムの壁は、ポケモンの技で破壊されて観客に被害が及ばないようにと、たとえラムパルドのもろはのずつきが直撃しても壊れないようにかなり頑丈につくられているのだが、ラティオスが激突

した部分はクモの巣状に多数のヒビが入っており、それが衝撃のものとすごさを物語っていた。

場内は観客の歓声が途切れ静まりかえる。

『ジャ、ジャツジマン、判定をお願いします』

「は、はい！」

どうやら審判ですら時間が止まっていたらしい。

バトルをジャツジするんだから、ありのままを冷静に受け止めてほしいな。

「ら、ラテイオス、戦闘不能！ ガラガラ勝ち！」

この声で実況も観客も時間が動き出し、スタジアムは爆発的な歓声に包まれた。

\*

「よくやったぞ、ガラガラ！」

「ガラガラ！」

「次もお前でいってもいいんだけどさ、どうしてもバトルに出たいってヤツがいてな」

オレの視線の先には準備万端、気合十分の、オレの一番の相棒のラルトスがいる。

「（ありがとう、ガラガラ。あとはわたしが引き継ぐわ。ちょっと

あのワカメにオシオキしなきゃならないのよ。当然代わってくれ  
わよね？」

「ガッ、ガラガラッ！ ガラッ、ガラッ！」

ガラガラは急にへこへこし出して、慌ててラルトスに道を譲る。  
きつとガラガラはラルトスの後ろに般若を見たに違いない（笑）

（んな、脅すなよ。可愛いそうじゃないか）

「（みんなのまとめ役としては、たまには威厳を発揮させなきゃな  
らないのよ。あ、それから指示はしなくていいわ。私一人でやるか  
ら）」

「別にいいけど、オレはお前が切り札なんだ。あんまり手の内見せ  
んなよ？」

「（その辺はきちんと気を使うからだいじょうぶよ。じゃ、いつて  
くる）」

「あいかわらずか、よし頼んだぞ、ラルトス！」

オレは苦笑いしながら、ガラガラをボールに戻しつつ、ラルトスを  
送り出した。

\*

「こんな、こんなことが、こんなことがあつてはならないんだ！」

伝説厨は頭を抱えながら、何やら呻いている。

ちなみに最後の3体目はライコウでした。

うん、マジ伝説厨乙！

尤も、ラルトスもレポートでかく乱しつつ必中技のマジカルリーフやひみつのちから、くさむすびで攻撃。

ひみつのちからの追加効果（フィールドによって異なる。草のフィールドの場合、3割の確率でねむり状態にする）で眠ったら、ゆめくいとといった感じで完全に翻弄しています、「種族値？なにそれ、おいしいの？」といった具合で。

「なぜだ！なぜ、ボクのポケモンがガラガラやラルトスごときに！」

まあ、持論の『強いポケモン』がこうも簡単に破られれば、ああなるのもわかる気がしないでもない。

「タクト、一つ言っておく。バトルに勝つには強いポケモンっていうお前の考えは否定しない。むしろオレは賛同もしよう。だがな、ポケモンバトルに勝つにはポケモンのレベル、そして何よりもトレーナーの知識と戦略だ。戦略を練るには自分のポケモンのことをよく知らなければならぬ。自分のポケモンをよく知るには愛情を持って接しないとポケモンも自らをさらけ出したりはしない。それがないお前はたとえグレードだろうがディアルガだろうが、伝説のポケモンを持ってこようとオレとオレのポケモンたちはお前になんか負ける気はしない」

そうこう言ってる合間にもラルトスのかげうちが決まり、伝説厨のライコウは倒れてしまいました。

「ライコウ、戦闘不能！よって、この勝負、タクト選手が3体目全てのポケモンを失ったため、ハジツゲタウン出身、ユウト選手の

「い、異議あり！！」？」



ん？

あの伝説厨はジャッジに何やら文句があるようです。  
いや、ホントにいまさら何の異議があるんだ？

「最初のダークライとテツカニンの試合のとき、あちらは交代の際、  
テツカニン、そしてガラガラが同じフィールド内にいた！ これは  
1VS1のシングルバトルというルールに反する！」

「なっ!？」

「(なんですって!?)」

なにをバカなこと言ってるんだ!?

あれはれっきとしたポケモンの技であり、ルール違反なわけがない!

「よってボクはこのバトルについては無効であると申告す

」

『待ちなさい!!』

伝説厨の抗議を止めたのは、スピーカーから聞こえてはきたが、シンオウ地方に来てからはよく聞き慣れた声。

『ボタンタッチはあまり知られていないだけで、れっきとしたポケモンの技。ポケモンリーグにおいてポケモンの使用できる技に制限はありません。よって、私は今の抗議をシンオウ地方チャンピオンマスターとしての権限を行使し、棄却します!』

シロナさん！

『これは、今私の隣にいるホウエン地方チャンピオンマスターダイゴ、ジョウト地方四天王シルバー、カントー地方四天王ブルー、この1名のチャンピオンマスターと2名の四天王の承認の下で発動できる正当な権限を行使しています！』

結局、ここはシロナさんが上手く治めてくれ、オレは予選リーグ決勝戦にコマを進められることに相成った。

「とりあえず、あとでみんなにはお礼を言いに行かなきゃな」

「（そうね。特にシロナには本当に感謝だわ）」

ホウエン地方、ハジツゲタウン出身、ユウト。  
予選リーグ決勝戦進出。

## 第9話 4回戦タクト（伝説厨）VSユウト（後書き）

前書きでも書きましたが、タクトファンの皆さま、本当に申し訳ありません。

当初の予定ではこんなことになるはずではなかったのですが、書いているうちにあれよあれよ暴走を始めてしまってこんなことになってしまいました。

ちなみにこのSS内でのタクトの手持ちはダークライ、ラティオス、ライコウ、レジアイス、ファイヤー、スイクンとしています。一応、ダークライ以外は準伝説でそこそこバランス良くかためてみました

第10話 予選決勝ユウトVSヒカリ(前書き)

タクト擁護がネットでも感想でも見た限りゼロ。  
改めて不遇なキャラだと思いました(苦笑)

## 第10話 予選決勝ユウトVSヒカリ

朝、暖かで優しげな日差しが大地を照らす。

空は雲一つない快晴。

そんな中、オレとヒカリちゃんは宿を出た。

試合の時間にはまだ早いのだが、シロナさんが、いや“シンオウチャンピオンマスター”がオレたち二人を呼び出したのだ。

二人でスタジアムまでの道を歩く。

ちなみにラルトスはグリーンさんたちに預かってもらっている。

今回オレはシンオウで育て上げたポケモンのみでヒカリちゃんとバトルをしようと考えていた。

そんなことをおくびにも出さず、オレはヒカリちゃんの話に付き合う。

今までの旅の中での話、ポケモンの話、この大会が終わった後の話、話題は尽きることはなく、あっという間にスタジアムの大会運営本部に着いた。

「ようこそ、2人とも」

そこではシロナさん、それから、ダイゴの二人に迎えられた。

「一応、今私たちはシンオウ、ホウエンのチャンピオンマスターとしての公的な立場に立ってあなたたちに話しているんだけど、気楽に構えてくれててかまわないわ。実は大会運営として、急なことで申し訳ないんだけど、あなたたちに頼みたいことがあるのよ」

頼みたいこと？

いったいなんだ？

「シロナさん、それっていったい？」

「一応、私の方からいろいろはたらきかけてルールの改正をしようかと思っただけね。具体的には『ポケモンが自分で扱える道具については使用を認める』っていう感じにね」

なるほど、そいつは助かります。

気合いのタスキやかえんだま、オボンの実とかが使えるなら今まで使えなかった戦略も使えるようになる。

「それはいいですね。そのときできれば『道具の重複は不可』というのも付け加えてほしいんですけど」

「どうして？」

「その方がさらに深い読み合いが出来ますから」

たとえば気合いのタスキやたべのこしは使用率が高い。

ここで全てのポケモンに同じものを持たせていたらバトルは陳腐なものになってしまいが、一つだけならば、あのポケモンは何を持っているのかという読み、こう読んでくるだろうが実は違う持ち物を持っているなどという駆け引きがさらに白熱する。

本当は他にも『2体以上「ねむり」や「こおり」状態にできない』とかもう少し細かく追加したいけど、今はしょうがない。

「なるほど。なら、その方向性でいくわ。ただ、はっきり言って今すぐ変えることは残念ながらムリ」

まあ、そうでしょうね。

この世界にはポケモンに持ち物を持たせるといった概念ははっきり言っていない。

おそらく考えてもいないことなのだろう。

それを説得させ、周知させるのには相当、おそらく年単位の時間がかかることは間違いないだろう。

「だから、1クッションというか、最初のステップとして、いつものバトルとは違うバトルを君たちにやってほしいんだ」

\*

「あの、いつもと違うバトルって何なんですか？」

あたしは思わずその言葉を口について出していた。

今日これから、予選リーグ決勝戦であたしはユウトさんとバトルをする。

こんな土壇場にそんなことを言われても、といった気持ちになった。

「あ、ヒカリちゃん、別にそんなに構えないで。私たちがいつもやっていることをやってもらえばいいから」

「いつもやっていること？」

「そう。予選リーグまでは3体のポケモンで戦うでしょ。だけど、この大会に出場するようなトレーナーなら6体全ては持ち歩いているわよね？」

ああ、なるほど、そういうことか。

「なるほど、ロクサン63の見せ合いですか？」

「そうそう、それ」

ユウトさんの口にした“ロクサン63の見せ合い”。

これは相手に自分の手持ちの6体のポケモンを全て見せた後、そこから3体を選択してバトルをするルール。相手はこちらの手持ちのポケモンを全て見ることが出来るが、その中でどの3体が出てくるかはわからない。こちらの手持ちから、いかに相手の繰り出すポケモン、戦略を読み、こちらのポケモンを繰り出していくかという、トレーナー同士の読み、定石の戦法を取ると見せかけて、実は意表をつく、あるいはその逆、といった駆け引きが必要になる。

そうすると、もはやポケモンバトルは単なる技のぶつかり合いやポケモンのレベルで勝負が決まるのではなくなる。そんなものは勝敗を分ける単なる一つのファクターに過ぎないのだ。そして逆に重要になってくるのはトレーナーの知識、そして洞察力。

正直言えばこのルールはあだし個人としてはすごく楽しい。相手がどんな戦法で来るのか、どんな技を使ってくるのかを読み解き、こちらのポケモンを選択し、技を指示する。そうして勝ったときの喜びは言葉には表せないほどの感動を覚えるし、逆に負けたときには、悔しいという気持ちは勿論あるけど、「そうきたか！」といった新たな発見に心が躍る。そして、バトル後にはそれを振り返り、美点と欠点を研究し、自分の血肉とする。

すると次回からはより洗練されたものとなっていく。ちなみにあたしの場合、それを可能にした知識はユウトさんの“ポケモン講座”で、洞察力はユウトさんのラルトスとのバトルが一番鍛えられたのではないかと思う。

彼女（なので）の繰り出したポケモンから、ある程度、どんな戦法で来るかは予想を立てることはできるが、彼女はポケモンなので、発する言葉は当然わからない（テレパシーは除く）。

実際にどんな技を指示したかは、彼女の小さな動作、あるいはポケ



モンの初動によって判断するしかないのだ。

また、今回はそのルールだとあたしとしても助かる。

あたしはユウトさんの持つポケモンたちのいろいろな意味での多彩さを旅の中で、そしてバトルの中で見てきた。

正直どんなポケモンが出てくるのかは全く予想もつかなかったのが、試合にエントリーした6体だけでも見られるということは大変ありがたい。

グリーンさんには負けると言われているがけど、できることなら…

…！

「あたしはそれで構いません」

「オレも構いませんよ」

「そう。じゃあ運営の方にはそう通しておくわ。二人とも頑張ってるね」

「ボクやグリーンたちは今回は、ていうかボクはずっとなんだけど、四天王やジムリーダーとして運営の方にいるから。新ルールの研修ということだね。そういうことでジュン君やコウキ君、シンジ君たちにはよろしく伝えておいて。じゃ、バトル期待してるから」

話はこれで終わりのようで、あたしたちは部屋を退室した。

「ユウトさん」

それからすぐあたしは歩き出そうとしたユウトさん呼び止めた。

「あたし、今までのこと本当に感謝してます！」

初めて会ったときは憧れだった。

二度目に会ったときは正直どん底で藁にも縋るような気持ちだった。それからいつしよに旅をするようになり、特訓や講座はスパルタで相当苦勞したけど、一人では絶対に体験出来ないことが数え切れないほどあった。

その旅の中で人、ポケモン、さまざまな出会いがあった。

一期一会、一度きりの出会いでも精一杯の礼を尽くして相手と接するべし。

そういう心構えも教わった。

そしてポケモンという、あたしたちにとっては切っても切れないフシギでステキな生き物たちとの向き合い方というものを教わった。

今のあたしがあるのはこの人のおかげと言っても過言ではないかもしれない。

そんな人とこれから対戦する。

だから

今までの感謝をこめて

「あたし、持てる力の全てで以ってあなたに挑みます！」

「そうか。楽しみにしている」

あの人はそのままこちらを振り向かず、歩き去っていった。あたしは見えなくなるまであの人の背中を目で追っていた。

\*

『みなさん、お待たせいたしました！ これより、予選リーグBブ

ロック決勝戦を開始します！」

「いやあ、それにしてもボクたち3人の中でヒカリちゃんが予選リーグ決勝に進んだなんて」

「お、お前たちはどうだったんだ？」

そこにコウキ、それから隣に座るある1人にかなり引いているシンジの姿があった。

この2人はユウト繋がりで知り合ったのだ。

「僕たちはそろって4回戦負けだよ」

「お、オレはトレーナー歴1年未満の奴らに揃って先を越されたのか」

「いやあ、ボクたちは運が良かったただけだと思うよ？ ていうかこのBブロックのレベルが高すぎるんだと思うんだ」

そう慰められるもorz状態のシンジ。

だが、それよりいい加減隣に座るヤツがうざったくなったらしい。

「オイ、いいのか、アイツほっといて？」

「ああ、いつものことだから気にしないで」

「こ、これがいつも？」

シンジはこの時点であんまりこいつには絡まないよう強く思った。

「なにやってんだ、運営！ ホントに待ったぜ、コンチクショウ！」

とか、

「ヒカリー！ 負けたら罰金だからなあ！ 罰金1億円だ！」

とか、

「ヒカリー！ 勝っても罰金だかんない！」

とか言っている奴だ。

「ていうか、なんで勝っても負けても罰金なんだ？」

「気にしちゃダメだよ、いつものことなんだから」

「わ、わかった」

『では、決勝戦を行うに当たり、シンオウチャンピオンマスターシロナより皆さんにお話があります』

「なんだ、いつたい？」

「うん、随分と異例なことだね。それからウソッキー、隣のうるさいのをちよつと黙らせておいて」

そしてコウキが出したウソッキーがアームハンマーを振り下ろす。

「ゴツ！ ひゅるるるっ……」

あわれ、痛恨の一撃を脳天に受けた罰金ボーイは膝から崩れ落ちた。

「い、いいのか？」

その様子に唾然となるシンジ。

ピク、ピク、と微妙に動く姿に若干の恐怖を駆られる。

「大丈夫、大丈夫。いつものことだから」

そして数分後。

「テメー、こんにやろう、コウキ！ 痛かったじゃねーか！ 罰金だ罰金！！」

そこには元気に復活したジュンの姿が           ！

「なぜだ！？ なぜ、ウソツキーのアームハンマーを食らって『痛かった』で済むんだ！？ ホントに人間かコイツは！？ 実はポケモンでしたとか言わないよな！？」

ちよつと、小一時間問い詰めたという思いに駆られ、だが、そうすると自分の中の何かがおかしくなると直感して悶々としていたシンジだった。

\*

「ではこれより2分間、お互いのポケモンを見せ合う時間とします！ カウントは双方が6体のポケモンを出した瞬間から始まります！ ではユウト選手、ヒカリ選手、手持ち6体のポケモンをフィールドに出してください！」

「よおし、あたしのポケモンたち、出てきてちょうだい！」

ヒカリちゃんが6つのモンスターボールをフィールドに投げる。

『ヒカリ選手の6体ですが、ポツチャマ、リザードン、エルレイド、ベトベトン、ムウマージ、ジバコイルのようです!』

なるほど、相性だけは全てのタイプの弱点をつけるようにという構成か。

ムクホークやギャラドスはリザードンやポツチャマとタイプが被るから外したのかな。

「さあ、ユウトさん！ ユウトさんのポケモンもフィールドに出してください!」

その目は輝きに満ちている。

決して負けるなんて考えておらず、気合いに満ちた目に見える。楽しみだ。

「ヒカリちゃん、最初に言っておく。オレがここに出すポケモンはみな、オレがシンオウ地方に来てから捕まえたポケモン、育て始めたポケモンばかりだ」

これで条件は5分と5分。

ポケモンのレベルだけで勝敗が決まるのではなく、それにプラスしてトレーナーの読み、駆け引きが合わさる。

それに読み勝った瞬間の感動はいつになっても忘れられない。

「ヒカリちゃん、存分にオレのポケモンを見る！ そしてそこからオレがどういう戦略を組み立てているのか、しかと読んでみる!」

ああ、本当に楽しみだ。

そして場に出すポケモンたち。

『ユウト選手、ポケモンをフィールドに出し始めました！ ポケモンは、ゴウカザル、ペラップ、グレイシア、クラブ、デンリュウ、そして　　な、なんだ、あのポケモンは！？』

オレが最後にフィールドに出したポケモン。  
それに会場中が、

　　いつたいなんだ、あのポケモンは？

　　見たこともないポケモンだよ。

　　あんなポケモンが存在するののか？

と、いった感じでどよめく。

まあ、このポケモンは入手条件がかなり特殊だから知らない人も多いハズ。

なにせ、オレがハウエン図鑑で見つけるまでは知られていなかったんだから。

だが、ごく僅かながら、この会場内で、このポケモンを知っている人は知っている。

それは本部にいるというシロナさんやダイゴやグリーンさんたち。

そして、もう一人

「な、なんですってー！ー！？」

目の前の対戦相手、ヒカリちゃんだ。

\*

「なんなんだ、あのポケモンは？」

当然シンジ達はそのポケモンを知らなかった。

「おい、コウキ、早く図鑑出せよ、図鑑！」  
「わかってるって、そんな急がさないでよ」

そしてコウキがナナカマド博士からもらったポケモン図鑑（後日、図鑑を全国版にもらった）をそのポケモンに向ける。  
すると、ポケモン図鑑が反応し、電子音声はそのポケモンに対しての説明を読み上げ始めた。

『又ケニン　ぬけがらポケモン』

ハネをまったく動かしていないのに空中に浮かんでいる不思議なポケモン。背中にある隙間から覗き込むと魂を吸われてしまうらしい』

「」「又ケニン??」「」



第10話 予選決勝ユウトVSヒカリ（後書き）

図鑑の説明文はエメラルドとプラチナの説明文を合成させました。

## 第11話 予選決勝ユウトVSヒカリ

「まさか又ケニンがくるなんて」

又ケニン。

虫・ゴーストタイプのポケモン。

入手条件はかなり特殊（そのためあまり研究が進んでいない）。  
具体的にはツチニンを進化させる。

ただし、その際、手持ちが5体以下、かつモンスターボールを1つ以上保持していること（スーパーボール、ハイパーボール等モンスターボール以外のボールは不可）。

そのため、つい最近発見されたのだとか。  
種族値自体はそれほど高くはない。

ただ、このポケモンは一つ、決定的に厄介な点が存在する。

「又ケニンの特性『ふしぎなまもり』」

特性『ふしぎなまもり』

この効果は効果抜群の技以外は当たらないというとても厄介な特性である。

下手をすると、又ケニン1匹で詰むほどだ。

実際、キッサキシティからミオシティに向かう際に、ハクタイシティに立ち寄ったときにユウトさんがナタネさんにバトルを挑まれたのだが、そのときにユウトさんが出したポケモンがこの又ケニン。

又ケニンは虫・ゴーストタイプなので、その特性により攻撃技は炎、飛行、岩、悪、ゴーストタイプの技しか効果がない。

そのときナタネさんのポケモンにそれらのタイプの技を使えるポケモンがいなかったので、呆気なく完封された。

そして後で理由を聞いたナタネさんは、

「そんなのって反則よおおおおおおおおお!!!!」

つと大絶叫していた。

その例からもわかる通り、又ケニンははっきり言っ対策をしなければその時点で詰むという非常に厄介なポケモンである（大事なことなので2度言いました）。

ただ、又ケニンはHPが1しかなく、効果抜群の技を食らえばアツサリ落ちる。

また、『ふしぎなまもり』にも抜け穴はあって、攻撃技以外でダメージを受けた場合（例えば特性『さめはだ』や『ゆうばく』などノダメージが減る状態異常（どく、もうどく、やけど）ノ天候変化技（すなあらし、あられ）ノやどりぎのたねノまきびし、どくびし、ステルスロックノみらいよち、はめつのねがい、がまんなど）ならば、倒すことは出来る。

あたしのポケモンの中で又ケニンを突破できる場合は弱点を突くか、ベトベトンのどくどく、エルレイドのおにびくらいでしか倒せない。

「ポツチャマにステルスロックを覚えさせておけばよかったなあ」

あるいはストーンエッジを使えるギャラドスを手持ちに入れておけばよかった。

まあ、泣き言を言っても仕方がない。

又ケニンの弱点をつけるポケモンはリザードン、エルレイド（ストーンエッジ）、ベトベトン（かえんほうしゃ、だいもんじ）、ムウマージ（シャドーボール）の4体。

この中では一番のエアアタッカーのリザードンは入れたい。

おにびやでんじは、ふういんなどのトリッキーな戦法もできるベトベトンやエルレイドもできれば加えたいし、ムウマージの嫌らし戦法も捨てがたい。

ヌケニン突破が出来なくても、ジバコイルはほとんどのタイプに耐性があり、なかなか落ちず、特攻だってフリーデンにやや劣る程度だが、ブイズの特殊アタッカーエーフィと同じくらいの高さを誇る。ポッチャマは一番の相棒でここぞというときに頼りになる。

『さあ！ もうまもなく、見せ合い時間の2分が経過しようとしています！ はたして両者は6体の中からどの3体を選ぶことになるのでしょうか！？』

……

……

決めた！

あたしの3体を

あの子たちで、勝負を挑む！！

「2分が経過しました！ それでは両選手、ポケモンをボールに戻してバトルに出す3体を選んでください！ それ以外のポケモンは使用できませんので、係の者に預けてください！ …… よろしいですか！？ それではこれより、予選リーグBブロック決勝戦を始めます！ 両選手、ボールを構えて！」

『それでは試合、開始イイイイ！！』

\*

「あたしの最初のポケモン！ いっけえ、エルレイド！」

「一番手はグレイシア！ キミに決めた！」

『両者、1体目のポケモンが出揃いました！ ヒカリ選手はエルレイド、ユウト選手はグレイシアです！』

ゲームだったならあのパーティーを見てグレイシアは入れない。

なにせ苦手なタイプがポツチャマ、リザードン、エルレイド、ジバコイルと4体もいるからだ。

そして今、ヒカリちゃんの1体目はエルレイド。相性は不利。

だが、このパーティー、この3体だと、グレイシアしかこの役割は遂行できない。

「グレイシア、ボックスステップで思いっきり下がれ！」

「エルレイド、逃がさないで！ 一気にいくわよ！ インファイト！」

「バリアーだ！」

フィールドの思いっきり後方（トレーナー付近）まで下がったグレイシア。

エルレイドとの距離が開いていたため、バリアーを張った後でもまだ若干の距離がある。

「ついでだ、グレイシア！ のろい！」

そしてのろいが発動と同時に、エルレイドがグレイシアの懐に入り

込む。

『エルレイドのインファイトがグレイシアに決まったアアア！ これは効果は抜群だアア！』

インファイトによつて吹き飛ばされるも、グレイシアはクルツと体勢を立て直し、まだまだやれる様子を見せる。

『こ、これは！？ グレイシア、格闘タイプの大技インファイトを効果抜群ながらも耐えきりました！ すごい！ すごいグレイシアだ！』

なにせグレイシアはイーブイ系統の進化形。

イーブイ進化形は種族値の中に130、110という高い数値を必ず持つ。

グレイシアはその中で特攻種族値が130ということで注目されるが、実は防御種族値が110という、ブラッキーと同じ防御種族値を持つ。

耐久面では特防が130のブラッキーの方が使い勝手はいいため、ゲームではグレイシアはアタッカーの側面が高い。

ただ、この世界はゲームのようにはいかず、かつ、ブラッキーはすでに育てていたため、このシンオウに来て育て上げたという限定条件下でブイズのどれかを出そうかと思つたとき、グレイシアかリーフィアのどちらかが残つた。

リーフィアは防御130と高く、素早さは95とそこそこ高いのですが、草タイプなため弱点が多く、特防が紙なので（リーフィアは65、グレイシアは95）、特攻がそんなに高くないベトベトンのだいもんじですら落ちかねないと思い、グレイシアをチョイスしました（ベトベトンのだいもんじならおそらく耐えられる）。

インファイトは物理技なため、その種族値＋バリアーとのろいでグレイシアの防御が2.5倍に上がったおかげで、たとえ弱点であっても現状はまだグレイシアは戦えるといった状況です。

「グレイシア、でんこうせっかで距離を取れ！」

「バリアーにのろいを積まれたんじゃ、いくらタイプ一致抜群でも落とせなかったみたいね！　なら、エルレイド、でんじは！」

「あくび！」

そうして、エルレイドにあくび、グレイシアにでんじはがヒットする。

『エルレイドのでんじはが決まり、グレイシアはマヒ状態になりましたアア！　グレイシアはピンチです！　一方、エルレイドはチャンスです！　この機に一方的に攻め上げればグレイシアを下すことは可能でしょう！』

「んなわけないでしょうが！　戻って、エルレイド！」

「グレイシア、バトンタッチ！」

『おや、両選手ここでポケモンの交代のようです！　ユウト選手の方はまだわかりますが、ヒカリ選手の方はいったいどういうことなのでしょう！？　解説のハウエンチャンピオンマスターダイゴさん、よろしくお願いします！』

そついや、ダイゴはなぜか解説席に座るらしいですね。

公人としての肩書を使ってるということは仕事ですか？  
お疲れ様です。

『あれはグレイシアのあくびという技のためですね。あくびは一定

時間経つと必ず眠ってしまうという技です。ただ、ポケモンをボールに戻せば効果はなくなるため、ヒカリ選手は交代を行うのでしよう。眠らされてはほとんど何も出来ませんからね。おまけにエルレイドはインファイトで防御と特防が下がっていますから、ここでの交換はいい判断だと思います。ただ、グレイシアをマヒさせたということはヒカリ選手にとってはかなり大きいですが、グレイシアにバトンタッチを決められたことはかなりの痛手ですね」

『はあ。あの、バトンタッチというものはいったい……？』

「いつけえ、ベトベトン！」

「クラブ、キミに決めた！」

『あ、それより、2体目のポケモンがフィールドに出てきましたね。バトンタッチについてはまた後ほど』

『わかりました、ありがとうございます。さて、双方、2体目のポケモン！ ヒカリ選手は3回戦シンジ選手とのバトルで進化したベトベトン、一方、ユウト選手は今大会初登場のクラブです！』

\*

2体目も又ケニンじゃなかった。

ひよっとして、又ケニンは入っていない？

くう、ちよっとやられたかもしれない。

にしても、ちよっと、なあ。

グレイシアにバリアーとのろいを積まれて、バトンタッチでつながれちゃった。

これはマズイ。



防御2・5倍に攻撃1・5倍のクラブ。

おまけに、キングラーに進化でもしようものなら、種族値は、攻撃はカイリキーやガブリアスと同等、防御はジバコイルやドータクンとかと同等。

はつきり言っただけ物すぎる。

ただ、クラブは特防が相当低い。

いわば、紙だ。

ベトベトンのそんなに高くない特攻でも十分落とせる。  
なら、

「ベトベトン！ かみなり！」

「こうそくいどうでかわせ、クラブ！」

『おおっと！ ベトベトンのかみなりがフィールドを襲います！

しかし、クラブもこうそくいどうでかわしている！ なんて器用なカニだアア！』

たしかにあのカニ、じゃなかった、クラブは器用ね。

さすが、ユウトさんが育ててるだけはある。

かみなりはもともと命中率がそんなに高いわけじゃないから、当たらないのも仕方がない。

ただね。

『クラブ、かみなりを避けている最中にベトベトンがクラブに接近！  
クラブ、ピンチだ！』

「今よ、ベトベトン、10万ボルト！」

「クラブ、こらえる！」

うそ！？

こらえる！？

これじゃあ、HPをギリギリまで削れてもクラブを倒しきることなんかできない！

マズイ！！

『ああつと！ クラブ、不運！ ベトベトンの10万ボルトに加え、降り注いでいたかみなりの1つがクラブを直撃イイ！ 効果は抜群だアア！ これはクラブ、耐えきれずにダウンかア！？』

んなわけないでしょ！？

こらえるなんてやられたら、次に来るのは！

攻撃種族値105で攻撃1.5倍HP1でのじたばたなんて食らったら！！

「クラブ、じたばた！」

「コキコキ！」

『あ、クラブのじたばたがヒットしましたね。クラブは相当の大ダメージを受けていたはずですから、このじたばたの威力は相当なものでしょう』

じたばたはHPが低いほど相手に大ダメージを与える技。

HP1でのじたばたの威力は200。

だから、

「ベトベトン、戦闘不能！ クラブの勝ち！」

になるわよね。

「はあ、お疲れ様、ベトベトン」

ふう、と深く息を吐きつつ、あたしはベトベトンをボールに戻す。

「ベトベトン、ありがとね。今はゆっくり休んで」

『ベトベトン、ダウウウン！ ヒカリ選手はこれで残りのポケモンは2体になりました！ 一方、ユウト選手は3体が残っています！ はたしてこの先、このバトルはどのような展開を迎えていくのかアア！？』

予選リーグBブロック決勝戦

ユウトVSヒカリ

ユウト手持ち：グレイシア（ダメージ+マヒ）、クラブ（ダウン寸前の大ダメージ）、残り1体

ヒカリ手持ち：エルレイド（無傷）、ベトベトン（ダウン）、残り1体

第11話 予選決勝ユウトVSヒカリ（後書き）

なんて強いカニだ。カニかわいいよカニ。

ちなみに、「こらえる！」「というの是指示、「こらえる」というのは技です。指示の方は「かわせ、ピカチュウ！」「のごとく、当たり前のように浸透していますが、技の方は知られていません。

第12話 予選決勝ユウトVSヒカリ(前書き)

第5世代仕様の技が出ていますが、そこはご愛嬌

## 第12話 予選決勝ユウトVSヒカリ

予選リーグBブロック決勝戦

ユウトVSヒカリ

ユウト手持ち：グレイシア（ダメージ+マヒ）、クラブ（瀕死寸前  
の大ダメージ）、残り1体  
ヒカリ手持ち：エルレイド（無傷）、ベトベトン（瀕死）、残り1体

『ベトベトン、ダウウウン！ ヒカリ選手はこれで残りのポケモンは2体になりました！ 一方、ユウト選手は3体が残っています！ しかし、クラブはかなりのダメージを負っている上にグレイシアはマヒ状態です！ 一方ヒカリ選手は2体に減りましたが、どちらもまだまだ十分にバトルは行える様子！ 数ではユウト選手の方が上でも、ポケモンの状態ではヒカリ選手の方が上！ これはどちらに勝利の女神がほほ笑むのか、まだまだわかりません！ そういえばチャンピオンマスターダイゴさん、バトンタッチという技はいったい？』

『ああ、バトンタッチですが、ただのポケモンの交代ではありません。かげぶんしんやみがわり、こうそくいどうなどの状態変化はポケモンを交代すれば、その場で消滅するのですが、バトンタッチはそれらをそのまま引き継ぐことが出来るんです。今の場合だと、のろいとバリアーで上がった防御と攻撃をグレイシアからクラブに引き継いだんですね』

『な、なるほど……』

『ただ、ヒカリ選手も狙いは良かった。引き継いだ防御と攻撃です

が、クラブはこれらがもともと高いんですね。しかし、クラブは特防が低いので、特殊技には弱い。だから、ヒカリ選手は物理技ではなく、特殊技で攻め立て、物理アタッカーとしてのクラブの役割を潰そうとした。尤も、クラブを倒しきれなかったのは非常に残念なのですが」

「はあ………」

私は思った。

観客を含め、ほとんどがダイゴの説明を完璧には理解しきれないことでしょう、と。

ただ、今ここで行われているバトルは今までの、ただ技をぶつけ合っただけのレベル差で勝敗が決まるなんていうポケモンバトルとは、明らかに隔絶したモノであるということは、きつと理解しているはずだ。

「これで、この地方のバトルも変わるかしらね」

「大丈夫ですよ、シロナさん。カントーでもユートの言葉と一緒に浸透してきてますから」

「ジョウトでもな」

「ホウエンだってダイゴを始め、リーグの方でいろいろやっているらしいので、これからだと思えますよ」

なるほど。

各地方でもそういうことになっているなら、きっと………！

「ホント、彼には楽しみが付きないわね」

私は、今バトルをしている2人を見下ろした。

\*

今はマジで危なかった。

いや、ポケモンバトルっていうのは、計算だけじゃなくて、“運”  
っていう要素も掛かってくるんだよね。

ヌケニンがウインディに勝っちゃったり、コイキングがクロバット  
やカブトプスを葬り去ったこともあるわけだし。  
でも

「戻れ、クラブ！」

これだからおもしろい！

『ユウト選手、ここでクラブを戻します！ ポケモンの交代です！  
はたして次のポケモンは双方どのようなポケモンが出てくるので  
しょうか！？』

「グレイシア、キミに決めた！」

「エルレイド、もう一度行って！」

『なんと！ 最初のポケモン同士の対決になりました！ しかし、  
グレイシアはマヒ状態！ おまけに氷タイプのグレイシアは格闘タ  
イプのエルレイドに相性が良くありません！ グレイシア、絶体絶  
命のピンチ！ 逆にエルレイドは絶好のチャンスです！』

「エルレイド、グレイシアを退場させるわよ！ かわらわり！」

「グレイシア、あと1回だけ頑張ってくれ！ ねがいごとだ！」

「げっ、マズイ！ エルレイド、絶対にねがいごとを発動させちゃ  
ダメよ！ なんとしてもねがいごとを決められる前にグレイシアを



落としなさい！」

ねがいごとを指示したことでおそらくオレの次のポケモンがなにを出すかわかったことだろう。

「頑張れ、グレイシア！」

尤も、こちらも結構危ない。

マヒは25%の確率で行動が出来ない。

そこに当たってしまうと……。

「シアー！」

よっしやあああつ、ねがいごと発動！

「エルレイツ！」

そこにエルレイドのかわらわりが決まる。

今度こそ倒れ伏すグレイシア。

「グレイシア、戦闘不能！ エルレイドの勝ち！」

『決まったアア！ エルレイドのかわらわり！ 効果は抜群だア！』

そしてグレイシア、ついにダウン！ これで双方、残りのポケモンは2体！ しかし、ユウト選手のクラブは残りの体力が厳しい！

これはユウト選手、苦しくなってきたか！？』

『いや、そんなことはありません。まだ、お互い完全な互角だ』

えっ？

今のダイゴの発言でおそらく会場の空気はこんな感じになった。いや、なんか肌でそう感じるんですよ。

とりあえず、そんな空気を無視してグレイシアを戻す。

お疲れ、グレイシア。

そしてありがとう。

キミの頑張りは絶対ムダにしないよ。

「ねがいごと決まっちゃった」

ヒカリちゃんも若干気落ちしてるようだ。

まあ、この後の展開がわかっているんでしよう。ということだ、

「出番だ、クラブ！」

\*

『ここでユウト選手、クラブを投入です！　しかし、クラブはベトベトン戦にて大ダメージを負っています！』

たしかに見た目は10万ボルトやかみなりの影響であちこちに黒いこげが見える。けど、

「ん？ んんん！？ わ、私の見間違いでしょうか！？ クラブの傷が回復していつているように見えます！」

ああ、始まっちゃった。

クラブの傷がどんどん回復していく

「いや、見間違いではありませんよ」

「しかし、チャンピオンマスターダイゴさん、クラブはねむる以外の回復技は覚えませんか？ いったいどういうことでしょうか？」

「回復技は使いました、尤も、クラブじゃなくてさっき倒れたグレイシアが、ですけどね」

「い、いったいどういう？」

「ねがいごとです。ねがいごとという技は一定時間が経つとねがいごとを使ったポケモンの半分だけの体力を回復する技なんです。グレイシアはこの技を使った直後、エルレイドに倒された。そして出てきたクラブが、ねがいごとによって回復したわけです。しかも今回はおそらくほぼ全回復に近いですね。だから、今は2VS2の完全な互角というわけなんです」

まさにダイゴさんの言うとおりです。

おそらくグレイシアのHPの種族値からのねがいごとなら、クラブのHPはほぼ全快まで回復するはず（クラブのHP種族値はグレイシアの半分以下。だから、グレイシアの体力の半分が回復するならば、クラブはほぼ全回復したことになる）

「おや、クラブの様子が……！ これはまさかまさか！？」

クラブの身体が白く発光していつてます。

そしてそれに併せて身体がだんだんと大きくなっていつてます

ナニソレ？

このたいみんぐでですか？

ホント、カンベンしてよ！

「ゴキゴキ」

『ここでユウト選手のクラブ、キングラーに進化しました！』

体力満タンのキングラー。

攻撃はカイリキーやガブリアスと同等、防御はジバコイルやドータクンとかと同等。

こっちは物理アタッカーでしかも物理耐久は低いのに！

「ええい、迷ったって仕方ない！ エルレイド、おにび！」

「マッドショットで打ち消せ、キングラー！」

『さあ、エルレイドとキングラーのバトルが始まりました！ 開始初手、エルレイドはおにび、対するキングラーはマッドショットの攻防です！』

『おそらく、ヒカリ選手はおにびでなんとしてもキングラーをやけど状態にしたいのでしよう。やけどになれば、攻撃力は半減しますし、時間が経つごとにダメージも受けていきますからね。カイリキー並の攻撃力が半減するというのは物理耐久の低いエルレイドにとっては非常に大きいですよ』

『なるほど。しかし、ユウト選手もそう易々と思い通りにはさせない、ということですか？』

『ええ』

くっ！

ならば、攻撃をして、その隙に状態異常を狙うしかない！

「エルレイド、リーフブレード！」

「キングラー、てっぺき！」

げっ！

そういえば、あたしの行動が今まで全部読まれてる………気がする。

『エルレイドのリーフブレードがキングラーに炸裂！ しかし、キングラー、ほとんど効いていない！』

『てっぺき（防御2段階アップ）の影響ですね。もともと、ドータクン並の硬さを誇るキングラーの防御が約2倍になったんです。いくらエルレイドが攻撃が高い上に弱点を突いたとはいえ、あれではなかなかダメージを与えられない』

たしかにそうだ。

でも、キングラーの間合いに入った。

素早さはこちらの方が僅かに速い。

これならば

「エルレイド、もう一度おにびよ！」

「キングラー、クラブハンマー！」

そしてあたしは見た。

クラブハンマーよりおにびの方が先に決まっていたことを

キングラーが一瞬早くやけどになり、これでダメージは相当押さえられた。

後は、なんとかこのキングラーを退場させるだけ！

「エルレイド、かみなりパンチ、連打！」

「エルレイツ！」

「キングラー、からげんきで応戦しろ！」

「ゴキゴキ！」

もはや、ボクシングの打ちあいのようになり始めている。避けて、かわして、当てて、避けて、かわして、当てて。その繰り返し。

『これはすごい！ かみなりパンチとからげんきの応酬！ もはやこれはキングラーとエルレイドの意地のぶつかり合いだア！』

『エルレイドはかみなりパンチで効果抜群のダメージを与えているけど、てっぺきで防御がグリーンと上がっています。一方、キングラーはからげんきで応戦していますが、からげんきは状態異常になると威力が2倍になる技で、かつ、エルレイドは先程も言ったように物理耐久は低い。なので、このままでは』

「エルレイド、大きく後退！」

「逃がすな！ 追え、キングラー！」

ダイゴさんの言うとおりのままではエルレイドの方が先に落ちる。というかもう落ちる寸前だ。  
ならば

「ふういん！」

「エッ、エルレイツ！」

決まった。

これでもう、エルレイドが覚えている技は使えない。

「エルレイド、かなしばり！」

「クラブハンマー！」

そしてエルレイドのかなしばりが決まると同時に、キングラーのクラブハンマーがエルレイドに突き刺さる。

……

……

そして

「エルレイド、戦闘不能！ キングラーの勝ち！」

予選リーグBブロック決勝戦

ユウトVSヒカリ

ユウト手持ち：グレイシア（ダウン）、クラブ キングラー（やけど+ダウン寸前の大ダメージ）、残り1体

ヒカリ手持ち：エルレイド（ダウン）、ベトベトン（ダウン）、残り1体

## 第12話 予選決勝ユウトVSヒカリ（後書き）

ねがいごとは第5世代になって「ねがいごとを『受ける』ポケモンの最大HPの半分だけ回復する」から「ねがいごとを『使った』ポケモンの最大HPの半分だけ回復する」に変更されています。ちなみに書き上げてから気がつきましたので、変更はしません。

それからラストにふういんをやったのも別に書き間違いなどではありません。



### 第13話 予選決勝ユウトVSヒカリ

予選リーグBブロック決勝戦

ユウトVSヒカリ

ユウト手持ち：グレイシア（ダウン）、クラブ キングラー（やけど+ダウン寸前の大ダメージ）、残り1体  
ヒカリ手持ち：エルレイド（ダウン）、ベトベトン（ダウン）、残り1体

「予選リーグBブロック決勝戦もいよいよ佳境に入ってきました！  
ホウエン地方ハジツゲタウン出身ユウト選手とシンオウ地方フタバタウン出身ヒカリ選手という今大会までまったく知られていなかった選手同士のバトル！ しかし！ しかし！ 大波乱が予想されていた今大会！ 私は思います、【なぜ、この戦いがシンオウーを決定する決勝戦ではないのか】、とツ！ 皆さん、これはまだ予選、予選なんですよ！！ 私はここまで心揺さぶられ、熱くなるほどの、手に汗握るほどのバトルを知りません！ そして、これほどの高度な戦略が練られたポケモンバトルというものを知りません！  
私は今まさに、時代が動き出しているような、いえ、新たな時代の到来に立ちあえた、そんな感動と喜びで打ち震えています！」

「あたしの最後のポケモン！ いっけえ、リザードン！」

「おっと。すみません、実況を続けましょう！ ヒカリ選手最後のポケモンはりザードンです！ 2回戦はその圧倒的強さでも相手選

手のポケモンを3体下して3回戦進出を決めました！ そのリザードンに今の満身創痍のキングラーではたとえ相性有利でも厳しいと  
いったところか！？』

たしかに。

もうキングラーはあまり戦えない。

だったら、

「キングラー、にらみつける！」

「ゴキゴキ！」

次につなげるような戦い方をするのみ！

「リザードン、ほのおのうずで閉じ込めなさい！」

「キングラー、なみのり！」

だが、キングラーは元々の特攻が低いため、フィールドに発生させたなみのりは微々たるもので、それをリザードンのほのおのうずがアッサリ飲み込み、そしてほのおのうずにキングラーが閉じ込められて

「ゴ、ゴキ……ゴキ……」

うずが消えた後は

「キングラー、戦闘不能！ リザードンの勝ち！」

となる。

尤も、エルレイドのかみなりパンチにやけどのダメージでもはや攻撃はほぼできず、今のほのおのうずを避けるのも難しかった。

だけど、

「戻れ、キングラー！」

本当に、本当によく頑張ってくれた！  
ありがとう。

実質、ベトベトンとエルレイドの2体を退場に導いたもんだからね。

「本当によく頑張ってくれたな、キングラー。今はゆっくり休んで  
いてくれ」

フィールドはなみのりの影響で豪雨の中での土のグラウンドのよう  
な様相を呈している。

さて、オレの最後のポケモン、  
それは

コイツだ！！

\*

『さあ！ いよいよ決勝戦も大詰め！ ユウト選手も残りのポケモ  
ンは1体のみとなりました！ はたしてユウト選手最後のポケモン  
はいかに！？』

正直2体目がクラブだったことでヌケニンは入ってないと思った。  
あたしはユウトさんのジム戦は2回しか見ていないけど、見せ合い  
の中で見かけた6体の中では、ゴウカザル、この子が間違いなくあ

の人のエースだった。  
そしてヌケニンを入れないなら、かつ、この土壇場。  
ユウトさんならきつと

「デンリュウ、キミに決めた！」

いつ!?

ここでデンリュウ!?  
まっず。

デンリュウじゃリザードンは相性的に厳しい。  
デンリュウの体力が減ってるなら、何とかなると思うけど、残念ながら、そんなことはない。  
おまけにリザードンはにらみつけるで防御が下がったみたいだし。

『ユウト選手、最後は電気タイプのポケモン、デンリュウです！  
相性はリザードンは飛行タイプを持つため、相性は不利！ ヒカリ選手ここからどう攻めていくのか!?!』

これは

負けたかも

「ヒカリちゃん！」

ユウトさんの張り上げた声が耳に届いて反射的に顔をあげる。

「オレは何度も言ったはずだ、バトルが始まるのは、モンスターボールを投げたときからではなく、トレーナー同士が目を合わせた瞬間からだ」と！ ならば、見せ合いの段階でヒカリちゃんとオレの駆け引きはとうに始まっていた。ヒカリちゃん、キミはオレの又

ケニンにばかり視線がいつていた」

！！

たっ、たしかに。

別にバトルにおいてパーティーに又ケニンを入れていたからといって、63（ロクサン）で出すとは限らない。

「もちろん、又ケニンは対策を施さなければ詰んでしまう。しかし、そればかりに目がいつてしまえば本末転倒になってしまう」

ぐっ！

たしかに。

しよ、正直、リザードンは確定だったけど、残りの2枠はベトベトン、ジバコイル、ポツチャマ、エルレイドで争っていた。

ただ、ジバコイル・ポツチャマともに又ケニンの弱点を突く技を覚えていなかった上、ポツチャマはステルスロックもなかったので外していたのだ。

これは、完全にあたしの読み違い。  
いや。

読み負けと言っている。

くやしい

ここまでできて

こんな

こんな結果じゃあ

「だが、バトルは相性だけで決まるものではない。それはキミのリザードンを見れば十分に分かるはずだ」

リザードンがこちらを見る。

オレに任せろ！

そう言ってくれている気がする。

そっあの子の瞳の強さが伝わってくる。

「あ、こ、こらー！」

ん？

試合が始まる前にモンスターボールを預けた係の人？

「ポッチャマー！」

ポッチャマがボールから勝手に出てきた。  
つて、ちよっ！

「ポッチャマ！？ なに勝手に出てきてるのよ！」

「ポチャ、ポチャポーチャポチャ！」

「えっ？」

なんか目つきがビミョーに険しい？

「マジ！ マージマー！ マージ！」

「ジBBBBRRRRR！」

ムウマー！ マージにジバコイルまで出てきた。

やっぱり、若干目つきが険しいような？

(みんな、ヒカリ、あなたを励ましているのよ)

えっ!？

この声って!？

(ラルトス?)

(そうよ。で、みんなヒカリにすっかりしろって言ってるのよ)  
「グウオワオオオ!」

そのときリザードンが大きく唖り立った。

(リザードンもそう言ってるわ。だいたい、あなたはポケモントレーナーでしょ? 自分のポケモンたちがまだ勝負をあきらめてないのに、あなたがそんなんでどうするのよ?)

あたしはリザードンを見た。

コクン

リザードンはあたしをみて頷いてくれる。

ああ、今までもそうだった。

挫けそうなときもいつもこの子たちがいてくれた。

辛いことがあってもいつもこの子たちはあたしの傍から片時も離れなかった。

離れようとはしなかった。

あたしがみんなのことを大好きなように、この子たちもあたしのことを大好きでいてくれる。

『あたしはポケモンたちが好き。あたしのポケモンたちが大好き。だから、旅を続けることが出来る。つらいことがあっても乗り越えることが出来る。それは、みんながいてくれるから、みんながこんなあたしといてくれるから。この感情は間違いなんかじゃない！』

心を否定されたギンガ団のアカギにも言った言葉。

今こそそれを実行しないでどうする！？

大好きだからこそ、彼らを信じないでどうするんだ！？

あたしもそれに頷き返した。

「よおし、いくわよ、リザードン！ 相性どこのどこの言う前に！ あたしたちの気合いと根性ってもんを見せてやるうじゃない！」

\*

「リザードン、飛び上がったねっふう！ フィールドを覆い尽くして、デンリュウの逃げ場所をなくしなさい！」

デンリュウが出てきた瞬間、ヒカリちゃんは負けを直感したみたい。な感じで諦めの気持ちが入り交ざっていたように思えた。

けどオレは『バトルを途中で諦める』なんてことは教えた覚えはない。

勝負は何が起こるか分からない。

たとえば、どれだけ戦略を立ててバトルを計算しつくそうと、バトル



には必ず運という要素が混ざり合ってくる。

感動したのが、現実世界のとある動画サイトで見たヌケニンVSウインディ、それからコイキング・ニドキング・キングドラVSクロバット・ルンパッパ・カブトプスの試合。

まず、ヌケニンVSウインディ。

虫タイプVS炎タイプ。

ウインディはオーバーヒートを持っていて、ヌケニンは一撃でもそれを食らえば負けるという状況。

しかし、勝負はヌケニンが勝った。

ウインディは混乱していて、自滅ダメージがあつたとはいえ、命中率90%のオーバーヒートが立って続けに外れ、その間に、ヌケニンが自滅ダメージとシザークロスでウインディを破ったのだ。

コイキングVSクロバット、カブトプスの試合。

攻撃の種族値はキャタピーやビードル、ヒンバスよりも劣るコイキング。

しかし、開始初手でクロバットがあまごいをしたため、コイキングの特性『すいすい』が発動。

その速くなった素早さからのとびはねるで、クロバット・ルンパッパにマヒを撒き、じたばたで最終的にコイキングがクロバット・カブトプスの2体を葬り去ったのだ。

ポケモンバトルでは何が起こるか分からない。

まさにそれはそのことを表していた。

だから、拙いながらも、喝を入れてみた。

尤も、それはラルトスや何より彼女のポケモンたちによって成功を成した。

ポケモンと人はお互いの足りないところを支え合って生きている。

この世界の縮図をそこに見た気がした。

つと、ねっぷうをどうにかしないとな。

「デンリュウ！ 回転しながらほうでん！」

「リュウウウ！」

『予選リーグBブロック決勝戦！ いよいよそのラストバトルが始まりました！ 開始早々、リザードンはねっぷうを放ち、対するデンリュウはほうでんで対抗します！ それにしてもこのリザードンはすごい！ このフィールドを覆い尽くすほどのねっぷう！ こんなに強力なねっぷうを使うリザードンは見たことがありません！ デンリュウ、ピンチか！？』

『いや、わからない、これは』

そしてねっぷうがふきやんだフィールドには、

『な、なんと、デンリュウ！ あの強力なまでのねっぷうを無傷で耐えた！ い、いったい何をしたんだア！？』

『おそらく、カウンターシールドです』

『カウンターシールド？』

ダイゴが何か言ってますが、まあそれですね。アニメでサートシ君が開発し、ヒカリちゃん、そしてシンジ君すら披露したというアレです。

オレのマリルやヒカリちゃんのポツチャマのアクアジェットもカテゴリでくくればそれに属しますし、アニメではサートシ君のブイゼルがやったみたいです。

尤も、なんとというか、オレが言うのもおこがましいですが、ネーミングセンスが、ねえ。

メリッサさんが名付け親（この場合は脚本家ですか？）なんですけど、もうちよつといい名前とかなかったんですか？  
もうちよつとこつ、カツコよかったら、と思っっているので、オレはあまりその名前は使いません。  
尤も、ダイゴたちに教えたのはオレだけだね。

『攻撃技を攻撃技でバリアをするという、ユウト選手が編み出した戦法の名前です。具体的に言えば、技の発生時に回転を掛けることによって技の指向性に別のベクトルの力を掛けて、攻撃技で攻撃と防御を同時に行うといったところでしょうか。ログで見ましたが、ヒカリ選手が3回戦のときポツチャマでやったアクアジェットも力ウンターシールドの一種です』

『そ、それはすごい！ まさにすごい！ まるで初めて開ける宝石箱のような、私たちに新たな世界を見せてくれている両選手！ すばらしいです！ そんな対戦が繰り広げられています！』

ダイゴは事情知らないからオレが発祥だなんて言うてくれています  
が、はつきり言うて居心地が悪いです。

まあ、そこら辺のリスクは後で考えることにして、

「デンリュウ、フィールド全体にかみなりを落とせ！」

「リザードン、つるぎのまいもどきをしながらあなをほって地中に逃げるのよー！」

つるぎのまいもどきをしながら……。

“もどき”ってなによ？

「グウオワオオオー！」

わあー、それなんてエロゲ？

じゃなくて、どんなチート？

なんかあのリザードン、たしかにつるぎのまいみたいなことをしながらあなをほって地中に潜っていききました。

「い、いつのまにあんなことができるようになったんだ？」

「この島に来てからの特訓ですよ！」

なるほど。

見てないところで特訓してたのね。

というかこの島に来てって、僅か1週間足らずであんなの身につけさせたんですか！？

あのリザードンはどんな天才だよ。

と想っている間にデンリュウのかみなりがフィールド全体に降り注ぐ。

『デンリュウのかみなりがフィールド全体に降り注いでいます！』

ひかえめならバリバリの特殊アタッカーを担ってもらおうと思いましたが、のうてんきなこの子（防御 特防 ）だったので、苦肉の策として攻撃・特攻に極振りして二刀流戦法を起用しました。

尤も、愛情があればそれでいいんです。

つぶらな瞳とか、自分の大きさを考えないでメリープ時代のようにじゃれてくるところとかがかわいいんですよ。

まあそこは置いておいて。

確かに地面は電気を通さない。

だから、電気技を回避するために地中に逃げることは悪くない。

オレもそう教えたいね。

でも、今回に限ってはリザードンは地中に逃げるよりは、空高くに

逃げた方が良かったかな。

「デンリュウ！ 続いてでんじふゆう！」

すると、デンリュウがラルトスがサイコネシスを使うかの如く、フワフワと浮きあがる。

これでデンリュウに地面技は届かない。

「今よ、リザードン！」

「かわせ、デンリュウ！」

そして地中から飛び出してきたリザードン。

お、これは……ラッキーだ。

「リザードン、かえんほうしゃ！」

「グ、グオワ……！」

しかし、リザードンはかえんほうしゃを放つことはなかった。

そしてブルブルと全身が痙攣したようになっていく。

『あーっと、リザードン！ マヒで痺れていてかえんほうしゃを放てません！ しかし、いったいいつのまにリザードンはマヒになったのでしょうか!?』

『さっきのかみなりの影響かな。しかし、リザードンは地面に潜っていたから、電気技を食らうはずがない』

ダイゴの指摘は惜しいところを突いている。

だけど、状況が違えば、その結果も変わってくる。

「……しまった!? さっきのなみのり!?」

おっ、ヒカリちゃんは気づいたみたいだ。  
そう。

さっきのリザードンのねっぷうで少しは乾いたけど、もともとは地面は

キングラーのなみのりでぬかるんでたんだよ？

『そうか！ キングラーのなみのりでフィールドがぬかるんでいたからかみなりが地中にいたりザードンにも届いたんだ！』

イエス、ザッツライト。

そういうことです。

「ちなみにフィールドは若干でも電気を帯びてるから、でんじふゆうの効果は普段より長く続く。地面技は効果はない」

これこそ、ゲームにはない仕様です。

まあ、イワークに、スプリンクラー付きとはいえ、10万ボルトが通るとかいうワケわからん世界ですからね。

「リザードンはマヒしてもはやスピードはお前以下だ！ 一気に攻め立てるぞ、デンリュウ！ はかいこうせん！」

「がんばって、リザードン！ フレアドライブでデンリュウに突っ込むのよ！」

リザードンはフレアドライブ特有の青っぽいエネルギーに包まれる。一方デンリュウがその口にはかいこうせんのエネルギーを充填する。

「はかいこうせん、発射！！」

「フレアドライブ、GO！！」

そしてはかいこうせんとフレアドライブ。

それはどちらも同じ超スピードで、両者の中間付近でぶつかり合う。

「くっ……!!」

「が、がんばって……リザードン……!!」

その激しいエネルギーのぶつかり合いによって、このフィールドは正直立っているのも辛いほどの衝撃が体を襲う。

『ふ、フレアドライブとはかいこうせん……!! す、凄まじいまでのぶつかり合いです、おわっと! すみません、私の大事なものが飛んで行きそうだったもので!』

余波はフィールドだけでなく、この会場全体にまで影響が及んでいるそうです。

「り、リザードン! は、はかいこうせんの軌道からズレなさい!」

ま、マズイ!

「デンリュウ、パワージェムで撃墜しろ!」

「もう、おそいです! リザードン、全力で突っ込めえ!!」

「グウオワオオオ!」

『決まったアア! 炎タイプの大技、リザードンのフレアドライブがデンリュウを直撃イイ!』

「リュウウウ!」

だが、吹っ飛ばされながらも、デンリュウはパワージェムを飛ばすことに成功していた。

『ああつと、しかし！ デンリュウもリザードンに吹き飛ばされながらもパワージェムで反撃！ 効果は抜群だアア！』

「デンリュウ、頑張れえええ！！」

そしてなんとかデンリュウがスタジアムの壁に激突する前に着地し、踏み止まった。

リザードンの方は、はかいこうせんのダメージに、フレアドライブの反動、パワージェムの効果抜群ダメージ（リザードンには4倍弱点）でまだ立ち直れていない！

「デンリュウ、ラストだ！ かみなりパンチ！！」

「リザードン、がんばって！！ からげんきよ！！」

デンリュウがリザードンに向かっていく。

しかし、もどきとはいえつるぎのまい込み（おそらく1段階アップ＝1.5倍）のフレアドライブは強烈だったようで、リザードンに向かうスピードは常のもの比べ、格段に劣っている。

その間にリザードンは立ち直りからげんきの体勢になって突っ込んできた。

「っつけええええええっつ！！」

スタジアム内に2人の願いすらこもる言葉が駆け巡った。





第13話 予選決勝ユウトVSヒカリ（後書き）

おかしいな。なんか努力値云々からはもはやかけ離れた話になってしまった。なんでだ？

## 最終話 予選決勝決着、別れ

「っいつけええええええつつっ！！」

スタジアム内に2人の願いすらこもる言葉が駆け巡った。

デンリュウとリザードン。

2体のポケモンが接触する。

それと同時にスタジアムを白色の閃光が包み込んだ

『で、デンリュウのかみなりパンチ、リザードンのからげんき！  
もはや、両者これが最後の一撃となったでしょう！ はたして、ど  
ちらが最後までこのフィールドに立っているのか！？』

閃光が止む。

交差する2体。

そのうちの1体。

グラッ

よろめいたと思うと、

ドッッッスン

大きな音を立てて地に沈んだ。  
スタジアムを静寂が包む。  
ジャッジが近づいた。

そして

「リザードン、戦闘不能！」

オレはワナワナと

「ヒカリ選手が3体全てのポケモンを失ったため、この勝負、ユウト選手の勝ち！！」

心の底から湧く感情に

「予選リーグBブロック！ 決勝リーグ進出者はホウエン地方ハジツゲタウン出身、ユウト選手！！」

打ち震えていた。

そしてその瞬間、スタジアム内をまさに爆発と言っているほどの熱気、歓声が包み込んだ。

\*

「ありがとう、リザードン」

あたしはボールにリザードンを戻した。  
耳はスタジアム内の歓声で、バカになったんじゃないかというぐら  
い、何も聞こえない。  
正直何が起きたのかわからなくなっていたのか、しばらくボーっと  
していたんだと思う。

「ヒカリちゃん？」

すぐ目の前にユウトさんが現れるまで。

あれ？

どこどこ？

「どこは？」

「フィールドへの入口だよ」

そ、そういえば照明もフィールドを照らすものとは全然違う、普通  
に室内を照らす用のものだった。

「あ、あの、ユウトさん」

すると、ユウトさんはあたしに向かって右手を差し出してきた。

「え？ え？ え？」

あたしはわけがわからず、何度もユウトさんの晴れやかな顔と差し  
出された右手に視線を行き来させていた。

「ありがとう、楽しかったよ」

あ……。

「あたし、も、です」

あたしはその手を右手でしっかりと握り返した。

「あ」

いつのまにあたしの視界が波打ち始めていた。

そしてだんだん歪み始めていた。

目頭がだんだんと熱くなる。

鼻になにやらツーンとした感覚が駆け抜けた。

「あたし」

「ヒカリちゃん」

ユウトさんはそう言ってあたしの顔を自分の胸に押しつけた。

暖かい。

「ゆ、ユウ、トさん、あ、あた、あたし、ヒック、そ、その……」

そこから先は言葉にならなかった。

「うん、うん」

ユウトさんはやさしくあたしを抱いてくれ、そっと頭においてくれた。

あたしは膝の力が抜けて座り込んでしまった。  
それでもまだあたしを抱いてくれている。

今までユウトさんとの特訓で勝ったことなんて一度もない。  
でも。

でも、それと比べて。

同じ負け。

同じ負けのはずなのに。

どうして。

どうしてこんなにも！！

「今は泣いちゃった方がいいよ。ここは誰も見てないからさ」

もうあたしの我慢は限界だった。

堰を切ったように溢れ出す熱い液体、嗚咽を押さえきくことはもはや不可能だった。

\*

「落ち着いた？」

「は、はい」

「あ、今は気にしなくていいからね」

は、はは。

好きな人にあんなダサイところ見られるなんてちょっと気恥ずかし

……い？

はれ？

「あ、あのですね、ユウトさん！？ えと、あの、その！？」  
「ど、どうした、ヒカリちゃん！？ 何をいつたいそんなに焦ってるんだ！？」

「あ、あの、あのですね！？ あたしが負けた原因の評価をお願いしまっすー！」

あー、言ってから気がついた。

なんであたしこんなこと言ってるのよ。

もつと違う話題あるでしょ。

それに最後の「しまっす」「ってなによ」「しまっす」「って。

「あ、ああ。そうだね」

そして何にも気がつかないユウトさん。

このニブチン！

「ど、どうした、ヒカリちゃん？」

「なんでもないですよ！ それよりも講評を！」

「あ、ああ。まず、ヒカリちゃんの最大の失敗はヌケニンを意識し過ぎたことかな。3 on 3 なんだからヌケニンが出てくるとは限らないし。それによって全体の戦略が崩れちゃったね。細かい部分についていろいろあった。たとえば、エルレイドへのふういんの指示とかね。他には――」

「最後のデンリユウとリザードンの撃ち合いについては！？」

「あ、ああ。まず、キングラーのにらみつけるの影響でリザードンの防御が2/3倍になっていたこと、オレのデンリユウが防御にプラス補正が入る性格だったこと、それから最後にリザードンがマヒで動けなかったこと。この3点があ的一瞬间に合わさってしまったことかな。正直、からげんきが決まっていたらオレの負けだった。強



「くなったね、ヒカリちゃん」

「強くなった？」

「いや、あたしなんてまだまだだ。」

「あたしなんて、ユウトさんに比べたらまだまだですよ」

「だって、ユウトさんはバトルが始まる前に言ってた、『オレがここに出すポケモンはみな、オレがシンオウ地方に来てから捕まえたポケモン、育て始めたポケモンばかりだ』って。」

「つまり、あたしと一緒に育て始めた、しかも、ユウトさんはあたし以上に旅の途中でポケモンを入れ替えて育てていたから、今日の6体の育成に掛けられた時間は明らかにあたしよりも格段に少ないはず。」

「それに何より、テンガン山のときにように所謂“本気パーティー”を組んでいない。」

「どうしてテンガン山のときのようなパーティーを組まないで、シンオウで育て始めたポケモンばかりでバトルしたんですか？」

「だから、気になって聞いてみた。」

「それで来てたら、あたしなんて本当に鎧袖一触で倒されていたはずだから。」

「ん〜、いろいろあるけど一つはヒカリちゃん、キミとのバトルを楽しめたかったから、かな」

「あたしとのバトルを？」

「そつ。なんせ、オレの持つ知識をほとんど教えた人はヒカリちゃんとシロナさん、キミたちが初めてなんだ。だからさ」

自分の育てた弟子がどれほど成長したのか気になるじゃない？

弟子……か。

「弟子、ですか？」

「うん、そうだね」

そう、か。

まだまだ、違う方としては見られないか……。

まっ、今はまだいいや。

まだ、あたしはユウトさんに並びたてるほどの実力を持ってない。  
ただ、そのときが来たら、告白しよう。  
そう思った。

いや、そう決めた。

\*

お久しぶりです。

オレです、ユウトです。

ヒカリちゃんとの予選も終わり、決勝トーナメントに進みました。  
ただ、進んだはいいんですが、実はヒカリちゃんとのバトルが一番  
白熱したんじゃないかというぐらい、なんだか呆気なく勝ち進んで

リーグ優勝を決めちゃいました。

でも、一つだけですが良かったことがあります。

オレとヒカリちゃんのバトルが話題を呼んだのか、なんだか力押し一辺倒でバトルをするというのは少なくなったような気がします。

尤も、にわか仕込み感がありありだったのですが、非常にいい傾向だなんて思いました。

で、今は時刻は夜半近くです。

明かりもない森の中まで歩いてきたオレとラルトス。

さて、なんでこんな時間にこんなところにいるのかというと、それは表彰式のときのことが原因です。

「のう、ユウト君？」

「なんですか、会長？」

「いい加減リーグに戻らんか？」

「遠慮します」

「と。いうてものう、各地方のリーグからキミのことですんざんせつつかれてのう。ワシとしては何としてもリーグに戻さなきゃならんのだ。ということ、チャンピオンリーグが終わった後でキミを拘束することにした」

なんてやり取りがありました。

(ラルトス、準備はいいか?)

(OKよ)

(よし!)

ということ、夜逃げすることを決意。

居場所を知られるのは面倒なのでライブキャスターはヒカリちゃんに預けてきました(シロナさんとヒカリちゃん宛の手紙も添えてで

す)。

そして、誰もいないことを確認。

いざー!

あばよおー、とつつあん、ならぬ、あばよおー、スズラン島。

「あら、こんな夜更けにどこに行くのかしら？」

うつ。

その声は。

頭上から何やら聞き覚えのある声が……。

「もう！ なに勝手に黙っていきこうとしてるんですか！」

2人分。

「ど、どうもお、シロナさん、ヒカリちゃん」

彼女らがそれぞれのポケモンに乗ってオレに声をかけていたのでした。

「よっ、つとー！」

2人とも着地し、リザードンや、トゲキッスをボールに戻す。

「手紙、読んだわよ」

そして懐からオレがシロナさんに宛てた手紙を取り出す。

「ユウト君、あなたの気持ちはわかったわ。でもね」

「あたしたちに黙って行くことするのは反則だと思っんです」

いや、そこら辺は手紙にしたつもりなんですけど……。

「やれやれ……」

「はああ……」

そう言ったら、海よりも深そうなため息を付かれましたよ。

「で、これからどうするつもりなんですか？」

「とりあえず、シロガネ山に向かうよ。そこでレッドさんに勝ってくる」

「その後は？」

「うーん、あんまり考えてないなあ。実家にいったん顔を出すか、それとも、一度旅した地方をもう一度旅してみるか、あるいは行ったことのない地方、たとえばイツシユ地方とかも行ってみたいなあとは当然、シロナさん、チャンピオンとしてのあなたも倒してみたい」

「あら、私の地位は高くつくわよ？」

「師匠が弟子に勝てないでどうするんですか？」

「弟子は師匠を越えていくものよ？ 昔からのお約束でしょ？」

何という不敵な笑い。

カッコいいですね。

「あの、ユウトさん」

「ん？ どうした、ヒカリちゃん？」

「あかし、あたしもあなたみたいに各地方を巡って旅してみようと思います」

「そつか。なら、どこかでばったり会うかもね」  
「かもじゃないです。会いますよ。あと、これ、あたしたちからの  
餞別です」

そう言っ手渡されたのは、

「これ、ライブキャスターじゃないですか」

しかもヒカリちゃんに『シロナさんに返しておいて』と頼んだやつ  
だ。

「私たちからは一切連絡はしないから、たまにはあなたの方から私  
たちに連絡寄こしなさい。できれば会って、バトルもしたいし、あ  
なたの“ポケモン講座”も聞きたいわ」

「2人にはもう基本的なことは全て教えましたよ。2人はもう、自  
分自身で戦法を探って戦略を立てるという段階です」

「バカね、そういうことじゃないわ。ちょっとこっち来なさい」

そういって腕をひかれて

ッ

ッ

へっ？ 今……

「(うつわっ、ユウッってばー)」  
「今日はこれでカンベンしてあげるわ」  
「ですー！」

オレはボーっとしながら自分の額、それから頬を撫でるように触る、シロナさんのあの柔らかかそうな唇が触れた部分を  
ヒカリちゃんの子供っばいながらもピンク色の綺麗な唇が触れた部分  
分を

「マジ？」

年上も含まれてるのに言葉遣いが普通に返っていました。

「マジよ、マジ。わるい？」

「本気ですよ」

いや、ごめん、ずっと一緒に旅してたけど全っ然気がつかなかったよ。

「（これはエリカって子も望み薄ね）」

「（敵が減るのはいいことですよ）」

なんか小声で2人がこそこそ話してたけど全然気がつかなかった。

（ああ、ごめん、2人とも。そろそろいくわ。こういうのってユウト経験したことないから多分フリーズしちゃってるっばいわ）

「そ。じゃあ、いつかまた会いましょう」

「あたし、あなたと肩を並べられるほどのトレーナーになってみせますー！」

そうしてオレはラルトスに引っ張られながらボーマンダに乗っけら

れて、この思い出深い地方を後にした。

これで、今回の物語はおしまい。

「もう、あたし、キスするつもりなんてなかったのに」

ポーマンダで飛び立ったあの人たちを見送ったあたしたち。

「やれるときにやった方がいいのよ。特に恋に目覚めた女はね！」

やれやれとため息をつきながらあたしは彼からもらった手紙を開いた。

ヒカリちゃんへ

おはよ！

ちよつといきなりで悪いけど、旅に出ます。

ヒカリちゃんには手紙での挨拶になっちゃうんだけど許してね（日が出てからだが見つかる恐れがあるからね）。



理由？

理由はそうだね。

別にリーグの仕事がイヤってわけじゃないんだよね。

それはそれで大切な仕事だし、むしろオレはリーグに戻ったら、今のポケモンバトルの主流を変えていこうと勤しんだりするんじゃないかって思ったりもしてるよ。

たださ、知ってる？

ポケモンは493種類いるって教えてけど、それはカントー・ジョウト・ホウエン・シンオウ・ナナシマに生息してる数だけであって、この世界中で数えると649、いや、700、あるいはそれ以上の数のポケモンが生きているんだ。

そしてそれに伴って新しい技、特性なんかもどんどん見つかった。それに今までに知られてるポケモンでも、新しい技を覚えたり、今までと違う特性を持っていたりすることもあるんだ。

オレはそのポケモンたちに会ってみたい。

そしてゲットしたポケモンたちで、「いかにしてその捕まえたポケモンたちでバトルに勝つことが出来るのか」っていうのをいろいろ試して考えてみたいんだ。

それだけあれば、きつと今までじゃあ考えられないような戦略や戦法だっけきつとできたりするよ。

だから、それを駆使してオレはバトルに勝つ。

『強いポケモン、弱いポケモン。そんなの人の勝手。トレーナーなら、自分の好きなポケモンで勝てるよう努力するべき』

これがオレの信念だからね。

そういや、ヒカリちゃん、トレーナーならいろんな地方を旅してみるといいよ。

自分が見つけた新しい発見とかがあるかもしれないから。

それにいろんな地方を旅してればオレと会ったりするかもね。

そんなときはまたこの前のときみたいな燃え上がるようなバトルしよう！

じゃー！ 元気で！

P.S.

ちよつとした頼みんだけど、シンジ君にオレが教えたことを教授してあげてくれないか。

シンジ君の頼みを途中で投げ出してしまったようなものだからね。

それに人に教えるということは、ヒカリちゃん自身のためにもなるからね。

なんだつたら、ジュン君やコウキ君にも教えてあげてもいいかも。

2人ともヒカリちゃんと幼馴染なんだから、ヒカリちゃんにおいていかれることはライバルとして悔しいはずだからね。

んなワケで一つ頼むよ。

ハアとため息をつきながら綺麗に手紙を折りたたんでしまう。

まあ、あの人の頼みだから引き受けることも吝かではない。

勝負は互いの実力が拮抗していた方がより燃え上がるのだから

## 最終話 予選決勝決着、別れ（後書き）

けっこう強引にメタ感がありますが、これでこのお話は終了です。

いえ、シロナ戦は実はすつごく書きたかったんですけど、30n3  
であれば（シンジ戦で1万4千ぐらい、ヒカリ戦で2万以上）に  
なってしまったので、これで60n6になったら……？（；

A アセアセ おまけに書くのもなかなかハードですし、はたして  
ヒカリ戦以上にうまく書けるかどうかという観点から取りやめまし  
た。

尤も、気力が回復して、かつ筆が乗るようでしたらシロナ戦も書き  
たいと思っています。

今後更新するとしたら、シロナやヒカリに焦点を当てた外伝の更新  
になると思います（しばらく休憩します）、。○  
ボケ〜）。あとは読者の皆様の感想から思い浮かんだネタとかを題  
材にしたものですかね。

イッシュ地方については、少なくともゲームの方の完全版（エメラ  
ルドやプラチナに該当するもの）が出るまで書くつもりはありませ  
ん。

それにしてもなんで最後はこんな恋愛チックになったんだ？おまけ  
にヒカリの成長ものにもなっているし。わからん。

それでは今まで拙作にお付き合いくださりありがとうございました！

外伝1 ヒカリ a few years later (前書き)

休憩するはずなのに出来上がってた。フシギ!

外伝1 ヒカリ a few years later

a few years later

みなさん、お久しぶりです。  
ヒカリです。

あのシンオウリーグスズラン大会からすでに4年ほど経過しました。  
もうすでにあたしは出会った頃の彼の年齢を越してしまいました。  
言っておきますが、年齢は聞かないくださいね。  
当たり前ですよ。

さて、そんなあたしですが、現在ジョウト地方という地方で旅を続けています。

「へえ、32番道路っていうのね」  
「ポチャー」

相棒のポツチャマも一緒です。

そして現在地をポケギアっていう携帯電話みたいなもので確認。

北はさつき出発してきたキキョウシティ。

北西にはアルフの遺跡。

南にはつながりの洞窟があるそうです。

あたしたちはそのつながりの洞窟を抜けてヒワタウンを目指しています。

ちなみにこれ、本当に様々な機能があつて大変便利ですね。

「待つてくださいよー、センサー！」

ちっ！

もう追いついてきやがったか。

「ポツチャマ」

「ポチャ！」

ポツチャマは準備完了なようです。

「センサー、私を置いて行こうなんてヒドイじゃないですか！ あ

あ、愛しのセンサー！」

「ポツチャマー！」

「ギャオオオオオオス！！！」

ポツチャマのハイドロポンプで吹き飛ばされていった変態女はそのまま近くの木に叩きつけられる。

「もう、ヒドイじゃないですか、センサー？」

ええ！？

「ポツチャア！？」

なんであたしたちの後ろにさも平然として突っ立ってんのよ、アンタはア！？

なんで！？

だって、見事にハイドロポンプに吹き飛ばされてったじゃない！

「いやだなあ、センチ！ みがわりですよ、みがわり、私のマリル  
たんの」

んな！？

なんでポケモンの技が人間に適用されるのよ！？

「ハア、愛しのセンチ？」

「ぐえっ」

そういつて抱きついてくるこのド変態。

ぐっ、力が強くて……離せない……！

「ええい！ いい加減にしろこのド変態のレズっ気女！ まとわり  
つくな！ 気持ち悪い！ 離れる、このアンポンタン！」

「ハアア、センチ、いいにおい？ スー、ハー、スー、ハー」

ひええええええ！

気色悪い！！！！

胸元にコイツの息が、生暖かい息が！

「お願い、エーフィ！ 何とかしてええええ！！」

「フィィィ！」

そしてボールから出てきたエーフィ。

「お？ およ？ あらっ？ ちよっ！」

エーフィのサイコキネシスで引き剥がすことに成功する。

「ハア、ハア、き、気色悪かった……」

「アアン、涙ぐむセンセも、ス・テ・キ！」

カチン！

「エ、エーファイ！ サイコネシスでこのバカでヘンタイでゴミ虫以下のチリに等しき存在を振り切りなさい！」

「え？ ちよっ！ センセ、それヒド！？ ってアイタタタタタタタ！ 痛い、痛いです、センサー！ 捻じれてます、捻じれてます！ 人間、何かいけない方向に捻じれてます！」

「あら、ならちようどいいじゃない。正常に戻るかもね！ ピカチユウ、出てきて！」

ピカチユウ様降臨。

「ついでに、電気ショックも加えてあげるわ、感謝しなさいよね！ ピカチユウ、最大威力でかみなり！」

「ちよっ！ センセ！ それ、マジにシャレになってないです！ センセー、お、お助けを……！」

「問答無用！ ピカチユウ、GO！」

「ピ~~~~~~~~カ~~~~~~~~、チュウウウウウウウウウウウウウウウウウー！」

「ウヤヤヤヤヤヤヤヤヤヤヤヤヤヤヤヤ！」

\*

「うう、センセエ、ヒドいじゃないですかあ」



涙目で怒るこの女。

だが、ここで気を許してはいけない。

ここで不用意に近づくとまたさつきみたいなことになるからだ。

「ったく。いつまでネコ被ってるのよ！」

「だってセンサーが私のこと置いてくから」

「アンタがすべての原因でしょうが!？」

ああ、そうそう。

このド変態のことを紹介するのを忘れてたわ。

この女はコトネと言ってワカバタウンに住むウツギ博士の娘さんの1人です。

ウツギ博士にはシロナさんやグリーンさん、ブルーさん、オーキド博士経由で知り合っていたので、カントーとジョウトを結ぶトージョーの滝経由でワカバタウンに立ち寄ったとき、挨拶に行ったんですね。

そのときに知り合ったのがこのド変態。

ちなみにウツギ博士は2人の娘さんをもつパパさんで、姉がゴールドさんの恋人になったクリスさん、で、妹がコレらしいです。

(クリス：クリスタルの主人公ですノコトネ：HGSSの女主人公ですby作者)

ゴールドさんとは幼馴染ですと本人は言っていますが、ゴールドさんの方は、聞いてみたところ、それを頑なに否定。

まあ、この惨状を見れば、ねえ。

ちなみに姉にもひつついてくることが多いらしく、クリスさんは旅立ってから一度も帰ってきてないんだとか。

間違いなくコレが全ての元凶ですね、わかります。

ウツギ博士も頭を悩ませていたそうです。

そしてこのヘンタイもトレーナーとして旅に出たいという年頃になつたらしいのですが、その性癖から見知らぬ人にも発情してしまうことも多く、旅に出せないと悩んでいたとか。

そんなところにあたしが訪ねてきて、ストツパー兼教師役として彼女に随行してほしいと頼まれました（尤も、ストツパーとしての役割は30番道路に住む“ポケモンじいさん”という人から聞きまし  
た）。

そして今、家にヘンタイのいなくなったウツギ博士はクリスマスさんにさかんに帰郷を募っているそうです。

復讐？

とりあえず、カイロスのハサミギロチンから始まって、エーフィのサイコキネシス、ゲンガーのさいみんじゅつ、あくむとかいろいろ考えていますよ。

カイリキーのきあいパンチ連打とかウインディのだいもんじとか、あつ、ウツボットで溶かすつくすのもなかなかおつでいいですね。まあ、次に博士と会ったときが博士の命日です。

旅立ったばかりで知識も経験も全然ない彼女ですが、1つだけ、“1つだけ”、“1・つ・だ・け！”、良かったところがありました。

「おいでー、マリル。あいた！こら、チコリータ！勝手に出てきて飛び乗るのはやめなさい！って、ジグザグマ！あなたもよ！んもつ、しょうがないなあ。あゝほらほら、みんないい子だね。大好きだよ」

ポケモンたちには無上の愛情を持っていることです。

マリルはもともと彼女が持っていたそうですが、チコリータは旅立つときにウツギ博士からもらい、ジグザグマは旅の途中でゲットしたものです。

それがあんな風に彼女のことを慕っていて、彼女も寄ってきたポケモンたちをやさしく抱いてあげています。

ポケモンたちもそれが嬉しいのか非常に幸せそうな顔をしています。

『強いポケモン、弱いポケモン。そんな人の勝手。トレーナーなら、自分の好きなポケモンで勝てるよう努力するべき』

あたしが口にせずとも、この言葉はいろいろな地方のトレーナーの心に息づいている。

この子もそうだし、今まで出会った様々なトレーナーにもそれを感じることが出来ます。

こういうところである人のことを思い浮かべることも出来たりします。

尤も、変化はそれだけではなく

「あなたはシンオウ・カントー準チャンピオン、そしてナナシマチャンピオンのヒカリさんですね？」

「あなたは？」

「ワタシはナナシマ地方3の島出身のフウコと申します。エリートトレーナーをしております。ワタシはあなたに勝負を挑みたい。よろしいですか？」

「うん、いいよ！一応自己紹介しておこうか、あたしはシンオウ地方フタバタウン出身ヒカリ！」

「ハイ。ルールですが、使用ポケモンは3体のシングルバトル、道具の使用はなしだけど、持たせるのはあり、持たせる道具の重複はなし、でよろしいですか？」

「うん、いいよ！　じゃあやるつか！」

“ 道具を持たせる ”

これはポケモンが自力で使えるものに関してポケモンに持たせて使うことはあり、というものだ。

各地方のチャンピオンが動き、リーグ、それからコンテストの方が一体となって宣伝し、この4年で浸透してきたことだ。

尤も、まだまだメジャーとは言いつらい部分があるため、「その道具のチョイスはどうなの？」というのもあつたりするが、それは仕方のないことだろう。

コトネちゃんには見学ついでに審判をしてもらうことにする。

これはあたしに挑まれた勝負だし、見取り稽古っていうのも大事なことからね。

「では、いきます！　いでよ、ゴローニャ！」

「あたしの一番手はカビゴン！　あなたよ！」

ゴローニャにカビゴンが出揃う。

「先手はいただきます！　ゴローニャ、ロックカット！　そしてま  
るくなる！」

こんな風に、攻撃技だけでなく、補助技を使うトレーナーが非常に  
多くなった。

尤も、まるくなるはこの後の連携に繋がることだろう。

「カビゴン、はらだいこ！」

「はらだいこですか。たしか体力は半分まで減る。ならばゴローニ  
ャ、ストーンエッジ！」

ころがるは取りやめたらしく、タイプ一致物理技で急所に当たる確率が高いストーンエッジがはらだいこ中のカビゴンに決まる。

しかし、カビゴンは元々（物理・）特殊耐久が高く、並の攻撃でははらだいこをしていようととも簡単には落ちない。

さらにあたしのカビゴンはのんき（防御 素早さ）で防御とHPに努力値を極振りして耐久を上げているから、ゴローニヤのタイプ一致ストーンエッジでも落ちることはない。

ちなみにあの人も、あたしと同じ型のカビゴンを持っています（昔、シロナさんと対戦したとき、はらだいこ ねむる ねごと ねごと と 他の物理技 ……（体力が減ったら）ねむる ねごと ねごと

他の物理技 ……といった感じで6タテし、『まさに鬼ね』とシロナさんをして言わしめてました）。

尤も、あたしがカビゴンの性格を見極めて、その戦略をマネをしただけなんですけどね。

「カビゴン、ねむる！」

「くっ！ かたいいし持ちでも落ちませんでしたか！ ならば、ゴ

ローニヤ、きあいパンチ！」

「ねごとよ、カビゴン！」

かたいいしとは岩タイプの技を1・2倍にアップさせる技。

だけど、あたしの予想通りカビゴンはダウンせず、ねむるで全回復。そこで相手はきあいパンチを指示。

ゴローニヤのきあいパンチがカビゴンに迫る中、カビゴンはねごとによりれいとうパンチを引き当てた。

そして、それが、クロスカウンター気味に決まる。

「ゴ、ゴローニヤ、戦闘不能です！ カビゴンの勝ち！」

カビゴンも効果抜群のダメージを負ったが、耐久を上げているし、

もちものにはたべのこし（一定時間ごとにHPが1/16回復）を  
持たせている。

「お疲れさま、ゴローニヤ。次はこの子です！ いでよ、ナツシー  
！」

今度は草・エスパータイプのナツシーか。

「ナツシー！ 相手の体力はかなり少ないはずです！ リーフスト  
ーム！」

リーフストームが眠っているカビゴンに炸裂する。

「やった！ これで！」

たしかに、きあいパンチのおかげでカビゴンの体力はかなり減って  
いる。

でもリーフストームは特殊技。

カビゴンの特防はもともと相当高いし、HPに極振りしているから、  
物理アタッカーじゃないとなかなか落ちないよ？

「カビ？ カビカビ」

「なんですって!？」

起きだして、きよるきよるとし出す相手のエリートトレーナー。

「カビゴン、もう一度ねむって、ねむよ」

「カ〜ビ〜〜…ZZZZ」

そして、ねむって体力が満タンまで回復。

そしてねごとであくびを引き当てた。

「あくび!? 眠らされてはたまらない! 戻って、ナツシー!」

あくびの効果も知られるようになりました。

というか、4年前のシンオウリーグスラン大会であたしやあの人が使った技の数々(あくびやアンコール、バトンタッチ、果てはカウターシールドや必中技を必中技で落とすというものまで)は、あのときから爆発的に有名になりました。

「ワタシの最後のポケモン! 出番です、マッスグマ!」

マッスグマ。

やはり4年前から一躍人気が出てきたポケモンですね。理由はもはや言わずもがなといったところでしょうか。

「マッスグマ! カビゴンが未だ寝ているうちにはらだいこ!」

マッスグマと言えばはらだいこ。

もはや、マッスグマの代名詞的なものです。

「いいわよ、マッスグマ! 『くいしんぼう』オボンの実で回復よ!」

はらだいこを決めた段階できのみを食べてるから特性『くいしんぼう』って判断したのかもだけど、回復系のきのみは体力半分以下なら食べるからね? (『くいしんぼう』は体力半分以下になっただけもついていたきのみを食べる特性)

まあ、『くいしんぼう』マッスグマだったら、カムラの実(体力1/4以下で使用、素早さ1.5倍(1段階)アップ)の方がメジャ

「な戦法な気もするけど、これもいいかもしれない。」

「カビゴン、ねごとよー!」

「だけど、ここで出た技はなんとゴーストタイプの技のシャドーボール。」

「当然、ノーマルタイプのマッスグマには効果がない。だが、ここでカビゴンが目覚めます。」

「よおし、カビゴン、きあいパンチから!」

「カ〜ビ〜!」

「マッスグマ、避けなさい!」

「グマッ!」

「マッスグマは持ち前のスピードできあいパンチを避けようとするのだが、」

「横に転がってマッスグマにのしかかりなさい」

「カ〜ビ〜!」

「マッスグマ!」

「しかし、マッスグマは避けた先にカビゴンがのしかかってきたため、避け切ることが出来ず、のしかかりを食らう。」

「マッスグマ、戦闘不能です! カビゴンの勝ち!」

\*



それから、ナツシーが出てくるも、ナツシーは特殊アタツカー的な性質なため、カビゴンを落とすことが出来ず、逆にこちらは、かえんほうしゃでナツシーが怯んだところをギガインパクトを決め、勝負はあたしの勝ちとなった。

「ハア、やつぱ、センサーはすごいねえ。私もあなるかなあ」

なんてことを言いながらあたしの隣を歩くコトネ。

「なるわよ。なんたってあたしだってなれたんだし」

「いや、それチャンピオンや準チャンピオンであるセンサーが言ってもあんまり説得力ないですって」

そんなことはない。

あたしはあの人の教えに従って修行してなんとかここまで

ナナシマ地方ではチャンピオンになり、カントー、シンオウではチャンピオンリーグには優勝するもレッドさんやシロナさんといったチャンピオンには勝てず、あたしも四天王にはならなかったので、準チャンピオンという称号をもらいました（タマランゼ会長には「ユウト君の弟子とはいえそこまで似ずともよかるうに」と嘆かれましたけど）

来ることが出来た。

その教えをあたしはこの子に今教えている。

あたしだってなれたんだから、きっとこの子も将来は

「にしても全国チャンピオンでしたっけ。センサー見てると、正直その人は化け物かなんかですかって思っちゃうんですけど」

そう。

あの人は、

あたしに教えを授けてくれた人は今そう呼ばれている。

あの人が旅してリーグに参加した地方は全てあの人がチャンピオンになるからだ。

旅した先の地方は全て制覇する。

だから、全国チャンピオン。

カントーやシンオウも制覇した。

尤も、未だに全て即刻辞退しているみたいだけど。

とにかくあの人に追いつこうと思っても、どんどんあの人は先に行ってしまう。

負けたくない。

負けたくないから、いつしよにあの人の隣を歩いていきたいから、あたしはもつともつとたくさんの地方を旅して修行する。

そしていつか

「あ、ポケモンセンターが見えてきましたね。今日はここで一泊しません？」

空は茜色に染まっている。

今からつながりの洞窟を抜けてヒワダタウンに行くとなると、今日の満月が東から西の空に向かってしまっただろう。

つながりの洞窟には最深部の方にも用があることだしね。

あたしはコトネの提案に頷いた。

もちろん部屋は別室にもらった。

\*

夜

「うへ、うへうへ、テンテー。えへ、えへえへ」

怪しい笑みを浮かべながら照明の落ちた廊下を歩く人影があった。その人影は目的の人物が寝泊まりする部屋の入口に着いた。

「えへへ、テンテー、今愛しのコトネたんがあなたの許に参りますよ〜?」

だが、彼女は近づく気配に気がつかなかった。

「ニド、ニドー!!」

ニドラン のどくづき!

「ハムフラビ!!」

コトネの急所に当たった!

「フィィィ!」

エーフィのサイコキネシス!

「ちよっ! 待ってええええええええ……………!!」

コトネは外に叩きだされた!



外伝1 ヒカリ a few years later (後書き)

おかしいな。なぜ休憩していたはずなのにキーボードにタイピングしているんだ？

そしてどうしてコトネはこんな変態になったんだろう？なぞすぎる。

ちなみにシンオウではシロナ・ヒカリはほぼ別格扱いされています。シロナには1人以外は誰も勝つことが出来ず、ヒカリも、シロナを合わせたその2人以外には負けることは一切なかったのです。

それからブルー、シルバーは裏設定として四天王を辞めています。ジュンやコウキ、シンジと合わせて彼らがどこに治まったのかはいずれ書けたら、なんて思っています。

## 外伝2 シロナ アルセウスとの邂逅

ハクタイシティ

歴史を重んじる気風が漂う町。

しかし、近年は高層ビルなどが軒並み建ち並び、街並みから歴史を感じることは難しくはなっている。

そんなハクタイシティの町外れの一角。

そこにはシンオウ地方伝説のポケモンの1体、パルキアを象った銅像とともに一つの施設がある。

シンオウハクタイ大学

ここは全国にある様々な大学の中で、各地方の歴史とポケモンとの関わりにおける研究において、全国的に有名な大学である。

ちなみにこのハクタイ大学は最近、それ以外の分野にも裾野を広げようと予備学校も設置し、様々な分野で活躍するであろう研究者の育成にも力を入れている。

尤も、本業とも言える歴史分野についても抜かりはない。

「 であるからして 「

その講堂の一つ。

そこで後ろに大きなプロジェクターを背負いながら熱弁を奮っている一人の女性がいた。

金系のような長髪を柔らかく後ろに垂らし、それは腰下までは易々と届いている。

シンオウ地方は比較的寒冷であり、ハクタイシティはキツサキシテイほどではないが、テンガン山から寒冷な空気が流れてきて、キツ

サキシテイの次くらいに気温は低い。

だが、室内はその限りではないのだが、その女性は黒のコートを羽織っている。

もはや、それが彼女のトレードマークであることを主張していた。

その女性の名は

「シロナさん、そろそろ次の」

「ああ、申し訳ありません。つつい熱くなってしまう。では、

」

シンオウ地方チャンピオンマスターとしての側面も持つ女性、シロナだ。

\*

皆さん、お久しぶりです。

私はシンオウチャンピオンマスターのシロナです。

現在私はチャンピオン、それから考古学者の一面を持っていますが、度々いろいろな施設で“講演”というようなものを行っています。

昔は“チャンピオンとして”、というのが多かったのですが、私の発表した論文が学会で認められ、世界的な賞を取ったからというもの“考古学者として”という依頼が多くなってきました。

ちなみに大学を始め、様々な研究機関が私に籍をおいてほしいと言ってきたのですが、断りました。

私も誰かに似てきたのか、一つの場所に縛られるというのもあまり好きではないので。

さて私がここに立っている理由。  
それは4年前の彼との出会いがすべての始まりでしょうか。  
彼との出会いが私の中のポケモンに対する認識、知識、考え方、ほ  
ぼ全てと言ってもいいものを変えました。  
そして同時に考古学者としての悲願もギンガ団の思惑があったとは  
いえ、相見えることもできました。  
そしてさらにもう一つ、

「では世界の根元というものの話をしましょうか」

私は彼のおかげで歴史の“始点”というものにも立ち会えることが  
できました。

\*

「おもしろいもの？」

彼から連絡が来たのは実に半年ぶり。  
たまには連絡しろとは言ったもののこれほど連絡してこないとは。  
喜びと同時に怒りのボルテージも膨れ上がっていく。

「私たちを放っておいてずいぶんなご身分ね」

私の発した言葉はつつけんどんな感じだったと思う。

【うっ、その辺は反省してます。ただオレ、シロナさんに喜んでほ  
しくていろいろ探し回ってたんですよ】



私のため

私のため

“私のため”

ちょっと、いや、結構舞い上がってしまった。  
年下の子の言葉一つに「喜」憂するなんて

【詳しいことは会ってから話します】

「そう。わかったわ」

【それからヒカリちゃんも呼びます】

「……ふうん」

微妙に今の言葉にカチンときたのだが、彼の次の言葉でそれは吹っ飛んでしまった。

【シロナさん、シロナさんのポケモン。実力が最強のメンバーを6体選出してから来てください】

\*

私とヒカリちゃんは彼の指定してきた、テンガン山の奥に佇む、やりのはしらにいた。

やりのはしら

ギンガ団ボスアカギがシンオウ地方の三湖にいる伝説のポケモンたちの力を使い、時間の神ディアルガ・空間の神パルキアを呼び出し、新世界を創造させ、世界の破滅を招こうとした場所。

ただど感じていた。

この場所はそれだけではなく、もっと別の重要な何かを意味しており、何か、言葉は悪いが、得体の知れないものが存在している。

「二人ともお久しぶりです」

そう、この場所に最後に現れた彼を見て、そう思った。

\*

「あの……」

ヒカリちゃんが言いよどむのもわかる。だって

彼の隣にはラルトスの他にものすごい威圧感を放つ得体の知れない存在が

いや

これは

まさか

ポケモン……!?

『何者だ、この者たちは？』

頭部は人間よりも明らかに大きいが二足歩行で尻尾があつて全身が白っぽい、得体の知れない存在のうちの1体が喋った。

「彼女らは助っ人さ」

『我らだけでは不服と申すか？』

「そんなんじゃないよ。仲間は多い方がいい。今回の相手はヤバいから」

「（アンタ、さっきからそうユウトが説明してるじゃない、戦力は多い方がいいって。このポケモンたちのことを受け入れたんだから、今更人間の一人や二人で文句言うんじゃないわよ）」

『むう』

その彼とラルトスはその得体の知れない存在と普通に会話している。

「ユ、ユウトさん、説明、してもらえます？」

「おお、そうだ。二人には紹介しておかないと」

そう言つて彼が紹介をし始める。

「二人の右から見てホウオウ、ルギア、グライドン、カイオーガ、レックウザだ。あ、オレたちと今話してたのがミュウツーね」

私、いつから夢を見ていたのかしら。

頬を抓つてみる。

いたい。

これ、現実？

これが現実？

コレガゲンジツ？

「ま、まさか……伝説のポケモン……！？」

「そつ。そのまさかだ」

ヒカリちゃんの驚愕の問いをよそに彼はあっけらかんと答える。

彼の講義を思い出す。

ポケモンの中で無類の強さを発揮し、そのポケモンの前に敵はなし。捕まえにくさも他のポケモンとは一線を画す存在。

それが“伝説のポケモン”

私たちが彼にそれについて教わったうちのシンオウを除く各地方を代表する伝説級のポケモン  
それが今私たちの目の前にいたのだった。

「この伝説のポケモンたちは全てユウトさんのポケモンなんですか？」

「いや、今は違うというか、捕まえてから逃がした」

「逃がしたあ？」

「ああ。こういう伝説のポケモンっていうのはそこにいるポケモンたちからも崇拜の対象になっている場合もあつたりするからオレが勝手に連れて行くっていうのもね。あと強過ぎるポケモンっていうのはいろいろなトラブルを招きやすいんだ」

そういえば昔ポケット団とかいう組織があつて、その組織は伝説のポケモンを狙っていたとか何とか。

尤も、今は解散しているが、しぶとく残党たちが再起しようと奮起しているというのも聞いたことがある。

今はそれらは聞かなくなっただけど、万が一ということもある。

「相変わらず、用心深いのね」

「いや、シロナさんが用心しなさすぎなだけだから。それに今ではこいつらはいいい友達みたいなものですよ。困ったときはお互い助け合っつていうね」

『我を頼ったのは今回が初めてだったかな』

『そうだな。今まではこちらの頼みごとが多かった。だから、君の頼みごとについては快く協力しよう。しかし、そろそろ説明してくれないか。私達伝説のポケモンと呼ばれるポケモンをこれほど集めて、君はいったい何をしようとしている？』

ルギアというポケモンが話の核心を聞きたいと促す。

ちなみにミュウツーもルギアも別に口が動いているわけではない（ただ、この2体はエスパータイプを持つので、ラルトスと同じくテレパシーの一種なのだろうと私は推測している）。

それを問われた彼は詩を朗読するかのように次の一節を詠う。

初めにあつたのは

混沌のうねりだけだった

全てが混ざり合い

中心に卵が現れた

零れ落ちた卵より

最初のもものが生まれ出た

最初のもものは

二つの分身を創った

時間が回り始めた

空間が広がり始めた

さらに自分の体から

三つの命を生み出した  
二つの分身が祈ると  
「物」と言うものが生まれ  
三つの命が祈ると  
「心」と言うものが生まれた  
世界が創り出されたので  
最初のもは眠りについた

「『始まりの話』ね」

シンオウ地方に伝わる伝説のうちの一つ。  
ギンガ団、そしてギラティナのことがあってから、私はこれについての論文を仕上げているために、検証を続けている途中でもある。  
この神話の中の“2つの分身”はディアルガとパルキア、“3つの命”はアグノム、ユクシー、エムリット、そして“最初のもの”というのがこの世界を生み出したポケモン、創造神アルセウス。  
尤も、この神話は事実が欠けていて、アルセウスは2つではなく、3つの分身を生み出して、それがこの世界の裏側に存在する“やぶれた世界”にいるギラティナである。

「ジョウトにあるシント遺跡、それからホウエン地方ルネシティの近くにはまったくその存在が知られていない海底遺跡があるので、その2か所に行ったときのことです。そこでわかったことなんです。実はこのやりのはしらはある目的のためにオレたち人間とポケモンの祖先が創り出したものらしいんです」

ジョウト地方。

ポケモンにまつわる遺跡や伝承が数多く残る歴史的な地方で、建造物も古風なものがよく見られる。

私もフィールドワークで何度か出かけたりにしていた。そしてその“誰にも知られていないという海底遺跡”

「あなたはどうかやってその海底遺跡に行くことが出来たの？」

「カイオーガに案内してもらったんですよ。カイオーガが住む“うみのどうくつ”にほど近い場所でした」

うみのどうくつは聞くところによれば入口が複数箇所あり、それぞれがランダムに口を開けるのだという謎の洞窟。

尤も、この子ならその不可思議な洞窟に辿り着いたとしてもなんらおかしいところはないと感じさせてくれる。

でも

「いったいどうやってそんなことを？」

彼は考古学者でもなんでもない。

彼はただの、というのには大きな語弊があるが、ポケモントレーナーだ。

いったいどうやってそれを知ることが出来たのか。

「アンノーンです」

「アンノーン、ですか？ あの前ざめるパワーしか覚ええない、あのエスパークタイプの？」

彼の講義の中で聞いたことがある。

アンノーン。

ヒカリちゃんの言うとおりのポケモンで、めざめるパワーしか覚ええないポケモンなため、残念ながらバトル向きとは言い難い。

しかし、その不可思議な存在から極めて謎の多いポケモン。

「ちよつとここで“臨時ポケモン講座”を開きましょうか。テーマはアンノーンについて。二人とも、アンノーンって実は何種類もいるんだけど何種類いるのか知ってます？」

遺跡とかに行くと壁画として刻まれていたりするアンノーン。  
たしか様々な種類がいた。

「18種類かしら？」

「20とかですか？」

「残念。28種類です。もっと詳しく言えば、A～Zまでのアルファベット26文字、というか26種類と『!』『?』の2つを合わせて28種類です」

!?

言われて初めて気がついた。

たしかによく見れば、アンノーンって

そしてアルファベット26文字ということは、それを並び替えれば

「まさか……ローマ字!？」

「正解です。これをアンノーン文字って言います。これはおそらくどこの遺跡に行っても見ることが出来ます。過去の人々はこれを文字代わりに使っていたということなのでしょう」

なんて、なんてこと……!?



こんな大発見をわずか20にも満たない子が発見するなんて!?

「だいぶ本題から離れてしまったので戻りましょう。このやりのはしらはそのシント遺跡とその海底遺跡にあったアンノーン文字の一説によるとある目的のために構築したそうです。その目的とは」

創造神アルセウスをこの世界に降臨せしめるため

「オレはこれからここにそのアルセウスを呼び寄せます」

開いた口がふさがらないとはきつとこういうことを言うのだろう。

アルセウスは『始まりの話』にある伝説のポケモンたちを生み出し、そして彼らがこの世界を創り出した。

アルセウスは云わば何もかもを生み出した神という位置づけに存在する。

しかし

『なるほど。全てを生み出した神というわけか。ならば、ここにそれぞれ“神”とも呼ばれることもあるポケモンを集めたのも納得がいく』

『我も、いや、様子を見るに我らは皆興味をそそられたといったところか』

『そうだな。私も全てを生み出した神とやらに会ってみたい。おそらく戦うことにはなるだろうがな』

『人間が“最強”を目指すために創り出した我の力がどこまでその神とやらに通用するのかというのをはかるのもおもしろい』

ルギアやミュウツールの言葉通り、伝説のポケモンたちは臨戦態勢を

整えている。

というか、ちょっと待ってほしい。

「あなたたち、戦うことが前提なわけ？」

『戦わないというのはおそらくムリな話だ』

『我らはポケモンであり、生き物である。生き物ならば仲間でもないものに対し、争わないという道理はない。我らとて戦わずしてユウトと友誼を交わし合ったわけではない。もちろん、例外はあるがな』

「だけど、今回は戦うのは最後の手段だ。一応戦わなくても済むよう手段を構築してきた」

尤もそれは後のお楽しみということにして、と言いつつ、彼はバツクから奇妙な形をしたものを取り出した。

「それ、何ですか？」

「ん？ これはねえ」

ヒカリちゃんの手を耳にしつつ、彼は地面の上に熱心な視線を送っている。

「……ん？ こいつかな？ ああ、コレっばいな」

そう言っただけで彼は地面に座り込み、その周辺の砂を払っている。

「これは天界の笛って言ってアルセウスを呼び寄せるためのアイテムなんだ。さっき話に出たその海底洞窟で拾った。そして、この天界の笛をやるのはしらのある特定の場所で鳴らすとアルセウスへの道が開かれる。それがここ。ヒカリちゃん、見てみ」

ヒカリちゃんの後に次いで私も彼の指差すところをみると何やら笛の絵?のようなものが描かれている。

「さて、じゃあ今からこの笛を吹くよ。みんな準備はいい?」

ここで否と答えた場合、きっと空気読めよと言われることうけあいだろう。

\*

「これは……!?!」

思わず、言葉がこぼれ落ちてしまった。

いや、この場にいる1人を除いて人もポケモンも皆がある感情を覚えていた。

『不思議だ。私達のように超能力のようなものではない』

『ごく自然にある。まやかしなどではない』

ルギアやミュウツーが言うにはおかしなところは一切ないらしい。

「透明な……階段……!?!」

そこに現れたモノ。

それはやりのはしらのさらに上に行けとでも言うような、透明で先が透けて見えるのだが透明でないものが連なり、このやりのはしらからさらに上に向かって歩けとでも言いそうな、階段。

それが笛の絵が描かれた部分から上に向かい、伸びていたのだった。

このやりのはしらはテンガン山の頂点に位置していると言っても過言ではない。

シンオウ地方ではテンガン山のことを『シンオウ地方を2つに分ける山脈であり、シンオウ地方の“屋根”である』とも言われている。実際、山頂付近は万年雪に覆われ、テンガン山の東と西では気候もポケモンの生態も異なる。

そのテンガン山山頂のやりのはしらからさらに上に、それこそ、やりのはしらに立てられている大理石の柱は先が見えないのだが、それよりもさらに上に向かって伸びている階段は、まさに“天にも伸びていきそう”な印象を受ける。

「創造神が降臨すると言っているにはまさにうつつとつけた感じがしらね」

「まあ、そうですね。じゃあ行きましようか、アルセウスの待つ

」

始まりの間へ

外伝2 シロナ アルセウスとの邂逅（後書き）

アルセウスとの邂逅までいかなかった……。そしてハウエンの海底遺跡はオリ設定です。

### 外伝3 シロナ アルセウスとの邂逅

「この階段不思議ですねえ」  
「そうね」

私は彼女の言葉に同意しつつ、上から聞こえてくる喧騒を無視して、振り返って後ろを見てみる。  
グラードンとカイオーガ、レックウザが何の疑問も持たず、ついてきていた。

グラードンもカイオーガもレックウザも相当の体重（一番軽いレックウザで200kg程度、グラードンなんか1t近く）があり、今それが階段全体でなく、たった一つの段に掛かっている。  
宙に浮いている不安定なもののだが、崩れ去るという気配は一切見えない。

そしてそこから更に視線を下にずらす。

「うわっ、見てください、シロナさん！ 下があんなに小さくなっています！」

「10階建てのビルの高さぐらいは上ってきたからね。でも私が見上げると同時にヒカリちゃんもそれに倣う。そして思った。」

「まだまだ先が見えないっていったいどうなのよ？」

下にあるものはだいぶ小さくはなったが、上を見てみると下から伸びている柱と共にまだまだ延々とこの階段は続いている。

「どの程度続くのか聞いてみたいところなんだけど」  
「肝心のユウトさんがアレですからね」

そして上を見上げると同時に喧騒の原因が視界に入り、私たちはあの子の意外な一面に苦笑いした。  
その一面とは……

「ほっ、本当に大丈夫なんだろうな!？」

「(ユウト! いい加減にしてよ! その質問何回目!? まったく、ボーマンダに乗るときは平気なのにどうして今回はそうかわけよ!?)」

「落下する可能性のある高いところは大っ嫌いなんだよ!」

「(だから、わたしが落っこちないように誘導してるでしょ! しかもわたしがわざわざ、下が見えないようにユウトの目押さえしてるでしょ!?)」

「それが怖いんだよ!」

「(じゃあどうしろって言うのよ!? わたしが手離したら、ユウト座り込んで、そしたら艇子でも動かなくなるでしょ!?)」  
聞いての通り。

彼、高いところが苦手みたい。

落ちる可能性が微塵もないところ(展望台とか飛行機の中とか)なら平気らしいけど、ここはそんな風になっていない。

足を踏み外せば真逆様なヒモなしバンジーがようこそと手を広げて待っている。

尤も、踏み外そうにもかなり階段自体に横幅があり(グライダーやカイオーガが横に並んでもまだまだ悠々余裕がある)、かなり意図的にやらなければ不可能。

後は下が透けて見えるところとかも恐ろしいのかもしれない。

ということ、ラルトスが彼の目を塞ぎつつ、彼は這ってこの階段

を上っている。

尤も、目が見えない状態なら、余計怖いんじゃないかという気もしなくはない。

「うう……帰りたい……」

「（みんなユウトのワガママに付き合ってくれてんのよ！）」

「ルギアああ、オレを乗っけて上へ運んでくれえええ……」

『そうしてやりたいのも山々だが、どうやらここは妙な力が働いてそれが出来ない。飛べるなら、私もホウオウもレックウザも、それからミュウツーだってわざわざこの階段を歩いて上ってはいない』

「は、はやくうう、始まりの間ああ……」

ワケの分からない呻きが響き渡った。

\*

「……は……？」

ようやくと見えた終点に全員が駆け足気味に上り詰め、そして着いた場所。

そこはキラキラ光る結晶のようなもので覆われた広間だった。

「ここが“始まりの間”、なんですか？」

ヒカリちゃんという言葉と同時に全員の視線がある一人に集まる。その彼は先程までの醜態ぶりはどこかに消え失せていた。



「おそらく間違いな、ん!？」

彼の様子から全員が彼の視線の向かう先を見つめる。

!?

その瞬間、全員が驚きに満たされる。

『ぬっ!』

『みな、気をつける!』

伝説のポケモンたちは臨戦態勢を整えるのが見てなくてもわかった。でも、私は、いや、私もヒカリちゃんもそれができなかった。

\*

「これが……これが……創造神……アルセウス……!」

目の前に突如として降臨した存在。

創造神アルセウス

その存在に私たちは圧倒されていた。威圧、迫力、威厳、尊厳、何もかも。何もかもが全てを圧倒していた。

『妾を呼び出せしものよ』

響き渡る声は老婆のようなしわがれ声だった。

それがその存在感と合わさって、より一層の威厳に満ち溢れる。しかし、そんな中1人、いや1人と1体がアルセウスに歩み寄る。

『妾を深き眠りから醒ませしすものよ。妾の探し求むるものは見つけること叶ったのか』

アルセウスの探し物？

いつたいなんのことが。

皆目見当がつかない。

「ラルトス」

「(ん)」

しかし、彼はラルトスに何かを頼むとラルトスがサイコキネシスを使い始める。

それは彼のバックに作用し、そして中から何やら色のついた半透明な板のようなものが宙に浮かび上がり始めた。

1枚、2枚、3枚

まだまだ浮かび上がっていく。

『ユウト、それは何だ？』

私たちの心情をルギアが代弁してくれた。

「後で説明する。それよりみんな、まだ戦わないでくれ。交渉が終わるまで……もう少し」

『何ともないのだな』

「ああ。少なくともオレの用が終わるまでアルセウスは動こうにもあまり動けないハズ」

動こうにも動けない？

本当にサツパリだ。

意味が分ければ、私も何か手伝えたこともあるのかもしれなかったが、これでは本当に、ただ彼の為すことを見守るばかりだ。

奏功しているうちに板のようなものが1、2、3、……合計で17枚、アルセウスと彼らの前の空間に浮かび上がっていた。

色は白っぽいものから水色、薄緑色、橙色、果ては紫や黒といったものまであった。

尤も、黒と言っても真っ黒などではなく薄い、かといって、灰色などではない、薄い黒。

何せアルセウスがその板を通して透けて見えるくらいなのだ。

あんなものは初めて見た。

というより、光の屈折などからアレは現実的にあり得るものなのかも聞いてみてしまいたくなる。

「シロナさん」

「ん？ なに？」

「あの色ってなんだかポケモンのタイプをイメージしません？」

「……つまり？」

「例えばあの薄緑は草タイプ、橙色は炎タイプとか」

すると白がノーマルタイプ、黄色が電気タイプを表す

「なるほど、だから17枚あり、それぞれに色がついているわけね」

「どういうことですか？」

「17というのはポケモンのタイプの種類よ。創造神アルセウス、

つまり、世界、そして人間やポケモンたちの歴史の始まり。更には、それらの祖先と言い換えることもできる。あのアルセウスというのはポケモンたちが持つタイプの全てをその遺伝子の中に持っているのよ」

そんな話をしているうちにその板、いえ、何だかダサイからプレートと言ひ換えましょうか。

そのプレートが宙を漂いながら、アルセウスを取り囲み、アルセウスを中心に回り始める。

そしてキラツと一瞬光ったかと思うとそれらはあつという間にアルセウス自身に飲み込まれた。

『ふむ、妾の身体の一部、確かに受け取った』

「いえ、それが昔からの約束なのでしょう？」

『うむ、確かに妾は遙か太古に彼の者たちとそう契った。だが、人間もポケモンもそう永くは生きられない。お前は単に妾と彼の者たちとの約定を果たしたに過ぎない。だが、世界に散らばってしまったこれらを集め、妾の許に戻したのだ。そしてこれで妾もまた生き長らえる。そういう意味でお前には礼を言おう』

「いえ、助けられそうなのに、このままあなたが死ぬということにオレは納得いかなかっただけです。それにあなたまだ5000年くらいは余裕で生きられますよね？」

『そんなものは妾にしてみれば刹那にも劣る時の流れだ』

「ですよね〜」

『お前には世話になった。一つ褒美をやるう。なんならお前を元のせ「失礼ながら」？』

「お話を遮り、申し訳ありません。しかし、オレはこちらも十分楽しんでおりますので、その必要はありません。その代わりなのですが」

\*

「そうだった感じで私はかの“全国チャンピオン”や多くのポケモンたちの手を借りてアルセウスに会うことが叶いました」

ここで私はふうと息をつき、手元にある水の入ったペットボトルを一口啣る。

喋りっぱなしって結構疲れるのよね。

あ、ちなみに彼の言ったシント遺跡や海底遺跡云々という事柄については、目立つのが嫌いという彼の性格と彼の許可から、彼の発見は一応私がしたということになっています（ちなみに私もその後カイオーガを紹介してもらい、海底遺跡には幾度も足を運びましたよ。それから、伝説のポケモンというのはポケモンハンターなどの密漁者に情報を掴ませないということで、いろいろ弄っています）。そして、彼がアルセウスに願ったのは

「神話・歴史研究者としてのシロナに歴史の語りをしてほしい」

というものでした。

歴史の真実を知るといふのは、歴史家として、『一生かかっても解き明かすことは難しい。されどそれが歴史家の夢』というものでした。

「ほったらかしにしてた分のプレゼントです」

なんて言ってくれたので、私は二重の意味での嬉しさと悔しさを味わいつつも、彼の厚意に素直に甘えました。

その後、私はこのやりのはしらと始まりの間に足繁く通い詰め、アルセウス、そしてディアルガ・パルキア・ギラティナ・アグノム・ユクシー・エムリットの6体にも話を伺い、彼らが示すシンオウ各所を巡ってその話を裏付ける証拠を見つけ、そしてそれらとシンオウ地方の『“真の”始まりの話』についての論文で、世界的な賞を取る事が出来ました。

神話についてですが、私の説が本物の神話となり（創造神アルセウスやギラティナが保証しているので）、元からある“始まりの話”は当時の人々の見解をうかがうことのできる、歴史的資料的価値が高いということの後世に残していくことになってます。

「歴史の始まりからの話は皆さんもスクールや大学で学んできたことですが、一応簡単におさらいをしましょうか」

初めにあったのは

混沌のうねりだけだった

全てが混ざり合い

中心に卵が現れた

零れ落ちた卵より

最初のものが生まれ出た

最初のは

二つの分身を創った

時間が回り始めた

空間が広がり始めた

さらに自分の体から

三つの命を生み出した

二つの分身が祈ると

「物」と言うものが生まれ

三つの命が祈ると

「心」と言うものが生まれた  
世界が創り出されたので  
最初のもは眠りについた

「この世界が創り出された際、一度アルセウスは眠りについたのだ  
そうです。しかし」

生命の誕生したこの星。

そこには人間やポケモンたちが息づいていた。

しかし、その星に、その星の質量・大きさ共に数倍にもなるほどの  
超々巨大隕石、いや、もはや隕石というのもおこがましいかもしれない、  
それが迫っていた。

人間やポケモンたちにそれはどうすることも出来なかった。

だから彼らは今一度、創造神の復活を望んだ、その危機を退けても  
らうために。

アルセウスも自身が生み出したと言ってもいい子らの願いを聞き入  
れ、この星に降り立つ。

そして、自身の全身全霊を掛けて、その巨大隕石を破壊しようとし  
た。

しかし、アルセウスでもそれを破壊するには力が及ばなかった。

そこでアルセウスは自身に眠る力を解き放つことを考える。

“それら”はアルセウス自身のエネルギーブーストというべきもの。  
その程度の隕石など軽々と粉碎するほどの凄まじいパワーを誇るの  
だが、“それら”を使用すると、自身の消滅にもつながりかねない。  
だが、アルセウスは宇宙空間に飛び出て“それら”を使った。

少しでも、地上への影響を少なくするためだ。

そしてアルセウスはその超々巨大隕石を爆破、この星は平穏を取り  
戻した。

しかし、隕石が爆発した際、“それら”が地上全体に飛び散ってし

まい、アルセウス自身がそれを探し出すことはもはや無理というべき状況に陥った。

アルセウス自身は少しでも消滅を先延ばしにするために、再度、深く眠りにつくが、アルセウスはこの星の人間とポケモンたちに“それら”を探し出すように指示。

一万年程度なら眠りながら待つことは可能としてそこで期限を切った。

「これらの記述を残した文明はそれからホウエンの海底に沈み、今日まで発見はされてきませんでした。さらに、“それら”はポケモンのタイプの数と同じ、17種類のプレートとして地上に散らばっていました。ポケモンのタイプが17種類あるのはアルセウスがこれらのタイプの遺伝子を持っていたということからも説明がついたりします」

そしてまだまだ講演は続いていく。

私はチャンピオンとしても歴史家としても、彼にはお世話になりっぱなしだ。

そんな私は彼に何を返せるのか。

彼の本業はポケモントレーナー。  
なら

（彼が“全国チャンピオン”になって以降、まだ誰も彼に土をつけてない。私とその最初の人間になってみせるわ）



チャンピオン、いや、彼の宿敵ライバルとしてなら  
彼の出す全身全霊、全力を受け止めるほどの実力を私がつければ  
彼と並び立つことは可能。

彼は言っていた。

ポケモンバトルはお互いの全てが拮抗しているからこそ面白い

私がこれから目指すものは決まっていた。

### 外伝3 シロナ アルセウスとの邂逅（後書き）

ということ、シロナはBWで考古学者として有名、かつ2番目のジムリーダーアロエが同業（？）として尊敬しているという設定から出来たお話でした（若干、映画の内容が被っている気がしないでもない）。ラストはすごいムリヤリにまとめた感がありあり（汗）。しばらく時間をおいた後、おかしいところは変更します。

にしてもポケモンらしくないというか。今回はもつとポケモンらしくいこうと思いましたがw タッグバトルとかもいいですね。

ちなみにアルセウスに関する設定はオリジナルです。

そしてプレートはゲームでは16種類です（ノーマルタイプに当たるものがない）。

## 外伝4 コトネ ヒカリの授業

みんなー！

はじめまして！

人呼んで愛の狩人、コトネでつす！

あ、男は専門外だから（シッシッ）

コトネはちょくつと変わってるって言われますが、そんなことは気にしてません。

女の子ラヴはコトネのジャスティス ですから。

そんなコトネはポケモントレーナーになってただいまジョウト地方を旅してます。

トレーナーならやつぱりリーグは出たいじゃないですか。

だから、ジョウト各地のジムに挑戦している最中です！

まだバッチは1個しかゲットできてませんけどね。

で！

そんなコトネの旅に同行してくれる素敵なお女性がいるんです。

その方の名前はヒカリ。

容姿は結構綺麗な方なんですけど、この方はそんじょそこらの人とは違うすごい一面を持っています。

それが経歴。

なんでも、ナナシマリーグチャンピオン。

そしてシンオウ・カントー準チャンピオンっていうすごい実力の持ち主なんです。

そんな人がコトネの旅に同行してくれて、コトネにポケモンについてのさまざまなことを教授してくれるんです！

いわばコトネの先生ですね。

なんで、コトネはセンサーって呼んでいます。

ちよつと恥ずかしがり屋なところがたまにキズなんですけどね（た

たとえば、コトネに対して嫉妬してくれるとことか、コトネのことを愛してくれてるのにそれをわざと隠そうとしているとことか（

「ニドラン！ どくづき！」

「ニド！ ニドー！」

「んがっ！ ビビルンバババ！」

な、なして……

「キサマが妙なことを考えていた気がするからよ」

センサーはツン度が100%なんですけど、コトネはそれが好きなんです。

コトネはいずれセンサーから隠されたデレを引き出してみせますよ！

「今度へんなことを考えてたら、カビゴンとハガネールでアンタのこ  
とプレスするからね！」

オウフツ。

デレへの道はまだまだ遠い……。

\*

「今日のテーマは努力値とそれに基づくステータスからの役割についてよ」

今日も始めました、センサーの“ポケモン講座”。

ちなみにこの言い方はなにやらゆずれないものがあるんだそうです。

「今までポケモンの種族値、個体値、性格、個性とそれらがポケモンの攻撃や特攻などのステータスに与える影響は説明してきたわね。まず最初のテーマである努力値。これは、簡単に言えば、努力値はステータスを上げやすくするための数値ってところかしらね」

コトネが旅に出るときにパパにもらった冒険ノートは、本来は日記を書くものなんだけど、コトネの場合は既に日記というよりも、ゼンセーの授業を書き取るためのノートになってます。

「で、この努力値は溜めれば溜めるほどそのステータスの成長率は上がっていきます」

「とすると、それを溜めこむほどいいんですか？」

「残念ながら、そううまくはいかないわ。努力値にはいろいろな制限があります。まず1点目、HP・攻撃・防御・特攻・特防・素早さと6つのステータスのうち、1つのステータスには255までしか努力値を溜めることは出来ないこと。2点目、6つのステータスで合計510までしか努力値を溜められないこと。3点目、努力値は4の倍数のときにステータスの成長率に関係してくること」

4の倍数に510。

ステータスは6つあるから  $510 \div 6 = 85$

「じゃあゼンセー、その努力値っていうのは1つのステータスにつき85を溜めるといいんですか？」

「うん。まず、6つのステに均等に振る。ああ、努力値を溜めることを努力値を“振る”って言い方をするから。で6つのステに均等に努力値を振るって言うのは一番やってはいけないことよ」

例えばね、といってゼンセーは1つの例を挙げる。

それはこちらがゲンガーで相手もゲンガーだったという想定。

ゲンガーは特攻と素早さの種族値がずば抜けて高いが、それ以外は紙という特徴を持っている。

こちらのゲンガーをA、相手のゲンガーをBとし、Aの方には特攻と素早さに努力値を極振り（1つのステに努力値を252振ることだそうです）、Bには6つのステに均等に85を振ったとする。

「努力値を多く振った方がステータスの成長は良くなるんだから、この場合、まず、どちらのゲンガーの方が素早さが高いかしら？」

「えー、Aの方ですか？」

「そうね。ついでに特攻もAの方が高いわ。で、ゲンガーはそれ以外のステータスは紙よ。だから、Aのゲンガーの方が速く動いて特殊攻撃の威力も高いから、AのシャドーボールがBに当たったらBのゲンガーはいくら特防にその程度の努力値を振っていようと、一撃で沈むでしょうね。何が言いたいかというと、一番は努力値は短所を補うより長所を伸ばすように振るのが望ましいわ。後はそのポケモンにどういった戦略を取らせたいかっていうトレーナーの戦略に合わせてといった感じかしら」

ほう。

思わず息を漏らしてしまう。

なるほど、いろいろ考えられてるわけですね。

「あ、じゃあ、さっき“極振り”っていうのは努力値を252振ることって言いましたけど、どうして252なんです？ 255じやいけないんですか？」

「努力値は4の倍数でステに影響が出るっていったけど、252は4の倍数で4で割り切ることが出来る。けど、255を4で割ると63.75になるけど、この0.75分の端数が切り捨て、つまりムダになるのよ。もったいないから255振らない。そうすると努

力値が6余るでしょ？ この6はどこか別のところに振るのよ。すると『 $4 \times “1” + 2$ 』という形で2は無駄になるけど、それ以外は活かせるという計算になるのね」

\*

その他、努力値はポケモンによって決まっているだ、何とか決定指数だ、何とか耐久指数だなんて出てきて、それを求める計算式とかもあるんだそうです（何とか指数の部分は今日は紹介だけで、後日また改めてやるんだそうです）。

「なんつーか、ポケモンの育成ってなんか算数というか数学というか。強くなるにはただただ楽しくバトルしていればいいってわけじゃないんですね」

「そうね。ポケモンって、ポケモン自体も強くなることも必要だけど、それ以上にトレーナーにそのほとんどのがかかってるからね」  
ちなみに今はセンサーが「喋り疲れた」とかで休憩時間です。  
そのため、ポケモンたちをみな外に出して、コトネたちはポケモンたちが遊んでいる様をポケエーっとしながら見ていたりします。

「強くなるには、ただポケモンたちに指示してバトルして特訓してっというだけでは強くはなれないわ。大切なことはそれらだけじゃなく、トレーナー自身がそれらの莫大な知識を修めなきゃいけないことね」

「センサーってどうやってあれだけの知識を修得したんですか？」

何気なく興味本位に聞いてみたら、サーッと顔を青くして顔をそむ

けたセンサー。

「いろいろ……いろいろあったのよ……」

なんとなく哀愁を帯びている感じから、『ああ、ここは突っ込まない方がいい』と判断。

「ところで、センサーにそれを教えた人っていったいどんな人ですかね？」

話題を変えることにしました。

「あれ？ 言ってなかったっけ？」

「なにをです？」

「あたしがそれを教わった人って今“全国チャンピオン”って呼ばれている人よ」

はっ？

「ええつと、どなたですか？」

「だから、“全国チャンピオン”よ」

「はいはいはいはい！？」



ちよっ!?

マジかよ!!

一瞬、時間が止まったぜ!?

「あ、あの“全国チャンピオン”ですか!? あの、行く地方行く地方でチャンピオンになって、でもすぐに辞退しちゃうっていうあのっ!?

「だから、そう言ってるじゃない」

お、驚きだ。

いくらなんでもそこまでのビッグネームが出てくるとは思わなかった……。

そんな人に師事していたら、そりゃああんだけ強くなるワケだ。

「尤も、あたしが習ったのは知識とか代表的な戦略・戦術とかだけ。他にもいろいろあるみたいなんだけど、そこら辺は自分で経験と実践を積んでいけて感じだったわ。あたしが今も旅を続けてるのってそのためだし。ただ、あたしが最初にあの人に黒星をつけるのを目指してるってのもあるけどね」

たしか、チャンピオンになってからは一度も負けたことはないとか  
なんか。

もはやバケモノだよね。

「しかし、今教えてもらってることってその“全国チャンピオン”に教わったんですよね? その人はいったいどこでそんな知識を身につけたんですか?」

コトネはポケモントレーナーになりたくて、パパがポケモンの研究者だったことも手伝って、旅に出る前はそれなりにコトネもポケモンについては勉強してたんですよ。でも、最初センサーの話す内容がどれもこれも聞いたことがなかった内容ばかりだったんで、パパに問い合わせてみたんです。

『パパ、種族値とか技の種類が3つあるとかって聞いたことある？』  
って。

最初は何やらわからなかったらしいんですけど、そのうちパパの顔色が見るみる変わっていった。

【コツ、コトネ！ そつ、それはいつたい！ どこで！？ どうやって知ったんだい！？】

危機迫る顔で家のテレビ電話にかじりつくようにしてアップになったパパの顔が印象的でした。

一応パパもあれでそれなりの研究者なのに知らないことを、さも当たり前のようにそれが事実であるという風に話すセンサー。そしておそらく“全国チャンピオン”

あまりにナゾすぎますよね。

「 禁則事項です 」

……うん、すごくかわいいんですよ、そんな兩人差し指をホッペに当てて？

もう、夜になったら、いや、いまずぐ襲っちゃいたいくらいのかわいさですよ？

……でもいつたいどういっ……

「っっていうことらしいわよ」

「え？」

「だから、秘密ってこと。いくら食い下がっても、教えてくれなかったから、ナゾよナゾ、ホントに」

うーん、でも是非とも聞いてみたい。

「コトネならきつと会えるわよ、あの人に」

「へ？ どうしてですか？」

「だってコトネ、もうあたしたちの仲間内では結構知られているはずだし」

意味がわかりません。

コトネはまだ旅だったばかりの新人トレーナーで、有名などという言葉とはかけ離れた位置にいるはず。

「あたしは、いわば“全国チャンピオン”の一番弟子。コトネはその弟子が鍛えてるポケモントレーナー。なら、チャンピオンリーグに出るほどの腕は近いうちに必ず身につけてくるはず。ということであの人やあたしとつながりのある、いろんな地方のチャンピオンや四天王、バトルフロンティアのブレーンがコトネを将来の強敵とライバル認知してるわ」

え？

ええええええええええ！？

ちよっ！？

なしてそげな重要人物にウチがなっ とんねん！？

「さ、そろそろ休憩はおしまい！ 続きをやりましょうか。まだ役割について話してなかったわね。あたしはアンタをジョウトリーグ出場までかどつかはわからないけど、あたしと別れるまでは目一杯鍛え上げないといけないんだからね。グズグズしてらんないし、今までのことは忘れたなんて言わせないんだから。ほらキビキビ行くわよー！」

コトネはセンサーに後ろ襟を捕まえられて引きずられていきましたとわ。

コトネとセンサーの旅はまだまだ続いていきます。

#### 外伝4 コトネ ヒカリの授業（後書き）

何気にメインキャラ以外での視点で進むお話の初登場は、コトネでした。ちなみにユウトもヒカリやシロナへの指導はこんな感じでした。っていました。

今回はバトルで行こうかなと思ってます。

## 外伝5 ユウト タッグバトル VS シロナ+レッド(前書き)

今回からの話は、時期的には、外伝の中でそれなりに後の方になります。ホントはこの前にいくつか外伝を挟みたかったですけど、出来なかったorz

それから主人公のユウトについて軽く補足説明をば。

ユウトは本編内では、カントー以外の地方ではチャンピオンまで上り詰めました。またカントーについても、1度目はレッドに大敗を喫してしまいましたが、次に対戦したときには圧倒的な勝利を収めてチャンピオンとなります(すぐ辞退していますが)。それ以後は誰も彼に勝つことは出来ておらず、いつしか“全国チャンピオン”だなんて呼ばれるようになります。そんなわけで彼の親しい仲間内では「さあ、そんな彼に最初に土をつけるのは誰だ!？」という一種の競争みたくなっていたりします。

また一般には『チャンピオンになってからは負け知らず』というような認識が広まっています。噂話みたく尾ひれがついたといった格好です。

## 外伝5 ユウト タッグバトル VS シロナ+レッド

ナナシマ地方5の島の北方、通称『みずのめいろ』という道路を抜けた先。

そこにはゴージャスリゾートという、云わばセレブ御用達のリゾート別荘地がある。

お金持ちの別荘なので、何から何まで他のところとは違い、調度品一つ取ってみても、他のそれとはケタが一つ、場合によっては二つ以上異なる金額が掛けられていたりもする。

さて、そんな別荘が乱立するリゾートの中に一際目立つ、別荘というよりはむしろ屋敷と言い換えてもおかしくはない装いを見せるそれがあった。

そして、その“屋敷”のゲートの前に燕尾服で身を包む一人の男性がいた。

彼はこの屋敷に訪れることになっている最後の客人を待っていたのだ。

しばらくすると晴れ渡っていた空に黒い点がぽつんと一つ現れた。それはだんだんと大きさを増していく。

彼は確信した。

ようやく待ち人が来たのだと。

そして、その最後の一人が、今ようやくと、ボーマンダに乗って、ここに降り立った。

待ちわびた客人たちの到着に彼はその名を呼んで出迎えをする。

「ようこそ、おいでくださいました、ユウト様、ラルトス、ボーマンダも」

「いえ、遅れてしまい、スミマセン、コ克蘭さん」

「ル〜ラルラ〜」

「マンダー」

男性の名はコ克蘭。

イツシュ地方のとある大富豪の家で執事を勤めている人間である。そしてジウウトバトルフロンティアアバトルキャッスルのフロンティアアブレーションという顔も併せ持っていた。

「皆さんもう来てるんですか？」

「はい。ユウト様以外の皆様は全員お揃いですよ」

「うーん、しまった。また遅刻か。まあた、シロナさんとかシルバーとかになんか言われそうだ」

「主役は常に遅れて来るものですよ。では、参りましょうか」

ユウトはコ克蘭の先導に従い、屋敷の敷地内に姿を消した。

\*

どーも。

主人公なのに外伝にはコトネよりも後に初登場したユウトです。

今回はイツシュ地方でカトレアちゃん（年下）が四天王への就任が決まったので、そのお祝いのパーティーをしようという“名目”で、このゴージャスリゾートにあるカトレアちゃんの別荘にお呼ばれました。

ちなみにカトレアちゃん家って世界的な大富豪らしく、それこそ世界中に別荘があるんだそうです。

で、さつき“名目”っていう風に強調したのは

「ユウト、今日こそボクがキミのことを負かせてみせるー！」



「いんや、俺が初勝利をもぎ取るぜ！」

という風にオレから何とか初勝利をもぎ取ろうと、知り合いが大勢（全員？）オレにバトルを挑んでくるんです（ちなみにカトレアちゃんの別荘には必ずバトルフィールドがあるので、こういうことも可能なんです）。

ただ今日は何やら様子が違ってました。

「悪いけど、今日の一番手は私よ」

アルセウスと始まりの神話についての研究で、考古学者としても著名。

長い金系のような髪を持ち、黒のロングコートがトレードマークの女性。

その女性の名は

シンオウ地方チャンピオンマスター、シロナ

「……………それから僕です……………」

口数が少ないのが玉に瑕だが、史上最年少でチャンピオンの座を獲得し、“最強のチャンピオンマスター”とも呼ばれた少年。赤い帽子がトレードマーク。  
その少年の名は

カントー地方チャンピオンマスター、レッド

「私たち2人とダブルバトルで勝負よ！」

「僕たち2人とダブルバトルで勝負だ！」

\*

「では、ルールを確認します！」

審判はコ克蘭さんが務めるみたいです（尤も、彼もオレとのバトルを望む一人ですが）。

そして他の連中は観覧席の方で見物をしています。

「シロナ様、レッド様の使用ポケモンは3体ずつ、一方ユウト様の使用ポケモンは6体で、擬似的な6on6のフルバトル形式になります！ ポケモンに道具を持たせることが出来ます！ ポケモンの交代はありとします！ ポケモン、道具の重複は認めません！ 以上です！」

大体が現実のダブルバトルと同じルールですね。

ん？

6体？

「（わたしやボーマンダも出てもいいのかしら？）」

「どうなんだろうな」

その辺を聞いてみると

「もちろんよ」

「…………あの2体を倒さないと本当に君に勝ったことにはならない……」

ということですよ。

しかし、ダブルバトルか。

今の手持ちは……

まあ、若干不安はあるけどなんとかなるかな。

「それでは双方、準備はよろしいですか？」

最初に繰り出す2体が入っているボールを二つ手に収める。

「では、バトルスタート！」

そのかけ声と共に、宙に向かってその二つのボールを放り投げた。

\*

どよめきが場内に広がる。

レッドさんの1体目がリザードン、シロナさんの1体目がルカリオ。どちらも二人のパーティの中でエース級の実力を持っている。

一方オレのポケモンは、

「…………カゲボウズにノズパス…………」

レッドさんの言うとおり、カゲボウズにノズパスというちょっとど

ころかかなりマイナーと思われるポケモンたちです。

カゲボウズはジュペッタの進化前でジュペッタ自体が他のゴーストタイプのポケモンの劣化になりやすく、なかなか活かしづらいポケモンだったりするため、バトルで見かけることは、現実の方では、あまりありません。

また、ノズパスもホウエンのジムリーダーアツツジさんが使う以外はあまり見かけないポケモンだったりします。

ただ、このノズパス、実はちょっとヒミツがあるんですよね。

「まずはノズパス、ロックカット！ カゲボウズはじこあんじ！」

ロックカットで素早さが2段階アップしたノズパスをじこあんじさせたので、これでカゲボウズも素早さが2段階上がり、この4体の中で一番速くなりました。

「まずは1体ずつ葬り去るわよ！ ルカリオ、ノズパスにはどうだん！」

「リザードンはりゅうのまいの後、ノズパスにはがねのつばさ！」

しかし、リザードンがりゅうのまいをしたおかげでリザードンの素早さが1段階上がってカゲボウズの素早さを抜き去って1番速くなったため、その素早さを生かして、たとえばどうだんに出遅れているようにすぐさま追いついてきました。

「（定石ね）」

「ああ」

ラルトスの言うとおり、ダブルバトルで、1体を集中して攻撃することは有効であり、よくある手でもあります。

「カゲボウズ、はどうだんの弾道に立ちふさがれ！ ノズパスはリザードンにでんじは！」

「かえんほうしゃで撃墜！」

格闘タイプのはどうだんはゴーストタイプには効かないため、カゲボウズがルカリオのはどうだんを無効化。

そしてリザードンのかえんほうしゃとノズパスのでんじはが衝突し合うが、

「相つ変わらずレベルが高いリザードンだなあ」

かえんほうしゃはでんじはをいとも容易く無効化。

というより、圧倒的な火力で拮抗することなく、アッサリ押し切ったと言い換えた方がよかつた。

「ノズパス、避ける！」

「はがねのつばさで追撃！」

「ルカリオはカゲボウズにシャドーボール！」

ノズパスがかえんほうしゃをかわした先にリザードンのはがねのつばさが、そしてルカリオのシャドーボールがカゲボウズに迫る。

「カゲボウズはまもるでルカリオを引きつける！ ノズパスはルカリオに――！」

そうして、シャドーボール、はがねのつばさがカゲボウズやノズパスに直撃した。

\*

「…………なぜ？」

「鋼タイプのはがねのつばさは岩タイプのノズパスには効果抜群のハズよ。それに、リザードンはりゅうのまいで攻撃と素早さが1.5倍になった上に、そのノズパスはリザードンに比べれば、でんじはの出来から、相当レベルは低いハズ。なんで落ちてないわけ？」

二人の言うとおり、リザードンのはがねのつばさはノズパスに対してクリーンヒットしましたが、かろうじてノズパスはまだダウンするに至ってはいません。

「このノズパスは特別なんですよね」

「…………特別？」

「そう。このノズパスはイツシュ地方で生まれたんです」

「イツシュ地方で生まれたからなんだと仰るのでしょうか」

おおう、ここで今日の集まりの名目の人物で、イツシュ四天王になったカトレアちゃんが話題に入ってきましたよ。

まあ、この場にはカトレアちゃん以外、イツシュに関わりのある人間はいないので、全体への説明を兼ねるとしますか。

シロナさんやヒカリちゃんにはイツシュ地方での知識については説明してなかったから、シンジ君やジュン君たちにも伝わってはいないはずだしね。

「カトレアちゃんはイツシュ地方の四天王なんだから知つとかないとマズいな。ノズパスの特性は？」

「“がんじょう”ですわ」

「そう、“がんじょう”だ。ただ“がんじょう”はイツシュ地方だ

と『一撃必殺技は効かない』の他に『HPが満タンならダウンしそうな攻撃を食らっても必ずHPが1残る』っていう、いわば常時気合いのタスキ所持って効果もあるんだ」

「そうだったのですか!？」

「……それは厄介」

「ホント。レッド君の言うとおりね。でも、もうそれも使えないわ。ノズパスの体力は残りほんの僅かしかないんだから」

うん、たしかにはがねのつばさを食らった段階でノズパスの体力は殆どなかったんだけど

「ところで、実を言うと、このノズパスってまだ孵化したばかりなんですよね」

!!!!

オレの言葉によって場内が衝撃に包まれたのが、手に取るように伝わってきた。

まあ、驚くのもムリはないですね。

ここにいるみんなはそれぞれ自分たちのポケモンを、そこらにいるトレーナーとは比べようもないほど鍛え上げてきたのだ。

それに孵化したばかりのロクに鍛えていないポケモンをバトルに出すのは自分から負けにいくようなものと思ったのでしよう。

しかし、戦略をキチンと立てれば、たとえ二人の切り札のピカチュウやガブリアスであろうと、勝つことは不可能ではないのよん

「で、残念ながらシロナさんの目論見はハズレです。今ノズパスの体力は満タンだったりします」

「な、なぜ!？」

「いたみわけ”ですよ”

“いたみわけ”

使ったポケモンと使われたポケモンの現在の体力を足して半分に分け合うという技。

「シロナさんの読み通り、このノズパスは生まれただけで経験は浅いです。しかし、それが逆に今回は良い方向に働いた」

レベルが低いということは体力が元々少ないということ。

つまり、いたみわけで体力を半分に分かち合っても最大HPが低ければ十分体力は満タンまでもっていけるのです。

「つまり、今のオレのノズパスはいたみわけをし続ける限り、常時気合いのタスキ所持という関係とイコール、ということになります」

シングルバトルなら『真・“がんばりょう”無双 Empires』

ちつくなことを考えていたんですけど、ダブルならもうこの手は使えません。

ということ、次の戦法に参りましょう。

奏功している内に、シャドーボールとまもるの衝突の影響で発生した白煙は既に収束していました。

どうせならこの場にいる全員への解説を、時間稼ぎの意味を込めつつ（聞いている間は命令してこない）、行いましょうか。

「さて、ダブルバトルで有効な戦法はいくつかあります」

ちなみにカゲボウズには効果抜群のシャドーボールでも、まもるで防ぎきったカゲボウズにはキズ一つ存在していませんでした。



「まず前提として、ダブルバトルにおいては“まもる”という技は必要不可欠の存在なんです」

ダブルバトルでは地震やなみのり、ほうでんなどの範囲攻撃技は使ったポケモン以外は、たとえ自分たち側であろうとダメージを受けるものもある。

また、ダブルバトルでは1体に集中攻撃をされる場合もある。

ダブルバトルでは後者の理由もあり、“受け(ゲームにおいては4発以上そのポケモンが攻撃を受け続けても倒れない)”は成り立たないので、『(様々な)攻撃を防ぐ』という意味で“まもる”という技は必須なのだ。

「なら、その必要不可欠な技を使えなくすることは十分に有効な戦法でしょう。ということでカゲボウズ、ふういん！」

そしてカゲボウズが覚えている技が使用不可になる。

「さらにもう一つ付け加えるなら、ふういんとゴーストタイプとの組み合わせで使われる最もポピュラーな技」

“だいはくはつ”

そうしてノズパスのだいはくはつが決まった。

場内を凄まじい衝撃波が駆け抜け、粉塵が巻き上がるのだが、それも止み、フィールドを見渡すと

そして(言い忘れてましたけどカゲボウズの特徴“おみとおし”により)リザードンもルカリオも気合いのタスキを持ってはいなかつ

たようなので（尤も、あの二人ならこの2体に気合いのタスキを持たせるなんてありえないけど）

「リ、リザードン、ノズパス、戦闘不能！」

だいはくはつは相手の防御を半分貫通する自爆攻撃技にして最大威力の技。

ダブルバトルでその威力が弱体化することもあるといえど（ダブルバトルでは範囲攻撃技は技の威力が3/4になるが、だいはくはつは攻撃対象が2体しかない場合はダメージが3/4にならない）、その驚異度は変わらない。

「おまけにだいはくはつはノーマルタイプだから、ゴーストタイプには無効」

というわけでフィールド上のカゲボウズ以外のポケモンはキレイに消し去ってしまうつもりでしたが

「みきり」ですね？」

「当たり前よ。ホント、ギリギリで思いついたんだけどね」

“みきり”

効果はまもると同じで、相手の攻撃を完全に防ぐ技。

ただ、みきりはまもるやこらえると違って技マシンがない上、覚えるポケモンの数も少ないため、ふういんにはほぼ間違はなく引つかからない、防御技として、完全にまもるやこらえるの上位互換技。ルカリオはそのみきりを使える。

カゲボウズはみきりを覚えないので、ルカリオは今のだいはくはつ

をみきりで防ぐことが出来たのだ。

さて、今シロナさん以外は手持ちが1体減った状態。

ならば、シロナさんにも公平に1体減らしてもらいましょうかね。

「いけ、カメックス！」

「クロバット、キミに決めた！」

うまく釣れてくれるとありがたいんだけどね。

外伝5 ユウト タッグバトル VS シロナ+レッド(後書き)

特性“おみとおし”は繰り出したときに相手の持ち物がわかるとい  
う効果です。

## 外伝6 ユウト タッグバトル VS シロナ+レッド

フィールドに出ているポケモンは4体。

相手側はルカリオとカメックス。

一方こちらはカゲボウズにクロバット。

オレにとってはルカリオ・カメックス、どちらも厄介だが、ルカリオは器用な上、こちらの弱点を2体とも突けるので、さっさと退場させたい。

一方、あちらにとっては、クロバットはカメックス・ルカリオのどちらも弱点を突くことが可能なため、狙いにいくなら、クロバットだが、

「カゲボウズ、ルカリオにかけうち！」

という鋼タイプに効果いまひとつなゴーストタイプで攻撃するような迂闊なマネをすれば

「カメックス、カゲボウズにハイドロカノン！」

「ルカリオ、カゲボウズにラスターカノン！」

と、カゲボウズに攻撃が集中するだろうから

「カゲボウズ、みちづれ！」

と落とし穴に嵌めることが出来ます。

ついでにクロバットにはわるだくみを指示しました。

「しまった！」

「チツ！ イヤらしい！」

しかし、ハイドロカノンもラスターカノンも放たれてしまった後。ついでにシロナさんの舌打ちについては何も言いませんよ？

「カゲボウズ、ハイドロカノンに当たれ！」

まあ、それはさておき、おそらくレッドさんのカメックスのハイドロカノンなら、カゲボウズを一撃で落とすことは可能なはず。ということ、二人はカメックスをみちづれにして戦闘不能にするつもりだと判断するでしょう。

超ガチのバトルタワーでのマルチバトルなら、片方をすべて戦闘不能にすれば、あとは2VS1になり、そうなれば勝ちも固くなるけど、レッドさんにシロナさんなんて豪華な面子と、同時にバトルなんてなかなか出来ません。

まだまだ勝負を決める一手を打つには惜しい。

そうこうしているうちにハイドロカノンがカゲボウズに直撃。

カゲボウズがダウンしそうになるが

「気合いのタスキですって!？」

シロナさんの言葉通り、カゲボウズにはバトルの始まる直前に気合いのタスキを持たせていました。

気合いのタスキの効果は前話を見てください。

なぐんでメタなことを言っているうちにルカリオの放ったラスター

カノンがカゲボウズに直撃。

今度こそカゲボウズはダウン。

そしてみちづれが発動していたため

「カゲボウズ、ルカリオ、戦闘不能！」

\*

相手側の手持ちポケモンは合わせて4体、こちら側も4体。いい感じにイーブンにもつていけました。

ちなみにさっきので、ラスターカノン ハイドロカノンに当たっていれば、レッドさんのポケモンは残り1体になり、その1体を倒してしまえば、いくらシロナさんのポケモンといえども、後は一方的な展開になっていたことでしょうね。

さて、次のポケモンを投入しますかね。

「波濤より来たれ、ミロカロス！」

「サンダース、キミに決めた！」

シロナさんが繰り出してきたのはミロカロス。

レッドさんのカメックスと合わせて、どちらも水単色タイプ。

2体とも電気・草タイプが弱点だけど、どちらもれいとうビームやふぶきを持っているだろうし、カメックスはじしんも持っているため、草・電気タイプに効果抜群を取れる。

そしてカメックスのだくりゅうは泥水やなぜか倒木すらも流れてくる。

倒木に直撃したら、手痛いダメージを負うだろうし、泥で電気技も効きにくくなってしまう（この世界での仕様です）。

強力な技で押し切るうにも、どちらも特防が高い。

さらに防御もカメックスは高い部類だし、ミロカロスは特性“ふしぎなうるこ”で毒・火傷・眠りになったら防御が1.5倍になる。一応、注意すべきところを挙げてみたけど、これからすることに大して影響はありません。

若干イジメ入るかもしれないのが心苦しい気がしますけど。

さて、こちらが繰り出したクロバットとサンダース。

素早さが非常に高い『130族』というグループ（素早さ種族値が130のグループ/これより上にはデオキシス（各フォルム）、テツカニン、マルマインしかない）にも括られることもある2体。

「クロバットにサンダースという組み合わせなら、あまごい かみなり狙いかしら」

「……にほんばれはありえないからあまごい。雨パならこつちも有利……」

クロバットにサンダース。

クロバットはあまごいとにほんばれを覚えるため、その高い素早さを活かして天候変化技を開始早々に使い、パーティの戦略の起点になつたりします。

レッドさんは、サンダースと一緒に組み合わせから、雨パと判断したのでしよう。

ちなみに雨パというのは雨が降っている状況下を前提とするパーティのことです。

雨が降っているとき、水タイプの技は1.5倍になり、かみなりが必中になったり、“すいすい”などの特性が発動したり（“すいすい”は発動すると、素早さが2倍になる）、他にも様々な影響があつたりします。

それからレッドさんがにほんばれがありえないと言っているのは、にほんばれだとかみなりの命中率が50%にまで下がり、サンダー



スを活かしきれないからです（晴れにしてソーラービームを連射するという手もありますが、サンダーズはソーラービームを覚えなし、クロバットが撃つにはほんばれをやった後なので、タイムロスが生じるし、ダブルバトルという特性を活かしきれない）。

しかし、クロバットとサンダーズだからあまごいが来るなんて、思考停止もいいところ。

あまごいの副次的効果を知らない他のトレーナーならいざ知らず、オレがあなたたち相手に、しかも実際にやってみせたことのあるコンボ技を真正面から使うわけないでしょうが。

「クロバット、くろいまなぎしで2体とも逃げられないようにしろ！」

「クロバット！」

そうして、くろいまなぎしが2体に決まる。

これでもうポケモンをボールに戻すレーザーがポケモンに当たっても、バトルが終わるか、そのポケモンがダウンするまでポケモンがボールに戻ることもなくなります。

「あまごいじゃない!?!」

「くっつ！ ミロカロス、アクアリングよ！」

予想と反する行動に動揺した二人。

しかし、すぐさまアクアリングを指示するシロナさん。

「カメックスもアクアリング！」

レッドさんも一歩遅れてカメックスにアクアリングを指示しました。ここからわかることはミロカロスは元よりカメックスも耐久型とい

うことです。

とするとミロカロスの持ち物はたべのこし確定で、カメックスはたべのこしかオボンの実あたりですかね。

ちなみにアクアリングは一定時間ごとに体力が1/16回復するというたべのこしの技版です。

たべのこしと効果を打ち消し合うということはないので、たべのこしと合わせると体力が1/8ずつ回復していきます。

「カメックス、だくりゅう！」

「ミロカロスはサンダーにどくどくよ」

ミロカロスは“受け”の典型例で来てますね。

どくどくはくらはえば時間が経つごとに毒のダメージが多くなっていく技です。

そしてだくりゅうは範囲攻撃技で、かつ、電気技の威力を弱めます。攻撃と同時に防御も行うという感じですか。

「クロバット！ サンダーを乗せて飛べ！」

そしてクロバットは指示通り、サンダーを背に乗せて宙に飛び上がってだくりゅうとどくどくを回避。

「カメックス、アクアジェットで撃ち落とせ！」

「げっ！」

カメックスがアクアジェットでクロバットに突撃し、ヘッドバットをぶちかます。

そのまま真つ逆さまに落ちていく2体。

「ミロカロス、どくどくよー！」

クロバットならまだしも、宙では自由に動けないサンダースはどくどくをくらってしまいました。とにかく一度態勢を整えなければ。

「クロバット、いやなおと！」

「クロバット！」

いやなおとは防御が2段階下がりますが、副次的な効果として相手がいやなおとが聞こえている間はだいたいの動きを止めてくれます。聞きたくないから耳を塞いでのりきる的な意味で。

その間によくサンダースが持ち直しました。どくどくのダメージがあるため、ここからは一気にいきます。

「クロバット、もう一度わるだくみ！ サンダースは“ほえる”！」

クロバットは2度目のわるだくみ。

これでクロバットの特攻は4段階アップしました。更にサンダースのほえる。

タクトとのバトルでも少し話は出たけど、これは現実世界では後攻になる強制交代技。

しかし、この世界ではフィールドに出ているポケモンを短い時間だが、怯ませ、行動不能にさせる技。

しかし、クロバットの特性は“せいしんりよく”。

“せいしんりよく”は怯まないという効果なため、ほえるでも怯まないで、行動可能というわけです。

で、怯んだ場合は、ポケモンをボールに戻るか自然治癒以外に回復する方法はないのだが、くろいまなぎしによって交代は不可能。

つまり、少しの間、相手のカメックスとミロカロスは完全に行動不可能な状態に陥ったこととなります。

「しまった！」

場内には2人の声の他に、客席からはまるで今の戦法に感心するよ  
うな「おお〜」といったことも聞こえる。

いや、あんたらさ、もう少し研究とかしよつぜ？

オレだってこんな戦法はこつち来てから開発したんだから。

まあ、前提となる知識の量に圧倒的な差があることだから、ムリも  
ないことなのかな。

「クロバットはエアスラッシュ！ サンダーはうそなき！」

うそなきは相手の特防を2段階ダウンさせる技です。

これでミロカロスの高い特防もそれほど驚異ではなくなりました。  
そしていのちのたま（攻撃技の威力が1・3倍になるが、相手にダ  
メージを与えたら、そのダメージの一部が自分に返ってくる）持ち  
で特攻が4段階アップのクロバットのエアスラッシュ！  
3割怯み効果もある技です。

「ミロカロス、しっかり！」

「カメックス！」

二人は精一杯呼びかけていますが、ほえるの影響が、エアスラッシ  
ユの影響かはわかりませんが、まだ怯んでいます。

「これも立派な戦法、ですよな？」

「……………そ、そうね……………！」

「ぐっ……………！」

何も出来ない二人は相当悔しそうにしていますが、これも勉強ということ。

しかし、いくら相手の特防が高い上にいじっぱり（攻撃 特攻）とはいえ、いのちのたま持ち・特攻4段階アップ・特防2段階ダウンなのになんで2体とも倒れないんですか？  
ちーとですかそうですか。

まあ、いい加減次で終わりでしょう。

「仕上げだ！ クロバット、更にエアスラッシュ！ サンダース、かみなり！」

エアスラッシュもかみなりも特殊技でタイプ一致、相手の特防は2段階ダウン、クロバットは特攻4段階アップ、サンダースの特攻種族値は110とかなり高い、その種族値からのかみなりは効果抜群、かみなりはボルテッカーと並んで電気タイプの技の中で最も威力が高い。

これほどの要素があれば、たとえだくりゅうで電気技の威力が落ちていようと、特殊耐久が非常に高いカビゴンやハピナスだって一撃で落ちるのに、

「カメックス、ミロカロス、戦闘不能！」

あの2体が落ちない道理はなかった。

\*

「まったく、あなたのその強さは相変わらねえ」

「……強い……。この中でトーナメントをやれば、君以外なら僕とシロナが決勝に残るほどなのに……」

ひょっとして1人で勝てないなら2人でということだったのか？

こっちではシングルバトルの方がよく行われるから、そっちの方面についての知識はいろいろ教えたけど、ダブルの方はあんまりしてなかったからなあ。

ダブルバトルは、シングルでの知識ももちろん活きるけど、ダブルならではの知識とかもあるからね。

「さて、それは置いといて。この子たちを倒さなければ、ボーマンダモラルトスも出てきませんよ?」

「わかってるわ」

「……絶対引きずり出してみせる……!」

どうでもいいけど、レッドさんて口数少ないけど、意外に熱いところがあったりしますよね。

語尾の『……』の後に『!』付いてますし。

「天空に舞え、ガブリアス!」

「頼むぞ、ピカチュウ!」

おっと!

んなメタなこと言ってる間に二人がそれぞれの切り札を投入してきました。

しかし、ああは言いましたが、クロバットはアクアジェットといのちのたまの反動ダメージ、サンダースはどくどくのダメージがあるため、あまり長くは持たないでしょう。

これはラスト2体の投入はありそうです。

ゲンガーやヘラクロスなんかを連れてきていたらどうなったかわかりませんが、それでも以前よりかは2人とも遥かに強くなってきているのがよくわかり、いろいろ教えた立場としては嬉しいものを感じたりしました。

外伝6 ユウト タッグバトル VS シロナ+レッド(後書き)

前半に若干ご都合的な部分が含まれていますが、ご容赦を



## 外伝7 ユウト タッグバトル VS シロナ+レッド

「天空に舞え、ガブリアス！」

「頼むぞ、ピカチュウ！」

さて、あちらはそれぞれ3体目の最後のポケモン。少し特徴を述べましょうかね。

まずはシロナさんのガブリアス。

“厨ポケ”として名高いポケモンの1体ですね。

合計種族値が600なので『600族』というグループにも括られます（ちなみに初代伝説三鳥や二代目伝説三犬などの三伝説ポケモンより高い種族値）。

攻撃、素早さは共に高い部類に位置していて（素早さ種族値102で、100という激戦区（100以下の種族値でも100抜き調整可能なポケモンが多い）を僅かに上回る）、特攻もそこまで悪くはありません（つるぎのまいを積まない場合、（現実で物理受けとして有名な）エアームドならだいたいもんじ二発で退場に追い込める）。タイプ一致のドラゴン技も強力で、じしんもタイプ一致で放てるというポケモンでもあります。

つるぎのまいを積まれるともう止まらなくなります。

続いてレッドさんのピカチュウ。

アニメでは伝説厨のラティオスと相打ちになったと思ったら、初心者レベル5のツタージャや有利なはずの水タイプのヒヤッキーにボロ負けするようなくわからない仕様ですが、この世界では違います。

昔、初めてカントーのチャンピオンリーグで、挑戦者として戦った

とき、あのピカチュウとそれからカビゴンに全抜きされたのは、今でも忘れられません。

当時は、「かわいい顔して内実は“黄色い悪魔”だろ」と戦おのいたものです。

また“でんきだま”という“ピカチュウの攻撃・特攻を2倍にする”なんていう反則アイテムのおかげでカイオーガに匹敵するほどの能力値からの攻撃を繰り出し、素早さに関しても、こうそくいどうで補えば、ガンガン避けながら攻撃してくる超高速アタッカーに変貌する恐ろしい電気鼠でもあります。

さて、サンダースの電気はガブリアスには効かないし、ピカチュウにも効きづらい。

クロバットには2体の弱点を突く技はありません。おまけに2体とも体調が万全とは言い難く、むしろかなり悪い部類。

これは次に繋げる戦い方をするか、あるいは……

「ダ、ダース！」

「クロバット！」

「（2人とも倒れるまでやらせてほしいですって）」

ラルトスの声が頭の中に響いてくる。

……

「サンダース。お前は猛毒状態だけど続けるか？ クロバットも残りの体力が相当厳しいハズだが、それでも続けるか？」

その問いに、

「ダース!!」  
「クロバツ!!」

2人は力強い返事を返してきた。

「しゃーない。2人気の済むとこまでいこうか！ただ、オレがダメって言ったらもうダメだからな。そこは約束してくれな」

「ダース！」  
「クロバツ！」

「(どくけしとモモンの実、げんきのかけらとかいふくのくすりを用意しておくわ)」

よくわかってくれる相棒でホント助かるよ。

「じゃあ、いくか！」

\*

「ガブリアス、つるぎのまい！」

「クロバツ、ブレイブバードで邪魔をしろ！」

ガブリアスに積ませるのは本当に得策ではありません。  
とにかく邪魔させます。

ただ、

「ピカチュウ！ でんこうせっかでクロバツを妨害！」

なんてことも。

こういうのがダブルバトルですよね。

「サンダース！ ミサイルばりをバラまくんだ！」

サンダースは猛毒に犯されているので、おそらく普段のときでんこうせつかよりは少し遅くなっているはず。

ならば、動かないで体を震わせるだけで放てるミサイルばりを放つのが確実。

案の定、ピカチュウの進路上にバラまかれ、ピカチュウの妨害に成功。

それから、ブレイブバードは決めることは出来ましたが、ガブリアスのレベルが相当高いため、あまりダメージにならず。

結果的につるぎのまいは成功し、ガブリアスの攻撃は2段階アップ。こうなれば、ピカチュウを先に狙うしかないか。

「クロバット！ ピカチュウにエアスラッシュ！」

「ピカチュウ、かげぶんしん！」

効果いまひとつとはいえ、特攻が4段階アップしているため、ダメージは見込めるはずだったが、かげぶんしんにより回避されてしまふ。

「ガブリアス、ストーンエッジ！」

「ピカチュウはこうそくいどう！」

その間にガブリアスのストーンエッジが迫る。

タイプ不一致とはいえ、元々高い種族値とつるぎのまいで2段階上がった攻撃からのそれは脅威以外の何物でもない。

おまけにピカチュウも素早さが2段階上がってしまったため、現状

のこの2体ではもはや、対処できないだろう。  
ならば　！

「クロバット、ねっぷう！　サンダースはめざめるパワー！」

ねっぷうでかげぶんしんを潰し、めざパで少しでもダメージを与えるのみ！

そして

「コ克蘭さん」

オレの問いかけにコ克蘭は頷いて答えた。

「サンダース、クロバット、共に戦闘不能！」

ねっぷうとめざめるパワーでかろうじてストーンエッジをしのぎ切ったようだが、もはや立っているのも精一杯といった2体。バトルの続行は不可能だった。

\*

バトルは一時中断し、サンダースにどくけしを打って、毒状態だけでも解除はしました。

「いよいよつてところかしら」

「……ええ……」

二人からすればようやく“本丸”にたどり着いたというところでしょうか。

だが、しかし。

“本丸”というのは容易には落ちないものですよ。

さて、このまま普通に戦うのもまあまあありだと思っておりますが、このペアだと単なるシングルバトル×2になりそうな予感がしないでもない。

というより、この2体の持ち味を生かしたポケモンらしいバトルは……ぶっちゃけ思いつかん。

なので、超 邪道で責めてみようと思います

フィールドも、これなら可能そうだし。

ということで初手

「ラルトス、ちょうはつ！ ポーマンダはハイドロポンプ！」

開幕ラルトスのちょうはつとポーマンダのハイドロポンプ。

ラルトスのちょうはつで、もはやピカチュウもガブリアスも、攻撃技しか繰り出せませんし、ポーマンダの特性『いかく』で下がった攻撃を上げることではできません。

「くっ！ かわせ、ピカチュウ！」

「チツ、相変わらずイヤらしい！ 避けなさい、ガブリアス！」

さてポーマンダのハイドロポンプは2体とも馬鹿正直に食らうことではなく、悠々と避けています。

ちなみにですが、二人がなぜちょうはつをしなかったかという覚えられないor戦法にそぐわないという理由です。

「ガブリアス、ギガインパクト！」

「ピカチュウ、ボルテッカー！」

いきなり大技が来たなオイ。

あ、ついでに言えばハイドロポンプが避けられるのは計算済みです。

「ボーマンダ、そのまま縦横回転！ ラルトスは宙に退避しつつ、サイコネシス！」

「（なる。そういう風にすればいいのね）」

ラルトスはオレの頭の中を読めるので、オレがイメージするものを見せられた彼女は、天井近くまでサイコネシスで急浮上すると、新たにサイコネシスでボーマンダのハイドロポンプを操る。

すると、ボーマンダのハイドロポンプが、あたかもボーマンダを包み込む水球のようになりました。

さらにボーマンダは回転を加えているため、縦横無尽にハイドロポンプがフィールド上にバラまかれる格好となっております。

「……………カウンターシールド……………！」

「厄介ね」

攻撃は最大の防御。

とは若干違う気もしますが、攻防一体のそれに、ガブリアスとピカチュウは攻撃を中断して、回避に専念しています。

宙に浮かぶラルトスを狙おうにもピカチュウは飛べず。

また、ガブリアス・ピカチュウともに水は等倍ダメージであり、タイプ不一致といえど、ボーマンダの特攻からのハイドロポンプは元々の技の威力も相まって、直撃すれば高いダメージが見込まれる上に、まるで意思でもあるかのごとくハイドロポンプがやたらめった

ら不規則に動き回るので、攻撃する暇がなく回避するしかない。といったところ

「いちかばちか！ ピカチュウ、ひかりのかべ！」

でもなかったようです。

ひかりのかべがガブリアスの前に張られました。

ていうかちょうはつ切れるの速くない！？

これでガブリアスに対しての特殊攻撃は半減となっていました。

「ガブリアス、ドラゴンダイブ！」

その状況を利用してシロナさんはガブリアスにドラゴンダイブを指示。

ハイドロポンプのダメージは受けてはいるようですが、だいぶ少なくなりましたようです。

「ピカチュウ、ガブリアスの後ろからボルテッカー！」

！  
なる。

ガブリアスを壁代わりにボーマンダに接近ということか。

上手い戦法です。

打ち合わせなんてしてないだろうに、即席とはいえ、二人の息が合っている。

流星はチャンピオンといったところ。

ちなみにちよつとここで考察。

ピカチュウの持ち物はでんきだまで固定でしょう。

それ以外はありません。



次いでガブリアス。

二つ以上の技を使っているので、こだわりスカーフ（素早さ1.5倍になるが、1つの技しか出せなくなる）はありえない。

後はいのちのため、ヤチエの実（氷技が効果抜群のとき一度だけダメージ半減）、ラムの実（状態異常を回復させる）。

それからたつじんのおび（効果抜群の技を使った時に威力が1.2倍になる）も候補に入るでしょう。

なぜなら、技に制限がないので様々な技を覚えさせておけば、それが活きるからです。

この世界なら下手したら最有力候補でしょうね（ガブリアスは水以外のタイプには効果抜群のダメージをとれる技を覚える）。

あるいはまさかのかいがらのすず（与えたダメージの1/8だけHPを回復する）ということもありうるでしょう（つるぎのまいで攻撃が上がったなら、そこからの技のダメージで回復量も多くなる）。ちなみにキーの実（混乱を回復させる）という可能性はほぼないと思われる。

げきりん（+いばる）とセットでしか使えないため、ほぼ持ち物がないという状態と同義になるからです。

で、さてこちら。

ボーマンダにはイバンの実、ラルトスにはまがったスプーンを持たせています。

イバンの実は戦闘中にHPが1/4以下になった時に最初の1度だけ『すばやさ』に関係なく先制できるきのみで、まがったスプーンはエスパイタイプの子の威力が1.2倍になるという効果がありました。

まがったスプーンはラルトスのエスパイ技を強化するためですが、どうしてイバンの実をボーマンダに持たせているかというのはまた後ほどに。

「今だ、ラルトス！ フィールド全体に10万ボルト！」

ちなみに今では、威力的にサンダーのかみなりをアッサリ超えるほどのものにまでなっています。

どこの黄色い電気鼠のように“レベルリセット”は起きませんので。

さて、10万ボルトがフィールド全体に落とされましたが、ピカチュウは元々電気タイプなためあまり効果がなく、ガブリアスに至ってはドラゴンタイプの他に地面タイプも持ち合わせているため、まったく効果がありません。

なので結局ダメージが大きかったのは、ハイドロポンプのバリアーが効いていたとはいえ、ガブリアスのドラゴンダイブにピカチュウのボルテッカー、ラルトスの10万ボルトを余波として食らったボーマンダでした。

ボーマンダはラルトスに次いで2番目に仲間になった最古参組で、実力もラルトスとツートップを張っていますが、さすがにそれだけの攻撃を食らっては体力もかなり減ったはずです。

「どづいうこと？」

「……指示ミス？ いや、でも、ありえない。なぜ……？」

二人はおろかギャラリーも首を傾げているみたいですね。

「一つ言っておきますが、指示ミスでもなんでもなく、戦術の一環です」

ではここからは“ずっとオレのターン”で。

「いけ、ボーマンダ！」

「マンダー！」

イバンの実が発動。

「ウソでしょ!?!」

「なっ!?! イバンの実だっ!?!」

意外過ぎる持ち物に驚愕を覚えたような二人だが、もう遅い。ボーマンダは一気にピカチュウに接近。

「そのままピカチュウにドラゴンダイブだ！」

「マンダー！」

タイプ一致ドラゴンダイブがピカチュウにクリーンヒット！そのまま勢いよく壁に激突する。

「ピカピカチュウ……」

目を回して倒れ込むピカチュウ。

「ピカチュウ、戦闘不能！」

これで、レッドさんのポケモンは全滅。

シロナさんはガブリアス1体のみ。

逆にこちらはダメージはひどいが、ボーマンダに、まだ無傷なラルトスの2体。

このまま2VS1でオラオラと押していてもほぼ決着はついたはずなんだけど、それではイバンの実なんかを持たせたポーマンダでわざわざ仕込みをした意味がありません。ついでにいえば、先程相手の持ち物について考察を入れましたが、それもぶつちやけるとあんまり関係なかったりします。

「よくやった。戻れ、ポーマンダ！」

ああ、また場内の雰囲気が変わりましたね。

外伝7 ユウト タッグバトル VSシロナ+レッド(後書き)

持ち物についてはゲーム同様(発動するまで)わからないと言う仕様です。

外伝8 ユウト タッグバトル VS シロナ+レッド

「それはアレかしら。私のガブリアスを倒すのにボーマンダは不要だとても」

ん、ちょっと、というかなかなり不機嫌なシロナさん。

さっきまではこの状況まで追い込まれたことに対する悔しさが見てとれましたが、今は怒りの方がはつきり見て取れます。

まあ、端的に言えばそうなりますが、それは言いません。

「これからやるうとしてにボーマンダはいないほうがいいのかと思っただんです」

適当、というわけでもないけどそう濁す。

ちなみにウソは言ってますんよ？

「……へえ、いいわ。私にとっては2VS1が1VS1になったんだから、状況が好転することに変わりはないんだものね」

あー……ごめん。

たぶんシロナさんは詰んでるじゃないかと思うんだけどなあ。

まあ見てからのお楽しみということぞ。

\*

「ガブリアス、つるぎまいよー」

シロナさんはほぼ詰みなので、別につるぎのまいを邪魔することなく、好きにしてもらいました。

とりあえずこれで、ガブリアスの攻撃は3段階アップですかね。

ちなみにあのガブリアスは、なのでメロメロ（相手を『メロメロ』50%の確率で相手は自分に攻撃できなくなる）『状態にする』もゆうわく（相手の特攻を2段階下げる）も効きません。

「ラルトス、でんじは」

ラルトスがでんじはを放つが、当たり前な話だけど、ガブリアスには効きません。

しかし、これで全ての準備は整った。

「ガブリアス、ギガインパクト！」

「ガアーヴー……！」

おそろしいまでに攻撃の上があったガブリアスのギガインパクト。まるで彗星の尾のごとく、オレンジの光を垂れ流しつつ、ラルトスに迫ってくるが

「ラルトス」

「（わかってるわ）」

残念ながらその一撃が届くことはなかった。

\*

レッドやシロナだけではない。

「こ、これはいつたい!?!」

「なによ、これ!?!」

この場内にいる全ての人間が驚愕に包まれた。  
彼らの視線の先にあるもの。  
それは

「……黒い……何か……?」

「ガス? いえ、でもならなぜ?」

ガブリアスの足首に何やら黒いモヤのような“ナニカ”が纏わりついていた。

「ガブリアス、振り払える!?!」

シロナの呼びかけにガブリアスも自身の足元に絡まる“それ”から脱出しようと懸命だったが、“それ”は一向に外れる気配を見せなかった。

「“それ”がいつたいなにか」



ただ一人だけ“それ”の正体を知るであろう人物の口許が動く。

「“それ”がいつたいなんなのか、少々解説しましょう」

\*

「“それ”が何かを知るにはナナシマ地方の成り立ちを簡単にでも知る必要があります」

ナナシマ地方はカントー地方の南に浮かぶ島々の総称。

なぜ、どうやって、この島々が形成されたのかを考えてみましょうか。

ゲームではナナシマ地方のモデルとなったのは伊豆諸島、小笠原諸島。

この2つの成り立ちに共通するものがあります。  
それは

## 火山

伊豆諸島、小笠原諸島も火山活動の結果、一部が海面より高くなり出来上がりました。

モデルになったものがそのようにして出来上がったので、当然、ナナシマ地方も同じようにして出来上がったわけです。

「事実ナナシマ地方の“1の島”と呼ばれる島では今でも火山が活動している状態（活火山）であり、火山の地熱を利用した温泉もあつたりします」

他の島は休火山か死火山のようで、ゴツゴツとした岩肌に覆われている部分が多いが、それらは溶岩が冷えて固まったものであるというとも容易に推測できたりします（実際にゲームでもゴツゴツとした進入不可の岩の地形が他と比べると非常に多いです）。さて、火山があるということはマグマに由来する火成岩が存在します。

その中で火山岩（マグマが急激に冷えて固まったもの）である流紋岩、深成岩（マグマがゆっくり冷えて固まったもの）である花崗岩があります。この二つが存在する個所にはあるものが大量に存在していたりします。

「答えは砂鉄です」

砂鉄自体は正直アスファルトじゃない限りどこにでもあります。ナナシマは元々火山なので、それらが大量に存在しています（ちなみに花崗岩の生成には水が必要なので、周りが海のナナシマは他と比べて特にそれが多い）。

「カトレアちゃん、このフィールド、わざわざよそから土を運びこんだんじゃないかって、この別荘を立てる際に掘り返した土や砂を使って造ったんでしょ？」

「え、ええ。そう聞いておりますわ」

「つまり、このフィールドにはナナシマ由来の砂鉄が多く含まれているんです」

岩なんかは海水や風雨なんかで、時間の経過と共に容易に風化されて、砂やあるいは土の中に溶け込みますから、結果砂鉄の多い土壌が出来上がるわけです。

で、オレがやったことは、そこにハイドロポンプで水（純水ではないので伝導率は良い）をばらまき、10万ボルトでフィールドに電気を通して砂鉄に帯電させ、それをでんじはとサイコネシスであやつるということ。

「だから、電気タイプのピカチュウを退場させたんです、でんじはで砂鉄の制御を狂わせないために」

本当ならでんじはだけで出来たかもしれないが、念には念を、というヤツです。

しかし、これでガブリアスの勝ちはおそらくなくなりました。なにせ、ガブリアスが今足をつけているフィールドは文字通り、ガブリアスにとって“敵”となったのです。

「ガブリアス、はかいこうせん！」

外せない足枷のおかげで物理攻撃が出来ないのなら特殊攻撃で、ということのようですが、

「ラルトス、サイコネシス」

そういえばですが、この世界のはかいこうせんは反動はない様ですが、撃つ前のパワー集中にやや時間がかかるようになってます。

パワフルハーブ持ちならパワー集中の時間すらなく撃てるようです。

「はかいこうせん、発射！」

さて、ガブリアスの大口から放たれたはいこうせんがラルトスに迫るのですが、

グ、グイ

無理やり変な力がかかったかのように照準から外れていきます。まっすぐ進んでるときって横方向からの力には弱いですからね（10円玉が転がっている最中に横から押すとアツサリと倒れますよね）。

（いいぞ、ラルトス。そのままはね返せ）

そうしてラルトスのサイコキネシスで方向を曲げていき、ついにはガブリアス自体に向かって直進するような格好となる。

「なんだって……！」

「くっ！ ガブリアス！ だいまんじで撃墜させなさい！」

だいまんじで相殺ねらいか。  
だけどそれってうまくいくかな？

「ラルトス、でんじは！」

だいまんじが放たれた瞬間、ガブリアスの前方に砂鉄の壁が現れる。

「なんですって!?!？」

だいまんじは砂鉄の壁を溶かしきることには成功したが、残ったのはひのこにも劣る程度の炎、というよりもただの“火”。

当然それはガブリアス自身が放ったはいこうせんを相殺するほどにはならず、結果、自ら放った技に自ら食らうということになりました。

まもるの方にすればダメージを食らうことにはならなかったんだけど、常のバトルとは明らかに違う状況にやっぱり動揺してたのかなで、ガブリアスの方は両腕を交差させてサメのひれみたいところで防ぎきったみたいです。

「こうなったら！ ガブリアス、りゅうせいぐん！」  
「ガアー！」

身体を中心にエネルギーが集まり

「ガヴー！」

口から宙に向かって一つの光球が発射される。

そしてそれは、そこで停止すると、数え切れないほどの光球に分裂。それらが一斉にラルトスに向かって降り注ぐ。

「でんじは」

だが、ラルトスはフィールド上のほぼすべての砂鉄をでんじはでかき集め、壁を一重にも二重にもつくりだす。

その直後に、りゅうせいぐんが降り注ぎ始めました。

「くっ！ なんて硬いの！」

「……もはやあのラルトスは別次元……」

壁に阻まれて向こう側が一切見えないのだが、二人のそんな声が聞こえてきます。

実際、フィールドに降り注いだりゅうせいぐんはその威力に見合った大穴を形成しているが、この砂鉄の壁に直撃したものは、壁は少しは削るものの、そこにまた新たな砂鉄が入り込むか、あるいは崩れた砂鉄がまた入り込むため、結果的にはまるでその壁を削り切るには至っていません。

「ラルトス、壁を解除して、そのままガブリアスを拘束しろ。それからみらいよち」

りゅうせいぐんの終わりを見計らってでんじはで、今度はガブリアスの体に纏いつかせるように指示をする。

砂鉄は岸边に迫る高波のごとく、ガブリアスに押し寄せると、両脚、両腕、尻尾、胴体、口とまきつき、それがフィールドに存在する砂鉄と連動して完全にガブリアスを縫い止めることに成功しました。

「ガブリアス！ まもる！」

「もう遅いです！ ラルトス、ごごえるかぜ！」

みらいよちは時間差攻撃のため、先にごごえるかぜの方が決まる。ガブリアスの方はまもるも発動させることも叶わず、効果抜群のごごえるかぜが直撃。

さらに、そこにみらいよちが発動。

身動きの一切取れないガブリアスがそれを避けられないことなどは言うに及ばず

「ガブリアス、戦闘不能！」

2 m近くの巨体は地に横たえ

「レッド様、シロナ様、共にすべてのポケモンを失いました！ よつて、勝者は“全国チャンピオン” ユウト様です！」

ちなみに、ガブリアスが、拘束される前にほえるやいばるをすれば、また違う様相を呈していたことには後になって気がつきました。まあ、さっさと全身を拘束すればよかつたなと反省しました。

\*

夜

ただいま立食形式のパーティーが行われています。

“名目”の方もちゃんとやらなきゃねということ。

ちなみにバトルの方は、さすがに全員とはいかないまでも、かなりの人数とはこなしました。

正直精神的にはヘトヘトです。

「と、言いつつ随分と平皿に大盛に乗せていることね」

「まったく。食い意地が張っているといふかなんというか」

「ハルカさん、ユウキさん、久しぶり！」

ハルカさんはハウエンのジムリーダーセンリさんの娘で、今ではミクリさんと同じく「コンテストに出場」優勝する」と言われるほど

の、頭に『超』という言葉がつくくらいのトップコーディネーターです。

ユウキさんはオダマキ博士の息子さんで、父と同じく研究者となりました。

尤もバトルの方もかなり強く、二人ともチャンピオンリーグで上位に食い込めそうなほどの腕前です。

「ねえねえ、わたしってばまたポロツクとポケモンの組み合わせを発見したのかも〜」

ああ、そういえばそんなこともありましたね。

コンテスト出場ということで、ポロツクやポフィンの味とポケモンの性格の組み合わせ、それから技の効果やアクセサリとそのテーマ、『かつこよさ』『かわいさ』『うつくしさ』などの要素を説明したこともあったりしたんです。

一応ゲームの方ではトレーナーカードのグレードを上げるため、一時期コンテストも頑張ってたのでそのとき取った杓柄で。

ただ、なかなかマスターで勝てなくて途中であきらめてしまいました。

ですので、バトルほどの知識はなかったわけで相当中途半端なものとなってしまいました。それでもハルカさんはいたく感激したらしく、それを実践しているそうです。

この世界のコンテストは、ゲームオンリーかと思えばアニメの方のコンテストが行われているなど、統一性がなく採点基準もよくわからないため、いまいちピンとこないのですが、もし優勝に一役買っているのだとしたら嬉しいかぎりですね。

「ところでこれからユウトはどうするんだ？」

これから、ね。



そうだなあ……。

「ロケット団」

「は？」

「アクア団、マグマ団、ギンガ団」

「そんな壊滅した組織なんて挙げてどうするの？」

「じゃあ、プラズマ団」

「プラズマ団？」

ロケット団はレッドさんたちやゴールドさんたち、アクア団とマグマ団はこの二人とダイゴさん、ギンガ団はオレとヒカリちゃんとシロナさんで壊滅させたことを知っている二人ですが、プラズマ団というのは聞いたことがない様子。

「プラズマ団っていうのはイッシュ地方に存在するロケット団みたいな組織です。尤も、ロケット団とは少し方向性が違って、宗教じみたことで人心を操るだとか、古代の“最強”のポケモンを改造して誕生させるだとか、とりあえず危険な連中であることに変わりはありません」

「……で、そのプラズマ団がいったいどうしたんだい？」

「活動が随分と活発になってきたようです。近々大々的に動き出す可能性も」

少し前、ノズパスの卵を受け取りに行った際ですが、結構いたるところでプラズマ団に出くわしました。

ゲーチスら七賢人たちが活発に動き出している、ということなのでしょう。

プラズマ団に支配されるわけにもいかないので、しばらくイッシュに滞在し、情勢を見届けるつもりです。

オレが出しゃばらずとも英雄候補はきちんといるわけですからね。

まあ、手を出すことも吝かではありませんが。さらにいえばアララギ博士にもお呼ばれされているので、プラスマ団の件がなくともイツシユには行く予定でしたが。

「まあ、何かあったら、わたしたちに声かけなさいよね。そうすればわたしたちはいつでも応援に駆けつけるかもだから」

「ハルカ、毎度言うようだけど、その言い回しだと知らない人には誤解を与えるからやめた方がいいって」

「にははは、口癖だからつい……。なかなか直らないかも？」  
「ハア」

なかなか、苦勞してるようですね、ユウキさん。

まあ、彼氏の甲斐性を見せてください。

「さつて、お！ あつちに料理が追加されてる。GO！」

旅してるとこんな立派な料理はなかなか食べられませんからね。

その後、なんだかんだで全員と言葉をかわして夜は更けていったのでした。

## 外伝8 ユウト タッグバトル VS シロナ+レッド(後書き)

ビミョーにアヤシイ知識が出てきました。一応きちんと調べて書き上げたものですが、「ここおかしいよ」といったものがあれば教えていただけると助かります。ただ、変更できるかといわれるとなかなか難しい次第なので、その点につきましてはご了承願います。

そして何気に第3世代主人公ハルカ、ユウキ初登場。この二人は作中にもあるようにリーグの方とは違う方面で活躍しています。ちなみにコンテストにはあまり触れていかない方向です。

で、一応この話がイッシュとのつなぎの話になります。『プラズマ団に改造された』云々は公式設定から持ってきました。これにロケット団が絡んでくるようですが、どういう風に絡んでくるのか、完全版が楽しみです(クリア後にロケット団のBGMがゲーフリで聞けるのはそのためなんだと勝手に解釈してます)。尤も、この部分は削除する破目になるかもしれませんのであしからず。

この話はホントはもっと後にアップしたかったのですが、これの前話が出来ず、こちらが先に、という格好になってしまいました。いずれ、前の話が出来れば、記事の入れ替えを行う予定です。

ネタ1 BW・タブンネ大虐殺（ほんのりR・15?）（前書き）

『ついカッとなってやった。後悔はしていない』といった超突発的に思いついた完全なネタ要素です。  
ネタということもあり、かなり短いです。

## ネタ1 BW・タブンネ大虐殺（ほんのりR・15?）

### タブンネ大虐殺

この大見出し各種新聞の一面を飾った。

タブンネとはイッシュ地方に生息しているポケモンである。

ヒヤリングポケモンという分類の通り、音に敏感なとても愛くるしいポケモンである。

また、ポケモンセンターにも看護師としてジョーイさんと共に常駐しており、

ティンティンティティティーン

「お預かりしたポケモンはみんな元気になりましたよ」

「タブンネー」

「いつでもいらしてください。お待ちしています」

「タブンネー」

というのは既にイッシュ地方では当たり前前の光景になっている。

ちなみに初めてイッシュを訪れる人はたいてい、

「（元気になったのかなってないのか）いったいどっちなんだよ！」

とツツコミを入れるのがもはやお約束となりつつある（ただ、当の本人たちは当然そのことを知らない）。

また、「タブンネー」の語調が単調なため、素晴らしく投げやりに聞こえてしまうのも、そうツツコマせる一因にもなっている。

さて、そんなタブンネ大虐殺について、特集したあるテレビ番組のコーナーがあった。それを見てみよう。

\*

「皆さん、ここがどこだかお分かりでしょうか。ここはセツカシテイの北、10番道路です。この道路、実はあの世間を騒がせている『タブンネ虐殺』が頻繁におこっている場所なのです」

といった具合にVTRは始まっていく。

「ああ、ひどいですね、これは。かえんほうしゃか何かでしょうか？ 酷い火傷の痕のあるタブンネの死体です。あっ、あっちにも！ カメラさん来てください！」

「ヒドイ。これは殺されてからだいぶ時間が立っていますね。かなり腐っていて、辺りにはすごい死臭が漂っています」

リポーターの人がマイクを持って現場のレポートにあたっていく。ここで、『町の人の意見は』といったテロップが流れた。

「いやあ、なんだかこわいですよね」

「こんなかわいいポケモンを殺すなんて許せないね」

「こづいこうことをしている人たちってどうかしてるんじゃないの？」

などという意見が出されていく。

さらにタブンネ虐殺現場の映像をバックに専門家の電話音声が入る。

「こんなに殺されたのでは、いずれタブンネは絶滅してしまいますよ。それに死体は放置されて腐り落ちるのをただ待つてるだけでしょ？　いつか深刻な伝染病が発生することは間違いないでしょうね」

その後『我々は取材の途中、実際にタブンネ狩りを行っているトレーナーを発見した』というナレーションと共に映像がヤグルマの森の外に移り変わる。

「ねえ、どうしてこんなひどいことをしてるの？」

「いや、ただ単に経験値稼いだけですよ。ア　エのミルホッグに勝てなくてね」

「そうそう！　ハーデリア倒した後のかたきうちとかマジ鬼畜（笑）」

「かわいそうなことだとは思わないの？」

「だってアイツ倒さないと先進ませてくれないじゃん」

「ね。プラズマ団いつまでヤグルマの森で集会やってんだよって感じ（笑）。あんなのがいなけりゃとつくに先行ってレベル上がったから、バッチ取りにくるし。だから仕方ないからタブンネでレベル上げ。だって、しょうがないじゃん。それにタブンネってそこらのトレーナー倒すよりよっぽど経験値もらえるし」

「先輩が言ってたんだけど、レベル高いタブンネってこっち回復してくれるんだって」

「うわ！　マジでタブンネサマサマだね！」

『彼らにはまるで悪気がないようだ』というナレーションで締められる。

だが、まだ続きがあり、さらなる驚愕の事実があるらしかった。

【別に俺らなんてまだまだかわいい方っすよ。リバティーガーデン

島のビクティニ道場とかセツカシティのマツギヨ師範代とか1番や2番道路のヨーテリー・ミネズミ狩りなんかはもつとえげつないんじゃないですか?】

ということで映像が今度はリバティイガーデン島に切り変わる。

「私は今、リバティイガーデン島にきています。リバティイガーデン島へはリバティイチケットを持っていけばヒウンシティのリバティイピアから船で来ることが出来ます。このリバティイガーデン島は数百年前にある大富豪が買い取った島だといわれており、現在では島の中心に大きな灯台がある自然公園になっていてちょっとした観光スポットにもなっています。このリバティイガーデン島、実はあの幻のポケモンビクティニが生息しているのです」

ここでまた、ビクティニを狩りに来たというトレーナーのインタビュ映像が流れる。

「虐殺? 違う違う。オレはただ単にビクティニ師範に稽古つけてもらいに来たただだって(笑)。殺す? ないない。だってすぐ生き返るし(笑)。ゲットしないかだって? だってゲットしたら努力値稼げないじゃん(笑)。師範の努力値、おいしいです(笑)。マツギヨ師範代より全然うまいよ」

『トレーナーのモラルが問われそうです』としてここでスタジオに戻った。

\*



「うんなんとも衝撃的でしたね」

「わたしもトレーナーですけどあんなのといっしょにしてほしくないですね。トレーナーの恥さらしです。だいたいなんですか、努力値って。そんなわけのわからないもののためにポケモンを傷つけることができるなんて考えられませんよ！」

女性のコメンテーターが半分涙を流しながら怒りをあらわにしている。

「じつはですね、付け足しがありました」

そう言いつつ取材をしたりポーターがフリップを取りだした。

「過去にもこういった虐殺事件っていうのは起きてるんですよ。たとえばジョウト地方でしたらアンノーンとか、カントーはコラッタ、ポッポ、キャタピー、マンキー、ハウエンならポチエナやジグザグマ、シンオウならムツクルとかスボミーとかですね。」

といった感じで新たな情報が提供され、それをもとにコメンテーターや司会進行のキャスターが意見をかわす。  
そして時間も差し迫ってきたところで、

「VTRの最後にもありましたが、トレーナーのモラルが問題なんでしょうね。こういうことは一刻も早く止めてもらいたいものです」

として閉められ、番組は次のコーナーへ進んでいった。

ネタ1 BW・タブンネ大虐殺（ほんのりR・15？）（後書き）

BW持ってる皆さんは一度は身に覚えがありますよね。ないとは言わせません（笑）

ということでもゲームに起こっていることが実際に起こったらどうなるかというものを思い立ち、構想時間3分、書き上げ1時間弱というかなりやつつけに近いですが、突発的にやってみました。

ビクティニ師範、すみません。私はまだあなたを捕まえてません。たぶんずっと図鑑のNo.000は埋まらないでしょう。努力値おいしいです。そしてタブンネさん、経験値おいしすぎて虐殺しまくって申し訳ありません。マツギヨ？しらん。

ちなみにジョーイは看護師のような格好をしています。 “看護師”ではなく“女医”です。

## 外伝9 とあるダメ人間たちの奮闘記録（前書き）

このお話は感想での妖精瞳さま、超電磁砲さまにアイデアを頂き、書き上げました。お二方、ありがとうございました。（バレンタイン前に挙げるべく、しかし、記事の入れ替えが出来なかつたので、いったん前の話を削除してから掲載というかなりムリヤリな力技を使ってこのような形になりました）

しかし、『恋愛』というよりは完全に『ギャグ』という方面に傾いてしまいましたので、その点に関しては申し訳ありません。

以下、内容を読み違えてしまう恐れがあるので、ことわざの説明をば。

『情けは人の為ならず』の意味は「情けをかけるのは他人のためではなく、やがてそれが巡り巡って自分にも返ってくるのだから、人には親切にすること」。

『情けは人の為ならず 巡り巡って己が為』とも言つ。

## 外伝9 とあるダメ人間たちの奮闘記録

2月。

寒さが厳しく、ところによっては雪深い地区もある。

広葉樹の木々には葉はなく、なんとも寂しい季節である。

だが、旧暦ではすでに春。

そして植物たちが春に向けて様々な準備をしながらジツと耐え忍びつつも、その息吹があちらこちらで感じられる季節でもある。

そんな2月初頭のイツシュ地方サザナミタウン。

ここは輝くような海が人気で避暑地としての評判がかなり高い。

そのため夏にはたくさんの人がバカンスに訪れる。

そんなサザナミタウンの一角にある別荘の一つ。

地元の間からは「百合の館」「女の園」「実写ストパニ」「マリみてinnイツシュ」などと噂されていたりする。

さて、今現在そんな別荘に集まっている面々を紹介する。

まずは一人目、この別荘の所有者であり、以前はシンオウバトルフロンティアバトルキャッスルオーナーを務めていたが、辞した後はイツシュ地方四天王となったカトレア。

二人目、ジョウト地方チャンピオンマスター兼ジョウトバトルフロンティアバトルタワー、マルチバトル部門フロンティアブレーン、コトネ。

三人目、トップコーディネーター、通称ハウエンの舞姫orコンテスト荒らし、ハルカ。

四人目、イツシュ地方フキヨセジムジムリーダー兼航空機パイロット、フウロ。

五人目、イツシュ地方ライモンジムジムリーダー兼ファッションモデル、カミツレ。

六人目、カントー・シンオウ準チャンピオン、ジヨウト・ナナシマ・ホウエンチャンピオン（ただしすぐにやめる）、ヒカリ。そして最後、この場を呼びかけた発起人であり、本来ならこの季節イッシュにはいないはずのシンオウ地方チャンピオンマスター、シロナ。

「ていうか、だれがコンテスト荒らしよ！」

以上の7人である。

「無視するなあ……！」

いや、だってコンテストに出場すれば必ず優勝をさらっていくじゃないですか。

主催者側からすらもその名が認知されてますよ？

「ぐっ……」

さて、押し黙ったところで先に進めましょう。

なお、この場に集まっていない他の女性の面々にもシロナは声をかけたのだが、「ジム戦・四天王・フロンティアブレーンで忙しい」「旦那とデート」「再放送のホウエン黄門を見る」「暴れん坊チャンピオンの最終回を見る」「大陸横断ウトラクイズに出る」「クロナの誘いはロクなことがないからイヤ」ということで来なかった。ちなみに「忙しい」以外の理由に関しては「ざけんな、ゴラァ！」と荒れる金髪のチャンピオンがいたとかいないとか。

「ではこれより、皆さんには殺し合いをしてもらいます」

別荘の食堂のダイニングテーブル。

その上座に座っていたシロナが立ち上がると徐おもむきにそう発言した。

「……………」

食堂にひたすら寒い空気が漂った。

「フウロ、帰るわよ」

そんな中、その空気を壊した者が一人いた。

名をカミツレという。

彼女は隣に座っていたフウロを促し、この場を立ち去ろうとする。

それを合図にシロナ以外の面々が無言で席を立ち始めた。

「あつ、ちよつ！ 待って！」

「シロナさん、そんなくだらないことでアタクシの別荘を使うのはやめてくださらない？」

シロナの訴えをピシヤリと棄却するカトレア。

ところでその異常なまでの頭髪の量は重くないんですか？

「やかましいですわ」

失礼しました。

「いや、ホントに今回は乙女にとって重要なお話なのよ！？」

「年を考えてくださいませ、シロナお・婆・さ・ま」

「……………あらあらあらまあまあまあカトレアちゃん。コトバには気をつけないと早死にするわよ？」

「ああもう！ ほらシロナさん落ち着いて！ カトレアちゃんもむやみに煽らない！」

慌てるさまから一転、自身の金髪を意志を持ったヘビのごとくユラユラと揺らしながら、シロナがカトレアと女の闘いを始めようとしていたところを、ヒカリが間に入って仲裁。

コトネのことといい、いろいろと苦勞が絶えない人です。ちなみにそんなコトネは

「（；、）ハアハア、フウロたん、しゅきしゅき！」

発情してました

「カミツレちゃん助けてー！！」

「ごめん、今だけは親友止めさして……」

フウロはカミツレに助けを求めるが、カミツレはそんなフウロと視線を合わせることはなく、フウロとは若干距離を置く。

他の面々もコトネとは距離を置いていた。

何せ、近づいて止めようとしようものなら、自分がアレの餌食になることを実体験しているからだ。

「カミツレちゃんの薄情者ー！」

かくいうフウロも今まで、たとえ親友のカミツレが襲われていようとも、止めずに逃げ出していたのだから、まさに情けは人の為ならずといった状況だ。

無論、全然いい意味では使っていない。

しかし、そんな中でもきちんと救世主<sup>メシア</sup>は現れる。

「コラー！ コトネ、いい加減にしなさい！！」

コトネとジヨウトを共に旅をしたヒカリである。

「あーん、センセ。もしかして妬いてくれてるんですか？」

「ちゃうわ、ポケエ！！ いいからフウロから離れなさい！」

「でも、センセ。フウロさんのモフモフはクセになりそうなんですよ。カミツレたのはまな板だし、センサーのは質・大きさともにちょうどいいんですけど、フウロさんのはバインボインなので気持ちいーくて」

その瞬間、スイッチの入った二人（誰とは言わない）。

「ムウマージ、サイコネシス！」

「ゼブライカ、ワイルドボルトよ！」

光の速さでポケモンを召喚すると、それぞれ、サイコネシスで雑巾をしぼることく身体をひねるようにして引っ剥がし、ワイルドボルトで突撃。

「グウエー！」

壁に叩きつけられたコトネはカエルが潰されたような声を上げる。しかし、まだまだの追撃の手は緩まない。

「出てこい、カイリキー！」

「リッキー！」

腕が4本あるボディビルも真っ青な体格のカイリキーが登場する。



「カイリキー、からてチョップ連打！」

「リックキー！ リキリキリキリキリキー！！」

「ゴッ！ ガッ！ セッ！ ンセッ！ ちょ！ まっ！ ブヘッ！  
うお！」

カイリキーがその4本の腕を使ってからてチョップの雨を降らせている。

周りには赤い水っぽいものが飛んでいる気もするが、気のせいだとして全員が華麗にスルー！。

「ヒカリ、カイリキーをあの汚物から離れさせて！ ライボルト、  
10万ボルト！」

ヒカリがカイリキーを戻すと同時に、トドメとばかりにいつのまに出したのやらライボルトの10万ボルトが炸裂。

「びび……びびび……」

倒れ伏すコトネ。

『悪は滅んだ』とばかりにガツシリと握手を交わすヒカリとカミツ  
シ。

乙女の怒りは恐ろしいのだ。

\*

「で、本題よ本題」

まるで何事もなかったかのようにシロナは進める。  
制裁を加えられた彼女のことは誰も気にしてはいなかった。  
コトネが来れば、常日頃行われる日常的な光景だからだ。

「みんな、2月14日は何の日か知ってる？」

「いきなり何を言い出すんだ？」とばかりに食堂には困惑が広がる。  
ちなみに、今年の2月14日は平日である。

「ユウト君が前にポロツと零したことなんだけど、2月14日はバレンタインデーって言う女の子にとっては特別な日なんだって」

聞き慣れないその言葉に集まった面々はもちろん、食堂で給仕をしていた屋敷のメイドすらも注目する。

ただ、メイドは仕事なのでシロナに視線を向けるのではなく、耳を傾けていた。

女の直感が「何やら捨て置けない！」と警鐘を鳴らしていたからだ。

「バレンタインデー、それは一年のうちで最も女の子の告白の成功率が高い、『男女の愛の誓いの日』なのよ!!」

この食堂内の空気が先程とは打って変わり、一気に最高潮にまで達していた。

5人がシロナに熱い眼差しを向けて話を先に促し、メイドたちは自身の耳をダンボのようにデックかくしていた。

心なしか、そのせいでやや仕事の進みが緩やかになったようにも見受けられる。

ちなみに

「告白ねえ。あたし関係ないかも」

と口を開いた杭は

「うるさいわよ、そっ」

「いいよねー、ハルカちゃんもカレシいるんだし」

「リア充は一度お亡くなりにならねばなりませんわ」

「ハルカさん、ちょっと外で“だいばくはつ”してきてください」

「空気読め、カモ娘」

「うっ。みんなちょっと言います……スミマセンでしたm」

m

という風に打たれていた。

それから、

「ムハー）。。(=3 ということはコトネがその日に愛の囁きをすればみんなコトネのことを愛してくれるのですね!？」

「それはない」「」「」「」

「グスン、みんなヒドイ。でも、コトネ、こんなことでへこたれな

いー」

「」「」「」「いや、いい加減あきらめろよ」「」「」「」

勘違い乙！なのにもそれは同様であった。

「で、このバレンタインデーは外国の習慣で具体的にはどういうものかというところ、いくつかあるらしいんだけど」

といった感じで説明していく。

現代ではバレンタインデーは世界的なイベントである（ただ、キリスト教色が強いイベントでもあるため、国によっては憲法に違反するとして禁止されており、これを犯した者には場合によっては死刑を宣告されることすらもありえたりする）。

欧米などでは男性も女性も様々な贈り物を恋人や親しい人に贈ることがある日とされているが、あいにくユウトは現代日本からこの世界に来たため、日本的なバレンタインの話が主であった。

その日本のバレンタインデー。

いくつかあるが、そのうち大きくクローズアップされるのが、『女の子が男の子に“愛の告白”としてチョココレートを贈る』というもの。

別にバレンタインデーのイベントのある地域では恋人やお世話になった知人にチョココレートを贈ることはあるが、なにもチョココレートに限定されているわけではなく、またバレンタインデーに限ったことでもない。（付け加えれば、女性から男性へ贈るのみで反対に男性から贈ることは珍しいという点と、贈る物の多くがチョココレートに限定されているという点は、日本のバレンタインデーの大きな特徴である）

「チョココレートじゃなくて、クッキーとかケーキでもいいらしいんだけど、やっぱりチョココレートがメジャーなんだって」

他にもお世話になった知人にチョココレートを贈ることがある。

この場合は『義理チョコ』という。

「とまあだいたいこんな感じみたい。何か質問は？」

外国の習慣ということだ、「まあ知らなくても仕方ないか」という流れになり、さらに「チョコは愛情を見せるために手作りに限るわ！」という一声で、チョココレートはつくるといった話になった。

「じゃ、みんながんばってね」

一通り話が済み、さあこれからというときのシロナのこの発言。いったい「何を？」という雰囲気になったが、この中で一番シロナと接している時間が長いであろう彼女が動き出す。

「……シロナさん、あたしは言わなくてもなんとなくシロナさんの言いたそうなのがわかります。あなた料理苦手ですもんね。で、シロナさん、いったい『何』を頑張るんです？」  
「そんなの決まってるじゃない、ヒカリちゃん。」

みんながチョコを作る。で、私がそれをユウト君に渡す。カンツペキね、私のアイデアは！」

「アホかー!!」

ヒカリのでんこうせっか！（シロナ用の特大ハリセン装備）  
きゅうしょにあたった！

といった感じでヒカリがシロナに対してO H A N A S H I するという一幕もあったが、実際料理が苦手なのはシロナ以外もカトレア・コトネ・フウロ・カミツレとヒカリとハルカ以外の全員。結局妥協案として、製菓用のビターチョコを仕入れ、それを溶かして味を調えた上で、各々の好む型で固めて作り上げるということになった。

以下、その調理風景

「くおらあ、コトネ！ 材料食いまくるんじゃない！ それからあたしがつくったものをつまみ食いするんじゃない！！」

「シロナさん！ チョコは細かく刻んでから湯煎していかないダメかも！」

「カミツレさん！ 湯煎の温度高すぎ！ そのお湯沸騰してるから！ チョコ焦げちゃうから！」

「フウロちゃん！ 卵使うのは構わないけど、カラもいつしょくたに混ぜたら大変なことになるかも〜！」

女の子じゃなくてもそうだけど料理は出来た方がいいですね。今のご時世、料理が出来るのは男女ともに得点は高いです。

「っ、つかれたああ……………」

「も、もういいかも……………やだ……………」

調理場にいたコックやメイド曰く、料理できる組が床にへたり込む傍ら、出来ない組の顔や全身になぜかチョコが飛び散っている様には、ご愁傷さまという思いを禁じ得なかったという。

後日、そのチョコは作り手の想いと共にきちんと手渡された。

その際、バレンタインを教えた者の責任として、受け取った男連中にいろいろとレクチャーしているユウトの姿があったという。

余談？

「思ったんだけど、ヒカリとシロナさんはユウトって彼氏がいるんじゃないの？」

カミツレのその一言に目をそらす2人。

目には若干涙が浮かぶ。

「えっ？ ちょっ、なんで！？ フウロ、どうにかして！？」

「ええ！？ カミツレちゃん、そこであたしに振る！？」

仲良しコンビがアワアワしている後ろで、

「だって、最近全然連絡ないし」

「バトルどころか会うことすらありませんもんね」

暗い雰囲気醸し出す2人。

肩にはキノコが生えそうなほどジメジメしていた。

さらに

「と、いうことはアタクシにもチャンスがあると」

と虎視眈々と狙うおぜうさまもいれば

「センサー！ コトネの愛を！ 一心不乱の快楽と墮落に溺れた愛を受け取ってええ！」

「コトネちゃん、発情するのはやめなさい！ というか意味分かって言ってるのお！？」

と暴走を始めるヘンタイを羽交い締めにして必死に止めるコンテス

ト荒らしもいた。

「なんですか、このカオスは？ 終末が近づいているのですか？ 次のターンにアルマゲスト撃たれちゃうのですか？」

「それ違う。アルマゲストじゃなくてミツシングだから」

「某四角いメーカーの最後の物語？ ・？ ネタは自重しなさい。そしてユウト様、責任とって下さい」

その惨状を見た屋敷の人間の心はそう一致した。

余談？

(へえ、これは一山稼げるかもしれないね)

そんなことを心中で宣ったのは世界的な大富豪を父に持つイッシユ四天王のカトレア。

彼女の家は今でこそ家格がその位置に位置しているが、昔からそうだったわけではない。

商才でのし上がってきたわけだ。

父もそうなら、娘にも当然というべきなのか、それがカトレアにも受け継がれていた。

(製菓部門の業績がワンランクもツーランクもアップするかもしれないね。ただ、これを一般にも広めなければなりません。メディアにはお父様のほうから圧力をかけてもらいましょう。コメントーターや“自称”専門家とやらにはお金を積みめば、バレンタイン普及にもホイホイ協力してくれるはず。いえ、是が非でもさせましょう。とにかくこれからバレンタインまではバレンタイン一色で染め



ましよう。この国はメディアを操ればホイホイと国民も乗ってきてくれますから、簡単なことです)

……まあ、メディアも資金がなければやっていけなく、その資金という名の広告費はカトレアの家の系列の広告代理店が半ば独占状態であるため、今のような手法もとることも不可能ではないのだが、娘にはまっとうに育ててほしい。

それを聞いたカトレアの父は後継者としては歓迎しつつも、娘の成長としてはそう思わずにはいらなかった。

## 外伝9 とあるダメ人間たちの奮闘記録（後書き）

この小説の紹介には『ダメナさん』という言葉があるので、そちらを目指していたらこうなってしまうた（コトネ？彼女はいつも通りの平常運転ですw）

ちなみにネタ風味ですが、他の構想中の外伝にも関連がありそうなので、【外伝】の冠をかぶっています。

それからチヨコを貰った男連中はホワイトデーにきちんとお返しを返しています。

いったい何を返したのかは一部の人間についてはいずれやる予定です。

ゼンゼン関係ないですけど、血だまり スケッチの6話には心底ビツクリした（いや、3話もそこそこ衝撃的だったけど6話はもう…  
…）。あまりのことに笑いが止まらなかった。虚淵マジパネエ…

## 外伝10 ヒカリ ときわたり（前書き）

このシリーズは感想でのぽけ介さまのアイデアを頂戴し、書き上げました。ぽけ介さま、ありがとうございました。

また、この話は本編の3話と4話の間のお話ですので、ラルトスが話せるということはヒカリやシロナには知られていません（初めて知ったのはギンガ団関連でテンガン山に登るとき）。このシリーズではその点に留意を置いていただきたく存じます。

### 追記

記事入れ替えのため、いったん削除して再掲載という形を取りましたので、以前のものと変更はありません（ユウトの手持ち以外）

## 外伝10 ヒカリ ときわたり

ジヨウト地方ヒワダタウン。

いつも町中にヤドンがいて、ヤドンがあくびをすると雨が降るとの伝承が伝わっている長閑な町。

そんな町の北には、カントーではトキワの森、ホウエンではトウカの森、といった風にジヨウトの森といえば必ずこの名前が出てくるといった具合に、ジヨウト地方を代表するような有数の森林地帯が広がっている。

その名はウバメの森。

昼間でも日光が入らないほど、木が鬱蒼と生い茂っており、ヒワダタウン名産の「もくたん」の材料が切り出されていたりもする。

そしてその森の中ほどには“森の神様”あるいは“森の護神”をまつる祠があった。

\*

「ああ！ 見てください、センサー！ アレですよ、アレ！」

ジヨウト地方で2つ目のバッチをゲットしたあたしたちはヒワダタウンとコガネシティの間にあるウバメの森にいた。

そして、このウバメの森にある祠の話聞いてきたコトネが立ち寄りたということ、此方に足を向けたワケだ。

尤も、出口に向かう途中にあったので、必然的に通りがかることにはなっただけだ。

ちなみにコトネは賽銭箱もないのに賽銭を祠に投げ入れていた。

……うん、あたしは別にツッコまないヨ？

「センサーとキャツキヤウフフが出来ますように。センサーとキャツキヤウフフが出来ますように。センサーとキャツ、

ゴウフッ！」

とりあえず、思いっきりそこらに転がっていた石を脳天に叩きつけました。

「し、しどいですが、センサー」

「うるさいだまればかへんたいあほきちがいがいちゆう！」

「あーあ、せつかくあと少しで3回言えたのに。そしたら願いは叶うんですよね！」

「叶わんわ、ボケエー！」

あまりのことに火事場の馬鹿力のごとく、やや大きな岩をヘンタイに叩きつけてしまった。

「グスツ。コトネ、ちょっと涙出そう」

いや、なんでそれだけ何ですかアンタは！？  
人間止めてんの！？

とまあ痴態はこの辺にして

「この“森の神様”ってきつとセレビィのことよね」  
「セレビィ？」

「あれ？ ジョウト地方の幻のポケモンなんて知らんけど知らない？」  
「うーん、聞いたことないですねえ」

『まあ、幻と言われるぐらいだから知らないのも当然か』と心の片隅で思いつつも、あたしはバックから自分のポケモン図鑑を取り出して、コトネにも見えるように、いくつか操作する。

「これがセレビィよ」

『セレビィ ときわたりポケモン』

森の神様として祀られる、時間を越えて彼方此方をさまようポケモン。セレビィが姿を現した森には草木が生い茂るといっ

とといった具合に電子音声が響き渡る。

「ときわたりポケモン、ですか。“ときわたり”というのはなんですか？」

「文字通り、“時渡り”よ。セレビィは時間を移動することが出来るの。タイムスリップって言えばいいのかしら」

「えー、なんかビミョーに胡散臭いような」

「ポケモンなんて不思議なものよ。超能力が使えたり、中には時間や空間、世界すらも生み出しちゃうようなポケモンもいるし。それに、セレビィの時渡りはあたしも一応経験したことあるのよ」

「……何か今サラッとすごいことを耳にした気がしますが、とりあえず。センサーって時渡りって経験したんですか？」

「今そう言ったじゃない」

「やっぱ、センサーはただ者じゃあなかった！ んで、センサー、その時渡りを経験したときってどうだったんですか？ ぜひとも聞かせてください！」

「うーん、そうねえ……」

これはそんな“時渡り”を経験したヒカリの話

\*

シンオウ地方。

あたしはユウトさんといっしょにシンオウ各地のジムを巡り、旅をしていた頃。

キツサキシテイで6つ目のバッチをゲットして7つ目のバッチをゲットするため、ミオシティへ、ハクタイシティからハクタイの森を抜けてソノオタウン コトブキシテイ ミオシティという経路で抜けようとしていた。

そしてハクタイの森の中頃まで来たときのことだった。

「どうした、ラルトス？」

ユウトさんのラルトスが何かを感じたらしく、そちらに向かい、森の中を分け入っていく。  
あたしたち、それからキツサキから同行しているシロナさんも合わせて彼女の後を追った。

「ここ、どこかしら？」

「シロナさん？」

「わたしも旅はしてるけど、ハクタイの森でこんなところがあるなんて見たことも聞いたこともないわ」

いつの間にかと言うべきだろうか。  
シロナさんの言葉通り、普通の森とは違って樹齢でいえば数百年は下らない、もはや単なる木ではなく、『大樹』と呼称すべき木々が所彼処に乱立していた。

「ひょっとして、普段人間は立ち入れないところだったりしてね」  
ユウトさんがそんな冗談を零しながら（でも案外冗談でもなさそうではある）、さらに先に進む。

しばらくいくと、ハクタイの森に生息するポケモンはもちろん、どう見てもこの森には生息していないポケモン（山や草原に洞窟、さらには水辺にいるようなポケモンまで）たちと遭遇した。  
みんなあたしたちのことを警戒していたようだが、どうやらラルトスが説得してくれているようで、ポケモンたちが襲いかかってくるということにはなかった。

「あれは……！」

まるで朝の日射しの中での木漏れ日のごとく、そんな森の中で、神聖さを醸し出す祭壇のような、平らであたしはおるかユウトさんやシロナさんよりも大きな一枚岩が鎮座していた。  
その周りには様々な種類のポケモンたち。  
皆一様に、その一枚岩を、あたし個人の推測の域を出ないけど、心配そうな面持ちに見つめている。  
いや。

正確に言えばその一枚岩の上にひどい怪我をして横たわる、ある“ポケモン”に視線が集まっていた。

「まさか……でもなぜ……！？ いや、そんなのは後で、とにかく



治療しよう!」

ユウトさんは驚いた顔をしていたが、すぐさまバツクからかいふくのくすりを取り出すと、そのポケモンに駆け寄った。

\*

「ビィ、ビィ〜!」

「ラル、ラルー」

どうやらあのポケモンは元気になったようだ。

今はあたしたちの周りをラルトスと一緒に元気に飛び回っている。

「ビィ、ビィビィ〜!」

なにやら「ありがとう!」っていわれている気がして嬉しくなる。

「で、ユウト君、このポケモンは?」

見たことも聞いたこともないポケモンにあたしたち二人の視線がユウトさんを集まる。

「うん、このポケモンはセレビィ。ジョウト地方の幻のポケモンです」

そうして彼は自分が持っていたポケモン図鑑を見せてくれた。その中に、気になる言葉があった。

「『時間を越えて彼方此方をさまよう』ってどういうことですか？」

「その言葉通りだよ、ヒカリちゃん」

「まさか……時間移動、タイムスリップ？ でもそんなことが現実  
に起きるの？」

時間移動。

つまり、過去に行くことも出来るし、未来にも行くことが出来る。

「そんなことがありますか？」

「別におかしなことじゃないよ。大地や海を生み出したポケモンも  
いれば、時間と空間を生み出したポケモンだっているんだから」

大地や海、ホウエン地方の伝説のポケモン、グラードン・カイオー  
ガ。

時間と空間、シンオウ地方の伝説のポケモン、ディアルガ・パルキ  
ア。

いずれも、人間からすれば、途方もないモノを生み出したポケモン。  
人間の力では及びもつかないそれらに比べたら、確かに時間移動も  
似たようなものなのかもしれない。

「ラルトスが『これからセレビィが時渡りを見せてくれる』だそう  
です」

え？

そう疑問に思う間もなくあたしたちは白い光に包まれた。

\*

「ここは……?」

目の前には透き通った水で満ちている湖。

周りには木々が生い茂っているが、森と言うほどではなく林ぐらいがちょうどいい。

ただ……

「「「さむ〜〜い!〜!」」」

辺りは猛烈なまでに吹雪いていた。

「ラル! ラルラル!」

「ビィ、ビィー……」

ラルトスはセレビィに向かってもものすごく怒っているようだった。シンオウ地方は、全国の中では比較的寒冷な地方とはいえ、晴れ渡って気温も高くなり、かといって低くもなくといった場所から、いきなり頬に叩きつけるような横殴りの猛吹雪の場所に飛ばされたら文句も言いたくなるのはよく分かる。

ラルトスとセレビィはおいといて、とりあえず、

「うう、ニドクイン、キミに決めた!」

「り、リザードン、出てきて!」

「ご、劫火におど躍れ、バクフーン!」

全員手持ちの中で炎タイプのポケモンを取り出して

「「「にほんばれ!!」」」

考えることは一緒だった。

\*

「ここはエイチ湖だったのね」

ひとまず吹雪を無理やり止ませたあたしたちは、ここがどこなのか、ということを知るために辺りを探索することにした。

にほんばれによって湖近辺だけだが、吹雪が止んで晴れ渡り、視界が開ける。

すると、近くにロッジ風の建物があったので立ち寄ってみると、そこはエイチ湖ほとりに佇むペンションの1つだったのだ。

ついでに今日はこのペンションにあたしたちは泊まることにした。

「急に湖が晴れ出したから『なんだ?』って思ったけど、そういうわけだったのか。でも、今日はどこもあの猛烈な吹雪で出かけるのはおススメしないよ。悪いことは言わないから今日は泊まっていくといい。明日になれば今日とは打って変わって快晴になるそうだからな」

とこのペンションのオーナーに言われたからだ。

事実、窓の外を見ると、にほんばれの効果が切れてきているようで、また吹雪き始めていた。

別にあたしたちはセレビィの“時渡り”で来たわけで少し我慢をすればいいだけだから、そのまま休息を取ったら出ていっても良かった

ただ、寒冷装備は持ち合わせていなかったあたしたちがそんな気候の中、外に出ていけば、オーナーの心持が悪くなるだろうし、非常に目立つ。そして問題はそれだけではなかった。

\*

「場所はわかりました。で、結局“ここ”は何なんですか」

壁際にある大きな暖炉がある木目調の、ホールというより喫茶店に近い雰囲気のような場所。

今、その暖炉の目の前にあたしたち三人とセレビィ・ラルトスが陣取っていた（今日は今のところ客はいないので問題ない）。そしてあたしが発した言葉に全員が全員困ったような顔を浮かべた。もちろんあたし自身もその一人だ。

「ビィ、ビィビィビィ」

「ラ、ラルラルラ、ラーラルラ」

「で、加減を間違えたらしいです」

ラルトスがセレビィから事情を聞き取り、その内容をラルトスがテレパシーでユウトさんに送信。

それをユウトさんが話すと言った感じで説明が行われています。で、それによるとセレビィの体調があまりに絶好調だったらしい上に、ラルトスが普通に接してくれたのがあまりに嬉しく（普段は普通のポケモンに出会っても相手の方が畏まった扱いをするらしいです。さすが森の神様と言われるだけはある）ハイテンションになっていたおかげで加減を間違えてしまったらしいようです。

で、“ここ”は何なのか。  
簡単にぶっちゃけると、ここはあたしたちが全く知らない世界です。  
ユウトさん曰く、あたしたちがいた世界とはなんらつながりはない  
世界。

時間の流れは同じで、たとえすぐそばにあらうとも、決してお互い  
が交わることがない世界　平行世界　というんだそうです。

結論をいえば、あたしたちは“時渡り”どころか“世界渡り”まで  
行ってしまったようです。

「で、セレビィ、結局私たちは元の世界に戻るのかしら？」

「ビィビィ」

「ラルラル」

「……がんばる、だそうです」

「ハア……つまり保証はないと」

あたしたちは思いつきり深くため息をついた。

そのときだった。

カランカラン

ペンションの入り口のドアに吊るしてある鐘が鳴った。

「やー、まいったぜ」

「ピカピカ」

「ホントに。猛吹雪かと思ったら晴れて、ちよつと経ったらまた吹  
雪とか。いったいなんなのよ〜」

「ポチャポチャ」

「とりあえず、ここで一休みしよう」

男の子が二人、女の子が一人、それからピカチュウにポッチャマかな（？）、とにかくポケモンが2体、そんな一団がこのペンションに入ってきたようだった。

オーナーが迎えにいつている。

ただ、何かおかしいと感じた。

ここは全然知らない世界。

あたしたちの知り合いなどは皆無の世界。  
なのに

……あたしの聞き間違いだろうかとも思ったけど、セレビィを除いて全員が驚きの表情を浮かべていた。

「いらっしやい、大変だったろう？つて、ええっ!？」

オーナーの驚きの声が聞こえてきた。

「キミ、今ホールにいたよね？」

「え？」

「ポチャ？」

「あのー、オレたちここにはじめてきたんですけど」  
「ピカ」

「見ての通り外はすごい吹雪なので、少し休憩させてもらえませんか？」

「あ、ああ」

そうしてホールに入ってきた一団。

……うん。

まずピカチュウとポッチャマは何となくわかってた。

そして男の子二人もあたしの知らない人たち。





## 外伝10 ヒカリ ときわたり（後書き）

図鑑の説明文は金（HG）とクリスタルから持ってきました。そして『“時渡り”じゃねーよ』と、書いてた自分でもつつこんでました。このセレビィは個体値6V（オール31でMax）の個体なんだと解釈してくださいm（）m（）m

Wikiによれば、ヒカリのことをピカチュウは「ピカカ」、ポッチャマは「ポチャチャ」と呼ぶんだそうです。

### 追記

ユウトの手持ちがゴウカザル ニドクインに変わりました。

外伝 1 1 ヒカリ ときわたり (前書き)

この話は本編の3話と4話の間のお話ですので、ラルトスが話せるということはヒカリやシロナには知られていません(初めて知ったのはギンガ団関連でテンガン山に登るとき)。このシリーズではその点に留意を置いていただきたく存じます。

## 外伝 11 ヒカリ ときわたり

あたしたちは彼らにあたしたちの事情を説明することにした。

「へえ、オレたちとは違う世界ね」

「平行世界……夢があつていいなあ」

「ピカ、ピカチュウ」

「ルー、ラルラー」

「ポチャ、ポチャチャ？」

「ポッチャー！」

「ビィビィ」

あつちの方では、人もポケモンも、世界が違っていようとでも、そんなの関係えねえ！」とばかりに親交が深まったらしい。

「……………」

「……………」

一方、こちらはこんな感じ。

化粧室に立ち、洗面台の鏡の前に立っていたら、こちらの世界のヒカリと出くわしたのだ。

(どうすればいいのかな)

普段はそんなことはないのだが、あたしはもう一人の自分に対してかける言葉が見当たらなかった。

化粧室に立った一番の理由はそれだったりする。見たところ向こうもあたしと同じ気持ちらしい。

世界が違うとはいえ、あくまで“自分”のことだからなんとなくわかる。

しかし、なんとかしなければいけないのもわかっている。  
内心深呼吸をして落ち着かせる。  
よし

「「……………あ、あの」「」

!?

声が重なり合ったせいか、お互い怯んでしまった。  
な、なんとかしないと。

「「……………え、えと、お先に」「」

!?

シンクロし過ぎだよ、あたしたち。

「……………あ、ホントあたしは後でいいから」

「い、いいよ、わたしの方が後で！」

「いや、ホントあたしが後でいいから」

「いやいや、わたしが　！」

いったいどのくらいそんなやり取りを繰り返していたのか。

いつのまにか

「プツ」

「アハハ」

笑いあつて

「なんかあたしたちバカみたいね」

「ねー。あ、そういえば気になってたんだけどさー」

打ち解けあつて

「つてわけなのよ!」

「うわー！ わかるわかる!」

深い友誼を交わしあっていた。

「あなた達どうしたの？ 遅いから来てみたんだけど」

「うわっ。」

「だいぶトイレで話し込んでたみたいだ。」

「シロナさんが化粧室の扉を開けて中をのぞき込んでいた。」

「あ、ごめんなさい、シロナさん。今戻ります」

「そうしてあたしたちはユウトさんやサトシ君たちがいるところに戻る。」

「（ありがとうございます、シロナさん）」  
「（気にしないで。でもよかったわ）」

後ろでこの世界のヒカリがシロナさんにお礼を言ってるのが聞こえた。

小声だったけどしっかりと聞こえてきたそれにあたしは二人に感謝した。

「遅かったね、ヒカリちゃん」

「もうこっちのヒカリとはうまくいったのか？」

ユウトさんとタケシさんにも声をかけられた。

こちらにも心配かけたようだ。

「だいじょうぶ！ わたしたちもう親友だから！」

後ろから抱きつきのしかかるよいにしてヒカリが言う。

「ホントかあ、ヒカリの「だいじょうぶ」は全然「だいじょうぶ」じゃないからな」

「もう、サトシ！」

ニヤツいた顔でからかうサトシに対してヒカリは頬をプクッと膨らませていた。

尤も、怒っているという感じではないことから、どうやら普段からもそうからかわれているのかもしれない。

まあ、親友の誼として一応手助けはしておこう。

「うん、バッチシだよ。ありがとう、サトシ君。タケシ君もありが

とうー！」

「うわっ。こっちのヒカリからそう呼ばれてる気がしてなんだか違和感ありすぎ。オレのことはサトシでいいぜ！」

「俺のこともタケシでいいよ。よろしく、ヒカリちゃん」

その日は夜遅くまで笑い声が絶えなかった。

\*

明くる日。

ペンションのオーナーの言った通り、天候は昨日とは打って変わって、雲一つない快晴だった。

そんな中、あたしたち6人とそれからピカチュウ、ポッチャマ、セレビィがエイチ湖のほとりの一角に集まっていた。

「ではこれより、バトルを始めます！ ジャッジは不肖、元カントーニビジムジムリーダーのタケシが務めます！」

トレーナーなら出会えば即バトルなんていうのもザラではあるが、誰と誰がバトルをするのかというと、

「ヒカリ、手加減なしの本気でいくからね」

「わたしだって負けないんだから！」

それはあたし（ヒカリ）とヒカリのバトルだ。

こちらのヒカリはコーディネーターを目指しているらしく、バトルの方はそれほどでもないらしいのだが、戦ってみたいということだったので、こちらも断る理由があるわけもなく、ヒカリの申し出を

了承した次第だ。

ちなみにこの後にはサトシとシロナさんのバトルをする予定だったりする。

異世界とはいえチャンピオンであるシロナさんにどれだけ今の自分が通用するのか確かめてみたいとのこと。

ついでにいえばサトシはバッチが6つでキツサキシティを目指していた途中だったらしい。

「ルールの確認をします！ 使用ポケモンはそれぞれ1体のシングルバトル！ 道具の使用は禁止とします！ 以上！」

基本的にはあたしたちの世界でのルールと同じです。

一応『道具を持たせるのは禁止』とは言われてはいないですけど、『ポケモンに道具を持たせる』という概念はあたしたちぐらいしかないようなので、道具を持たせることはしていません。

「双方準備はいいかい!？」

あたしはボールポケットの一番目に場に出すポケモンに右手をかけた。

「ではバトルスタート！」

あたしはその手でボールを掴み取ると、それを大きく振りかぶった。

\*

「あのポケモンは」



ヒカリがポケモン図鑑を取り出してあたしの繰り出したポケモンに向ける。

『レアコイル　じしやくポケモン　電気・鋼タイプ  
コイルの進化系。3体のコイルが強い磁力で繋がったポケモン。たくさん集まると電化製品に異常をきたす。ばらけると元のコイルに戻る』

こつちの世界って図鑑で何の進化形だとかタイプとかまでわかるんだ。  
何気に羨ましいじゃない。

「電気・鋼ね。わたしのマンムーとは相性はいいわね」  
たしかに。

マンムーのタイプは地面・氷で、レアコイルの電撃が効かず、逆にあちらの地面技は4倍弱点として効果抜群で突き刺さる。  
尤も、レアコイルの鋼技があちらにも効果抜群で突き刺さるが、相性でいえばやはり悪いとは言わざるを得ない。

「レアコイル、いやなおと！」  
「リリリリリリリリリリ！」

キーンというやや甲高いような、けどかなり不快な音波攻撃で相手の防御を1/2倍にする。

「ムー！　ムー！」  
「がんばって、マンムー！　とっしんよー！」  
「ムー！ー！」

いやなおとを首を振ってかなり嫌がっていたマンムーだが、ヒカリの指示でそれも治まり、レアコイルに突っ込んでくる。

「宙に浮かび上がって回避！」

「させないわ！ マンムー、こおりのつぶて！」

とっしんしながらのマンムーのこおりのつぶてがばらまかれる。二つの技を同時にこなすかなり器用なマンムーなようだけど、

「レアコイル、てっぺき！」

「リRRRRRR！」

防御2倍、おまけにこおりのつぶてもとっしんもレアコイルには効果いまひとつ。

これなら、いくら攻撃が高いマンムーでもレアコイルを倒し切るには至らないはず。

ただ、ここで少し予想外なことが起こった。

「マンムー、もう一度こおりのつぶてで例のアレよ！ いっけえ！」

ヒカリのその言葉に、眼前で氷塊をつくり上げたマンムーは、その角でそれを砕いて先程と同じようにこおりのつぶてを飛礫として飛ばすのではなく

「はいいい？」

なんとそれを大口を開けて飲み込んだのだ。

直後、マンムーの体毛が白く変化し、そして背骨付近の一部が氷柱

のごとく立ち始めた。

「な、なに……?」

こおりのつぶてを飲み込むのだの、直後の変化などに驚くやら呆れるやら。

一方、

「おお！ いいぞ、ヒカリ、その調子だ！」

「ピカピカー！」

タケシはジャツジを務めていたのであからさまな応援などしていないが、それでもこの世界のヒカリを知る面々には今のナニカの成功を喜んでいるようだった。

そしてなんと、こおりのつぶてを飲み込んだマンムーはとっしんのスピードが、どう見ても、増しているようにしか見えなかった。

「マン、ムーツ！」

「レアコイル、もう一度てっぺき！」

「リリリリリリリリリ！」

直後マンムーのとっしんがレアコイルに決まる。

マンムーはスピードの他にパワーも増していたようで、レアコイルは思いっきり後方に吹っ飛ばされた。

「レアコイル、後ろに向かってチャージビーム！」

「リリリリリリリリリ！」

てっぺきを2回積んだおかげでダメージはあまり負っていないかったみたいだけど、このままではそのまま近くの木に激突してしまいそ

うだったたので、チャージビームで勢いを落としたりした。なぜチャージビームかと言うと、特攻が7割の確率で1段階上がるからだ。

ずっと撃ち続ければ2段階も3段階も上がる可能性もあったりする。

元々特攻の高いレアコイルにはありがたい恩恵だ。

それにひよつとしたらあのマンムーは地面タイプの技を覚えていないのかもしれない。

だってあたしとヒカリが逆のシチュエーションなら、絶対地面技を繰り出すから。

ヒカリちゃんはバトルに関しては、あたしがいうのもなんだけど、未熟な部分がある上、ion1のこの状況で決定打となる技を隠すということはないはずなので、この予想は間違っていないことだろう。

そしてなんだか、マンムーとレアコイルの距離も開いたことだし。

「レアコイル、いばるー！」

「リリリリリ！」

いばるは相手を混乱させるけど、相手の攻撃を2段階上げてしまう技。

ただ、さっきも言ったようにマンムーとは少し距離があるので、いきなりスピードが増したさっきとは違って、とっしんを避けるのは可能はず。

こおりのつぶてはてっぺきを積んだ上、相性も良くなく、威力も高いとはいえないので脅威ではないし、特攻が上がっただろう今ならほうでんなどのテキストな特殊技で破壊してしまうこともありだと思っ。

「ム、ムー！ ムーッ！ ムーッ！ ムーッ！」

「マンムー!? マンムー、どうしたの!? 落ち着いて!？」

「ムッ! ムーッ! ムーッ!」

「マンムー……!?」

混乱したマンムーはヒカリのいうことを聞かず、暴走している。

「ムッ! ムーッ!」

そのままレアコイルに向かって猛然と、暴れ牛が何かのごとく、とっしんしてくる。

「レアコイル、宙に浮かび上がって回避!」

ただ突っ込んでくるだけのマンムーの単純単調なとっしんをレアコイルは容易に回避。

一方、避けられたマンムーは勢いが緩まず、そのまま近くの木々に激突。

根元がへし折れるのは1本に留まらず、4、5本目でようやく止まった。

「レアコイル! トドメのラスターカノン!」

「リ—RRRRRRRR!」

灰色の光線のようなラスターカノンがマンムーに直撃する。

鋼タイプの技は氷タイプには効果抜群で突き刺さる上に、特攻の高いレアコイルでのタイプ一致特殊技、さらにとっしんの、ある意味の自滅のダメージをマンムーは負っていたので、

「マンムー、戦闘不能! レアコイルの勝ち!」

バトルはあたしがヒカ리를くだした。

\*

「あーあ、わたしの負けか」

若干気落ちした風なヒカリのもとにサトシたちが駆け寄る。

「そんなことないぜ」

「ああ、いい勝負だったと思う」

「ピカピカ!」

「ポツチャ!」

たしかに。

ヒカリはバトルよりはコンテストの方向にベクトルが向かっている。あのマンムー自体は良く育てられているし、なによりあんな『こおりのつぶてを飲み込んでのパワーアップ』にはメチャクチャ驚かされた。

「だから自信持っていていいと思うわよ」

シロナさんの言葉にうんうんと首を縦に振り同意する。

世界は違えど、チャンピオンであることに変わりはないシロナさんの言葉にヒカリは感動しているみたいだ。

「さて、次はオレとシロナさんの番ですね」

「そうね、ヒカリちゃんとは違って、キミはバトルの方が本業だからフルバトルでいいかしら？」

「ハイ！ お願いします！」

ということ、今度はサトシVSシロナさん。

ジャッジは今度はユウトさんがやる。

ルールは交代ありが追加されただけで、基本的にはあたしとヒカリとのバトルと同じ。

「魅惑の舞踏を披露せよ、サーナイト！」

「ハヤシガメ、キミに決めた！」

で、いよいよバトルが始まる。

そんなときでした。

「ビィ！ ビィビィ〜！」

反射的に全員がそちらの方に振り向いた。

そこにいたのは、胸にRの文字を印字された奇妙な格好をした男女の2人組とニヤース、それからプラスチックケースに入れられているセレビィだった。

外伝 11 ヒカリ ときわたり（後書き）

アニメからいろんな人が出張参加しています。そしてマンムーの体毛が白くなるというのは独自設定です。

ちなみにシロナのサーナイトはユウトから譲り受けたタマゴから孵ったもの。サーナイトが好きなのでどうしても出したかった。尤も、将来的にはサーナイトがメインで出てくることもある……かな？



## 外伝12 ヒカリ ときわたり（前書き）

この話は本編の3話と4話の間のお話ですので、ラルトスが話せるということはヒカリやシロナには知られていません（初めて知ったのはギンガ団関連でテンガン山に登るとき）。このシリーズではその点に留意を置いていただきたく存じます。

また、今回「ん？」と思われるかもしれませんが、一つ温かい目でもよろしく願います。

今回は外伝12と13の同時掲載です

## 外伝12 ヒカリ ときわたり

「だれ、あなたたちは!？」

胸にRの文字を印字された奇妙な格好をした男女の2人組とニヤースにセレビィを捕えられてしまった。

当然そんな状況下でサトシとシロナさんのバトルが行われるわけもなく、シロナさんがそんな彼らにその言葉を投げつけたときだった。

「なんだかんだと聞かれたら」

「答えてあげるが世の情け」

その2人組はなんだかへんなポーズを決め出した。

「世界の破壊を防ぐため」

「世界の平和を守るため」

さらに男の方はいったいどこから取り出したのか、赤いバラを取り出した……

しかしまあ……

「愛と真実と正義を貫く」

なんというか……

「ラブリーチャーミーな敵役」

「ム」「ねえ、シロナさん」

「コ」「なあに、ヒカリちゃん?」「」

「銀河」「これって最後まで聞いてなきやダメ?」「りには」「

「ホワ」「うーん、別にいいんじゃない? こんなの聞かなくても」「  
るぜ」「!」

「っておまいら最後までちゃんとニヤーたちのセリフを聞くニヤー  
!」

「ソオオオナンス!」

ニヤースの他にはソーナンスまで現れた。  
というか

「「ニヤースが喋ったあツ!?!」」

2人組のことよりそちらに方が気になってしまった。  
なんで?

どうしてポケモンが人間の言葉を?  
ていうかなんでユウトさんやサトシたちは平然としてるのよ?

「ニヤースのいうとおりよ、まったく!」

「ああ! なんて失礼な奴らだ!」

「ソオオオナンス!」

いや、アンタらそんなことを言う資格ないんじゃないかなあ。

「とにかく! ムサシ!」

「オッホン! コジロウ!」

「銀河を駆けるロケット団の二人には」「

「ホワイトホール、白い明日が待ってるぜ　！」

「あニヤーんてにゃ！」

「ソオオオナンス！」

結局最後までやるわけね、アンタたち。  
でも

「なんだか締まらなかったわね」

シロナさんの言うとおり、なんだか微妙な感じになってしまった。

「うるさいわね！　元々はアンタ達がジヤマしたからでしょ！」

「ていうか、なんで同じジャリガールが2人もいるんだ!？」

「あつ！　本当ニヤ！」

「ソオオオナンス！」

ロケット団。

この世界では壊滅しなかったのね。  
ていうか、今それに気づくか？  
やれやれって感じね。

「とにかく！　ロケット団、セレビィを返せ！」

「へっ！　お断りよ！　コイツをボスに献上すれば？」

「幹部昇進！」

「支部長就任ニヤ！」

「ソオオオナンス！」

サトシとロケット団の言葉の応酬が続いている途中

『ほう！ こいつはなかなか珍しいのがあるな！』

\*

まるでスピーカーから聞こえたような女性の音声が空に響き渡る。見上げてみると、空が何やら歪んで見えた。

……？  
歪んで？

「なによ、あれ？」

すると何もなかった空に突如としてゴツゴツとした機械的な飛空艇らしき物体が浮かんでいた。

「あれは！？」

「Jの飛空艇よ！」

「チッ！ よりにもよってこんなときに！ ニヤース！ コジロウ！」

「オウ！」

「ニヤー！」

「ジャリボーイ、ここは一時休戦よ！」

「わかった！ だけどセレビィはあとで返してもらうからな、ロケット団！」

ロケット団も含め、サトシたちも臨戦態勢を取る。

というより、さっきまではお互い敵対していたのに、一時的とはい

えタツグを組むなんていったいその「J」とやらは何者？

「ポケモンハンター。依頼されたポケモンはたとえ人のものだろうと強奪して、それを依頼者に高く売りつける。いわば犯罪者だね」

ユウトさんがそう解説してくれた。

「しかしまあ、随分と危険なのに出くわしたな」

「どういうことなの、ユウト君？」

「あのJの場合、自分の障害になるようならば人を殺すことにもなら躊躇はないということです」

そんな！？

そんな人がいるの！？

誰しも たとえサトシたちやロケット団すらも ユウトさんの発言に驚きを隠せないようだった。

「なるほど。容赦は無用ってわけね。なら、全員出てきなさい！」

シロナさんは残り全てのモンスターボールをボールポケットから取り出して放り投げた。

出てきたポケモンはバクフーン、ガブリアス、スターミー、トゲキッス、ライボルト。

「ここは幸いにもエイチ湖。シロナさん、スミマセンが、少し時間を稼いでくれませんか？」

「わかったわ、任せて」

飛空艇からはポーマンダに乗った顔にフィットするタイプのバイザーとインカムをつけた女が現れた。

「すまないけど、オレとシロナさん以外は」の相手はしないよう努めてくれ」

「でも、ユウトさん、オレ！」

「サトシ君、なにも戦うなどは言っていないよ。キミたちにはあの大軍を相手にしてほしい。もちろんヒカリちゃんたちやロケット団、あなたたちにもね」

ユウトさんの指差す先には飛空艇から大量に放たれるメタングとエアームドの群れ。

その数の多さは、黒点によって青空が覆い尽くされるのではないかというほどであった。

「……………チツ、気に食わないけどしゃーないわね。コジロウ、あたしたちの相手はおまけのザゴどもよ！」

「わかった！」

ロケット団の二人がユウトさんの案に動揺するとサトシたちもそれに同意することになった。

そしてユウトさんはラルトスの他にボスゴドラ、ラティオス、ラティアス、ニドクインを繰り出し、あたしもレアコイル以外の手持ちの全員（ポッチャマ、リザードン、ムクホーク、エルレイド、ムウマ）を外に出した。

他の全員も手持ちの全てを繰り出し、もはや総力戦といってもいいほど様相を呈していた。

「ユウトさん、気をつけてほしいことがあるんですけど」

「ん？ ああ、彼女がポケモンを捕獲するために使う特殊な技術のことかい？」

「えっ？ あっ、はい。知ってたんですか？」

「んー、まあ、ね。とりあえず、「ご忠告はきちんと受け取っておく。ありがとう」

…… 釈然としない。

どうしてユウトさんが「のことについてあんなにも詳しく知っていたのか。

あたしたちの世界では」の存在などついぞ聞いたこともない。

「ユウト君、聞きたいことがあるんだけど」

それはシロナさんも同じみだった。

だけど、あの人の返事は

「A secret makes a woman woman .  
(女性は秘密を着飾ることによって女性らしくなる) ちょっとオレが使う分には違和感アリアリですけど、女性の方なら覚えておいた方がいいですよ？」

secret=秘密。

つまりはそういうことなのだろうか。

「おっと、お客さんをもてなす最後の準備をしないと。ゴルダック、キミに決めた！」

そうしてエイチ湖の湖面に向かって投げたボールからゴルダックが繰り出された。

「ゴルダック、ラルトスからの指示をしっかりと聞いてくれ。それからこれも持っていつてくれ。失くすなよ」



「グワツパ！」

ユウトさんがゴルダックに向かって何かを投げた。

それはきれいな弧を描いて、無事ゴルダックの手元に収まる。

「じゃあ頼んだぞ！」

「グワツパ！」

ゴルダックはラルトスとユウトに向かって大きく声を上げると、反転してエイチ湖に潜っていった。

ゴルダックへの指示はきつとユウトさんがラルトスにテレパシーを送って、それをラルトスがゴルダックにまたテレパシーでは送ったのだろう。

一応ここには共闘するとはいえ、“敵”に当たるロケット団もいるわけだから。

そうこうしているうちにあのJとかいう女が地上2、3mの中空まで降りてきた。

黒の濃い灰色っぽいドレスのような、だけど全然柔らかそうな印象のない戦闘服に、左腕の前腕部に何かの発射口のようなものがある機械を装備している。

「依頼のあったサーナイト、しかもチャンピオン様のものとおれば相当レベルも高い。素晴らしい」

「あら、そう簡単にいくかしらね。獲らぬ狸の皮算用とはよく言ったものだわ」

「フフ、お強いことだ。だが、それもいつまで続くかな？ それに

「

ツツと視線が横にずれ、あの女はセレビィを見据える。

「まさか幻のポケモンであるセレビィまでいるとは。あまりに運が良すぎてあとが怖いな」

何気に死亡フラグを立てているような気もするけど、とにかく、あたしたちをそんなに舐めないでほしい。

全員が全員、そんなに簡単にやられる、あるいは簡単に屈するような人たちじゃないんだから。

\*

「バクフーンはふんかを、ライボルトはバクフーンの護衛を続けて！ リザードンとムクホーク、トゲキッスはねっぷう！ ムウマはあやしいかぜ！ ヒマがあればわるだくみもしなさい！ それ以外は攪乱しつつ、チームワークを組んで各個撃破！」

シロナさんのバクフーン、トゲキッス、ライボルトは一時的にあたしに預けられ、あたしのポケモンたちといっしょに辺りの、それこそ数えるのも億劫ほどの、メタングとエアームドの群れを撃退していきます。

メタングもエアームドも炎が弱点なので、ふんかやねっぷうといった範囲攻撃でおもしろいように墮ちていっています。

それ以外も空を飛べるのはもとより、飛べないのはメタングやエアームド自身を足場にして次から次へ飛び移るようにして迎撃しています。

「ピカチュウ、10万ボルト！ ヒコザル、ほのおのうず！」

「ポッチャマ、うずしお！ パチリス、ほうでん！」

「グレッグル、どくばり攻撃！ みんな、絶対に1対1で戦うな！  
必ず2体以上でタッグを組んで戦うんだ！」

サトシたちも広範囲をカバーできる技を使えるポケモンたちには指示をし、それ以外はあたしたちと同じくポケモンたちに独自の判断をさせて各個撃破を狙っています。

「ハブネーク、ハヤシガメの後ろのザコ2体にポイズンテール！」  
「マスキッパ、ブイゼルとニヤースの上にタネマシンガン！」

尤も、タケシの言うことをあのロケット団すらも実践して、しかも  
即席連携の穴をうまくカバーしています。

一方Jのポケモンたちと対峙するシロナさんやユウトさんの方

「スターミー、サーナイトにめざめるパワー！」

すると、Jのあの妙な機械から発射された弾丸によって、石膏に全身を固められたようなサーナイトが解放される。

「チツ！ 猪口才な！！！」

「同じ手が何度も通用するとは思わないことよ！」

先程シロナさんのガブリアスが同じように固められたとき、ラルトスのめざめるパワーによって解放されたのを、今シロナさんがスターミーで実践したわけです。

シロナさんはガブリアスをも捕らえようとした」に怒り心頭なように、常とは違った迫力を醸し出しています。

「くっ！ ポーマンダ！」

空で戦闘を繰り広げるポーマンダを見上げる」。

しかし、ポーマンダはユウトさんのラティオスとラティアスによって、完全に翻弄されており、片や地上ではアリアドスはニドクインとサーナイトに、ドラピオンはガブリアスとスターミーによって同じく完全に釘付けされており、「は身動きを取るうにも取れないといった状況だった。

ちなみにボスゴドラはラルトスの護衛についていて、ラルトスはさつきからなにやら精神統一して集中しているようで、めざめるパワー以降は微動だにしていない。

「おいッ！ 増援をもっとよこせ！！」

インカムに向かって怒鳴りつける」。  
だが

「できた！ 全員、地上に下りろ！！ 巻き添えを食いかねるぞ！！」

ユウトさんのその叫びによって何かを感じた皆はすぐさま地上に滑空するように下り立つ。

「今だ！ ラルトス、レーザービーム発射！」  
「ルーーーーーー！！！」

するとなにやら極太の、はかいこうせんよりも大きな橙色の光線が

発射される。

それはまっすぐ一直線にJの飛空艇に向かって突っ込んでいき、飛空艇の防壁を「何でもない」とでもいうような感じで容易く貫通。直後、飛空艇は大爆発を遂げる。

その衝撃は、地上に生える木々を激しくしならせ、エイチ湖の湖面を激しく波立たせるといった、多大な衝撃波をもたらしていた。さらに爆発によって飛空艇の残骸が彼方此方に飛散し、その多くが近くの森やエイチ湖に落下している。

「よくやったぞ、ラルトス！」

「ラルル〜」

褒めるユウトさんにエツヘンと胸を張るラルトス。

しかし、周りはあたしやシロナさんを含め、あごが外れんばかりといった風に啞然呆然といった有り様だった。

「ああ、あれはでんじはを使ったちよつとした特技だよ。ただ時間がかかる上に、文字通りの“必殺の一撃”になるから、めったに使うことはないんだけどね」

ユウトさんが言うには、

簡単に言うと電子レンジの応用で、でんじはを使って空気中の水分子を振動させる。

熱は分子の振動によって発生するので、よってそこに高温の熱が発生。

同時に熱は電磁波の一種で、熱を持つ物質は、赤外線のような形で電磁波を放出している。

電磁波は言葉通りの『波』であり、位相というものがあって、その位相によって様々な種類に分類されるが、それをサイコキネシスで弄って無理やり揃えたらしい。

また高温になると物体は自然発火し、その際生じる『火』というものは『光』を内包する。

で、結論として揃えた電磁波の位相を一方向に打ちだしたのだとか。正直何を言っているのかさっぱりわかりません。

「とりあえずわかりやすいたとえで言うと、『でんじはとサイコキネシスでレーザーを放った。レーザーの射線上の物体は“蒸発”させる』といえればわかりやすいですか」

その後、霧や煙などを通過するとレーザーの威力が大幅に減衰するだのなんだの言われたけど、そんなものは頭には入ってこなかった。

「おお、ゴルダック！ ナイスタイミングだ！」

ゴルダックが岸边に現れた。  
その後ろには

「伝説のポケモン、ユクシーとは！ まったくもって……八八八！」

自身の飛空艇が爆散したことに我を忘れて呆然としていた」だが、ユクシーが現れた途端、再起動したかのように動き出す。

爆発した飛空艇には彼女の部下が乗っていただろうに、一切それに気にかけていないといのは、確かに残忍な性格なのかもしれない。左腕に備わっている機械の発射口をユクシーに向けた。

「じゃあユクシー頼んだ。みんな、死にたくなかったら、地面に伏

せて目を閉じる！ 人もポケモンも全員だ！」

片やユウトさんの何やら物騒な発言に、先程の飛空挺爆破が脳裏に焼き付き、さらにその威力にまだまだ自分を取り戻すということは出来ていなかったたので、あたしたちは反射的に、すぐさまあの人の言つとおりにした。

雪面に伏せたので、全身が雪だらけになるが、死ぬよりはマシだった。

「ああっ！ ああああああああっ！！」

直後、「J」のもがき苦しむ声が聞こえた

\*

「ふええ、それはスゴイですね。その後、どうなったんですか？」

これを聞いて“すごい”で済ますアンタも大概だと思いつつも、あたしは図鑑を操作する。

『ユクシー ちしきポケモン』

人々に様々な問題を解決するための知恵を授けたといわれるポケモンで、知識の神とも呼ばれている。目を合わせたものの者の記憶を消してしまう力を持つ』

そう凶鑑の再生ボタンを押すと、電子音声が開いたページのポケモンの説明をそう読み上げた。

「目を合わせた者の記憶を消すってなんだか怖いですね。で、これ

……まさか？」

「そういふこと」

「はユクシーの目を見てしまい、記憶を消されてしまったのだ。」

「地面に伏せて目を閉じる」といったユウトさんの指示は他の人間やポケモンに被害が及ばないようにするためである。

「で、記憶をなくした」のおかげで問題は解決。このあとはホントはいろいろあったんだけど、なんとかあたしたちは無事この世界に戻ってこれたってわけよ」

ちなみにロケット団はユウトさんの命令に従順に従い、セレビィはアッサリ返されることとなった。

で、彼らには何もせず、彼らは一目散に逃げ出していったのだった。それからどうやってユクシーを説得したのかというと、ゴルダックに投げ渡したアイテムによって成功したんだとか。

それが、アルセウスを呼び出したときに使った“てんかいのふえ”だと知ったのは、アルセウスと邂逅を果たした後のことだった。

創造神を呼び出す笛なんだから、そりゃあユクシーも納得してついてくるわよね。

「と、まあこんな感じかな。さて、休憩はおしまい！ 今日中にこの森を抜けちゃいましょうか！」

「はい、センセー！」



あたしとコトネの旅はまだまだつづく

おまけ

「ジユリーさん、ここの書籍を8番の棚に戻しておいてください」  
「わかりました、シロナさん」

その女性はいつだったか、シロナがいきなり連れてきた女性だった。年にしてシロナよりは上の年代。

だが、記憶を失っていたらしく、人間としての基本的なこと以外は何もかもがわかっていなかった。

連れてきた責任としてシロナはその女性と一緒に自分の家で同居をさせ始める。

はじめはシロナが一つ一つものを教えていったのだが、ある程度になつてくると、自らが好奇心を発して自分でシロナの家の書籍やパソコン等で調べ始めるようになった。

さらに家事も覚え始め、私生活がだらしないシロナの助けにもなり始めた。

今では、連れてくる前の記憶は一切戻らないが、その新生活にはすっかり慣れ、公私に渡るシロナの個人的な“秘書”のような地位にまで上り詰めていた。

最近シロナはその女性の知識（様々な考古学の本を読み漁っていたようで）を活用させようと自分のコネを使ってハクタイシティの予備学校に講師として赴任させた。

生徒には何かと評判らしい。

だが、その女性は今もシロナの下から離れようとはしていない。  
また、ユウトやヒカリに対しても随分良く接してくれる。

「自分の“恩人”なのだから」

それが口癖だった。

ひよっとしたら、その女性は自分の過去に何やら暗いものがあること  
に薄々気がついていたのかもしれない。

彼女らは自分を太陽の当たらない暗い深淵から引っ張り上げてくれた

ポケモンハンターという暗い……

## 外伝12 ヒカリ ときわたり（後書き）

ポケモンハンターJもアニメより出張参加。ちなみにJの『人を殺すことも厭わない性格』というのはアニメの設定ほぼそのままです。それから大人の都合により死人は出ていませんのであしからず。また、おまけの内容はあくまで“対外的な”Jの認識です。

ユクシーの説明文はポケモンダイヤモンドとHG/SSのを参考にしました。

グレッグルが鋼タイプに毒技を使用していますが、アニメではなぜか効いていたような描写があつたと思います。

それにしてもロケット団とサトシたちが協力し合う姿は大好きです。ということで映画2作目は自分の中では“神”認定されています。それからアニメ内で協力し合う回があるらしく、某レンタル店で借りようかと思っっているのですが、どのシリーズのどの回なのかご存知の方はいらっしやいますか？

外伝13 シロナ かくれ特性(前書き)

今回は外伝12と13の同時掲載です

### 外伝13 シロナ かくれ特性

こんにちは、シロナです。

私は今イツシユ地方サザナミタウンに滞在しています。

ここは輝くようなコバルトブルーの海が広がるサザナミ湾が存在するため、避暑地として有名な町ですが、それ以外にももう一つ、この町を有名たらしめているものがあります。

それはサザナミ湾の海底に沈む『海底遺跡』の存在です。

この海底遺跡。

入り口は東西南北にそれぞれ一つずつあり、そこから内部に進入できるのですが、その内部はかなり複雑な迷路になっていて、一つの階層に一定時間以上いると問答無用で外に押し流されるという摩訶不思議な構造になっています。

で、この遺跡を詳しく調査・解析するためにイツシユ各地から調査団が派遣され、最寄りのサザナミタウンでは、よくこの団体が見かけられます。

実際今日もどこかの調査隊がこの町からサザナミ湾に向かって出発していききました。

実は私も個人的にですが、この遺跡を調査しています。

というのもユウト君にホワイトデーのお返しを貰ったときに、彼に頼まれたからなんです（ちなみにその彼はアロエの博物館やリゾートデザート、18番道路などイツシユ各地を飛び回っているいろと調べ回っているそうです）。

それにしても……。

彼と知り合って結構な時間も経つし、彼と一緒に、例えば“セレビイのときわたり”のような普通ではなかなか体験出来ないようなこ

とも経験して、普通の知り合いという枠組みでは括りえず、また彼へのアプローチだつて事欠いたことはないわけで、言つてしまえば彼とは特別な関係だと自負しています。彼は私に（というかヒカリにも）まだまだ話していかないようなヒミツがたくさんあるのではないかと思う。

そりゃあ人間秘密の一つや二つあつて当たり前だし、たとえ親しい人でも言いたくないこともあるのだろうけど、気になるものはやっぱり気になる。

つと、なんだか話がズレてしまつたけど、私も組織的ではなく個人的にだけど、海底遺跡の調査をしています。

ただ、おそらく私が一番海底遺跡のナゾに近いとは思つてます。なぜかというところ、調査隊の面々は海底遺跡の一階でウロウロしてその先に進めず、結果、遺跡の仕掛けによって外に押し流されているけど、私は遺跡内部を最上部である第四階層まで上ることが出来るから。

階を上るにはその階にある暗号を解読してその通りに仕掛けを解いていけばいいのですが、解読した暗号、さらには私が自分で確かめるためにと解読表もユウト君が用意してくれた上、仕掛けを解くために必要な技を覚えたゴルダックをユウト君から借りていたりします。

……この暗号、元が象形文字みたな記号のようなものでハッキリ言つてかなり難読なんだけど、よく彼はこの暗号を解けたなと感心する。

ここからも彼の異常さがわかるのではないかと思ひます。ただ、そこから先の暗号の意味成すもの。

正確にいえば暗号の解読は出来たものの解読した文章の内容に理解が難しい部分が含まれていて、その部分は彼でも解釈はできなかつたそうです。

というか、そこまでされたら私たち考古学者は立つ瀬がありません。

是が非でも彼より先に解き明かすつもりです。  
今はイッシュ地方の英雄伝説と“ハルモニア”との関係から探っているのですがなかなか。

とまあそんな感じで毎日意気込んで研究をしているのですが、今日はお休みです。  
というより休みにしました。  
なぜかというと

「うん、今日中には確実に孵化しそうね」

ポケモンのタマゴが孵りそうなのです。

このタマゴはホワイトデーのお返しにユウト君から貰ったもので、「ちょっと特別なタマゴだから楽しみにしてください」と言われ今まで連れ歩いていました。  
いったいどんなポケモンが孵るのか。  
どういう性格と個性を持ったポケモンなのか。

ポケモンのタマゴが孵るとき、彼と出会う前までは前者にばかり気を取られていましたが、それ以後は後者にも目が行くようになりました。

むしろ、どうそのポケモンを育てていくかは後者に掛かっていますね。

何にしても、ポケモンのタマゴが孵るといふのは年甲斐もなくドキドキワクワクします（聞けば、キクノさんやクロググさんもそうなのだそうです）。

「あっ」

気づけば、タマゴが光り輝いたと思ったら、その光が点滅し始めた。これはいよいよと私はタマゴを持っていそいそと外に出て、地面に置く。

「全員、出てきなさい」

それから、皆への挨拶も兼ね、今私が持ち歩いている手持ちの6体を全て外に出す。

全員、タマゴの存在を知っていて、点滅している様子から、皆注意深くそれを見守っている。

タマゴの点滅の間隔がだんだんと早くなる。

そしてその点滅の間隔がわからなくなるほど光輝いた瞬間、それが爆ぜる。

眩しさから腕で視界を覆うが、それもすぐに治まる。

タマゴから孵ったポケモンは

\*

「どづいづいとっ」

孵ったポケモンと一通りの挨拶を終えると思わずその疑問が私の口からついた。

ちなみに今、孵ったポケモンは私のポケモンたちが面倒を見てくれている。

「一つは考えが思い浮かぶのだけど……この場合、考えているより



は聞いた方が速そうね」

私はタマゴをくれたユウト君自身に“このこと”について問い質すべく、ライブキャスターを操作した。するとすぐさま応答があった。

【あ、シロナさん、お久しぶりです】

ライブキャスターの画面が4分割され、その右上にユウト君が表示される。

後ろの様子から、どうやらアロエの博物館にいるようだ。

そして普通なら1対1の場合、画面は2分割になるのだが、今は4分割。

つまり、今このライブキャスターは3人以上と繋がっているのだ。

ちなみに左下の画面は砂嵐になっている。

そして左上の画面には、

【お久しぶりです、シロナさん！】

ヒカリちゃんだった。

地下鉄の案内が見えるから、バトルサブウェイ辺りで何十連勝かしているのかもしれない（地下鉄はイッシュ地方にしか存在しない）。

【それでシロナさん。シロナさんもタマゴから孵ったポケモンのことですか？】

なるほど。

彼の物言いで、“も”ということはヒカリちゃんも私と同じ用件なわけね。

「そうなの。私のタマゴからはロコンが孵ったんだけど、特性が普通とは違うのよね」

きつねポケモンのロコン。

タイプは炎で、特性は『炎技を受けるとダメージは食らわずにこちらの炎技の威力が1.5倍になる』という“もらいび”。

通常特性は1種類のポケモンに対して一つ、乃至<sup>ないし</sup>二つで、ロコン系統の場合は“もらいび”一つしかない。

だけど、このロコンの特性は

【なるほど。“ひでり”ロコンはシロナさんにいったわけですか。じゃあヒカリちゃんの方には“すいすい”ニョロモかな】

【は、はい】

“すいすい”ニョロモ。

ニョロモって特性は“ちよすい”と“しめりけ”の2種類しかないはず。

私の“ひでり”ロコンのように、なぜそんなニョロモがいるのかしら？

【『隠れ特性』です】

「【隠れ特性?】」

【簡単に言ってしまうえば、ポケモンの三つ目の特性のことです】

なんでも彼が言うには、今現在イッシュ地方限定だけど、めざめいしを持たせた状態でタマゴを生むと通常とは違う特性を持った個体が生まれてくるらしい。

その特性のことを隠れ特性というんだとか。

……そういう発見だとかをいつたいたいどうやって見つけてくるのか。ホントにちょっと小一時間オハナシしてみたくなるわね。

まあそれは置いておくとして。  
特性“ひでり”のロコンか。

【あ、ヒカリちゃんのニヨロモは“すいすい”でも十分に役に立てるけど、ニヨロトノに進化させることをオススメするよ】

【どうしてですか？】

【ん。“すいすい”ニヨロモはニヨロトノに進化すると特性が“あめふらし”に変化するんだ】

おまけに“あめふらし”ニヨロトノですって!？

【2人ならどう育成するかもつ見当ついてるよね？　じゃ、次にバトルが出来るのを楽しみにしてるから】

そう言ってユウト君とのラインは切れた。

ただ、ヒカリちゃんとはまだ繋がっていて、ライブキャスターが2画面表示になっている。

「まさか“あめふらし”に“ひでり”なんてね」

【はい。どちらもカイオーガ、グライドン専用の特性でしたが、これが使えるとなると……】

どちらも非常に強力な特性であり、これらは天候を変えようとする限り、その状態は永続する。

……正直ゾクゾクしてくる。

【晴れパと雨パが革新的に変わるかもしれないね】

場に出すだけで晴れや雨状態になるなら、にほんばれやあまごいを

するという工程を省ける。

つまり、その工程を別のものに当てることが出来るのだ。

「バンギ（バンギラス）・カバ（カバルドン）・ノオー（ユキノオ  
ー）並ね」

バンギラス・カバルドンは永続的なすなあらしを、ユキノオーは永続的なあらしをそれぞれ発生させ、そこから砂パ、霰パの起点にされることが多いポケモン。

砂パ・霰パならば、たとえ一撃で落とされても、それだけでパーティに入れる余地がある。

「はい。特にダブルバトルではものすごく強力ですよ。正直これだけでレギュラー入りもアリですね。じゃあシロナさん、あたしすぐ出かけますね。サブウェイでバトルポイント（BP）貯まったからアイテムと交換して、それからショップピングモールR9で買い物もして、それから」

とりあえず長くなりそうだから私はそこで切った。

\*

さて、このロコンをどう育成するか。

私の脳内では何通りものロコンの育成シミュレーションが急速に構築されていく。

「キュウコンに進化させるのは確実かしらね」

キユウコン

ロコンの進化形。

非常に美しいポケモンで人気が高く、その体毛には不思議な力が宿っているといわれている。

しかし、しっぽをつかむと1000年は呪われ、妖しい光でもって人々の心を操るといって、幾分恐ろしい逸話も残っている。

ここまでは図鑑的な特徴だが、育成するとすると特防種族値が100という高さに注目する。

また素早さも種族値100で、“100族”という激戦区ながら、そこそこの素早さもある。

ここからめいそう（特攻・特防1段階アップ）を積んでの特殊受け型がある。

また、おにび（相手をやけど状態にする）を撒いての相手の物理攻撃型を潰すということも出来る（やけどになると攻撃が半減）。

パワースワップ（自分と相手の攻撃・特攻ランクを入れ替える）があるので、相手の積み技を潰すやり方も出来るし、オーバーヒート（使用後特攻2段階ダウン）と組み合わせ流すのもいい。

そこにあまえる（攻撃2段階ダウン）も加えるなんてことも出来ないことはないと思うけどそこまでは高望みかしら。

さいみんじゅつやあやしいひかりを使つていく型もある。

ただ、このキユウコン（ロコン）は特性が特性なので特殊攻撃型が最も生きる。

元々わるだくみ（特攻2段階アップ）で特殊アタッカーとしては十分だったものが“ひでり”のおかげでタイプ一致炎技は1.5×1.5＝2.25倍、ソーラービームが溜めナシで連射可能と、キモクナイイ（ラグラージ）やぼわぐちょ（トリトドン）、スターミー辺りなら確実に返り討ち出来るし、わるだくみ+草のジュエル（草技の威力が1.5倍/使用するとなくなる）を持たせればスイクン

やブルンゲルみたいな特殊受けのポケモンだつて一撃で落とせる。  
ピンチになつたらいたみわけも使える。

またキュウコンの運用だけでなく、晴れパの起点として“ようりょくそ”や“フラワーギフト”、“サンパワー”などの特性発動も狙いやすい上、私の手持ちのガブリアス、バクフーン、カビゴン、トリトドンとも相性がいい。

バクフーンは炎タイプなので言わずもがな。

ガブリアスとトリトドン、カビゴンについてだけど、晴れパは総じてドラゴンや炎タイプに弱い。

またピンポイントだが、バンギラスにも弱い。

これは、晴れパで特性発動や技の威力強化などの恩恵を受けられるのが、草タイプと炎タイプだけだからだ。

どちらもドラゴンに対して効果は薄いし、草タイプは相手の炎タイプのポケモンや技でアツサリ落ちてしまう可能性がある。

バンギラスはフィールドに出てきただけで天候がすなあらしに変えられてしまう上にソーラービームの威力は半減、岩タイプのバンギラスの特防は1.5倍と相性は最悪。

その点、ガブリアスとトリトドンはじしんやれいとうビームなどでこれらの欠点に対しての対策になる。

カビゴンは特性“あついしぼう”（炎・氷技ダメージ半減）のおかげで草の弱点である炎技と氷技も受けられる上、草が苦手の鋼タイプが出てきたところでだいもんじ辺りを叩きつければそれで相手は沈む。

ちなみにカビゴンは育てるつもりはなかったけれど、ユウト君に6タテされてから育て始めたクチ。

そしてヒカリちゃんやレッド君、グリーン君、シルバー君、ブルーちゃん、コトネちゃんなんかも持つてるから結構流行りなんじゃないかと思つてたりする。

ととと。

話がズレちゃった気もす、ん？

「コーン」

見ると瞬ったばかりのあのロコンが私の前でお座りしている。

さらに私の周りにはロコンの面倒を見てくれただろう皆がいた。ひよっとして、結構時間が経ってたのかと思いつつも、私は座り込んで徐に両手を差し出すと、ロコンが私の胸の中に飛び込んできた。

「コーン」

喜色満面の笑みを浮かべてとても喜んでくれている。

そのままロコンを私の視線の高さまで持ち上げる。

「これからよろしくね、ロコン」

「コーン！」

よく彼が言っていた。

『戦略を練るには自分のポケモンのことをよく知らなければなりません。そして自分のポケモンをよく知るには愛情を持って接しないとポケモンも自らをさらけ出したりはしません』

この子は生まれたばかりで私はこの子のことを知らない、この子も私のことを知らない。

育成云々というのは後にしよう。

まずはこの子のことを詳しく知らないとどうにもならない。

そう思った私はそれまでの思考を頭の中から蹴り飛ばした。



### 外伝13 シロナ かくれ特性(後書き)

目標があれば人は努力できる。ゲームのように毎日遊んでるばかり(？)のシロナさんではありません

かくれ特性を登場させました(ちなみに夢特性は通称です)。その際めざめいしを持たせてタマゴを産ませるという簡素な設定(PDWを登場させるのはちよつと……)。原作でもこんな感じだったらありがたかったのに。(時間軸的な)これ以後、夢特性も登場しません。

バトルポイント(BP)については次話で詳しい話が出てくるので、そのときに。

キモクナイイとぼわぐちよについては「どうしても入れたかった、ただそれだけ」といった感じですよ。おんみょんやモエルワ、バリバリダーもいずれ出せたらいいなと夢想しております(笑)。それにしても「バリバリダー！」と「ババリバリッシュュ！」、「モエルワ！」と「ンバーニンガガッ！」はどちらが正しい鳴き声なんだろうかと。

## 外伝14 コトネ フロンティアブレイン

みんなー、こんにちは！

愛の狩人、コトネです！

つとつとつと。

みんな、いつもコトネのこと「おちゃらけてる」って思ってるかもしれないけど、コトネだってマジメなときはあるんだよ！

ということ、今日はそんな場面をクローズアップしていきたいと思えます！

\*

ジヨウト地方チャンピオンマスター、コトネ。

彼女の出身はジヨウト地方ワカバタウン。

ポケモンのタマゴの研究で著名なウツギ博士の娘の一人である。

また、チャンピオンマスターの他にもう一つの肩書きがある。

それが

「挑戦者ペアのポケモンがすべて戦闘不能になりました！ よってバトルタワータワータイクーン、クリス・コトネペアの勝利です！」

ジヨウトバトルフロンティアバトルタワーにおいてトレーナー2人でペアを組み戦うマルチバトル部門において自身の姉、クリスとともに“フロンティアブレイン”というバトルフロンティアの各施設のリーダーという肩書きだ。

ちなみに姉は他にもタワーのダブルバトル部門でもブレインを務めていたりする。

ただ最近、

「ちょっとー！ どうしてクロツグさんもお姉ちゃんもいないのよー！ コトネ聞いてないんだからー！」

といった具合が多くなってきており、実質コトネが一人でバトルタワーをまわす機会が多くなってきていた（ちなみにクロツグというのはシンオウバトルフロンティアのバトルタワーでフロンティアブレインを務めていたが、後を息子のジユンに任せ、ジョウトの方のバトルタワーに移ってきていた）。

ただ意外にもマジメな性格からチャンピオンマスターもフロンティアブレインもきちんとして務めているため、なかなか多忙な日々を送っている。

そんなとある日の一場面を切り取った情景

\*

「終わった。やっと休憩だ〜」

ここ最近ジョウトバトルフロンティアバトルタワーにはフロンティアブレインがコトネ一人しかいない状態が続いている。

本来、タワーのブレインはシングルバトル部門のクロツグさん、ダブルバトル部門とマルチバトル部門のクリスお姉ちゃん、それからチャンピオンマスターとしての仕事もあるため、マルチバトル部門にだけ半ば“お手伝い”という形で出向しているコトネの3人。

ちなみにマルチバトルは一番対戦頻度が低いから、チャンピオンとしての仕事に差し障りが少ないので引き受けたようなもの。

ただ、ここしばらくクロツグさんもお姉ちゃんもいない。

だから、それらの負担の全てがコトネに掛かってきていた。

「もう……ゴールしても……いいよね？」

「いえ、これからすぐにシングルでの挑戦者と対戦していただきませう。お急ぎください」

お願い係の人、コトネの独り言に何食わぬ顔で返答しないでください。

コトネ、朝からずっと対戦対戦対戦で休む暇もないし、まだまだ全然入れられている試合数も消化されてないし……。

ハードすぎます、だれか……。  
ポスけて……。

\*

「これより挑戦者エリカとタワータイクーン、コトネのバトルを始めます！」

ノーマルフィールドに響き渡るジャッジの声。

それでこの、そしてなによりコトネ自身の先程までだらけ切っていた意識も切り替わる。

「お久しぶりですね、エリカさん。タمامシジムはどうしたんですか？」

「何事も自己鍛錬は必要なのですよ」

タمامシジムジムリーダーであるエリカさん。

草ポケモンを使わせたならシンオウ地方のナタネさんと共に“双壁”

とされていて右に出る者はいないとすらいわれており、“大和撫子”という言葉がよく似合うお嬢様。

ときどきこんな風に“自己鍛錬”と称してカントーにほど近いこのジヨウトのバトルフロンティアを訪れる（カントーにはバトルフロンティアは存在しないため）。

草ポケモンは弱点が多いけど、毒やマヒ、眠りといった状態異常を撒き散らすにはこの上なくラクで、エリカさんはそういった戦法を得意としている。

ジムリーダーとしての在任期間も長く、実力も折り紙つきなので、タワーシングルでもブレーンに挑めるほど勝ち続けることが出来ていた。

「あなたはチャンピオンなんですもの。当然本気中の本気ということですよ。よろしいかしら」

そういう言い方をされるとなかなかプレッシャーを感じる。

けど、それを心地よい快感と感じる自分自身もいて、コトネとしては思わず口許が上がるような気がした。

「どうぞどうぞ。ついでに言えば、今日のコトネの手持ちは晴れパですから、エリカさんに有利に働くかもですね」

「あらあら。ならばこれで勝たなくては私自身の恥となりますね」

「そんなことはありませんよ。なんせコトネは“チャンピオン”ですから」

と。

バトル前の言葉の応酬はこの辺にして

「それでは、バトルスタート！」

ジャッジの合図とともにコトネとエリカさん、2つのボールがフィールドに投げ込まれた。

\*

バトルフロンティア。

それはポケモンバトルを極めんとする者たちが集う場所。発祥はホウエン地方で、エニシダという人物が考案した。それが以後、カントーやナナシマ以外に広まっていった。ジョウト地方のバトルフロンティアには5種類の施設があり、それぞれには名称は異なるが、“フロンティアブレイン”と呼ばれる代表者がおり、この者に勝つことが栄誉とされている。

このバトルフロンティアには“バトルポイント”(BP)というものがある。

例えばバトルフロンティア内である技マシンを購入したい場合、その技マシンに定められているBPを支払うことと引き換えに受け取るといった具合である。

バトルフロンティア内ではこれが一種のお金となるのである。

また、これの他の使い道として重要なものがある。

それがフロンティアブレインとのバトルである。

実はフロンティアブレインに挑むためにはある一定以上のBPを貯める必要があるのだ。

それが貯まっていない場合、たとえチャンピオンであろうとブレインには挑めない。

では、どうやってBPを貯めるのかというと、方法は至って簡単。

バトルフロンティア内の各施設でのバトルに勝ち続けることである。勝ち続ければ続けるほど貯まっていくBPは多くなっていく。

しかし、言うは易し、するは難し。  
なので、BPが多く貯められるということはこのバトルフロンティアにおいては“強者”という名を欲しい俤にする。

さて、その施設の中でコトネに関連する施設、バトルタワー。

このバトルタワーには通常のシングルバトル部門、双方トレーナーが1人で2VS2のバトルを行うダブルバトル部門、双方トレーナーが2人ずつで2VS2のバトルを行うマルチバトル部門の3つがある。

そのうちエリカVSコトネのバトルが展開されているシングル部門について。

基本ルールは手持ちの6体の中から先に3体を選択し、その3体で勝ち抜いていく方式。

その際、最初の手持ちの6体を見せ合うことはないノポケモンや持ち物の重複・幻のポケモンやポケモンのタマゴの出場は禁止ノバトルでポケモンが使用した道具はバトル終了後に支給される、といった具合である。

また、引き分けの場合は挑戦者が、最後の3体目でじばくやみちづれで双方手持ちポケモンが消失した場合はじばくやみちづれを使用した方が、それぞれ負けとなる。

\*

「ドープルですか。イヤらしいですわね」

コトネの先手はドープル。

ドープルはスケッチという技でポケモンが使える『ほとんどすべての技』を覚えることが出来るため、いったい何をするのかがこちら

が行動に移すまで、相手はサツパリ読めないポケモン。  
一方エリカさんの繰り出したポケモンはナツシー。  
ナツシーの特性は“ようりよくそ”。

これは天気が晴れの状態ならば素早さが2倍になるという特性だが、これが発動しない限り、ナツシーの素早さはかなり遅い。  
つまり、エリカさんほどの使い手が先発にナツシーを繰り出したならば何をするのが手に取るように分かりそうなもの。

「ナツシー、トリックルームですわ！」

「ドーブル、スケッチ！」

初手ナツシーを繰り出してにほんばれはやらないはず（やるならワタッコやダーテングみたいなポケモンが都合がいい）。

ということでトリックルーム読みでトリックルームは発動されたけど、トリックルームをスケッチすることは成功。

「ドーブル、トリックルーム！」

トリックルームをり返して、トリックルーム状態を打ち消す。

「戻りなさい、ナツシー！」

トリル だいたいはつも出来るナツシーだけど、ここはトリルのチャンスを探うということでナツシーを下げてたろうエリカさん。  
ドーブルがいる限りトリルしてもり返すからね。

「キノガッサ、出番ですわ！」

そしてドーブル突破のためなのか、草・格闘タイプのキノガッサを投入。



格闘持ちな上、100%相手を眠らせるキノコのほうし、特性“ポイズンヒール”で持ち物がどくどくだまなら弱点は多くても居座り性能はある(“ほうし”でマヒや毒状態になったらキノコのほうしがかからないので“ポイズンヒール”ほぼ一択)。  
みがわりやまもる、やどりぎのタネを使えばそれにさらに拍車がかかる。

厄介すぎる気もするが、ダブルにはほんのわずかだけでも耐えてくれればいい。

「キノガッサ、スカイアッパー！」

「ガッサ！」

攻撃種族値130族のタイプ一致スカイアッパー。

急所に当たらなければ耐えてくれると思うが、どう転ぶかわからない。

一応このダブルはずぶとい(防御 攻撃 )性格で運用の都合上、HP極振り・防御164・特防92と努力値を振って(残りの2は適当)物理特殊両方の耐久を上げていて、急所に当たらなければいくらタイプ一致弱点攻撃でも落ちることはないと思うけど、こればかりは運の問題。

急所来るな！

お願い、耐えて！

「~~~~ツブル！」

よし！

耐えた！

「ダブル、からをやぶる！」

そしてからをやぶるが発動。  
効果は防御と特防が1段階下がるけど、攻撃・特攻・素早さが2段階上がるという技（ちなみに素早さならこの時点でフーディンやジュカインよりは速いハズ）。

「からをやぶるということは白いハーブですね？」

そう。

ドーブルの持ち物は白いハーブ。

これは能力ランクが下がったとき、そのランクについては元の無補正の状態に戻すアイテム。

これで、下がった防御と特防は元通り。

「そういうことですか。キノガッサ、ドーブルを好きにさせてはいけません！ とどめのマツパンチです！」

エリカさんはコトネの狙いに気がついたみたいだけど、もうこちらのもの！

「ドーブル、バトンタッチ！」

ステルスロックぐらいは撒きたかったけど、トリックルームは潰せた上に、ドーブルはきちんと仕事をしてくれたから助かった。

さて次に出す2体目は

「コトネの2番手！ それは、この子です！」

\*

「頼んだわよ、フシギソウ！」

「ソーウツ！」

フシギソウ。

コトネのセンサーの先生、つまりユウトさんからコトネの現状に同情したという理由でもらったフシギダネ、その進化形。

特攻と特防がそこそ高いポケモンで、しかも今はバトンタッチでからをやぶるを受け継いだ影響により、攻撃・特攻・素早さが2倍になり、決定力としては十分。

素早さ的にはフーディンやジュカインと違ってタメを張れる。

ちなみにフシギバナへの進化は本人が嫌がってる（「これ以上デカくなったら速く動けない」とか）

それから、このフシギソウはちょっと変わっている。

なぜなら

「フシギソウ、にほんばれ！」

「キノガッサ、ストーンエッジですわ！」

フシギソウのにはんばれ発動と同時にキノガッサのストーンエッジが放たれる。

しかし、

「えーっ！？　なんですか、今のは！　ありえませんわ！」

フシギソウの素早さが急に上がり、それによってストーンエッジは呆気なくかわされる。

「コトネのフシギソウはですね、普通のフシギソウとはちょっと変わってまして。特性が“しんりよく”ではなく“ようりよくそ”な

んですよ」

“ よつりよくそ ” も合わさって素早さは4倍。  
大変おいしいです。

さて、キノガッサですが、この後はどのような行動をとるか。  
用済みになったどくどくだまをなげつけるにしても（この時点でどくどくだまは疾とうに発動しており、キノガッサは猛毒状態のハズ）、  
フシギソウは毒タイプを持っているので効果は薄い。  
さらに草・毒タイプなため、草技・格闘技も効果はかなり薄い。  
となるとこの後キノガッサは引っ込めるか、

「キノガッサ、キノコのほうし！」

を撃つしかない。

「キノコのほうしは特性“そうしょく”以外のポケモンなら、どんなポケモンであろうと100%眠らせることが出来ます。やどりぎのタネとは異なり、相手が草タイプのポケモンであろうともそれは変わりありません」

たしかに。

現にフシギソウはキノコのほうしを浴びて眠ってしまう

「ソウ、ソウ！」

「なっ！？ カゴの実ですって！？ くらいへドロではないのですか！？」

ことはなく、起き続けている。

「フシギソウ、めざめるパワー！」

「ソウ！ ソオウウ！」

特攻2段階アップのめざめるパワー（ついでにタイプは氷タイプ）超ラッキー！（で普通にドラゴンにも刺さるのでマジでおいしいです）。

「どくタイプのポケモンにくろいヘドロを持たせるのはよくあることです。特にフシギバナは特殊耐久があるからたべのこし代わりに持たせているトレーナーさんをここなら何人も見かけます。でも、フシギソウはそこまで特殊耐久は高くない。おまけにからをやぶるをバトンタッチでつなげる攻撃型なわけだから、耐久型の持ち物を持たせるのはナンセンスです。攻撃型なら、少しでも長く場においてほしい。だからコトネはねむるとのコンボでカゴの実を持たせていたんですよ」

くろいヘドロは毒タイプのポケモンに持たせるとたべのこしの代わりになり、カゴの実は眠りから覚める実。  
ということ、フシギソウはキノコのほうしで眠らなかつたわけ  
です。

「キノガッサ、戦闘不能！」

そして解説と脳内雑談を交えている内にめざめるパワーが決まって  
戦闘不能になるキノガッサ。

上の理由に加え、効果抜群＋特殊耐久が紙なら、たったの一撃でも  
この結果はしょうがないですよ。

\*

「ユキノオー、がんばってください！」

次はユキノオーですか。

これでエリカさんのポケモンは3体すべて出揃いました。

あとはどう攻略していくか、の前にユキノオーが場に現れたことで、フィールドにあられが降り始めました、さむい。

とにかくにほんばれの効果が打ち消されて“ようりよくそ”の恩恵が消えてしまいました。

「ユキノオー、ふぶきですわ！」

「フシギソウ、ひかりのかべよ！」

あられ中のふぶきは必中なので逃げようがなく、ならばひかりかべで威力をやわらげておきます（この場合、まもるは状況が変わらずジリ貧になるのであまりオススメはしません）。

って何を言ってるんだか。

とにかく！

フシギソウなら。

フシギソウなら！

きつと耐えてくれる！（壁も張ったわけだし）

「ソ、ソウ！」

よっし！

耐えた！

ならば！

「フシギソウ！ ヘドロばくだんで一発K・O・よ！」

カウンター的な（技じゃない）タイプ一致効果抜群のヘッドロバくだんがユキノオーに直撃して

「ユキノオー、戦闘不能！」

\*

「それまで！ これにて挑戦者エリカのポケモンがすべて戦闘不能になりました！ よって勝者はタワータイクーン、コトネ！」

コトネはバトルが終わったら必ず相手選手と握手するようにしています。

バトルって一人じゃ出来ないじゃないですか。

相手がいないと出来ないことなので相手の人も称えないとねということ。

「また一段と強くなったのではないかしらね、コトネちゃん」

「そんなことはありません。コトネも最初のナツシーでトリックルーム決められていたら相当危なかったです」

これは事実。

もしトリックルームが決まっていればエリカさんの「まだまだわたくしのバトルフェイズは終わっていませんのよ！」というばかりの独壇場になっていた可能性がかなり高い。

逆にトリックルームを潰せたから、また意表をついた持ち物でエリカさんの戦略を崩すことが出来たから、コトネは勝てたと思っている。

そういつた意味で最初にドローブルを繰り出したのは何気に正解だった。

ちなみに内容は、エリカさんのラストのナツシーもフシギソウのベノムシヨックで一発K.O.にもっていくことが出来たけど、あられのダメージでフシギソウも戦闘不能になり、ドローブル、そしてナツトレイやハツサムなどの鋼対策+晴れ要員+いざというときのだいはくはつ要員のスカタンクが手持ちにいる状態で勝ちとなりました。(ゴキブリ……じゃなくてヒードラン？ そんなのコトネのフシギソウならじしん一発でハイ、サヨウナラよ。ま、そもそもヒードラン自体ここではまだお目にかかったことないけど)

「でも、今日はエルフーンもナツトレイもいませんでしたね。トリル使うならナツトレイくらいは入れてもよかつたんじゃないですか？」

「たまには違う型も勉強しませんとね。トリックルーム戦法はその一環。それにナツトレイはトリルは逆に不向きな気が致しますわ。相手が炎でない限り、耐久がありますので十分後手でもやっていきますし、タイプ一致『のろいジャイロ』っていうナツトレイを代表するコンボも生かせますしね」

「そういえば、ヤドランやカビゴンでトリルって見たことないですね」

「そうね。『素早さ低い』』『ではトリルを』ということではないのよ。さて、それよりコトネちゃん、また次の機会も頼めるかしら」「ハイ！ いつでもいらしてください！」

戦略や戦術を知っている人との対戦はいつでもスリリングな緊張感を味わえるけど、コトネはこれがやっぱり快感。

そして勝てればもつと快感。

たとえ負けても、それはそれで次に負けた敗因を生かすべく検討すればいい話だし。



だから、ポケモンはやめられない！

「ところで、最近ずっとあなたしか見てない気がするんですけど、クリスやクロツグさんはどうしたのかしら？」

「……それが2人とも、このところ連絡とれないんですよ（泣）。だから」

すみませーん！ 次の対戦者が待機してるので5分後にバトルをはじめまーす！

そんな声がコトネたちの後ろから聞こえた。

「と、いうわけで、2人ともいないからそのしわ寄せが全部コトネのところに来るんですよ（泣）」

「そ、そう。が、がんばってくださいね？」

「とほほほほ」

今日もコトネの普段通りの一日が進んでいく。

「こんなの『普段通り』になんてしたくないですよー！ ギブミー  
休み！ ギブミーホリデー！！ 休暇を！！ コトネにかわいい女  
の子をハアハアするための休暇をマジでプリーズツツ！！」



#### 外伝14 コトネ フロンティアブレイン（後書き）

ということでコトネの変態度救済のためのお話でした。ブレインやチャンピオンの仕事をきちんとしてる分、コトネはユウトやヒカリより偉いです。

フシギソウはじしんを覚えませんが、挿話7のあとがきにもあるような理由でO・K・にしています。

余談ですが、最初はバトルサブウェイを元にネタを考えていたのですが、地下鉄の車両の中で『かえんほうしゃ』やら『はかいこうせん』やら『ぼうふう』やら『じわれ』やら……。『どんだけ頑丈な地下鉄やねん』と思ってしまい、ボツに。おまけにハガネール、ギヤラドス、ホエルオーみたいな超大型のポケモンが狭い車内でいたいどうやって暴れるのか、ものすごく疑問です。

それはさておき、今回は能力値計算ツールやダメージ計算ツールなどを使ってかなりゲームに即した展開になるよう心がけてみました（マツハパンチよりバトンタッチが先に決まったり、フシギバナの方が素早さ低いみたいなこと言ったりしていますがノちなみに通信対戦ではスケッチは使えませんのであしからず）。

ドールは遺伝技要員でしか使ったことがないのですが、対戦だとどんな感じでしょうか。技を自由に選択できるのがドールの強みですけど、種族値が低いor中途半端で……。あの種族値なら攻撃よりも完璧なサポート型での運用ですかね。ちなみにSS内のドールはからをやぶる+白いハープをバトンする前提での私なりに考えた育成論です。他にもはらだいこ+カメラの実をバトンするのも考えてみましたが、今回はこちらで。

ちなみにこのドールは計算ツール使って調べてみたところ、キノガッサのマツハパンチなら、たとえA（攻撃）個体値V+いじっぱ

り+A極振りでも、このダブルのHPと防御個体値が15以上あれば確3になるみたいです。

## お知らせ＋外伝14までの主な登場人物紹介追加

外伝14（2011.3.6投稿）を以って、当SSの更新を一時停止します。

理由の一つとしては私生活にゆとりがなくなり、執筆の時間が取りづらくなったことが挙げられます。

ですので、落ち着いたら更新を再開しようかと思っておりますので、そのときはまたお付き合いいただければ幸いです。

また、書き溜めの方も少なくなりましたので、一度この機に溜めてみようかとも思っております。

完結とは銘を打ちますが、再開の予定はあるとは含んでおきます。

第2部BW編に関しましては原作待ちの状態となっております（一応“第1話”というべきものはほぼ書き上げた状態ではありますが）。

ですので、BW編は原作の方で大きな動きがありましたら、スタートということになるかと思われまます。

それまでは感想やメッセージでいただいたリクエストや思いついたネタでの外伝形式の話になるのではないかと思っております。

ちなみにですが、現状、それぞれ異なったテーマに沿ったシリーズを2本書いていた状態なのですが、その2つのテーマは感想等で頂いたもので私自ら思いついたものではなく、かつ、今もなかなか思いつかず。

なので、「こういう話を読みたい」「このポケモンの活躍が見たい」といったリクエストやアイデア等も感想やメッセージで頂けるとありがたいです。

可能であれば、いずれお見せすることが出来るのではないかと思っております。

最後にこのSSの各話の時系列とBW編の触りを載せて終わりとさせていただきます。

今まで私の拙いSSをお読みいただき、ありがとうございました。

k u r o

<時系列>

出会い編

第1話+第2話

挿話1

第3話

外伝10      ヒカリ      ときわたり

外伝11      ヒカリ      ときわたり

外伝12      ヒカリ      ときわたり

ギンガ団編

第4話

挿話2

挿話3

第5話

第6話

ポケモンリーグ編

第7話

挿話4

挿話5      ヒカリ1回戦

第8話 主人公ユウト2回戦  
挿話6 3回戦シンジVSヒカリ  
挿話7 3回戦シンジVSヒカリ  
挿話8 3回戦シンジVSヒカリ  
第9話 4回戦タクト(伝説厨)VSユウト  
第10話 予選決勝ユウトVSヒカリ  
第11話 予選決勝ユウトVSヒカリ  
第12話 予選決勝ユウトVSヒカリ  
第13話 予選決勝ユウトVSヒカリ  
最終話 予選決勝決着、別れ

外伝2 シロナ アルセウスとの邂逅  
外伝3 シロナ アルセウスとの邂逅

外伝1 ヒカリ a few years later  
外伝4 コトネ ヒカリの授業

外伝5 ユウト タッグバトル VSシロナ+レッド  
外伝6 ユウト タッグバトル VSシロナ+レッド  
外伝7 ユウト タッグバトル VSシロナ+レッド  
外伝8 ユウト タッグバトル VSシロナ+レッド

外伝9 とあるダメ人間たちの奮闘記録  
外伝13 シロナ かくれ特性  
外伝14 コトネ フロンティアブレーン  
(外伝13、14を同時期)

ネタ1 BW-タブンネ大虐殺(ほんのりR-15?)について  
はゲーム内のネタ話であり、本編には関わりありません。

< 追記 > 2011.3.29

まずはじめにこのたびの「東北地方太平洋沖地震」におきまして、被害にあわれた方々に心からお見舞いを申し上げるとともに、犠牲になられた方々のご遺族の方々へ心からお悔やみを申し上げます。また被災地の方々の一日も早い復興を心からお祈り申し上げます。

さて、私自身の生存報告も兼ね、外伝14までの主な登場人物紹介を追加します。本編では言及されていない設定（裏設定）もありますが、基本的には本編で触れる予定がないものであるため、ここに載せてみました。

#### < 登場人物 >

ユウト（ ） ホウエン地方ハジツゲタウン出身

5才のときにもらったラルトス（ ）が一番の相棒。

数々の地方でポケモン図鑑をほぼ完成させていることから、その地方を代表するような学者たちには大変覚えがいい。またそれと同時に、旅する地方のリーグでは完全制覇し、“全国チャンピオン”という異名まである。しかし、チャンピオンマスターへの就任には消極的で一度はタマランゼ会長からの要請をリーグ公式戦途中で脱走までして断るほど。

ポケモンバトルの腕前に関してはピカイチ。具体的には、ポケモンの種族値・努力値・性格・個性、さらに戦法まで加味して戦うため、現状彼の右に出る者は現れていない。恥ずかしがり屋で目立つことは嫌い。

ラルトス（ ）

ユウトが5才のときにもらった卵から孵った。



彼の一番の相棒であり、一番の理解者だとも自負している。

もともと控えめな性格だったが、現在は……（ただし、能力に関しては控えめな性格の特徴を受け継いでいる）。

ユウトが仲間にしたポケモンを主人がいないときには一手にまとめ上げるような見事な統率力を見せる。肉体言語でのお話をするのも間々あり、実力はユウトのポケモンの中ではボーマンダとのツートップを張る。

ヒカリ（ ）シンオウ地方フタバタウン出身

旅に出始めの頃は新人トレーナーとしても実力は下位に位置していたが、ユウトに師事することによってその後メキメキと実力を伸ばしていき、ユウトと同じく各地方のチャンピオンに輝くという（ただし、チャンピオンマスターへの就任は拒否）、ある種、ユウトによって人生が最も変わった人間の1人にして、最もユウトの影響を強く受けた人間でもある（タマランゼ会長曰く「そこまで師匠に似ることもないじゃろうが」）。

ユウトと別れた後はジュンやコウキ、シンジ、コトネに教わったことを教授しつつも、ユウトへの憧れと彼の立つ頂に追いつくために彼と同じように各地方を回っていた。

仲間内からコトネのストッパーとして認識されている苦勞人でもあったりする。

最近は大バトルサブウェイでよく目撃されている。

最初にもらったポケモンはポッチャマ。

シロナ（ ）シンオウ地方カクナギタウン出身

考古学者兼現シンオウチャンピオンマスター。

ユウトと出会い、最も人生が変わった人間その2。具体的にはバトルの強さにおいては以前から抜きん出ていた実力が最早手が付けられないほどで“不敗の女神”という異名すら一部では聞かれたりする。

考古学者としては“歴史の始まりの真実”を解明した功績により、多くの世界的賞を受賞し、その名を後世に残すこととなる。年齢を聞くのは禁句。ただし、本人自身、何年経っても変わらず、本当に年をとっているのか一部では疑われていたりする。

#### カントー地方

オーキド博士（ ）

カントーを代表する研究者。

ポケモンに対する多種多様な知識、バトルにおける類い希なる實力、そして何よりポケモン図鑑の完成に大きく寄与したユウトのことを高く買っており、期待もしている。

レッド（ ）カントー地方マサラタウン出身

“最強のチャンピオンマスター”という称号を持ち、以前はユウトが快進撃を上げるようになってから唯一彼に土を付けていた人間だったが、シンオウから帰った彼に敗退。

現在はカントーチャンピオンマスターを辞し、ジョウトのシロガネ山に籠もり、修行を積み重ねている。

最初のポケモンはピカチュウ。

グリーン（ ）カントー地方マサラタウン出身

現カントートキワジムのジムリーダーで“最強のジムリーダー”という称号を持つ。所以は一度はカントーチャンピオンマスターにも輝いたことから。本気の彼はやはりその名に恥じぬほどの腕前を見せつける。

最初のポケモンはイーブイ。

ブルー（ ）カントー地方マサラタウン出身

かつてはカントー四天王最強を誇り、大将格だったが、今は辞している。レッドの伴侶。

凄まじいまでの方向音痴。そのため、レッドに会いに行こうにもレッドのいる山頂には全然辿り着けない。  
最初のポケモンはイーブイ。

エリカ（ ）

タマムシジムのジムリーダーを務める大和撫子な和服美人のお嬢様。草ポケモンを使わせれば、シンオウ地方のナタネと双璧をなす存在とまで言われている。

ジョウト地方

ウツギ博士（ ）

ジョウトを代表する研究者。

上の娘と同じように育てたはずなのに、下の娘があんな風に育ってしまったことに対して「いったいどこで教育を間違えたのか」と後悔していたりする。ヒカリが訪れたことによつてコトネを体よく追い出すことに成功し、この隙にクリスを帰郷さえようと目下奮闘中。

コトネ（ ）ジョウト地方ワカバタウン出身

現ジョウトチャンピオンマスター兼ジョウトバトルフロンティアマ  
ルチバトル部門フロンティアブレイン。

女の子スキスキ、というよりアダルティなGLっぽい性癖から周りを散々に振り回すが、意外と真面目な一面も見せる。チャンピオンマスターをきちんとこなしつつも多忙なフロンティアブレイン（最近では半ばバトルタワー全ての部門でブレインを務めている）を務めている辺り、その面を垣間見ることができるだろう。

シルバー（ ）

ロケット団のボス、サカキの実の息子だが、それは公然の秘密。

以前、ウツギ博士の研究所からポケモンを盗み出したこともあるが、謝罪しに行くとともにウツギ博士と和解している。

ジヨウト四天王は現在は辞している。ゴールド、クリスとはライバル関係。

最初のポケモンはチコリータ。

ゴールド（ ）ジヨウト地方ワカバタウン出身

かつてはジヨウトチャンピオンマスターにも輝いたこともあるが、今は辞している。シルバー、クリスとはライバル関係。

最初のポケモンはヒノアラシ。

クリス（ ）ジヨウト地方ワカバタウン出身

ウツギ博士の一番目の娘。妹のコトネのことは家族としては好きだが、その性癖にはウンザリしており、なるべく彼女とは距離を取ろうとしていたりする。ゴールドの伴侶。

最初のポケモンはワニノコ。

ホウエン地方

オダマキ博士（ ）

ホウエンを代表するような研究者。

息子のユウキが自分と同じ研究者となり、かつ、同じスタイルで挑む姿を素直に喜んでいる。

ハルカ（ ）

ホウエン地方トウカシティ、トウカジムジムリーダー、センリの娘。ゲットしたバッチの数は8つとバトルの腕もかなりあるが、本業はコンテストを主眼におくポケモンコーディネーター。

現在は数多くいるコーディネーターの中でも“ホウエンの舞姫”“コンテスト荒らし”とトップコーディネーターの中でも半ば別格扱いされている。

最初のポケモンはアチャモ。

ユウキ（ ）ホウエン地方ミシロタウン出身  
オダマキ博士の一人息子で、ハルカのライバル兼恋人。  
バトルの腕前もかなりのものだが、研究者としての道を歩む。学会からはアララギ博士、コウキと共に若手研究者の超注目株と目されている。

ダイゴ（ ）ホウエン地方カナズミシティ出身  
ホウエン地方でのシエアナンバー1であるデボンコーポレーションの跡取り息子。  
かつてはホウエンチャンピオンマスターだったが、ミクリあるいはミツルに譲り（押し付け）、趣味の珍しい石探しのために全国を駆け回る。

#### シンオウ地方

ナナカマド博士（ ）  
シンオウを代表するポケモン研究者。  
オーキド博士とはタマムシ大学時代の先輩後輩の仲。  
かなりの甘党。

ジュン（ ）シンオウ地方フタバタウン出身  
ヒカリの幼なじみ。「罰金」という言葉が口癖で、事ごとあることに口をつけて出てくる。  
結構せっかちな性格をしていると一面も合わさり、シロナに「変わったお友達」と評された。  
最初のポケモンはナエトル。

コウキ（ ）シンオウ地方フタバタウン出身  
ヒカリの幼なじみ。ジュンが暴走したときは容赦ないツッコミで黙らせるのはいつものこと（尤も、ジュン自体も復活が早いので良心は痛まない）。父親と同じく研究者となる。

最初のポケモンはヒコザル。

シンジ（ ）シンオウ地方トバリシティ出身

初めはユウトを目の敵にしていたが、その知識の一端に触れて心酔するようになった人。

誰が読んだかあだ名は『廃人』。彼自身もユウトからこの言葉の意味を聞いており、本人は若干気に入っている。

その他

カトレア（ ）

かつてはシンオウ・ジョウトバトルフロンティアバトルキャッスルのオーナーを務めていたが、現在はイツシュ四天王に就任。世界的大財閥の娘で、各地に屋敷のような別荘を持つ。

カントーのナツメと同じく、エスパー少女なため、エスパータイプのポケモンの扱いに長けている。

ユウトの恋人の座は狙っている……のか？

タクト（ ）

別名、催眠厨、あるいは伝説厨。

伝説のポケモンでごり押しで勝ち進むのがスタイルだったが、そのおかげでユウトに手も足も出ずにコテンパンに負けた過去を持つ。

タマランゼ会長（ ）

各地で開催されるポケモンリーグの大会責任者。頭髪はすべて白髪で、長く豊かにたくわえた白ひげが自慢の70代後半の老人だが、年に似合わず、カジユアルな格好を好む。

はじまりはいつだったのか。

私が生まれたとき？

私に双子の弟ができたとき？

幼なじみのチェレンとベルと知り合ったとき？

私がポケモンといっしょに旅に出たとき？

それとも私が初めてポケモンバトルで勝ったとき？

ううん、違う。

確信できる。

「ああ、キミがその子を選んでくれたんだ」

私がこの子と出会ったときに他ならないんだって

\*

イツシユ地方カノコタウン。

私は、いや、私達　私：トウコ、双子の弟：トウヤ、幼なじみの  
ベル・チェレン　はこの町で生まれ育った。

何をするにも常にいっしょ。

どこに行くにも常にいつしょ。

一心同体とまでは言い過ぎだけど、でも、誰が何を考えてどういう人柄かなんてのは当たり前のように熟知している。

「で、ベルはまた寝坊なの？」

「みたいだ。キミたちの家に来る前に立ち寄ったら、「先行つてて」だったさ」

「トウヤもそうだけど、ベルも相変わらずよねえ」

「ポヤポヤして世間知らずな分、トウヤよりもヒドい気がするけどね。まあ今日はさすがに先に来たんだけど」

普段はベルとくつつき、世話焼きなチェレンが常とは違う行動を取る。

つまり、それほど今日は特別な日であるのだ、私達にとって。しかし、待つのもヒマだ。

あ、そういえば目の前にカモがいるじゃん。

「で、いつつも傍にいるわけね。告白はいつ？」

「なっ！ ボクは別にそんな！」

「気づいてないのは当人たちばかりとはこのことね」

「あのね、トウコ！ か、勘違いしてるようだから言っておくけど、ボクは別にベルのことは！」

「あら、私っていつ「ベルに告白する」という『言葉』を口にしたかしら？」

「それはキミが！」

「ん？」

「だいたい、あの話の流れから確実に！」

「んんん？」

「……………ぐっ！……………悪女め」



なんていつものごとく、チェレンで遊びながら、私はチェレンといっしょに私の部屋で二人が来るのを待っていた。

ちなみに普段なら、チェレンの最後の言葉には腕ひしぎ十字固めだとか、チヨークスリーパーを決めていたところだが、今回は見逃した。

それは私達の前に置かれているプレゼントボックス故だ。

これはこのカノコタウンに研究所を構えるアララギ博士から贈られたもので、箱の中には、モンスターボールに入ったポケモンが入れている。

私達にとって初めて、所持することが許されたポケモン。

すなわち、私達は今日からポケモントレーナーになるのだ。

小さな頃からポケモンを連れ歩くことには憧れがあった。

ママやパパに頼み込んでもなんだかんだで、結局は不可能だったこと。

それが今、現実に叶うのだ。

そういうことで少々の些事は見逃しても構わなかった。

「ういゝす、おはあああああゝ」

私の部屋に入ってきたのは、目が横線一本でハイ終わりという風な、眠そうな顔をした私の双子の弟。

挨拶なのかデカイあくびなのかビミョーなものも洩れなくセット付きた。

ちなみに普段ならきちんと目は開いている。

「トウヤ、キミは二日酔いのオヤジか？」

「ちがうっつーの」

「どうせ興奮して眠れなかったとかそんなオチでしょ？ あいつかわらず、子供ねえ」

「ばっ！ ちげーよアネキ！」

「ハイハイ」

そういうムキになって言い返すところがまだまだなのよ。  
更に階段をドタドタ上ってくる音。

……人の家なんだからもう少し丁寧に扱ってくださいな。

「ごつめーん！ 遅れちゃった！」

「ベル！ まったく。キミはいつもいつも」

「うわあ！ ねえ、それ、博士からのモンスターボール！？」

「ベル！」

「だって、チエレンってパパみたいにお節介なんだもん」

「あのねえ、誰のおかげで……」

「ねえ、早く開けようよ」

相変わらずのベルのマイペース振りに私達姉弟は苦笑いしながら見ていたが、『ベルの言うとおりか』と思い、箱に添えられていたプレゼントカードを抜き取る。

『ハイ、boy & girl！』

この手紙と一緒に

4匹のポケモンを届けます

4人で仲良く分けてね

それじゃあよろしく！

アララギ

『

紐を解き、中を開けてみると私達4人に行き渡るのに過不足のない数のモンスターボール。

「まずはキミたちから先に選べばいい。ここはキミたちの家だからね」

「そうだねえ。トウコちゃんにトウヤくんが先で〜」

「アネキ先選べよ。オレはアネキの後でいい」

ふむ。

ならば、お言葉に甘えることにして。

とりあえず4つのモンスターボール全てからポケモンを取り出す。出てきたポケモン

「タジャ、タージャ」

くさへびポケモン、ツタージャ。

「カブカブ」

ひのぶたポケモン、ポカブ。

「ミジユ、ミジユマ」

らっこポケモン、ミジユマル。

いずれもイツシュ地方で最初に貰えることが多い初心者用ポケモン。それからもう1体は

\*

「みんな欲しいポケモンが被らなくてよかったね」

「そうだね、ボクもお目当てのツタージャが貰えてよかった。けど、トウコ、いいのかい？」

チエレンの言葉に3人とも私を窺うような視線を送る。

「ひょっとしてアネキ、オレたちに遠慮したりとかした？」

ナルホド。

私が3人に遠慮してこのポケモンを選んだと思ったわけね。

「そんなことないわよ。全然気にしないで」

遠慮した、というのとはまったくの正反対。

実際、私はこの子を見た瞬間、一目惚れとっていいほどの衝撃を受けた。

『この子“で”いい』じゃない。

『この子“が”いい』  
いせ、

『この子“じゃないとダメ”』

ぐらい言い放つても構わなかった。

「だから、そんなことは気にしないでいいわ。私はこの子が気に入ったんだから」

もちろん、あそこまでは言うのも他の子たちに悪い気がしたので言わなかったけど。

その後、「ポケモンを貰ったんだからやることは一つでしょ!」とバトルをして、一回も勝てなかったけど、そんなことは全然気にならなかった。

まだ続きはあるのですが、ひとまずこの辺りで

## 外伝15 ユウト ときわたり（前書き）

お久しぶりでございます。せっかくのGW+10話近くストックが溜まりましたので、ストックが切れるまで週一ペースでの更新を再開していこうかと思えます。

今回は様々な方から要望をいただいたものを掲載しました。リクエストありがとうございました。

時間軸的には本編3話と4話の間、またヒカリのときわたりシリーズ後となります。また構成は第4世代仕様となっております（第5世代は主に外伝13以降となります）。

## 外伝15 ユウト ときわたり

ときわたり。

それは左から右へ一方通行である時の流れの中を、それにとらわれることなく、自由に行き来できる特殊能力。

ときわたり、漢字に置き換えると“時渡り”。

それが表すはすなわち、タイムスリップ。

そんなとんでもないことを行えるポケモンがいた。

その名をセレビィという。

ただ、中には相当特殊なセレビィもいたりするのだった。

\*

「で、セレビィ」

「ビィー」

「オレたちは今度こそ元の世界に帰れたんだろうな？」

「ビビィービィビィ」

「（大丈夫大丈夫。今度は間違いないって。でも、このセリフ何回聞いたかしらね。一回や二回じゃないわよ）」

期待半分不安半分を抱きつつも、やれやれとため息をついた音がオレ以外の他の三人からも漏れてくるのが聞こえます。

なぜ三人かというと、ユクシーの目を見て記憶を失ったJを、その責任としてオレたちが引き取ることにしたためであり、今現在には女もこの旅に同行しているからです（ちなみに日常生活を送るには不自由はないが、自分の名前すらも覚えていない状態であり、あの世界で犯罪者としての生を送るより、やり直しの人生をさせてみた

かったというエゴみたいなものです）。

で、さて。

いったいどんな状況になっているのかというと、既にお察しの通り、さつきまでオレたちは元の世界への帰還を果たしてはいませんでした。

なんですか。

オレたちは流浪の旅人だったとかなんかですか。

あてどなく時空を流離

さまよ

うとかマジ勘弁してほしいかったですけどね。

「ああ！　ここって！」

まあ落ち込んでても始まらないので、状況の把握をしようと辺りを窺っていたときに大声で発せられたヒカリちゃんの声。

「ここあたしん家！」

うん？

ヒカリちゃんの家？

ってことは

「シンオウ地方フタバタウンってことかしら」

ということになるでしょうね。

「どなた？」

そのヒカリちゃんの家からかわいらしいピンクのチェック柄のエプ



ロンを纏った一人の女性が出てきました。  
ヒカリちゃんの大声を聞いて外の様子を窺いに来たのでしょうか。  
あの特徴的な髪型はカンツペキにヒカリちゃんのママさんですね。  
ゲームやアニメで見覚えがあります。  
まあ何にせよ、やっと現代に

「ええええ!! な、なんで!?!」

……うん、だいたい把握したよ。

「ヒ、ヒカリが二人いいー!?!」

またか!?!

またこのパターンなのか!?!

「(セレビィ、何か遺言は?)」

あ、ラルトスとうとうキレた?

口調というか雰囲気やバいよ?

あ、サイコキネシスで拘束された。

「ビィ、ビィビィ!」

助けを呼ぶ声かな?

ごめん、オレにはなんのことがサツパリわからんなあ。

「(ウフ、覚悟はいい?)」

「ビィ! ビィビィビィ!」

後ろで何かやってるけど、オレたちは一切関知しない。



どこぞで休息を取る必要があった。

「なら、ここにしばらく泊まっていきなさいよ」

「そうそう！ それにもっと聞きたいわ、その時渡りの話！」

とこちらの世界のヒカリ親子の鶴の一声によってオレたちは数日ヒカリの家にお邪魔することになった。

\*

明くる日

「これよりカントー地方マサラタウン出身サトシとハウエン地方ハジツゲタウン出身ユウトのバトルを始めます！」

ヒカリの家の前の拓けた広場の一角でオレとこの世界のサトシが向かい合っていた。

というのも昨日、シロナさんが「彼は私より全然強い」と零してしまい、サトシはおるか、タケシやヒカリ親子すら興味津々で、此方が折れたという格好だ。

「最強と謳われるチャンピオンマスターをしてこう言っただけのけた相手に興味を持つのはムリからぬこと」とかシロナさんに言われたけど、こうなる種を蒔いたシロナさんが言うのはおかしいと思う。

まあそれはさておき、そんな訳で見物人はヒカリちゃん、J、セレビィ、こちらの世界のヒカリ親子、タケシで審判はシロナさんが務める。

「ルールの確認をします！ 使用ポケモンは6体のシングルフルバ

トル！ 道具の使用、及び所持は禁止とします！」

ゲームでストーリーを進める際の6006のトレーナー戦みたいな感じですよ。

ゲームの野生トレーナーなら道具は使いませんし。

尤も攻撃技でごり押しなんてこともするつもりはサラサラありませんが。

「では始め！」

いつもとは違う凜々しい声で始まりの合図が告げられた。

「オーダイル、君に決めた！」

サトシは昨日のうちにメンバーを入れ替えて今日に臨んだ模様。つか、アレですか？

あのオーダイルはジョウト編のワニノコが進化したヤツ？

うん、ホントにオレの知ってるアニメ本編と違う。

まあそれはさておき。

「ニドクイン、キミに決めた！」

「あ、オレと同じ言い方」

セリフが被ってることについて当の本人はそんな認識なようです。正直世界が違うので、「パクんな！」って言われてもシカトしますよ。

「水タイプと地面タイプならこっちの方が相性がいい！ 一気にいくぜ！」

「さて、どうかな」

攻撃技で一気に攻めてきそうなのでとりあえず出鼻を挫くというこ  
とで、

「ニドクイン、おだてるだ」

するとニドクインは手をパチパチと叩いてオーダイルを褒めまくる。

「オーダイル、アクアジェット！ って、お、オーダイル？」

するとオーダイルの様子がおかしくなり、

「ちよっ！ オーダイル、何やってんだよ！ 正気に戻れ！」

混乱して自分で自分を殴ったりしています。

ちなみにおだてるは相手の特攻を1段階上げてしまいが、相手を混  
乱させるという技です。

さて、この子は特性は“とうそうしん”という『性別が同じ相手に  
対しては攻撃・特攻が1.25倍になる代わりに、異なる場合は0  
75倍になる。ただし、性別のないポケモンの場合は効果がない』  
というやや珍しい特性。

しんちよう（特防 特攻）という性格もあり、ハピナスを主体と  
した キラーな物理アタッカーに育てていたんですが、サトシのポ  
ケモンはたしか 主体のはず。

ここは攻撃力が下がるので、サポート型戦法でいってみましょうか  
ね。

「ニドクイン、今のうちにどくびしとステルスロックをばら撒け！」

この混乱している隙がもつたないので、ここでステルスロック、

それからどくびしを撒きます。

ステロは1度でいいですがどくびしは最低2回は撒きたいですね。

「よし！ おかえしだ！ オーダイル、たきのぼり！」

混乱が解けたオーダイルがたきのぼりで迫ってくる。

「あまえるだ、ニドクイン」

2体の間には距離があり、迫ってくる間にあまえるがヒット。

その後、ニドクインがたきのぼりを食らう。

オーダイルは元々攻撃が高い上にタイプ一致のたきのぼりでニドクインには効果抜群のだが、それでもあまえるの効果は大きく、少しよるめく程度でニドクインは持ち堪えた。

元々ニドクインは耐久がそこそこ高いというのもはたらいたと思う。

「ニドクイン、どくびしは十分に撒いたな？」

その質問にやや甲高い嘶きでニドクインは応えてくれた。

「うん、いい返事。戻れ、ニドクイン！」

今回オレの手持ちの中にはラティ兄妹がいるが、なるべくなら使わないような方向でいきたい。

伝説のポケモンはそれ自体が非常に強力で、下手をすれば戦法もクソもなくなる可能性を秘めているからです。

なので実質オレは手持ち4体でサトシの6体を撃破しなくてはならない。

ニドクインは器用でほぼ何でもできるから、こんな序盤で失うには正直惜しい。

だからニドクインはここは一旦引かせたわけです。  
代わりは

「オレの2体目！ラルトス、キミに決めた！」

「（了解よ！）」

\*

「あのニドクイン、弱点技をもらっているのに全然効いてない！？」  
「いや、僅かだが効いてる。あまえるが効いているということだろう。それにステルスロックか。これがいったいどうバトルに響いてくるか」

「ステルスロックってたしかポケモンを出すと少しダメージを受けるっていうヤツだっけ？」

「ヒカリ、あなたも旅をしてサトシ君たちのバトルを見てきたはずなんだからそれぐらい覚えなさい。ステルスロックは使われるとポケモンを交換する度に、出したポケモンはダメージを受けるって技よ」

「そしてフルバトルの場合、ポケモンの交換が頻繁におこり得る場合がある。その場合はサトシの方が不利になる。おまけにどくびしの存在だ。どくびしは使われると、相手はポケモンを交換する度に出したポケモンが毒状態になるっていう厄介な技だ。この序盤でこれだけのプレッシャーをかけてくるとはシロナさんが言うだけのことはある」

「そうねえ。それにステルスロックと合わさると出ただけでタイプ相性にも依存するけど結構なダメージを食うわね」

「尤も、飛行タイプと特性“ふゆう”のポケモンは効果を受けないし、サトシがベトベトンやフシギダネみたいな毒タイプのポケモン

を出せば効果がなくなる。それにこうそくスピンを使えばステルスロックも含めて全部吹き飛ばせる。サトシがどんなポケモンを手持ちに入れてるのか分からないが、アイツは突拍子もないが案外巧い手を考えつく天才だ。それに期待してみよう」

こちらの世界組の面々が今のバトルについての討論を行っている。この世界のママもやっぱり凄腕のトップコーディネーターらしく、この世界のあたしより知識量も豊富だ。

「でもステルスロックは1回だけだったけど、なんでどくびしは何回も撒いていたんだろ？ 1回でよくない？」

「うーん……」

「そうねえ……」

ん？

どくびしの細かい効果までは知らない？

「どくびしは2回以上撒き散らすと交換で出てきた相手を猛毒状態にするのですよ」

つて幾分ハスキーなお声のJさんが答えてくれちゃったけど、アレ、なんでJさんがそんなこと知ってるの？

「ヒカリさんやシロナさんが受けている授業をコツソリ聞いてみました。先程タケシさんとアヤコさんの説明にはその部分が欠けていたようでしたので、その点を補足してみました」

「お姉さあぁん！ 素晴らしい！ それほどまでの深い知識、是非ともこのタ・ケ・シに手取り足取りご教じ」

へあ、っつ！ー！」



タケシはどうかやら年上のお姉さんに目がないようです。  
今、急に豹変してJさんの手を取り、その甲に口づけを行いそうな様は、そこに騎士ナイトと姫プリンセスがいるかのような錯覚を受けたけど、彼のモンスターボールから勝手に現れたグレッグがどくづきを彼の後ろからブツサして毒で痺れたところを引きずっていかれました。

\*

「ラルトス。たしかキルリアやサーナイトの進化前のポケモン、エスパークタイプ。……いくしかないか！ オーダイル、ハイドロポンプ！」

「ひかりのかべを張った後にいたみわけだ」

ハイドロポンプが発射されるまでの間にひかりのかべを張る。

これはおだてるで特攻が1段階上がったこと、さらにひかりのかべは交換してもしばらくの間は留まり続けるので、後続に出すポケモンにつなぐことが目的です。

さらにハイドロポンプで受けたダメージもいたみわけで回復と。

とってもおいしいです^q^

「ラルトス、10万ボルトでキッチリおかせししてやれ」

「（当然よ！）」

とりあえず、水タイプのオーダイルは厄介なのでここで何としても退場させる。

オレのラルトスなら、いたみわけ+効果抜群10万ボルトで、

「オーダイル、戦闘不能！」

と持っていける。

「よし！ いったん戻れ、ラルトス！」

「（え、わたしの出番これだけ？）」

オーダイルをダウンさせるためにラルトスに出張ってもらったようなものなので、ここは一度引かせた。  
そして、

「出番だぞ！ ボスゴドラ、キミに決めた！」

早くもといふべきなのか4体中、既にこの序盤で3体目を繰り出した。

\*

「6匹の中でもう3匹目を出すのね」

「相手に自分のポケモンを知らせないというのはフルバトルなら特に重要だけど、そのセオリーからは外れてるわね」

「ですが、それがすべてというわけではありません。彼がいったいどういう考えでバトルをしているのか」

あたしが見るに戦況はユウトさんが優勢。

現在あたしたちは時渡り中なのだからアイテムの補充やポケモンの入れ替えなどは出来ない状態だから、ユウトさんの手持ちはポケモンハンターのときのJと対したときと変わっていないため、水タイ

プを苦手とするポケモンが2体いる。

旅のトレーナーで、かつ、ポケモンリーグにも出場するようなトレーナーなら、パーティに同じタイプのポケモンを被らすということはない。

とすればサトシは貴重な水タイプのポケモンを失ったことになる。おまけに、

「次はコイツだ！ ヘラクロス、君に決めた！」

投げたボールから現れたヘラクロスは

「ヘラクロツ！」

ステルスロックでダメージを受け、

「ああ！ あのヘラクロス猛毒状態になっちゃった！」

ということだ。

以後出てくるポケモンは毒タイプや鋼タイプ、飛行タイプでないかぎり、どくびしで猛毒状態になり、ステロのダメージを受けることになる。

そして今出てきた1ぽんツノポケモン、ヘラクロス。

タイプは虫・格闘タイプ。

鋼・岩タイプのボスゴドラに虫・格闘タイプのヘラクロスは格闘技ならタイプ一致弱点4倍で合わせて6倍ものダメージを期待できるけど、ボスゴドラの物理耐久は並じゃない上、時間をかけ過ぎるとヘラクロスが猛毒のダメージで落ちてしまう。

そして何よりユウトさんのボスゴドラには強力無比なアレがある。

『ヘラクロス 現在猛毒状態』

不意に聞こえた電子音声の方に振り向くとこの世界のあたしが図鑑を開いていた。

さらに

『覚えている技：インファイト メガホーン かわらわり つので つく ビルドアップ ねむる ねごと 』

とそのポケモンが使える技まで読み上げている。

ていうかこの世界の図鑑ってチートすぎない？  
マジでほしいわ・・・

外伝15 ユウト ときわたり（後書き）

アニメBWの図鑑は覚えている技がわかるようなので、実装。  
う、うらやましいなんて思ってないんだからねっ！

それはさておき書き終えたものはみなバトルものばかりなので、  
何かバトル以外のアイデアはありませんかね？

## 外伝16 ユウト ときわたり

「うーん、ヘラクロスか。ちょっと厳しいな。よし、戻れ、ボスゴドラ！ もう一度頼む、ニドクイン！」

そうしてボスゴドラとニドクインを入れ替えた。  
というのも

「ヘラクロス、大丈夫か!？」

「へ、ヘラクツッ！」

ヘラクロスはどくびしで猛毒状態になったからだ。

ヘラクロスの特性は“こんじょう”と“むしのしらせ”。

“こんじょう”は状態異常になると攻撃が1.5倍になり、“むしのしらせ”は自分のHPが1/3以下になると、虫タイプの技の威力が1.5倍になるというもの。

この場合、もしあのヘラクロスの特性が前者だった場合が問題になる。

もし仮に“こんじょう”だったとして、何らかの格闘技を使ってきた場合。

タイプ一致により×1.5倍。

特性により×1.5倍。

さらに鋼・岩タイプのボスゴドラに使用する場合、格闘タイプに対して岩・鋼はそれぞれ弱点となるため×2×2で×4倍。

合わせると×9倍の威力となる。

さすがにボスゴドラでもそれは耐えられない可能性が高い。

その点ニドクインなら、毒タイプがあるため、虫タイプや格闘タイプの技を半減できる上に耐久もあるという、グライオンに次ぐ、ヘラクロス受けとも言うべきポケモン。

ツノの形から のヘラクロスのようで“とうそうしん”により攻撃技の威力が弱まっているが、ピンチな状況なら博打を打つのも構わないが、今は堅実に攻めるべきとき。

「ヘラクロス、いけるか!？」

「ヘラクロツ！」

一方、ステルスロックで1/8ダメージ、おまけに猛毒状態のヘラクロス。

猛毒状態は1/16、2/16、3/16……と時間が経つほどダメージが増えていくという厄介な毒状態。

交代すればまたカウントは1/16からになるが、ねむるなどの技や特性“しぜんかいふく”などがなければ、持ち物を使えないルール上、治す手立てがない。

サトシのポケモンがいやしのねがい（使えば瀕死状態になるが、その後、控えから出てくるポケモンの状態異常を回復+HP全回復）やアロマセラピー（味方全員の状態異常回復）などの技を覚えているとは考えられないし、覚えられるポケモンでもない。  
とするとサトシは

「くっ、猛毒だとそんなに長い時間はかけられない。この際一気にいってやる！」

という戦法を取る以外はなくなると思ってしまったりするだろう。

「ヘラクロス、からげんきだ！」

「ヘラクロツ！」

ヘラクロスがからげんきを決めるためにニドクインに急速に接近す

る。

このままからげんきをたたき込むつもりかもしれないが、そのは問屋が卸さない。

「ニドクイン、メロメロ！」

ニドクインに攻撃が刺さる手前でメロメロがヒットする。

「ああ！ ヘラクロス！」

ヘラクロスは目がハ・ト型になっていてからげんきを放つことが出来なかった。

「いまだ！ つばめがえし！」

つばめがえしは飛行タイプなため、ヘラクロスには4倍弱点技として突き刺さる。

威力的にはだいもんじと同じだったが、このニドクインは物理アタッカーかつヘラクロスの特防はなかなか高いため、こちらを採用した。

それがメロメロ状態で無抵抗なヘラクロスを直撃した。

「ヘラクロス、耐えるんだ！」

「へ、ヘラクロッ！」

まあ、つばめがえしを耐えることは計算済み。ただ

「ヘラ！？ ク、ク……」

「ヘラクロス!？」



「ヘラクロス、猛毒のダメージにより戦闘不能！」

ステロのダメージもあることだし、こうなるのも自明の理だよね。

\*

「頼むぞ、カビゴン！ 君に決めた！」

「カ〜ビ〜」

「サトシ、がんばって！」

「カビゴンか。サトシのカビゴンは相当クセが強いからな。期待できろぞ」

シロナさんがどくけしを打って最低限の処置を施した後に再開されたバトル。

サトシの三番手として出てきたのはカビゴン。

特殊耐久が非常に高く、また高いHPのおかげで物理耐久もなかなか侮れない厄介なポケモン。

「戻れ、ニドクイン！」

ユウトさんも、やっぱりニドクインでは荷が重いのと思ったのか、ボールに戻す。

代わりに出てきたのは、

「もう一度頼むよ、ボスゴドラ！ キミに決めた！」

再びボスゴドラの登場。

「またボスゴドラなの？」

「カビゴンは攻撃が高くて物理アタッカーとしての面が強いから、防御の高いボスゴドラには相性がいいわ。逆に特攻はそれほど高くないから、特防の低いボスゴドラでもそこそこ耐えることが出来る。あたしでも同じ判断を下すと思うわ」

「ふふ、どっちもヒカリだけど、おかしな感じね」

確かに両方ヒカリだから少しおかしい気もしなくもないけど、あたし自身は以前も体験したことだからもう慣れた。

「あのカビゴン、特性は“あついしぼう”なのね」

例によって、カビゴンはステロのダメージを受け、なおかつ、どくびしで猛毒状態にもなったようで、察するに特性は“めんえき（毒状態にならない）”ではなく“あついしぼう”の方。

「今までのおかえしだ！ カビゴン、すてみタックル！」

「カ〜ビ〜！」

「げっ！？ なんちゅう速さだよ！」

ドスドスと地響きを鳴らしながら、ユウトさんの驚きの通り、あり得ないほどのスピードでボスゴドラに対して疾走するカビゴンは、あたしのカビゴンに対するイメージとはかけ離れた姿だった。

「ボスゴドラ、まもる！」

「かまうな！ いけえ カビゴン！」

「カ〜ビ〜！」

とりあえずすてみタツクルのダメージを避けるためなのか、まもるを指示したユウトさん。

（いくら規格外っぽいカビゴンとはいえ、岩・鋼タイプに対してのすてみタツクルなのになんで、まもるなんて指示したのかしら）

なんて思っていたとき。

まもるの薄緑色の壁に阻まれてすてみタツクルのダメージはゼ……

「えええええ！？」

口のはずが、まもるの壁を破られてそのまま突進される。そしてさらに

「はいいいい！？」

あたしもユウトさんと同じくビックリ仰天！

というかなんでよ！？

なんで、まもるのガードは破られるし、タイプ一致といえど防御はバカ高い上に威力は1/4にまで抑えられるはずのすてみタツクルで、どうしてボスゴドラの方が吹っ飛ばされるわけ！？

「いいぞ、サトシ！」

「いけー！ そのままやっちゃえ、カビゴン！」

「がんばって、サトシ君！」

サトシ側の応援は非常に盛り上がってます。

「とどめだ！ カビゴン、もう一度すてみタツクル！」

さらに追い討ちをかけるべく、サトシは再度すてみタックルを指示。また、猛毒状態で苦しみながらもドスドスと疾走するカビゴン。

「来るぞ！ ふんばれ、ボスゴドラ！」

吹っ飛ばされたボスゴドラは耐性を立て直すと、地を力強く踏みつけ、膝を折る。

そのため足が地面にやや沈みこんでいた。

「なる」

ユウトさんが狙っているものがわかった。

\*

「メタルバースト」

その一言でさつきまでのカビゴンいけいけムードを木っ端微塵にぶっ飛ばしました。

「か、カビゴン？ カビゴン！ しっかりしろ、カビゴン！ がんばってくれ、カビゴン！」

サトシは必死に呼びかけていますが

「カビゴン、戦闘不能！」

地に倒れ伏すカビゴンに立ち上がる余力はなかったと。

オレが何をやったのか。

答えはさつきボスゴドラに指示をしたメタルバースト。

「メタルバーストは、自分が攻撃する前に最後に受けた技のダメージを1.5倍にして相手に返すという技。あれほどのすてみタックルならば、そのダメージを返せば、こうなるのも当然だよ」

おまけに、ステロ、猛毒状態のダメージも蓄積していた。

「正直、ねむるで回復していれば、カビゴンの体力の高さなら倒れるまではいかなかったかもしれない」

「っ！ 戻れ、カビゴン！ ………………」

指示ミスと見通しの甘さを指摘され、一瞬熱くなるものの、それもすぐ治まったようだった。

「次はコイツです！ ジュカイン、君に決めた！」

4体目のポケモンは草タイプのジュカイン。

サトシのポケモンではリザードンやカビゴンに並ぶエース格だったかな。

「今のメタルバーストには正直かなり驚きました。でも、ボスゴドラも二度のすてみタックルでかなりのダメージを受けたはずです」

「たしかに。それはサトシの言うとおりだろうね」

「そして倒してしまえばメタルバーストを食らうこともない」

「それもそうだ」

「なら、ここでボスゴドラを退場させる！ ジュカイン、リーフブレード！」

あゝ、これはマズイ。

サトシそれはマズイッて。

「ジュッツ!?!」

リーフブレードがボスゴドラに炸裂するも、ボスゴドラに大したダメージは与えられなかった。

それも当然。

リーフブレードは物理技。

そしてボスゴドラは物理防御に関してはメチャクチャ高いというのはさっき話したが、逆にジュカインの攻撃の高さは平均よりやや高いかといったところ。

これではダメージはあまり見込めない。

「ボスゴドラ、がむしゃら」

そして接近したジュカインに対してのボスゴドラのがむしゃらが決まる。

がむしゃらは相手の残りHPから自分の残りHPを引いた分のダメージを与えるという一風変わった技。

ボスゴドラはカビゴンの二度のすてみタックルにジュカインのリーフブレードのダメージによってかなりHPを減らしている。

一方ジュカインはステルスロック以外のダメージは負っていないため、ボスゴドラの残りHPと鑑みると相当のダメージを受けることになる。

「がんばれ、ジュカイン！」

「ジュー！」

するとここでジュカインの特性“しんりよく”が発動。これは自分のHPが3分の1以下になると、草タイプの技の威力が1.5倍になるという特性だ。

「ジュカイン、今度はリーフストームだ！」

「ボスゴドラ、ストーンエッジ！」

サトシもオレもこの2体は最後の技の出し合いというのはわかっている。

あとはどちらが先に相手の技にヒットするかだけだ、

「ジュツ、カインツッ！」

素早さ的には圧倒的にボスゴドラより速いジュカインの方が先に決まる。

今までのダメージ+“しんりよく”で威力の高まったリーフストームにより、300kg以上の重量を誇るボスゴドラの巨体は大きな音を立てて地に沈むことになった。

「ボスゴドラ、戦闘不能！」

とりあえず、オレのポケモンは1体失ったことになる。

ジュカインの方は、リーフストームに阻まれてボスゴドラのタイプ一致ストーンエッジの礫は僅かしか到達しなかった。しかし

「ジュ、ジュカ……」

ジユカインの方もその場に倒れ伏した。

「ジユカイン、猛毒のダメージにより、戦闘不能！」

サトシもポケモンを失うこととなった。

ここに来て、ステルスロックとどくびしの影響が俄かに出てきた。

\*

「す、すい……」

「なんてレベルの高い、いえ、計算しつくされた戦いな……」

「たしかに。まるで詰め将棋を見せられているような感じです」

タケシの言うとおりの気もするけど、実際はサトシがユウトさんの仕掛けた罠というか術中にまんまと嵌まっている感じ。

でも最初にニドクインを出したときはきつとこんな戦法ではなかったと思う。

昆布（どくびしやステルスロック、他にもステルスロックと似たような技のまきびしを使った戦法）をするなら、エアームドやドラピオンなどの耐久が高いポケモンを使う方がいいと教わった。

ニドクインはそこそ耐久は高い方で昆布などによってパーティをサポートをすることも出来るけど、あのニドクインは“とうそうしん”からのハピナス突破を始めた物理アタッカー型で、決してサポート型の育成をしていたわけではなかったはず。

でも、最初のオーダイルへのおだてるによって、ステロやどくびしを撤く時間、というか隙は出来た。

混乱している間にきつと戦法を変更したんだ。



あんな僅かな時間で戦略を一から組み立て直したのか。

いや、違う。

『確立されているような戦法はだいたい頭の中に入っているから』

以前、“ポケモン講座”の中でそんなことを言っていた気がする。そのときあたしとシロナさんは『いたいところそんなのが確立されたのよ』と思ってしまったこともあるが、それは事実なんだろう。

きつと、あの人はいろんな状況を想定してその膨大な知識から、『コレ』という戦法を選び出した。

『すごい』という言葉で言い表すことなんかできない。そんな言葉では不敬だとすら思えてしまう。

「まだまだ先は遠いのね」

あたしの夢への道の険しさを思い、あたしは思わずポロつと零してしまっただが、

「これでわかったことがある」

ユウトさんの言葉により聞き咎められることはなかった。

\*

「サトシ、キミはバトルを行う上で、ポケモンに対する知識がなさ

すぎるんだ」

カビゴンにしてもジュカインにしても、なんであれ、いきなり突っ込むとかは拙かった。

「メタルバーストにがむしゃら。がむしゃらは予想できなくても、ボスゴドラが出てくればメタルバーストを警戒するのは当然のこと」

この世界はどうだか知らないし、オレたちの世界ではそれはかなり怪しいが、少なくとも現実世界では当たり前のことだった。

尤も、それを彼に要求するのは酷なことかもしれないが。

「そしてジュカインの最初に指示をしたリーフブレード。これはボスゴドラの特徴を知っていればまず選択などしない。リーフストームを覚えているなら、迷わずリーフストームを選択するべきだった」

ボスゴドラは防御が高い代わりに特防がかなり低い。

等倍特殊攻撃なら下手をすると一撃で持っていかれることもあるほどだ。

さつきならばリーフストームをブチかましていれば、たとえ、ラルトスの張ったひかりのかべの効果で特殊技が半減される状況であろうと、ジュカインはノーダメージでボスゴドラを突破することもできていた。

下がった特攻は一旦交換すれば元には戻るから、ゲームとは違い、リスクはほぼゼロ（リーフストーム後に特攻が下がることを知っていればだが）。

「リーグで準優勝したことは大変素晴らしいことだし、奇抜な戦法も大いに結構だけど、基本を疎かにする者にこれ以後伸びるモノはない！ 勝利の栄光もないんだ！」



外伝16 ユウト ときわたり（後書き）

ヘラク羅斯は、の場合、ツノの先端がハート型になっています。

外伝17 ユウト ときわたり(前書き)

ほんの一部を修正しました。

外伝17 ユウト ときわたり

「戻れ、ジュカイン」

モンスターボールの白いスイッチから放たれた赤いレーザー光線がジュカインを直射して、シロナさんによって毒消しを打たれたジュカインがボールに戻った。  
サトシはそのボールに伏見がちに視線を落とす。

「ありがとう、ジュカイン。よく頑張ってくれたな。あとはゆっくり休んでくれ」

やっぱりサトシはどこに行ってもやっぱりサトシで、ポケモンに対する愛情・慈しみは変わらない。

「確かにオレには知識は足りてないかもしれませんが。コイツらのごとも含めてポケモンたちのことをまだまだ知らないと思うし、これから知っていかなきやいけないと思います」

そこでキツと目線を上げてその強い眼差しをオレに送ってくる。

「でも、オレは勝負を諦めるなんてことは絶対にしません！ 最後まで全力で戦います！」

うん！

いいねいいね！

この前向きさがいい！

バトルは諦めなければ、最後の最後までわからない。諦めなければ何かいい手段が見つかるかもしれない。

尤もそれは保有する知識量に左右される。

彼に足りていないのはそののみ。

この一見アニメの中の、されど現実の世界ならば『リセット』なんてこともきつと起こらないでしょう。

ならば、彼に知識を叩き込むのも悪くない。

一応断っておきますが、さっきはあんなことを言いましたが、サトシは好きなキャラですよ。

だから、ちよつとぐらい肩入れしてもいいよね？

「ああ！ ポケモントレーナーならそうこなくちゃな！」

このバトルについてはオレが勝ってみせるけどね。

さて、話はバトルの方に戻して。

これでサトシの手持ちはピカチュウを含む2体。

その内、不明なのが1体。

サトシのパーティには水・草・炎・飛行タイプはほぼ必ず入る傾向があり、水・草・炎に関しては御三家がほぼ例外なく入る（ちなみに電気もそうなのだが、ピカチュウは絶対に外れないのであえて除外）。

その中で今回のバトルに出てきたのは電気を除けば、水と草。

それ以外にはノーマル、虫、格闘。

とすると残りの1体で一番あり得そうなのが飛行タイプか炎タイプ（しかも御三家）。

飛行タイプは全体的にあまり優秀といえる特性はなく、御三家炎の特性は“もうか”しかない。

「ゴウカザル、君に決めた！」

ん！

これで6体全て確定。

ゴウカザルは炎・格闘タイプで、シンオウ御三家の1体の最終進化形。

こっちはゴルダック、ニドクインと相性が良い子たちがまだ残っている。

ただ1つ問題があつて、それは

(わたしを出しなさいよお！)

さつきから出せ出せうるさいラルトスさん。

“超”が付くほど久しぶりなバトルだったため、出番あれだけで引つ込めさせられたのが、かなり不服な様子。

正直ここでラルトスを出して“もうか”を特性“トレース”でトレースしても、旨みはほぼない。

まだ、ピカチュウの“せいでんき”をトレースした方がお得だ。

お得なんだけど

「仕方ない。ラルトス、キミに決めた！」

たまには思いっきりバトルさせるのもいいかと思い、要望通り、ラルトスを指名。

「(ツシャオラアアア！)」

超やる気満々でフィールドに飛び出していった。

ていうか、そんなにバトルしたかったのね。

それからその雄叫びは女の子がしていいよつなやつではないから…

…。



\*

「サトシ、大丈夫かしら……」

「ステルスロックのダメージに猛毒状態と形勢は不利だ。サトシが何もしなくても、ゴウカザルの体力は減っていく」

「おまけに格闘タイプにエスパータイプは相性が極めて悪いわ。迂闊に攻めてもさっきのヘラクロスの二の舞みたくなるだろうし」

「ですね。ここは慎重さが求められる。頑張れよ、サトシ」

心配そうな面持ちでバトルの行方を見守る3人。

その一方、サトシは、

「ゴウカザル、ビルドアップだ！」

積み技で能力アップをして対抗していくようだ。

ヘラクロスのときと同じく、とにかく速攻速攻と攻撃技を仕掛けていくことはマズイと考えたっばい。

ただ

「ラルトス、アンコール！」

それだけではユウトさんのラルトスは止められません。

さらに追撃とばかりに、今、ゴウカザルの周りには黒い不気味な瞳がいくつも浮かび上がり、それらがゴウカザルを睨みつけてます。

これはくろいまなざしかな。

くろいまなぎしは使ったポケモンがフィールドから消えない限り、相手のポケモンはボールに戻すことが出来ない（逃げられない）ようにする技です。

「マズイ、マズイぞ。ゴウカザルはアンコールでビルドアップしか技が出せない。アンコールを解除するために、ゴウカザルを戻そうにもくろいまなぎしでボールに戻せない」

「じゃ、じゃあ、サトシはどうすることも出来ないの!？」

「一応ビルドアップは出来るからどうすることも出来ないわけじゃないでしょうけど、その間にユウト君とラルトスがどういうことをしてくるのか。ゴウカザルとサトシ君としては彼らがすることを黙って見ていることしかできないわね」

「ラルトス、よこどりだ!」

よこどり!？

なんつー珍しい技を!

「よこどりってどんな技かしら?」

「よこどりとは相手が使おうとした能力アップをさせる技や回復系の技の効果を奪い、自分にかけるという非常に珍しい技です」

ヒカリの問いにJさんがまたまた説明してくれました。

「そんな技があるんですか。知りませんでしたわ」

「私もつい先日知ったばかりです」

ママはどの世界でも有数のトップコーディネーターなんだけど、それでも知らないなんて。

まあ、ユウトさん曰く『ドマイナーな技』らしいので知らないのも

無理のない話なのかもしれない。  
ちなみによごどりされると、相手は使おうとした変化技を使うことが出来ません。

ゴウカザル&サトシ超涙目……。

「……よし！ ラルトス、もういっちょ！ かなしばりの後にめいそうだ！」

……ここに来てそれですか  
うん……。

「ユウトさん、メチャクチャえげつないなあ」

くろいまなざしで逃げられず、アンコールで技を一つに縛られ、唯一できるビルドアップはよごりで奪われ、その後はかなしばりでビルドアップすら使えなくして行動不能にする。

そして動けなくなったところでめいそうで、特攻特防アップ。  
イヤすぎる……。

なにこの凶悪コンボ。

なにこの凶悪コンボ。

なにこ（ry

大事なことなので3回（ry

「とどめだ！ ラルトス、サイコキネシス！」

……結果は言わなくてもわかるよね？

\*

「ピカチュウ、君に決めた！」

最後の1体は当然、あちらの最終兵器光厨<sup>ピカチュウ</sup>。

「ピカピツカツ！」

ピカ厨さん、超やる気ツスね。

キラツとした目に頬の赤い電気袋から電気が洩れだしています。ホントは静電気をトレースしたかったけど、ビルドアップもめいそうも積んだから、相殺、どころかむしろプラスの方向に運ぶことになりました。

あとついでに気になったんですが、

「ピイカツ！」

なんでピカさんはステロも毒びしも食らってないのですか？  
なに？

ボールから出てる状態だから、ダメージは受けなくてもいいの？  
それとも毒びしもステロもボールから出た状態だったから避けるのも容易かったとか？

オレのラルトスでもそんなことは起こりませんよ？

ひょっとしてこの世界特有の現象とかですか？

まあなんにしる、さすがは『厨』という言葉が入っているポケモン。  
マジパネエっすね。

尤も猛毒状態になっていないなら別の方法で攻めていくのも可能だ  
けどね。

「ピカチュウ、出し惜しみはなしで一気にいくぞ！ ボルテッカー  
！」

「ピツカッ！」

宣言通りに電気タイプ最強の大技を指示するサトシ。

「ピカピカピカピカピカピカー！」

ボルテッカーを出す際の掛け声と共に、ものすごい突進スピードで  
以てして、ラルトス目掛けて突撃する。

「ラルトス、聞こえるかぜ！」

とりあえずまずはピカチュウの素早さを落としますか。

「負けるな、ピカチュウ！」

「ピカ、ピカ、ピカ、ピカ、ピカ！」

聞こえるかぜはダメージはそれ程でもないのですが、上でも述べた  
ように素早さ1段階ダウンが非常にいいんです。

サトシの声援に応える形でピカチュウも頑張つて聞こえるかぜの吹  
きすさぶ中をボルテッカーで駆け抜けてきますが、影響は免れない  
ようで、スピードが落ちてきています。

もう一押ししときますか。

「ラルトス、リフレクター！」

「（あら、おにびじゃないの？）」「

「体力回復できるぞ？」

「（なるほど。じゃあ美味しく頂くわ）」

オレの言葉で、この後のことを全て理解してくれたようで、ラルトスはリフレクターを張る。

これでしばらく物理ダメージは半減。

「ピカピツッカーー！」

直後、ピカチュウのボルテッカーがラルトスを直撃。

しかし、ビルドアップでの防御力アップ+リフレクターによって電気物理攻撃技最強のボルテッカーといえど、あまりダメージにはなり得なかった。

（リフレクターも張ったとはいえ、これぐらいなわけね）

（大丈夫か？）

（まったく問題ないわ。チクツと痛かっただけよ。でも、お返しはお返しよね！）

「よし、ラルトス、マジカルリーフ！」

数ある技の中で回避不可能な必中技のマジカルリーフを選択。

それがボルテッカーの反動を受けている最中のピカチュウに襲いかかる。

「がんばれ、ピカチュウ！ ほうでん！」

「ピイイカ、チューー！」

おろ、ほうでんなんて技が使えたのね。

しかし、ナイスチョイス。

ほうでんは全体範囲攻撃技なので、一方向にしか飛んでいかない！

0万ボルトよりは、この場合は効果的。  
ただ、ほうでんの威力的な問題とラルトスがめいそうを積んでいた  
こともあって、マジカルリーフは半分ほどしかほうでんに撃墜され  
ませんでした。

「チャアアア！」

マジカルリーフの直撃によって宙に吹っ飛ばされるピカチュウ。

「負けるなピカチュウ！ がんばれ！」

「ピッ、ツカツ！」

サトシの声援を受けクルツと宙で体勢を整える。

「ピカチュウ、そのまま10万ボルトだ！」

「ピーカ、チューー！」

自身が落下しながらの10万ボルトが放たれる。

「ラルトス、ひかりのかべ！」

「（ビリビリはやーよ？）」「

先程張ったひかりのかべはとうに切れているので、再度張る。

直後、レーザーのようにまっすぐ直進するのではなくてジグザグマ  
が歩くかのごく、ジグザグとやや蛇行しつつ進む10万ボルトがラ  
ルトスに直撃。

「（ああ、肩こりに効くわ。いい電気刺激マッサージね）」

しかし、めいそう+ひかりのかべで全然効いておらず。

「よし！ ラルトス、とどめだ！」

「（了解よ！）」

ラルトスはテレポートで姿を消す。

「ピイツ!? ピツ!? ピカツ!?」

突然消えたラルトスに、きれいに着地したピカチュウは動揺して首を左右に振るも姿を捉えることが適わない。

「!? ピカチュウ、後ろだ！」

サトシが気づき、声を張り上げる。

ピカチュウが振り返るも、既にすべてが遅くて

「ピ……カア………ZZZ………」

トロンとした目で後ろ向きに倒れると胸が規則正しく上下するとともに穏やかな寝息が聞こえてくる。  
ラルトスのさいみんじゅつが決まった。

「ピカチュウ！ 起きろ！ 起きるんだ！ 目を覚ませ！ ピカチュウツーーー！」

どこぞ修造バりに自身の声を張り上げさせ、目を覚まさせようとするサトシだったが、

「ゆめくい」

「（いただきます）」



ピカチュウが目を覚ますことはなく、ラルトスのゆめくいが決まる。

「ピカチュウ、戦闘不能！ サトシ君が6体すべてのポケモンを失ったため、このバトル、ホウエン地方ハジツゲタウン出身ユウト君の勝ちとなります！」

\*

あれから数日ヒカリの家で過ごしたオレたちは、この世界のヒカリのママさんの言葉に従ってある町へ行くことにしました。

その名も『ハイテク都市』として名高いラルースシティ。

ママさん曰く、ここはかつてセレビィが訪れる小さな島としてトッブクラスのトレーナーたちの中ではそこそそ有名だったらしい。

しかし、この島を含めて周囲を再開発し、最先端技術の水位を結集した超ハイテク都市を建設する計画が浮上。

セレビィが訪れる島を開発させるわけにはいかないが、表立って騒げば、『幻のポケモン、セレビィが訪れる島』として立ち所として有名に。

そうなれば、ロケット団やポケモンハンターなどの善からぬ者たちにつけ狙われるということから、セレビィを説得して別の場所に立ち寄らせるということに成功。

それ以来セレビィもラルースも無事問題もなく終わり、ラルースの完成をみた。

ただ、ここ最近では別のセレビィが再び、この島を訪れるようにな

つたのだとか。

なんだか皮肉な話な気もする。

で、セレビィの時渡りならぬ世界渡りで、ピンクのツンデレちっばいゼロのメイジのいる世界やら、リリカルマジ狩る全力全壊の世界やら、「契約してよ」と迫ってくる孵化器がいる世界やら、魔法使いやらマギステルなんかのいる世界やら、古代某国の有名な人が皆女性という世界やら、とある魔術だか科学だか知らないけど「その漢字からそんな痛いカタカナ横文字なんて読めねーよ」のトンでも能力の世界やら、あちらこちらの世界を彷徨っていたので、なら『1体だけで無理なら2体でやればいいじゃない』という作戦に打って出ることにしたオレたちはフタバタウンを後にして一路、ラルースシティに向けて旅立ったわけです。

ただ、予想外なこともあつて、それが

「ねえ、見て！ラルースシティってすごいよねえ！」

「なになに？」『都市の中は動く歩道や、プロボと呼ばれるガードロボなどがあり、あらゆる設備が自動化されています』ってなんだかすごそうだな」

「あ、ねえサトシ、ヒカリ！」『ポケモンに関する施設も充実！

様々なバトルやコンテストも楽しめます』だって！」

「おお！なんだか燃えてきたぜ！」

「ピツカツチユ！」

「よーし！アタシもそのコンテスト出場しちゃうわ！」

「ポチャチャ！」

サトシたち御一行様です。

なんでも、彼ら3人（+ピカチュウ）にポケモン講座をやったらえらく好評で、オレたちがこの世界を離れるまで、ずっと受け続けた

なので、ラルースシティに向かうメンツはJを含むオレたち4人＋サトシたち3人＋ラルトス・ピカチュウ・ポッチャマとかなりの大所帯となっている。

ヒカリちゃんが一番サトシたちと年が近いためか、あの中にすでに溶け込んでいる。

というか初めて行くラルースシティのガイド本片手に彼らと騒いでいる。

「なんとというお祭り騒ぎ」

「でも、にぎやかで楽しいじゃない」

「ですね、子供らしくていいと思いますよ」

隣を歩くシロナさんやJが本当にニコニコとして彼らを見ている。

(まあ、いいことじゃない、見てて飽きないし。わたしたちはあんな風にさわぐ性質たちではないからね)

まあ、ラルトスの話には同意はするんだけども。

「にしてもアレ、すごいですね」

Jさんが話題を変えて振ってくる。

ただ、その話は何度目か。

いや、たしかに驚きなんだけども。

「本当に別人よね」

シロナさんもそれに相槌を打つ。

『いったいだれが?』というところらのヒカリちゃんとの世界のヒカリちゃんがということ。

中身の人間的部分は違くとも外見は同じ、なはずなのにその外見、特に顔が全く異なっている。

どういうことかというのと、答えはメタモンのへんしん。

同じ顔では何かと問題もあるだろうということ、こちらの世界のヒカリのママさんが、持っていたメタモンをオレたちの世界のヒカリちゃんの顔にひつつけて、メタモンに『へんしん』してもらって顔だけ別人になってもらっているという。

初めに聞いたときはビックリでしたが、これが意外や意外、よく出来ている。

なので、オレたちがこの世界を離れるまで、オレたちの世界のヒカリちゃんにはそれで過ごしてもらおう予定です。

ちなみになんていきなりこんなことが出来るのか疑問に思い、尋ねてみたら「昔これでよく変装をしていた」のだからか。

これ、帰ったら絶対研究しようと思いましたが。

「それにしてもラルースシティね。こちらでは聞いたことないわ」

「世界が違えば、同じようでも細部が違うということもあるのじゃないか」

そして何気なく視線をシロナさんの持つガイドブックに落とす。

「……ん？」

アレ？

これ……

「ごめんなさい、シロナさん！ それちょっと貸して！」

「あ、ちよつと！」

「ユウトさん？」

返事も聞かずに、半ばひつたくるようにして、それにじっと視線を

落とし、突然のことに2人が何か言っているようだが、今は脇に置いておいて読み漁る。

名前にはサツパリ聞き覚えがなかったけど、これは……

「うわっ、マジか」

思わず、口を吐いて出てしまった。

ラルースってここか。

たしかデオキシスの映画のヤツか。

レックウザとデオキシスが暴れて、最後にセキュリティシステムが暴走する……。

映画ではたしかホウエン地方だったはずだが、サトシたちというフラグ、もといたラブルメーカーたちがいるから、ここがシンオウだろうと、なんだかイヤな予感が拭えない。

「はあ、なんだか前途多難な気がする」

余計なトラブルに巻き込まれないように願うばかりだった。

外伝17 ユウト ときわたり（後書き）

帰還後、ユウトに『変装』のスキルが加わりました。

そして最後はデオキシス映画のフラグを立ててみましたが、変更する可能性は大いにあり得ます。

そしてヒカリの変装を『この世界のヒカリ』 『ユウト達の世界のヒカリ』に変更しました。

ちなみによこどりはふいうちとの相性がかなり良い技です。

相手攻撃してきそう ふいうち

相手積みそう よこどり

という具合で。それからよこどりが決まるとスカツとするのは私だけ？

外伝18 シロナとヒカリの実家ご訪問（前書き）

今回は急遽、本来の話の前に、頂いたアイデアの中から即興で書けそうなものを選抜して書き上げてみました。

神様 紡様ありがとうございました。

他のアイデアにつきましてもできるだけ形に出来るよう努力してまいります。

これからもよろしく願います。

## 外伝18 シロナとヒカリの実家ご訪問

ホウエン地方。

カントーやジョウト、シンオウとは異なり、比較的温暖な気候である。

平坦な地形が多く、さらに海や熱帯雨林などの緑が広がるなど、自然が豊か。

砂嵐吹き荒ぶ砂漠や、火山灰が降り注ぐなどの、他の地方ではなかなかお目にかかれない地域もあつたりする。

また各地方の中で、海の占める割合が最も大きい地方でもあり、ホウエン地方の道路の半分が水道であつたり、海上の島に町が多く存在することはその証左であろう。

さらに気候の温暖な穏やかな気質は人々やポケモンたちに心に余裕を持たせてくれるのだろうか。

人と人とのつながり、人とポケモンとのつながり、ポケモンとポケモン同士のつながりが強く、『豊縁』という言葉も生まれるようになった。

さて、そんなホウエン地方の北西部の一角にハジツゲタウンという町がある。

えんとつやまのふもとに位置する小さな農村で、風の影響により、噴煙を上げているえんとつやまからの火山灰が多く降り注ぐ土地であるが、『火山灰にも負けない』という野菜を作っている。

また、この近辺は隕石の落下によって出来たと伝えられている流星の滝など、隕石の多い、あるいは縁の多い土地でもあり、それらを研究するために、この町に研究所を構える研究者も存在する。

そんな一農村ではあるが、ここを訪れるポケモントレーナー、あるいはコーデイナーは多い。

なぜなら、この町には彼らの興味・関心を惹きつけてやまない魅力



溢れる施設が存在するからだ。

その一つがバトルテントと呼ばれる、あるルールに則ってポケモンバトルを行う施設。

これはホウエン地方にあるバトルフロンティアのある一つの施設を実際に体験できるという施設である。

ホウエン各地に存在し、このハジツゲタウンではバトルアリーナを体験できる。

ちなみに勝ち抜くと、すごいきずぐすりが景品としてもらえる（ハジツゲタウンの場合）。

もう一つがポケモンコンテストのコンテスト会場。

ここではスーパーランクと呼ばれるランクのコンテストが開催される。

ホウエンでのグラランドフェスティバルは『ノーマル』『スーパー』

『ハイパー』『マスター』とあるランクの中で、マスターランクでなければ出場資格は与えられず、マスターランクに上がるには、ノーマルランクから一歩ずつ着実にステップアップしていかなければならない。

そのため、ハイパーにランクアップするために、コーディネーターは特に多くこの町を訪れたりする。

また、彼らほどではないが、研究者たちも訪れることがある。

それはこの町の西のはずれにホウエン地方のポケモン預かりシステム管理人のマユミの家があり、化石のマニアが高じて化石の研究者になり、自宅を研究所兼採掘現場としてしまった兄妹を訪れるためでもある。

閑話休題。

そんなハジツゲタウン。

マユミや化石マニアの兄妹の家ではないにしろ、やはりハジツゲタウンの西のはずれにはこの物語の主人公、ユウトの実家がある。

今日はそんな彼の生家を訪れたとある2人のお話。

ハジツゲタウン中心部から外れた郊外に建つ 郊外特有の土地の  
広さに比例した大きさの ごく普通の庭付きの一軒家。  
それが初めて見たときの印象だった。

「こんにちはー！ サエコママさんいますかー！」

玄関から声をかけるヒカリちゃん。

すでにそれはよく見慣れた光景だ。

すると、家の奥からパタパタとスリッパの音を響かせて、前掛けを  
掛けた女性が一人。

「あら！ いらっしやい、ヒカリちゃん、シロナちゃん！」

この長くもなくかといって短くもない赤みがかった黒髪の女性はサ  
エコさん。

ヒカリちゃんが言ったとおり、ユウト君のお母さま。

私より年が一回り以上は軽く上で、かつ一児の母なのに、それを全  
くと言っていいほど感じさせないその若さ、美しさには、初めてお  
会いたときには衝撃的だった。

今ではいろいろお世話になっています。

「サーナ」

「ダネダネ」

「ブスター」

そしてサーナイトにフシギダネ、ブースター。

この子たちはユウト君からサエコママさんにプレゼントされたポケモンで、サエコママさんのお手伝い、護衛、手持ちポケモンを兼ねていたりする。

家の中ではこの3体が活躍するが、外ではまた別のポケモンたちが活躍する。

ちなみにサエコママはトレーナーではないので6体制限はなかったりするが、ママさんはあまりそれ以上を持つとしたりする。

「こんにちは！ みんなもこんにちは！」

「ご無沙汰しています。あなたたちもね」

彼らも含め、サエコママさんは私たちを知らない仲ではない、というよりも半ば（9割以上）身内としての扱っている。  
なので、

「2人とも案外早かったのね。とにかく上がって。まずはお茶にしましょう。おいしいお菓子もあるのよ」

と、簡単に家に上げられる私たち。

「ごめんねえ、急に呼び出しちゃって」

「いえいえ、ぜんぜん。むしろ将来的にはおいしいかなと」

「そう？ とりあえずこっちからもプッシュかけてるし、応援してるから頑張ってるね」

サエコママさんと知り合ったキツカケは“ホウエンの舞姫”こと八

ルカちゃん。

『 将を射んとすればまず馬を射よ』 かもね、2人ともし』

ということで紹介された。

初めての時は緊張といういろいろな意味での衝撃を持ったが、大変気さくな方で助かった。

そして『女3人揃えば姦しい』とはよく言ったもの。

話の内容はいつのまにかコイバナの方にまで姦しく発展していった。

「女の子はいつだって恋の話が好物なのよ」

それが若さを保つヒケツかもね、と冗談めかして言っていたことは今でも耳の奥に残っていたりする。

そしてついだというか、こっちが本命だけど、サエコママは私たちのことを応援してくれるらしい。

私もヒカリちゃんもどちらも譲る気はなく、ただ、どちらかは諦めなければならぬという思いが頭の中を持上げていたが、

「男なら、女の2人や3人面倒見る甲斐性がないとダメね。安心して、ユウトにはきちんと2人を娶るよう強権働かせるし、「社会通念上ダメ」なんて言ってきたら、その社会通念ごとぶっ飛ばしてあげるから。いくらあの子がチャンピオンだろうと、私の子供であることに変わりはないんだものね」

なんていうありがたいけど、正直言って何を言っているかコメントに困るような、そんな言葉をいただいた。

ちなみに、最初は冗談だと思ってたけど、それ以後、会うたびにいろいろなところに連れられて挨拶をしたり、何やらかなりのお偉いさん（かなりボカシてます）を呼び出してお話をしたりと、なんだ

か本格的過ぎて私もヒカリちゃんもいつのまにか信じるようになっていた。

「周りを固めてしまえばあとはどうにでもなるわ。あとはあなたたちのお嫁スキルを磨くだけね」

そうしてサエコママは私たちを扱き出す。

……初めは全然ダメダメだった。

サエコママは次こそはがんばろうねという感じだったが、サーナイトやフシギダネには呆れられ、ブースターにはため息を吐かれてしまった。

ちなみに、サーナイトにフシギダネはきちんと家事をこなせたりする。

なんとなくサーナイトはわからなくもないけど、フシギダネはつるのむちやはっぱカッターで器用に掃除や料理などをこなすさまはかなりシユールだった。

「ポケモンにすら劣るあたしたちって何なんでしょうかね、シロナさん」

その日は2人で枕を濡らしたのは今でも記憶に残っている。

尤も、初めはそんなだったが、年単位で過ぎていけばそれも随分改善されたもの。

今では「炊事洗濯得意です。家事全般余裕で出来ちゃいます」と胸を張って言えますよ。

言えますよ。  
言え

「……サーナ」

「……ブスター」

そのこの2匹、あからさまに首を振ったり、ため息をついたりしない！  
それから、ブスターはため息ついでに若干炎が出ちゃってるから！

「ダネダネ、フッシッシー」

ありがとう、フシギダネ。

慰めてくれてるはずなのに、でも、どこか笑っているように感じる  
のは気のせいよね？

「フッシッシッシッシー」

ま、まあそれは置いてといて。

でも、昔よりかなり改善されたのは確かなんですよ！？

「……昔がヒドすぎただけなんですけどね」

「ボソツと言っならもう少し声落としなさいよ、ヒカリちゃん！  
聞こえてるんだからあー！（泣）」

ゼツタイ。

いつかゼツタイ見返してやるんだから！（泣）

追伸

かたづけはきちんとできる女になりました。

シロナ

皆さん、お久しぶりです、ヒカリです。

私はいまユウトさんのママさんにお呼ばれして、ユウトさんのご実家にシロナさんと一緒に来ています。

初めてここを訪れたときは、ハルカさんの紹介で、想いを寄せる人のお母さんといった感じだったんですけど、あたしたちとユウトさんのことを聞いたママさんが、あたしたちのことを「あなたたちとつても気に入ったわ」ということ。

以来、『花嫁修業だ』『義娘に会いたい』『息子とはあれからどうなのか』『ちよつと手伝つて』『ある人に紹介したいから来て』『お料理作り過ぎちゃったから食べに来て』『一緒に買い物行こうノ旅行に行こう』だの、他にも様々な理由でお呼ばれして、今やすっかり身内としての扱いを受けています。

今日の用件はママさんが近所の人と一緒にパーティーをやるといふことでそのお手伝い。

ついこの前は、

「お義母さんって呼んでね」

なんて言われちゃいました。

その日1日は舞い上がっちゃいましたよ。

で、その話をシロナさんにしたら

「孫の顔はいつ見れるのかしら。楽しみね」

なんて言われたそうで。

うん、あたしもその後似たようなこと言われたけど、あたしが先なのでそのところはよろしくお願いします。

「そうね。楽しみだわ。うふふふ」

なんてやり取りもあったりしたけど、なかなか楽しくやっています。すこぶる良好ですよ、あたしとシロナさんとの仲は。疑似一夫多妻だけど、ママさんが

「そんな細かいことは気にしなくてぜんぜん大丈夫よ」

なんて言われ、その後のママさんの様々な側面を見たら、たしかに気にするのもアホらしくなりました。てか、あの人何気に

「ヒカリちゃん、これよろしくー」

「ハイ！」

ととと。

それよりも準備準備。

サーナイトもサイコキネシスで手伝ってくれて、ママさんから受け取ったものをひとまず、リビングとテラスを隔てる大窓の許に置く。

「サーナイトはママさんのところに戻って。ヌマクロー、それ置いたらあたしと一緒にこれを持っていくの手伝って。ゴリキー、このテーブルとイス4セット運んで。あ、おかえりオニドリル。じゃあお勝手の方に持って行ってね」

あたしは1階のテラスとリビングの設営を指揮しています。



このテラス、それから2階のベランダにもですが、以前みんなで協力してアルミ製の屋根を取り付けてみました。

この近辺はえんとつやまの影響で火山灰が降るので、主にそれを防ぐためにです。

覆いが掛かっているところは昔に比べるとだいぶ汚れなくなりました。

その部分に関しては雨の後は灰が固まってものすごく掃除が大変だったりする苦労はだいぶ軽減されたように思えます。

ちなみにシロナさんは今、家の中の掃除です。

あの人、料理はまあうんそうなんだけど、それ以外にはすごい才能を発揮しています。

ただ、それを利用してユウトさんの部屋の発掘、じゃなくて物色、でもなくて掃除を行うというのはなんだかビミョーに納得いかない。そこそこきれいな部屋でそんなに物が置いてあるわけじゃないのに、なかなかの時間をかける。

ベッドの下や本棚の後ろ、机の引き出しの底の方を“掃除・整理”という名目で覗くのもよろしくない。

うらやまs、じゃなくて、あたしも混ぜるべく、じゃない、ゴホンゴホン……道徳的に非常によろしくはないと思うんだ(ニッコツ

……あたしだって、あたしだってこれくらい………あー、スタイルもつとよくなりたいわあ……。

「ゴリツキー、リツキー？」

「ああ、ごめんごめん。ちょっとボーっとしてた。えーと、次はー  
」

ゴリキーが手持無沙汰だったので、我に返り、支度を続ける。

ちなみにこのパーティー、あたしたちのことを知らせるために開くというような話もママさんから聞いていた。

「確実に外堀埋めてってるよね」

まあ、それは致し方ない。

ユウトさんがなんだかんだでハッキリさせないのがわるい。

いや、あたしたちのこと大切にしてってくれるのはよくわかる。

ただ、それがあたしたちが特別なのか、それともごく普通の、他の人に対しても同じものなのか。

「ユウトさん、言葉にしてくださいよ。言葉にしてくれないと……」

こちらとしても不安で不安で仕方なくなる。

あなたの気持ちが変わらなくなる。

以心伝心なんて言葉があるけど、あんなの少なくともこのことに関しては絶対ウソっぱち……。

言葉にしないと伝わらない思いもある。

「やれやれ……。なんだかなあ……」

「又マクロー？」

「ん？」

はたと気づくと又マクローが不思議そうにあたしを見ていた。

「おっと。ごめんね、又マクロー。お疲れさま。次はあ……」

「ヒカリちゃん、だれか連れて来ようとして来て」

「ハイ、わかりましたー！　じゃあ、又マクロー、一緒に来てくれる？」

「又マクロー！」

まだ日が傾く前の時間。

あたしたちの将来のために、万事物事は進んでいく。

外伝18 シロナとヒカリの実家ご訪問（後書き）

ユウトのママ、サエコ初登場。というかサエコママって何者よ？  
（笑）

途中、あまりにカユクになって恋愛系からは脱線してしまいました。  
むずかしいなあ……

外伝19 雨乞い祭り 波乱の予感？（前書き）

まさかまさかのあの人が……

外伝19 雨乞い祭り 波乱の予感？

「雨乞い祭り、ですか？」

【そうそう。なんか作物の豊穰を願って、恵みの雨を請うっているよ。よくある祭りの一種みたいなんだけどさ。それでその祭りの催しの一つにさ、 っていう があるみたいだね。】

きみも来てみないか？

最終的にユウキさんからそのようなお誘いを受けて来てみました。どこにかつて？

イツシュ地方リゾートデザート（の近く）です。

や、リゾートデザート自体、いろいろあって俺自身何度も足を運んでたりしてましたが、ここはリゾートデザートからは少し離れた、しかし、やや乾燥気味な気候のとある町です。

ちなみにタテワクタウンとかいうらしいんですけど、イツシュらしく立涌文様からの名前のようにです（イツシュ地方は文様の名前から町の名前を取っています）。

この町はゲームにはありませんでしたね。

それにしても立涌とか、まさか水蒸気すら羨ましかったとでもいうのか？

まあその辺は置いていて。

「お久しぶりです、ユウキさん」

待ち合わせ場所のポケモンセンターでお目当ての人物を見かけたので、声をかけると、

「ん？ きみは？」

ひよっ？

ユウキさん、オレのこと知って ああ、そういえば！

「（ひさしぶりね、ユウキ。ユウトはメタモンで変装してるのよ）」  
「え？ ラルトスのテレパシー？ ってことは！？」

頭の上に乗っかってアイス食べているラルトスのテレパシーによってわかってくれたようでした。

「お久しぶりです、ユウキさん」

「あ、ああ、ひさしぶり。にしても話には聞いていたけどまるつきり別人だな。確かにこれなら衆人にはバレないな」

ユウキさんはまだ見たことなかったんですね、これ。

実は以前メタモンを使った変装が出来ることを知り、いろいろ研究してました。

いくつか問題もありましたが、無事に実用化でき、プライベート時間で町などの人がいるようなところでは大いに役立ってます。

「ところで、ラルトスのそれってヒウンアイスか？」

「（そうよ。クッキー&チップス）」

「好物なんでここ来る前にわざわざヒウンシティに立ち寄って買いましたよ。いやー、一番狙い目の火曜日の夕方じゃないから買うのに苦労しましたよ」

とりあえず、ユウキさんに連れられて町を歩くオレたち。

ちなみにこの人、オダマキ博士の息子さんと父と同じように、フィ

ールドワークを得意とする（というよりフィールドワークばっかしてる）研究者として有名になってきました。  
オーキド博士曰わく、業界では若手の中でかなりの有望株で、若手の研究者たちをアララギ博士・コウキと共に一手に牽引しているといった認識だそうです。

「そつえばハルカさんはどうしたんですか？」

確かフィールドワーク兼観光兼デート（というより婚前旅行という気がしないでもないけど）で二人でイツシュ地方各地を回っているとか、以前連絡があつた気が……？

「ああ。ハルカはアレだ。ライモンシティだ」

ライモンシティというと、イツシュ地方一の娯楽都市として有名で、カミツレさんのライモンジム・巨大観覧車が著名な遊園地・様々なスポーツが行われるビッグスタジアムにリトルコート・“現実では”『厳選』などという言葉の名のもとに個体値が良くない、性格が狙っていたものとは違った、狙っていた性別ではないなどといったポケモンは容赦なくその辺に捨ててきた不届きで非常識な廃人が集う、“サブウェイクオリティ”全開のバトルサブウェイがあるギアステーションなどの様々な施設があるが……ああ、なるほど。

「ポケモンミュージカルですか」

「そう。ハルカのヤツ、アレにハマっちゃってね」

ポケモンミュージカルとはイツシュ独自のもので、自分のポケモンを着飾り、ミュージカルで演技をさせるという施設。

「しかも、これが大ウケでさ、ミュージカルのオーナーもしばらく



ずっと出演してほしいって熱望しててさ」

「さすが。“ホウエンの舞姫”という異名は伊達ではないですね」

「それでハルカはハルカでノリノリだから一発OKしちゃうし」

「（ハルカのポケモンならコンテストにも慣れているからそういうところでもしっかり応用効いちゃいそうなものね）」

「そういうこと。だから諦めて置いてきた。ま、暫くすれば、戻ってくると思うから好きにさせてるよ」

（束縛はしないのはもとより、ハルカさんを信頼しきってるわけか）

（アツアツってことよね）

（わかってるとは思うが、伝えるなよ？）

（そっちこそ口には出さないようにね）

と、それとてにかくオレたちはポケモンセンターを後にしました。

さっきも思いましたが、町を歩いていると普段は並んではないんだろうって見受けられる屋台やテントが軒を連ねているし、頭上には万国旗が紐状に連なる形で幾重も掲げられています。

通りを行く人々は普段にも増して活気づいているような感を受けるし、今なんか、小さな子どもたちが綿アメを片手にヨーテリーやズルグ、マメパトなんかといっしょに楽しそうに駆けていきました。こんなところからも今この町がお祭りムード一色に染まっているんだということを感じ出しています。

屋台は見るだけでも楽しいもので、冷やかしながら歩いていくとお互い彼女はいるので、男同士でも気にならないといえれば気にならないが）

（少しは女心を理解してあげないとかわいそうでしかたないわ）

なんて耳に痛い言葉を聞き流していると、前方のやや開けた広場の

ような場所の入り口といえるべきところにあるゲートに

【第8回雨乞い祭り記念 ポケモン雨乞いバトル大会】

という垂れ幕が掲げられていました。

「そつ。いやはや、これはきみから初勝利をもぎ取るチャンスというべきかなと思って」

そつ。

これがユウキさんがオレを誘った理由。

オレの知り合いは公式でも非公式でもバトルでオレから勝ちをもぎ取るために様々なところでのぎを削り、鍛練を繰り返しているのだとか。

大袈裟すぎだろと思う気もするけど、四天王やチャンピオン、フロンティアブレーンでもまだオレに黒星を付けていない。

まあオレだって負けっぱなしはやっぱり悔しいから同じようなことをしそうな気もするけど、オレだってまだ負けるつもりはない。

『オレは彼らの一歩も二歩も先を行ってみせる』と思いつながら、ユウキさんからこの大会のルールを聞いていました。

「ルールは2VS2のシングルバトル、ただし、準決勝からは3VS3のシングルバトルになるけどね。道具の使用はあり、ただし、重複はなし。ポケモンの重複もなし。あとはタワーとかサブウェイルールと似たようなものだね。それからこの大会独自の環境と面白いルールがあるんだ」

まずはこの大会独自のバトル環境。

それは

フィールドに常に雨が降っている状態であること

なんでも町のポケモンたちが協力して雨を降らせるらしい。  
そしてユウキさんの言う『面白いルール』、それは

雨を止ませた段階で、止ませた方の負けになるということ

「“雨乞い”祭りなんだから雨を止ませたら負けっていうのはまあ理解できる」

「そうですね。にしてもこのルールはおもしろい！ 要は雨パ限定ルールですかね！」

「ぼくらのいえばそうだな。水タイプの技の威力を上げるだけじゃなく、特性や他のタイプの技、持ち物なんかをフル活用したいところだ。それからゴルダックの登場はOKをもらったよ」

とすると特性“ノーてんき”はいいわけだ。

まあ、ノーてんきは天候の影響を打ち消すだけで、天候そのものを変ええるものじゃないし。

レックウザ？ 特性“エアロック”？

そんなのが出てくるとは到底思えませんわ。

んで広場でちょちょいと受付を済ませて、さて、明日からの大会に備えて手持ちの入れ替え兼宿泊するためにポケセンに戻ろうと思っ  
ていたら

「あれ？ ユウト、これ、ひょっとして……」

なんて言っただれを引き止めるユウキさん。  
見てみると出場者の名簿をやや難しい顔で見せてもらっています。  
何をそんなに真剣にと思い、覗き込んでみました。

「ユウト、この名前」

彼の差した指先に書かれていた名前は

「タクト？」

正直、その名前はよくある同名の人間だと思っていましたが、どうやら違うようです。

あれは何年前だったか。

このタクトという人物、オレが初めてシンオウリーグに出場したときのあの難癖を付けてきた伝説厨なようです。

当時のバトルでは、そのバトルスタイルと性格によってお高くとま  
りすぎた鼻っ柱を叩き折ってやったと記憶しています。

難癖についてはシロナさんが握りつぶしましたし。

それと、あのバトルのおかげで、少なくともイッシュでは違うと見  
受けられますが、オレが彼とバトルする前に回っていた地方のジム  
リーダーや四天王、チャンピオンの間では、彼の評判は頗る悪いよ  
うで。

普段ジムリーダーはバッチの獲得数に応じて挑戦者とのバトルに使  
用するポケモンを変えているみたいなのですが、彼に対してだけは  
問答無用で“超”という漢字が幾つも付くほどのガチパーティーでバ

トルをするそうです。

そのときはやはり伝説を使っていたそうで、新人やタイプ相性が頗る悪いジムはともかく、老練のジムリーダーならその対戦成績はまあ推して知るべしだったとか。

それもあの直後ぐらいの話で、オレ自身、これでもいろいろ各地を旅して回っていました。最終、それから噂を聞きませんでした。あれから果たしてどうなっているのやら、気になるところ。

「はい！ お預かりしたポケモンはみんな元気になりましたよ」

「タブンネー」

「タクトというトレーナーのことですか？ そうですねえ、彼かなりの数の伝説のポケモンを持っていると聞いたことがあります。実際、預かったポケモンは皆“伝説のポケモン”と呼ばれるポケモンでしたから。明日の大会もきっとその伝説のポケモンが出てくるのではないですか？」

「タブンネー」

この町のポケモンセンターのジョーイさんもそんなことを言っていました。

……タブンネにはツッコまないからな！

………ん？

そういえばオレって

レックウザ？ 特性“エアロック”？

そんなのが出てくるとは到底思えませんわ

ねえ、これふらぐ？

フラグなの？

旗立てちゃったの、ねえ？

答えてよ、ラルえもん！

「（今たこ焼きと焼きそば食べるのに忙しいから後にして）」

おい

おい

オッス！

オイラ、アツシユ。  
シッポウシテイ出身の新人トレーナー。  
ポケモンマスターになる夢を目指して旅に出てる。

「ダゲキッ」

コイツはオイラの相棒のダゲキ。  
オイラの父ちゃんがオイラにポケモンを貸してくれて、それでシッポウシテイの近くのヤグルマの森っていうところで初めてゲットしたポケモンなんだ。

今旅に出て2ヶ月ぐらい経ったけど、超順調。

なんでかつつーとこの2ヶ月でサンヨウジム、シッポウジム、ヒウンジムと3つのジムを制覇してジムバッチを手に入れたんだ。

んで、次のジムがライモンシテイに向かう途中、リゾートデザートが一番近くの街のタテワクタウンに寄ったんだ。

そしたら何か『雨が降ってる条件下でのポケモンバトル』とかなかかオモシロそうなバトル大会があつてよ、モチ、ソツコー参加決定。雨が降つてようが、正直オイラには関係ないね。

絶対優勝してやるもんねー！

『さあ！ 今回でいよいよこの大会も今回で8回目を数えるに至りました！ では、今年も始めてまいりましょう！ タテワクタウン雨乞い祭り記念、第8回雨乞いバトル大会！』

オイラの試合は第3試合目だから、今やってるバトルの次の次。控え室で待機してる最中、チラッと覗いてみたんだけど、雨が降つ

てるせいか、水タイプが多い。

その次に水タイプに相性で有利な草タイプ、電気タイプを見かける。他のタイプももちろんいるけどこの3タイプが一番多い。

ま、尤もオイラにはカンケーないけどね。

気合いと根性で攻めて攻めて攻めまくるのみよ！

「なっ！ ダゲキ！」

「ダゲキッ！」

『では次のバトルに参ります！ シッポウシティ出身アツシユ選手とこれは珍しい、ハウエン地方ミシロタウン出身ユウキ選手です！では両選手、入場してください！』

よっしや！

まずは一勝して1回戦突破だぜ！



外伝19 雨乞い祭り 波乱の予感？（後書き）

アッシュはアニメ英語版？のサートシ君の名前ですが、サートシ君とは一切関係ありません。名前だけ借りた完全なる一発キャラ（の予定）です（性格は初期のサートシ君そのまんまですが）。ゲーム中でそこそこのレベルの高い短パン小僧当たりでも当て嵌めてください。ただ、まさかのタクト再登場フラグ（正直Y O S O G A I）も立ったことですので、再登場は……ないと思うんだけどなあ。アッシュ、一つ忠告しておくよ。

どこのサートシ君並みにバリバリのフルアタで攻めていくことだけがポケモンではないのだよ。

外伝20 雨乞い祭り とあるモブの立場から(前書き)

『積み技(変化技)ってすごく大事だよね?』

これが今話のテーマです。アイデアを提供していただいたKI様、  
沢庵様、ありがとうございました。

## 外伝20 雨乞い祭り とあるモブの立場から

【タテワクタウン雨乞い祭り記念 雨乞いバトル大会!!】

毎年恒例となりつつあるこの大会。今回も開催しますよ!

エントリーはタテワク広場にて 月 日 時まで随時受付中!

さあ、キミもエントリーして豪華商品ゲット!

明日のポケモンマスターはキミだ!!

### 《大会ルール》

本大会のルールについて

- ・ エントリー出来るポケモンは6体まで。
- ・ その中から2体を選択しての2vs2シングルバトルです。
- ・ 準決勝からは3体を選択しての3vs3シングルバトルとなります。

基本はバトルタワーやバトルサブウェイと同ルール(道具を持たせることは許可、ただし、重複は不許可。またポケモンの重複も認めないetc)

ただ一点、

【フィールドは常に雨が降っている状態であり、雨を止ませた段階で、止ませた方のトレーナーの負けとなる】

この大会にはこのルールが存在します。

この点に関しては十二分に注意して大会をお楽しみください。

タテワクタウン雨乞い祭り記念 雨乞いバトル大会実行委員会

〈大会宣伝のチラシより一部を抜粋〉

『さあ、このバトル大会もフィールド内は雨が降り気温も若干低下する一方、バトルに臨むトレーナー、ポケモン、そして観客席の熱気はどんどん高まっています！ では次のバトルに参りましょう！ まずは赤コーナーはイツシュ地方シッポウシティ出身アツシュ選手です！』

うわっ、結構人多いな。

だって会場いっぱいに入ってるし。

ま、ちよつと緊張するけど、どうせポケモンリーグに出ればここより遙かにデカイ会場にいっぱいのお客の中でバトルするわけだから、いずれオイラの花道を飾るための予行演習と思えばちよつどいいわけだ。

「続いて青コーナー、記録によれば初めてのイツシュ以外の地方から参戦してくれました！ ホウエン地方ミシロタウン出身ユウキ選手！」

なんか頭が真っ白な人が出てきました。

つか白髪？

しかもホウエンとか田舎だろ？

お上りさんには都会人の情けで負けてあげるより、現実は斯くも厳

しいといつことを理解させるべきでしょ。

『では、バトルスタート!』

といつことで

「いけ! ダゲキ!」

気合いと根性でガンガン押しまくってやるぜ!

なんで

なんでだよ

なんでなんだよ!

「ダゲキ! もう一度からてチョップだ!」

「ダゲキッ!」

「デンリュウ、コットンガードとリフレクターはもう十分だ。なき  
ごえでもしておこうか」

「リュウ。デン、リュウ!」

相手は余裕綽々、逆にこちらは焦りばかり募る。

なぜかっていうと

「リュウ」

「デンリュウ、大丈夫だよな」

「リュウリュウ」

「念のための確認だ」

オイラのダゲキの攻撃は間違いなくデンリュウにヒットした。だけど

どうして相手のデンリュウには効果がないんだ！

「あゝ、さっきから見るとむやみやたらに攻撃の指示ばかりしているようだけど、ポケモンバトルってそれだけではダメなんだよ」

「なんだと!？」

「それに今のきみのダゲキの状態を理解しているかい？」

白髪の言うとおり、注意深くダゲキを見てみると、

「ダ、ダギツ……!」

動きが何だかカクカク(?)していて、常日頃の状態に比べると少し精彩が欠けているようにも感じる……? ?

「このポケモンの名前は知っているかい？」

「デンリュウだろ、電気タイプの?」

「なら、デンリュウの特性は? 覚えられる技は? デンリュウは能力的にどういことが得意で何が不得意なのか知っているかい?」

「そ、それは……」

く、悔しいけど、あの白髪の言うとおり、オイラはそんなこと全然知らない……。

「まあ、ここでデンリユウの解説を細かくしても仕方ないが、一部だけ。デンリユウは電気タイプポケモンで素早さは低いけど、耐久力はそこそこあるポケモン。そしてコットンガードは物理防御を大幅に上げる技で、リフレクターは物理攻撃のダメージを半減させる技、なきごえは相手の物理攻撃力を下げる技だ。ダゲキは能力的に物理攻撃が非常に得意だが、コットンガードとリフレクターで防御が限界まで上がり、加えてなきごえで攻撃力を下げられては、攻撃力が非常に高いダゲキといえど、ダメージは稼げない。ここでできはその状態に構わず、デンリユウに接触するような攻撃の指示をダゲキにし続けた。ところでぼくのデンリユウの特性は“せいでんき”。効果は接触攻撃をしてきた相手を一定の確率で麻痺状態にすること。あれだけ何度も触れられればそりゃあデンリユウの特性も発動する。つまり、きみのダゲキはぼくのデンリユウにほとんどダメージを与えることが出来ず、逆に“せいでんき”で麻痺状態に陥ってしまったということさ」

な、なんだよそれ……。  
そんなこと……。

「2度目だけど、ポケモンバトルはただただ闇雲に攻撃ばかりしてもダメなんだ。ポケモンの様々なことをトレーナー自身がよく知り、理解すること。そしてそれに見合った戦略をトレーナーが組み立てて、それを遂行出来るようにバトルの流れの舵を取ること。もちろんトレーナーとポケモンの息の合った連携とポケモンのレベルも必要なことだけど、これができなければこの先勝ち上がっていくことはかなり厳しいということを理解しなければならぬ。さて、仕上げだ、デンリユウ」

かみなり

オイラのダゲキはその一撃を麻痺で避けきることが出来ずにクリーンヒット。

『これはすごい！ ユウキ選手のデンリュウが圧倒的強さを見せて、アツシユ選手のダゲキを一撃の下にダウンさせました！ ダゲキ、戦闘不能です！』

「確かにアンタの言うとおりなのかもしれない。でも、勝負は最後まで何があるかわからないし、最後まで諦める気もオイラにはない！ 絶対アンタに勝ってみせる！ 頼むぞ、行け！ ハーデリア！」  
「バウツ！」

オイラが2番目にゲットしたポケモン、ヨーテリーの進化系。ダゲキと並んで最も頼りにしている一匹。  
ただ、ああは言ったけど、勝てない可能性が正直高えと思うけど、ここで勝てなくなったら一矢は報いてみせる！

「ハーデリア、かたきうちだ！」

これは直前に自分のポケモンが倒されていたときには、威力が大幅に上がる技。

その驚異はアロエさんにこれをやられたときに実感した。



これなら、いくらあのデンリュウでも

「リュウ、リュウ！」

「んっ、そこそこいいダメージだったか」

ちっ、倒すまでにはいたらなかったか。

ていうかあのデンリュウとんだけ堅いんだよ!?

こっちは以前これでダゲキが一撃でダウンしたってのに!

「デンリュウ、ボルトチェンジ！」

「避ける、ハーデリア！」

だけど、ハーデリアがデンリュウにかたきうちを決めた直後ということもあり、ボルトチェンジは避けられず。

デンリュウは発光する玉のような形になってハーデリアに一撃を加えた後、モンスターボールに戻っていった。

「デンリュウ、ありがとう。ゆっくり休んでくれな」

白髪はボールに戻ったデンリュウに労を労っている。

さて、次はどんなポケモンが出てくるのか。

ボルトチェンジは相手に一撃をくらわす代わりにこちらのポケモンを強制的に交代させる電気タイプの技。

以前ヒウンジムジムリーダーのアーティさんがとんぼがえりを使っていたのをバトルで見たことがあるが、その電気タイプ版がこれ

だと教えてもらったことがある。

あんなつええデンリユウが出てきたわけだから、次のポケモンも相当強いに違いない。

正直ジムリーダーなんかよりよっぽど強いのかもしれない。

「よし！ 次はお前だ、いけ！」

そして投げられたモンスターボールからは、

「フニヤアアウ！」

『ユウキ選手、デンリユウのボルトチェンジによってフィールドに現れたポケモンはレパルダスです！』

レパルダス。

確かタイプは悪タイプでチヨロネコの進化形だったよな。

ていうか、ダゲキだったら相性有利だったのに……！

オイラが交換してダゲキを温存しておいたらよかったのにな。ちっ。

オイラがもっともつとよく考えておけば……。

「さあ、いくぞ、レパルダス！」

「フニヤアアウ！」

おっと、そんなのは後で考えよう。

ええと、そうだな。

「ハーデリア、ふるいたてるだ！」

「バウツ？ バウツバウツ」

ハーデリアは『えっ?』といった感じで振り向いたけど、オイラが頷くとその命令が間違いではなかったとばかりに頷き、自身をふるいたてる。

たしかこの技で自分の攻撃力を上げることが出来るってサンヨウジムの三つ子ジムリーダーに教わったから、これでハーデリアはさらに強くなったはずだ。

「レパルダス、みがわりからのいばるだ」

「フツ！ フ、ニヤアアアアアウ」

「バウ？ ！！ バウツバウツバウツバウツバウツバウツ！！」

「お、おい！ ハーデリア、落ちつけて！ なにやってんだよ！」

あのレパルダスがいばるをやってくれたおかげで、急にハーデリアが怒り出した。

「バウツバウツバウツバウツバウツバウツ！！」

「ああ、くそっ！ いいから、落ちつけ！ 落ちつくんだ、ハーデリア！」

ハーデリアは勝手に攻撃しですが、怒りで我を忘れたその攻撃にレパルダスは当たってくれず、逆にハーデリアは自滅ダメージを負う。

「バウ、バウウウウウ！」

それが余計気に入らないらしく、またまた頭に血が上ってしまつという悪循環に達しているようだった。

「とどめだ！ レパルダス、イカサマ！」

レパルダスが素早くハーデリアに接近してその前足で一撃をくらわ

した。

「というかイカサマ？

なんぞそれ？

「というかあんな猫キツクのような軽そうな技でハーデリアが負けるはずが

「バ……バウ……」

「つて、んな……」。

「決まりました！ ハーデリア戦闘不能です！ このバトルはホウエン地方ミシロタウン出身ユウキ選手の勝利です！ ユウキ選手、2回戦進出決定！」

「アホな……！」

「ああ、いたいた」

「ボーッと試合を眺めていたときに、横からそんな声が聞こえた。

「あなた、さっきの」

「オイラとバトルした白髪だった。」

「なにしに来たんだ？」

正直今は関わりを持ちたくはない。  
早くどっかに言ってくれとも思ってる。

「いやさ、正直ぼくとのバトルで何を感じたのか、それを聞きたくてね」

何を感じたか？

アンタとの圧倒的な格差を感じたってところか。

「ぼくを感じたこととしてはきみはこれからもっともっと強くなる  
ことが出来ると思う」

いや、それをアンタに言われてもね。

オイラが今までやってきたことはアンタに全否定されたわけだし。

『さあ、続いて次の試合です！』

『

「まあ、言いたいこともいろいろあるだろうけど、この試合を見ながら聞いてよ。この試合はものすごい見所のある試合になるはずだ」

んー、見所ねえ。

全然知らないトレーナー同士の対戦だけど。

強いて言うなら、片方が“全国チャンピオン”って人と同じ名前なだけか。

あ、それとラルトスを連れる。

まあ、偶然かな。

“全国チャンピオン”はなかなか行方がつかめないことで有名だし、  
第一顔も違うし。

それにそんな人がこんなところの大会に出てるとは思えないし。

と、思ってたんだけど、この白髪が言うんだからきつと何かすごい

ことが起こるんじゃないか、とも思ったりする。

『両者1体目のポケモンが出揃いました！ シューティー選手のポケモンはプルリル、ユウト選手のポケモンはドレディアです！ しかし、シューティー選手はいきなり苦しいタイプに当たりましたが、はたしてどのような立ち回りを見せてくれるのか！ 期待したいところですよ！』

「戻れ、プルリル！ ゆけっ、ハトーボー！」

「ドレディア、ちょうのまい！」

『シューティー選手、プルリルを戻して、相性有利なハトーボーに交換しました！ 一方ユウト選手はドレディアでちょうのまいを選択！ これは今やドレディアを代表する超有名なあのコンボに繋がる布石でしょうか！？』

ドレディアを代表するコンボというのは、ちょうのまい はなびらのまいと繋げるコンビネーション技のことで、“全国チャンピオン”がポケモンリーグで初披露して、その美しさと強力さから一気に浸透した。

以後、ドレディアの使い手は皆この技を覚えさせているらしい。

「特性“マイペース（混乱しない）”なら混乱のデメリットなしで使えるしね」

「でも、飛行タイプ相手じゃあ、ドレディアは交換するしかないんじゃないか？」

「……本当にずいぶん変わったみたいだね」

「そりゃあ、さっきイヤっていうほど痛感したし。ダゲキ温存しとけば、レパルダスは何とかなったかもしれないって思ったし。だから、交換だって考える」

「うん、まあそうだね。ただ、草だから飛行には弱いつて頭から考えてそこで思考停止してしまうと手痛いしっぺ返しを食らうこともある」

そうこうしているうちに、ドレディアのコンボを完成させまいと、ハトーボーのエアスラッシュが決まる

「ってなんでほとんど効いてないんだよ!？」

「エアスラッシュはタイプ一致といえど、特殊技でハトーボーはそんなに特攻は高くない。加えて、ちょうのまいは特攻特防素早さが1段階上がる技だから大したダメージにはならなかったわけだ」

……「ごめん、なんか解説してくれてるみたいだけど、なにを言ってるのかサツパリわかんねえ。」

特殊技ってなに？

特防ってなんだよ？

「それにちょうのまいのおかげで素早さも上がってきてるから、だんだん外れるようになってきた」

見てるとたしかにエアスラッシュの風の刃がドレディアに向けて放たれるのだが、当たる直前で悠々と避け始めるようになってきた。

「チツ！ ならば、ハトーボー！ 今度はかぜおこしだ！」

「ドレディア、つるぎのまい！」

かぜおこしはエアスラッシュのように点での攻撃ではなく、どちらかというと面に近い攻撃なため、ハトーボーの起こしたそのかぜおこしが、雨露を伴ってドレディアに襲いかかる。

『ハトーボーのかぜおこしがドレディアを襲っています！　しかし効果抜群であるはずにもかかわらず、ドレディアは平然としております！　まったくと言っていいほど効いておりません！　一方ドレディアの方はそのかぜおこしの中でつるぎのまいで力強く舞っておりませす！』

「かぜおこしはエアスラッシュと同じで特殊技。しかも威力的にはエアスラッシュよりも低い。これでは特防の上がったドレディアにダメージは見込めないね。しかし、つるぎのまいとは……。いったい何を狙っているんだ？」

「どういうことだ？　確かつるぎのまいって攻撃力が相当増す技だから別にいいんじゃないかね？」

「上がるのは攻撃の方だ。攻撃が2段階上がる技」

は？

それになんか違いがあんのか？

それから段階つてなによ、段階つて？

「ドレディアはその特攻の高さから、特殊アタッカーで生かすのが一番いい。攻撃を上げてあまりそれを生かせる技は覚ええないんだから、彼の狙いがわからない」

相変わらずサツパリわからん解説ご苦労。

理解の範疇から完全に逸脱してるわ。

そして試合が大きく動いたのはこのときだった。

「決める、ドレディア！　しぜんのめぐみだ！」



……その会場内で理解出来たのはほとんどいないだろうな。

「なるほど！ その手は考えつかなかった！」

隣りのヤツは除いてな。

『あ、え、ハ、ハトーボー、戦闘不能です！』

実況が目を回して地に倒れ伏すハトーボーに判定を下す。

ただ、実況の人も何が起こったのかわからなかったようなので、半ばまだキョトンとしていたりする。

「ちょっと待て！ アンタ、いったいなにをしたんだ！？」

まあ、そうなるわな。

オイラもわからん。

「しぜんのめぐみ」

「しぜんのめぐみ？」

「そう。れっきとしたポケモンの技だ」

「な、なんだと！？ なんだよ、それは！？」

「しぜんのめぐみはポケモンが持っている木の実によって、タイプ・技の威力が変動するノーマルタイプの物理攻撃技。使った木の実は当然消失する。で、持たせていた木の実はミクルの実。この場合、しぜんのめぐみはノーマルタイプだが、岩タイプとしての物理攻撃技になる。岩タイプは飛行タイプに効果抜群。おまけに火力はつるぎのまいを積んで2〜3倍。防御やHPがどちらかといえは高くは

ないハトーボーなら、しんかのきせきでも持たせていなければ、これで落ちるのは必然だよな」

……どう感想を言やあいいのかわかんねえが、とりあえず、なんかいろいろすごいのはよくわかった。

いや、しぜんのめぐみつつう技に関してはわかったけど、それ以外はなんだか「はあ……」という感じだ。

「今のを聞いてどう思った？」

「いや、どうって」

「『飛行タイプ相手に草タイプでは、交換するしかない』。たしかに普通ならそうだろうね。けどもそうならない場合もある。この結果になったのはドレディアに指示するトレーナーの戦略がうまくいったからだ。さっきのぼくがやった『いばる イカサマ』もそうさ。あれは相手の攻撃を利用してダメージを与えるイカサマの特徴を生かして、いばるとのコンボとして使ったといった感じかな。まあ、こんな感じに戦略を立てるには、技、タイプ、特性、得意不得意なこと、性格、個性といったポケモンのあらゆる知識が必要だ。逆にそれさえ修められれば、きみときみのポケモンの実力は数段以上のランクに上がるはずだ」

「……なんだかそう言ってくれるのはありがたいが、なんだってアంతaそこまでオイラに言ってくれるんだ？」

正直ほんの少し前に出会ったばかりだぞ。

「見込みというか、きみには才能を感じるから、かな。きみがさっきのバトルでハーデリアにふるいたてるを指示したとき、ハーデリアが不思議そうに振り返っていた。これってハーデリアが「えっ、その指示でいいの？」って驚いたからじゃないかな。おそらくは、『攻撃は最大の防御』とばかりに攻めて攻めて攻めまくるスタイル

を変えてまで、きみはさっきのバトルで、なんの他人からの助言なしに自力で、ふるいたてるという変化技を使った。つまり、頭も柔らかく、その気になれば自分自身で臨機応変な対処も可能と。ポケモンバトルは想定外のことが起こることなんかはザラだ。そのときにいかに対処して見せるのか」

そんなダイヤの原石みたいなきみを見かけたら将来が楽しみじゃない？

うん。

そこまで言われるとちょっと気恥ずかしいけど、嬉しいじゃないか。こんなつええヤツがこんなオイラにここまで目を掛けてくれるなんて。

「なあ」

「ん？」

これだけはキメといてやる　！

「ゼツテエ、アンタのいるその高みまで上り詰めてやる。首を洗って待っていやがれ」

「ああ。楽しみにしているぞ」

ちなみに試合は

『プルリル、なんとかドレディアのはなびらのまいを避けようと必

死でしたが、ついに直撃！　これは耐え切れません！　ダウンです！　プルリル、戦闘不能！　これにより、ホウエン地方ハジツゲタウン出身ユウト選手の2回戦進出が決定！』

彼は順当勝ち上がった。

## 外伝20 雨乞い祭り とあるモブの立場から（後書き）

ドレディアの物理型は以前「いじっぱり攻撃防御V特性葉緑素」といった理想型とはまるつきり正反対の個体が生まれたときに考えてみました。威力80木の実がほとんどない現環境では活躍の場はないでしょうね。しかし、あれば1回限りとはいえめざパより威力は高い。プラチナで思いましたが、何気に威力80というのはおいしいです。ただ、この技は正直技がないときの苦肉の策という面は否めませんが。

### 追記

テクニシャン+威力60木の実なら、威力90に跳ね上がり実戦でも結構使えると思います。ストライク辺りでつるぎのまいで舞えばかなり強くなりますが、所詮は1回だけなので奇をてらった感が否めないという……。

『積み技積むより攻撃した方が絶対いいじゃん』  
こんなことを考えていた時期が絶対ありますよね？私もそう考えていた時期がありました。少し話がずれるのですが初代ではシオンタウン、ポケモンタワーもそうですが、ダグトリオにもトラウマがあります。レベル20代前半でストリーを進めている最中に、ディグダの穴でいきなりレベル29、31でのご登場で何度全滅したとか。そしてその当時近所はかなりポケモンの強いお姉さんがいたのですが、その人のみ伝説ポケ、フーディン、ゲンガー、ケンタロス使用禁止の中で、その人の使用ポケモンの1体がダグトリオ。「かげぶんしん、すなかけ、あなをほる、きりさく」の技構成で、かげぶんしん+すなかけ積まれてこっちの攻撃は当たらない、きりさくはすべて急所、あなをほるは当時はじしんと同じ威力なためダメージがひどい……。まだまだ全然小さかったせいaka超ガチ泣きでした。それからいろいろ考えつつもフルアタでがむしゃらに攻めて

負けまくりでしたが、あるとき、「積み技って本当に大事なんだ」と唐突に実感したという記憶があります。ちなみにヤドランのドわすれのえげつなさ、ラッキーの脅威もそのときに実感しました。個人的に今作のちいさくなるの脅威っぷりは初代のラッキーを彷彿させてくれますね。

## 外伝21 雨乞い祭り 伝説厨再び

『さあ、大会も佳境に入ってます。これより準決勝第1試合を開始します!』

結論から言っておれもユウキさんも準決勝残りしました。

オレの試合はこの後の準決勝第2試合で、ユウキさんは今試合中です。

それからもう一つお知らせが。

「楽しみだよ、ユウトクン。今度こそキミに勝ち、あのシンオウ大会での雪辱を果たそう」

タクトはやはりあのタクトでした。

性格はあの鼻高々なものから若干まるまった感がありますが、伝説厨は相変わらずで。

だって準決勝まで普通にダークライ1体だけで勝ち上がってきたから。

ちなみにラルトスは珍しくモンスターボールの中に入っています。

……よっぽど好かないんだな。

「今回はキミを倒すための秘密兵器を用意したんだ。キミはコイツに勝てるかな?」

そう言っつて2つのモンス……マスターボール?

おいおい、めっさ珍しいボール持つてんじゃない。

いったいどうやって手に入れたわけ?

どんなポケモンがあの中に入っているのかね。

果てしなく気にはなるが、まあ土壇場になってみなければわからない。

「よろしく、タクトさん」

「ああ。いい試合をしよう」

……伝説使ってる時点でそっちにアドバンテージあるのわかってる？  
まあ、ある程度雨という環境下で出てきそうな伝説に対しての対策はしてきたつもりだから、何とかなると思うが。

『ハイ、試合終了！ ユウキ選手、決勝戦進出決定！』

さて、いよいよか。

いっちょ、気合い入れていくか！

『さて！ 今大会、これまでとは違い、ハイレベルな戦いが繰り広げられています！ それもひとえに彼らのような選手が出場してくれたからに他ならないでしょう！ では紹介しましょう！ まず  
は1人目、タクト選手！』

その強さと甘いマスクのおかげでなかなかのファンが付いたらしい。いろいろと歓声が上がっています。

『タクト選手はこの大会は初出場ながら、この準決勝まで僅かダイクライ1体、ダーククライ1体のみで勝ち上がってきました！ その強さはまさに折り紙付き！ 優勝候補の一角をなしています！ 続



いてタクト選手と対戦するトレーナーを紹介しましょう！ ユウト選手です！」

どうやらオレの方にも少しは応援してくれる人はいてくれるらしい。タクトの方には届かないまでも歓声が上がってくれている。

「ユウト選手は様々なポケモンを駆使して、それぞれに合った戦い方で、この準決勝まで勝ち上がってきました！ そのバトル運びの仕方に参考になったトレーナーも多いのではないかと思います！

斯く言う私も先ほどのドレディアの戦い方は大変参考になりました

！ ありがとうございます！」

さっきつてあれか？

つるぎのまい しぜんのめぐみ？

それともねむりごなちょうのまいゆめくいコンボ？

……うん、なんか思いつきり私情挿んでし、前者はあまり参考にならないそうだし、後者はちょうのまい以外は他のポケモンでも出来るから、参考って言われても……。

まあ、本人がなっただって言ってるからいいのか？

それに参考になったなんて言われると嬉しいような気恥ずかしいような、難しい気もするけど。

「そんな両者が激突します！ 果たしてどのようなバトルが繰り広げられるのか！ タクト選手の2体目はなんなのか！ ユウト選手はどのような戦法を繰り出していくのか！ 期待に胸が膨らみます

！」

さて。

相手の1体目はおそらくダークライ。

ならばこっちはうつつけなのが2体いる。

……嫌らし系でいくか！

『注目の準決勝第2試合、始めちゃってください！』

「なんだと？」

タクトの疑問の思いがそのまま口をついて出たのかな。

『両者1体目のポケモンが出揃いました！ タクト選手はお馴染み  
ダークライ、一方、ユウト選手はラッキーです！』

フハハ。

このラッキー、ただのラッキーじゃないのよ。

「先手はもらった！ ダークライ、きあいだま！」

ノーマルタイプだから相性有利な格闘タイプのきあいだまか。

『タクト選手の先制攻撃です！ ダークライのきあいだまが相性抜群なラッキーにスマッシュヒット！』

ふっ。

しかし、

「ラッキーラッキー」

ムダムダア！

「なに！？」

『こ、これはどういうことでしょうか！？ 効果抜群なはずのダークライのきあいだまが全くといっていいほどラッキーには効いておりません！』

「ラッキー、タマゴうみ」

「ラッキー、ラッキー」

するとラッキーがお腹のポケットに入っているタマゴを外に放り投げ

自身の周りに投げられたタマゴはラッキーの体に吸い込まれ、そしてお腹のポケットには、また新たなタマゴが入った。

『あーっと、ここでラッキーのタマゴうみが決まりました！ これでラッキーはまったくの無傷となりました！ ダメージゼロです！』

「ならば、今度はダークライ、あくのはどう！」

タイプ一致だけときあいだまよりも威力が低い技なんかこれまたムダムダア！

『あーっと！ ダークライ、ラッキーにダメージが与えられません！ それにしてもすごい！ あれだけ数々のトレーナー、ポケモンを下してきたダークライがユウト選手のラッキー相手にまったくダメージが与えられていません！』

フフン。

そろそろ種明かしといきましょうか。

まずこのラッキーの特性は“しぜんかいふく”。交代すれば状態異常が回復する特性です。持ち物はしんかのきせき。

しんかのきせきとは進化前のポケモンなら防御特防が1.5倍になるという面白い道具です。

これによりなんとラッキーの特防は特殊耐久指数（レベル50時、HP実数値×特防実数値÷0.411）でトップのハピナスを上回るという脅威の高さを示します。

また、ずぶとい性格（攻撃 防御）に、努力値はHP防御に極振り残り6は特防と振ることにより、物理耐久指数（レベル50時、HP実数値×防御実数値÷0.411）もドータクンを上回り、生半可な物理攻撃技では落ちなくなります。

これがこのラッキーの強さです。

「今度はふぶきだ！」

さつきから特殊攻撃で攻撃してくれていますが、このラッキーを特殊技で倒そうなげ、まさしく狂気の沙汰。

倒したいなら、しんかのきせきをはたきおとすか、カイリキーや火傷の「猛毒」「こんじょう」ローブシン辺りでも連れてきてくださいな

と余裕ぶっこいてるけど、ふぶきで凍ったらマズい。

「ラッキー、ちいさくなるだ」

「ラッキー、ラッキー」

『ここでラッキーのちいさくなるです！ ラッキーの回避率がグーンと上がりました！ これはタクト選手のダークライ、技を当てにくいのは厳しいか!?!』

「又かせ！ ダークライ、フィールド全体にかみなりだ！」

あれ？

これ雨の中のかみなりだから必中か？

「ラツツキーーー！」

やっぱり雨中のかみなりだから当たってる。

「ラツキー、どくどくの後にひかりのかべだ！」

相手はかみなり。

マヒらないよう祈りつつ、時間を稼いでどくどくのダメージを蓄積させよう。

「タマゴうみの後にまもる！」

タマゴうみでせっかく与えたダメージを回復され、さらにまもるで一定時間ダメージ回避。

「くっ！」

これで相手が焦れてくれれば

「ダークライ、今度はギガインパクト！」

キタ d (。 。 ) b ! !

「ラッキー、当たりにいけ！」

「どういつつもりだ!？」

『これはどういうことでしょうか？ ユウト選手、ラッキーにワザとダークライのギガインパクトに直撃するように指示しました！ その真意は!？ そしてそうこうしている内にダークライのギガインパクトが決まりましたア! !』

真意は何かって？

答えは、

「カウンターだ！」

カウンター。

格闘タイプの一風変わった技。

その効果は直前に受けた物理攻撃によるダメージを2倍にして相手に返す技。

ラッキーのHPの高さは最終進化形のハピナスと合わせて全ポケモンの中で3位以下を大きく引き離して圧倒的なツートップを飾る。逆に防御の高さは全ポケモンの中ではHPとはまったく対照的に、進化前のヒンプクと共にワースト1を飾る。

そんなラッキーがダメージを受けた場合、HPの減りは他のポケモンに比べると圧倒的に多い。

さて、そんな状況で2倍のダメージを返すカウンター。

さらに、猛毒状態でダメージが時間の経過と共にどんどん増えていくのならば

「ダークライ、戦闘不能！」

となるのも自然しぜんの理。

『なんとなくなーんと！ 今大会、誰もなし得なかったタクト選手のダークライが、圧倒的なまでの強さを誇ったあのダークライが、ラッキーに撃破されてしまいました！ これでタクト選手の残りのポケモンは2体！ はたしてその2体目！ タクト選手はどのようなポケモンを繰り出すのでしょうか！？』

無言でモンスターボールを取り出し、ダークライを戻すタクト。

「さすがはやるね。なら、ボクの2体目はコイツだ」

そうしてタクトがさっきのマスターボールの内の1つを取り出す。

「いでよ

レックウザー！」

ハイ、フラグ回収ありがとうございました。

てかアンタ、やっぱりもうまじめにタクトから伝説厨に改名した方がいいんじゃない？

『タクト選手、注目の2体目ですが、なんと、なーんと！ 伝説のポケモン、レックウザです！ 成層圏に生息し、地表にはめつたに降りてこないといわれるポケモン！ 私も実物は初めて拝見しました！』

ホントにあんな珍しいポケモンをどうやって見つけられたんですかね。

オレは空のはしらで出会ったけど、今はもう旅立った後のハズだから、きつと別の個体だよな？

「このレックウザはフィオレ地方という田舎で捕まえたんだ」

フィオレ？

マツクのメニュー以外では聞いたことねえ。

あ！

あれですか？

ポケモンレンジャーとか不思議のダンジョンからですか？

まあ何にせよ、あんな極悪種族値に特性“エアロック”はウザすぎる。

さて、どうしようか。

「秘策その1といったところだ。じっくりと堪能してくれたまえ」

……よし！

これでいこう。



「レックウザ、まずは挨拶だ。はかいこうせん！」  
「ラッキー、スキルスワップ！」

だから、このラッキーに特殊技で攻撃したってやるだけムダなのに。その間にこちらはスキルスワップでラッキーとレックウザの特性を入れ替える。

これでラッキーを引っ込めれば、雨の影響が打ち消されずに済む。

「戻れ、ラッキー！」

『おっと、ユウト選手、あのレックウザのはかいこうせんを食らってピンピンしていたラッキーを交代します！ ユウト選手の2体目は何が出てくるのでしょうか！？』

「オレの2番手は、ジュゴン！ キミに決めた！」

外伝21 雨乞い祭り 伝説厨再び(後書き)

どくどくだまローブシンは3ターン目までなら火傷よりダメージは  
少なかったりします。

## 外伝22 雨乞い祭り 伝説厨再び

研究者という職種上、持ち歩いていたポケモン図鑑。

勉強の一環ということとでその図鑑を開き、彼アッシュに見せる。

彼は珍しいのか熱心に見てくれていた。

ページは当然あの2種類のポケモン。

『レックウザ てんくうポケモン

何億年もオゾン層の中を飛び続けてきたポケモンで、地上に降りることは極めて稀。ある地方ではカイオーガとグラードンが戦うとき、地上に降りてくると言い伝えられている。』

『ジユゴン あしかポケモン

全身が雪のように真っ白な体毛に覆われている。寒さに強く、むしろ寒いほど活発になる。冷たい氷の上で寝るのが大好きなため、昔、氷山で眠る姿を人魚に間違われたことがあるらしい。』

「レックウザもダークライも伝説のポケモンなんだろ？」

「まあね」

「あんなの持つてるなんてあいつマジすげえな」

まあ、伝説や幻のポケモンは種族値が普通のポケモンに比べると、高い水準にあるからユウトはそういうポケモンばかり使つと「伝説厨乙！」とかいつてくるけど（ただ伝説解禁戦の場合はそういうことは言わない。というか彼は、伝説はラティ兄妹とミュウしか持つていない）。

現にあのタクトとかいうのは伝説のポケモンばかり使つから“伝説厨”という烙印を押されている。

「それからジユゴンか。なんかパツと見てフツッなポケモンな気がするな。一応弱点は突けるみたいだけど、大丈夫なんかね」

「見た目と伝説か否かで勝負の行方は決まるものではないさ」

ジユゴンの特性はかくれ特性も含めれば、“あついしぼう”、“うるおいボディ”、“アイスボディ”の3種類。

そのうち、雨というこの状況もあることから、おそらく特性は“うるおいボディ”の方。

“うるおいボディ”は雨が降っているときは状態異常を回復させるという特性。

ねむるはHPを全回復させる技だが、一定時間は眠ってしまうという技。

これら単体ではそれほど脅威でもないと思われるが、合体したときには飛躍的に脅威度が跳ね上がる。

これらが組み合わさって意味するものはすなわち、“ねむるでHP全回復+即眠り回復”。

本来ならばレックウザの特性“エアロック”で天候による影響を打ち消すのだが、ラッキーのスキルスワップによって特性を入れ替えられ、今は“しぜんかいふく”になっている。

つまり、ジユゴンは今、ノーリスクの全回復技を持っていることになる。

「なんかわかんねえけど何となくスゲエってのはわかる」

アツシユがそんなような感想を漏らしているが、真に理解するにはまだ先のようにだ。

さて、そんなレックウザVSジユゴンのバトル。

レックウザは氷タイプが4倍ダメージだが、その攻撃特攻種族値からの攻撃技は脅威の一言。

対するジユゴンは

「ジユゴン、ねこだましの後に限界までたくわえるだ！」

やっぱり耐久型か。

「あんなポケモンに何を怯んでいるんだレックウザ！ 10万ボルトだ！」

……ねこだましはバトル最初のみ有効な強制怯み技だから、どんなポケモンだろうと関係ないんだけどな。

あと、何気に電気技も覚えているとはジユゴンにとってはなかなか恐ろしい。

「なんだ、ねこだましにたくわえるって？」

「ねこだましはバトルの最初だけ有効な強制的に相手を怯ませる技、たくわえるは防御と特防を1段階上げる技さ。最大で3段階までしか上げられないけど、普通はそこまで積む時間はないから、あまり気にならないけどね」

現に今、レックウザは怯まされ、10万ボルト、さらにはりゅうのはどうを撃ち出そうとしているが、それができず、その隙にジユゴンが積んでいるという状況だ。

「ジユゴン、ここえるかぜ！」

さらに追い討ちとばかりにここえるかぜがレックウザを襲つ。しかし、レックウザの方は、4倍弱点とはいえど、これだけで落ちる様子は見せていない。

「ここえるかぜ。初めて聞いたぜ。見た感じ、氷タイプの技っぽいからレックウザには効果抜群だけど、れいとうビームとかかぶぶきの方がよくないか？」

「いや、ほくもここではここえるかぜを選択するかな」

ここえるかぜは氷タイプの技で、威力や知名度ではその2つの技に劣るけど、その代わりに素早さを必ず1段階下げるといふ追加効果がこの技にはある。

「だから、今の場合だと素早さを下げるといふ意味合いが大きい。相手へのダメージは二の次といったところだ。素早さが下がれば、こちらに有利となる展開もつくりやすいしね」

「はええ、いろいろと考えてるんだな」

「逆にここまで考えないとほくらのいるところまでは届かないといふことだ」

そうしているうちにバトルは俄かに動き出した。

「くっ、相変わらず小賢しい！ ならば、こちらにも考えがある。レックウザ、りゅうのまいだ！」

いや、小賢しいというか。

戦略を練り上げるのはポケモンの常識だから。

尤も、以前は積み技なんか使わなかったらしいから、いろいろ学習したというところみたいだが。

「！ ジュゴン、ストップ！ アンコールだ！」

「ジュゴ。ジュゴジュゴジュゴ」

ジュゴンは彼の指示通りにここえるかぜを中断。

両前足を叩き合わせてアンコールを決める。

あっ……。  
これは……。

「レックウザ終わったな」

『ジユゴンのアンコールが決まりました！ これでレックウザはりゆうのまいしか技が出すことが出来なくなってしまいました！』

「ちっ！ しまった！」

フフフ。

迂闊に積むとアンコール持ちの前では死に体になりますよ

「ジユゴン、つづいてかなしばり！」

どこの初代ファイヤーさんみたいならみつける（キリッ）じゃないよ？

でも、にらみつけるにパツと見そっくりだけどね。

まあ、とにかくかなしばりが決まり、これにてレックウザはもはや手出しが出来ません。

「レックウザ、なんとかしろ！」

いや、なんとかしろってあーた、なんとかできるんならレックウザ

自体がなんとかしてるし、それにそれってアンタの役目とかじゃない？

『レックウザ、もがきますが技を出すことが出来ません！』

「くそ！ もういい！ 戻れ、レックウザ！」

「そいつはさせないよ！ ジュゴン、うずしお！」

ボールに戻させないためのうずしおが、ボールから発せられるレーザーが届くより僅か先にレックウザを包み込む。

『あーっと、ここでタクト選手、レックウザをボールに戻そうとしましたが、ジュゴンのうずしおによって閉じ込められ、戻すことが出来ません！ 攻撃はおるか、一切の行動が封じられたレックウザ、大ピンチです！』

「決める、ジュゴン、ふぶきだ！」

「ジュゴーン！」

「チイツ！ レックウザ、動け！ 動き回れ！」

無防備なレックウザに対して4倍弱点のふぶきが襲いかかる。

レックウザも襲うが、うずしお自体もふぶきによりカチカチに凍りついていく。

仮に、この1発で倒せずとも、もはやタクトはレックウザに対して何も出来ません。

アンコール、かなしばり、さらにもはや氷の牢獄ともいうべきうずしおが解けるまで待つてやるつもりもないし。

ということ、いずれレックウザは倒れることになります。

さて、彼の3体目のポケモンを拜ませてもらいましょうかね。



「…………ハア…………」

思わずため息をついてしまう、あんなのが出てくれば。

「ガギヤギヤアツ!!」

そして場に現れた伝説厨ラストのポケモンは、レックウザに負けず劣らずの咆哮を上げてくれちゃってます。

なんだかなあ。

いや、ホント、アンタマジでなんなのさ…………。

「これが秘密兵器その2にして最終兵器、といったところだ。さらに雨状態だからこちらにとっても好都合といったところだね」

んなドヤ顔で自慢されてもねえ。

「か、会場内も大きななどよめきに包まれています…………!! しかし! しかし、それも納得といったところでしよう…………!! 私も実物は初めてお目にしました。これが、あのシンオウの伝説のポケモン」

「そう!」

パルキアだ!

パルキア

シンオウ地方伝説のポケモン。

空間の神として、ディアルガ・ギラティナとそれぞれ対をなす存在。タイプは『水・ドラゴン』と極めて優秀（弱点はドラゴンタイプの技のみ）。

HP以外はどの種族値も100乃至100ないしオーバーで特攻に至っては150もある。

雨も降ってるこの状況では水技1.5倍にタイプ一致で1.5倍、しらたまというアイテムを持たせれば、水・ドラゴンタイプの技が1.2倍と強化され、かけ合わせて全部で2.7倍とシャレにならない強さを見せつける。

ハイドロポンプなら威力120×2.7=324というバカげた火力になり、生半可なポケモンではアツサリ落ちてしまう可能性が非常に高いです。

「　といついつとね」

なんかさらにつらつらと語ってくれちゃってました。

アルミア地方で捕まえたとか何とかね。

正直マジもつどうでもいいです（ほとんど聞き流してましたから）。

「さて、キミはどういついつに立ち向かうかな？」

どうすればいいか。

一度氏ねばいいよ、マジに。

まあ、冗談はさておき本当にどうしようか。

というのもパルキアに対してオレのジユゴンは有効でかつ、まともな攻め手があまり存在しない。

「ではバトル再開という」

『大変珍しいポケモンの登場で大いに会場を沸かせてくれたタクト選手！ 3体目のポケモンはシンオウ地方では空間の神といわれている伝説のポケモン、パルキアです。しかし、タクト選手はもう後がありません！ ですが、タクト選手は余裕の表情！ この状況からどのような逆転の秘策があるのでしょうか！？』

しようがない。

全然やるつもりではなかった、現実でのジユゴン耐久といえばこれという戦法をやあつてやるぜ

オレのジユゴンなら即バトル終了にもって行ってしまおう上に、後の処置が面倒だからやりたくなかったんだけど、もうどうでもいい。自重？

相手が自重してないんだからこっちもしてやる必要はないっしょ？  
ホントは、面倒になったつてのはナイシヨ

「まずは、パルキア、ハイドロポンプ！」

「ばるばるう！」

「ムツ、避ける、ジユゴン！」

特攻種族値150からの雨状態＋タイプ一致でハイドロポンプ。

『ジユゴン、パルキアのハイドロポンプを必死に避けています！しかし、完全ではなく、その余波からは逃げきれいません！』

「今だパルキア、あくうせつだん！」

「ガギヤギヤアツ！」

「ジユゴン！？」

ハイドロポンプを避けた先に飛んできたあくうせつだん。  
それにはジュゴンも対処できなかつた。

「ジュゴーン！」

『ここでユウト選手、タクト選手から初めてのクリーンヒットをもらいましたア！ ユウト選手のジュゴン耐えきれるか！？』

「ジュゴン、大丈夫か！？」

「ジュ、ジュゴ、ン」

だけどその声に弱々しくもきっちり答えてくれたジュゴン。

かなりの大ダメージを受けているのは目に見えてわかる。

ここまで来たらキツチリとお返しをしてやろう。

だから、まず

「ジュゴン、ねむる！」

目閉じたジュゴン。

だんだんと身体の傷が回復していく。

『ジュゴン、ねむって体力を全回復させ、万全の状態となりました！あくうせつだん、ハイドロポンプで傷ついたダメージは見たところ一切ありません！』

ねむるで全回復して

『おっと！？ ジュゴン、眠ったもののすぐさま眠り状態から回復した様子です！』

「チツ、まるでゾンビだな。だが、やることに変わりはない。パルキア、ハイドロポンプ！」

ハイドロポンプを撃とうとしてくるが、もはや関係ない。

これでとどめ

「決める、ジユゴン。」

ぜったいれいど

「

この瞬間、すべてのトキが凍った。

それは見事な彫像だった。

描き出される曲線と直線の交わり。

筋肉の収縮と膨張、関節の屈折と伸長が今にも行われそうなほどの、まるで本物と寸分たがわないというほどの造詣。

そこから放たれる、見る者を圧倒するような凄まじい威圧感。

まるでそれは生きていて今にも動き出しそうな、そのようなものだ。彫像をつくる場合、これを表現しうる苦労というのは並大抵のものではない。

しかもそれが氷で作られていた場合、湿度・気温・日光・元の水の状態等にも気を使わなければならない。

しかし、コレをつくりだしたものはそのような芸はない。  
そして『生きていて今にも動き出しそう』と表現したのは当たり前のことである。  
なぜなら

今現在もそれはこの世界で生を享けたときから、命の鼓動を打ち続けているのだから

『こ、これは！？ なんとということでしょう！？ パ、パルキアの氷の彫像が一瞬にしてフィールド内に出現しました！ いったいなにがどうなっているのやら！？』

一応解説を付け加えておくか。

伝説厨もあまりのことに放心しているみたいだし。

「ぜったいれいど。氷タイプの技で、命中率はそんなには高くないけど、コレを食らったら即戦闘不能となる一撃必殺の技。氷状態のときはかえんぐるまやフレアドライブなどを放てば自力での回復も可能だが、それはまだ戦闘が続行できる場合。ぜったいれいどを食らえば自力での解凍は不可能。よってバトルの決着はここについた」

その後なんだかんだ、すったもんだの一幕がありました。無事に決勝進出。

伝説厨は逃げるかのようにそそくさと退散していきました。

ちなみにこのぜったいれいど、ゲームだと命中率30%ですけど、こちらでは練習を積みめば100%も可能です。

ただ、あまりに強過ぎるので、滅多にはやらないのですが、まあ今

回は仕方ない。

あんまりハメを外すのはよくないよね。  
お互いに。

## 外伝23 雨乞い祭り 決勝(前書き)

### 前話の補足

一撃必殺技は熟練度を積みれば命中100%にもなりうるということ  
で、バトルでは『使用禁止』としています。無論、ヒカリやシロナ  
達とのバトルにおいても(前話ではあまりのことについて解禁してし  
まったといった状況です)。

さらに一撃必殺技は変化技以上にものすごくマイナーという設定で  
す(以下は以前感想でノーガード+一撃必殺技のコンボはどうなの  
かと聞かれた際に返答したものです)。

>「2010年 12月 14日 (Tue) 08時 30分  
28秒」

>補助系があまり知られていないとなると

>ダブルバトルでのノーガード+一撃必殺のコンボとかも知らない  
んでしょうか?(笑)

>kuro 「2010年 12月 15日 (Wed)  
15時 33分 52秒」

>一撃必殺もあまり知られていません。

>そもそもまず技が当たらない(発動しないと言い換えてもいいか  
と思います)

>そして

>じわれ=じしんとどう違うの?

>ぜったいいいど=ふぶきとどう違う?

>ハサミギロチン=はさむとどう違う?

>といった認識です。

>つのドリルに関しては存在しないとしています。

>当たると少々グロい上に「どうして生えてる角がグルグル回るの  
さ?」という観点からです。



>ノーガードは『技が外れないなんてラッキー』ぐらいの認識です。ということですので、上記を踏まえると、(公式?)バトルで一撃必殺が決まったのはおそらく世界初なのではないかと(なんだか言い過ぎな気もしますが)。

決勝については『雨パVS雨パ』と『ユウト苦戦(?)』をテーマにしていきたいと思っています。

アイデアを提供していただいたごま油様、アスカ様、ありがとうございます。

そして気づけば、本編の数より外伝の数の方が多くなっている……

## 外伝23 雨乞い祭り 決勝

『タテワクタウン雨乞い祭り記念 ポケモン雨乞いバトル大会』も今年で8回目！ 過去に様々なバトルが行われてきましたが、今回、かつてないほどのハイレベルなバトルが繰り広げられてきました！』

表では実況が決勝を盛り上げるための演説っぽいことをしています。

「さて、いよいよ決勝だな」

「ええ。ただまだまだ勝ち譲るつもりはありませんからね」

「なかなか大きく出るね。ぼくだって負けるつもりは微塵もない、いつだってね。今まではたまたま結果が付いてこなかっただけだ」

お互い気合十分。

読み合いのスリルと心地よい緊張感が味わえそうだ。

『それではまずはハウエン地方ミシロタウン出身ユウキ選手、入場してください！』

先に行くからという言葉を残して控室を出ていったユウキさん。

「（今回の“雨が降り続くという限定的な状況下”ではどうなるかはわからないわね）」

伝説厨が消え去ってからは外に出てきたラルトス。

彼女の言つとおり、今回は『雨』という天気を変えることが出来ず、いかに『雨』という天候を味方につけるかが勝敗のカギを握る。

「(ユウトとユウキ、名前は似てるけど、はたしてどちらがこの天候を制するのかしら?)」

ニヤリと口許を歪めるラルトス。  
しかしまあ

「誰にものを言ってるんだ？」

こちららも口元がつり上がる。

こちらら、現実世界のあのシビアナポケモンに対するアプローチも含めて軽く30年以上はポケモン歴があるんだぜ。

しかも、こちらにきてからも、この世界の『派手な技サイコー!』とか『努力値性格種族値個体値物理特殊? なにそれおいしいの?』といったヌルイ考え方には一切浸ってはいない。

「年期が違うよ」

「(そう。今回わたしは傍で見てるだけにするわ。がんばってね)」

『では、ハウエン地方ハジツゲタウン出身ユウト選手、入場してください!』

「よし! 行きますか!」

タイミング良く聞こえた実況の案内に、頬を一度叩いた後、オレとラルトスは共にゲートをくぐっていった。

『それでは決勝戦、始めてください!』

実況の開始の合図とともに始まった決勝戦。  
まず最初の1体目は

「ニョロボン、ゆけ!」

「ドクログ、キミに決めた!」

雨の降りしきるフィールドに種類は違えどカエルの親戚には違いな  
い2体のポケモンが現れる。

『ユウキ選手の一番手はニョロボン! 一方、ユウト選手はドクロ  
ッグの登場です!』

ドクログは毒・格闘タイプのポケモンでこのタイプの組み合わせ  
は他には今のところ、進化前のグレッグルしかいません。

特性は“きけんよち”、“かんそうはだ”、“どくしゅ（夢特性）  
”ですが、当然このドクログは“かんそうはだ”です。

「（お肌の手入れは怠っているわけじゃないからね）」

いや、ラルトス、そんなこと言わなくてわかって。

まあ冗談はさておいて、“かんそうはだ”という特性は水タイプの  
技を無効化して吸収し、雨が降っている状態なら一定時間ごとにH  
Pが1/8ずつ回復していきます（逆に炎技は1.25倍、晴れ時  
1/8ダメージ）。

特性とタイプによって、雨パメタ（雨パに対しての対策）として有  
効なナットレイやエンペルトを止められ、雨パ代表の物理アツカ  
ーのカブトプスにいたってはほぼ機能停止寸前まで追い込みます。

さらに草タイプ技は半減され、どくどくも効かずと、対雨パ・対雨

パメタとしてなかなか都合がいいポケモンです。

ちなみにこの子は、持ち物：くろいヘドロで、いじっぱりのA極振りのH228B12D12振りと決定力+耐久力の底上げを狙っています。

対するユウキさんのニョロボン。

特性は“ちよすい（水タイプの技を無効にし、HPが1/4回復する）”、“しめりけ（じばく、だいばくはつ、ゆうばくを無効にする）”、“すいすい（雨の時に素早さが2倍/夢特性）”となかなか……アレ？  
まさかまさかk

「ニョロボン、はらだいこー！」

うええええええ！？

ヤバッ、マズッ！

雨天時にはらだいこなんてやられると、さらに仮に“すいすい”だったとして素早さ調整されてたら、余裕で最速サンダースを超える素早さから水等倍までなら全ポケモンを一撃で粉碎する破壊力を見せつけますよ！？

さーて、一旦落ち着こう。

KOOLだ、KOOLになれ（誤字に非ず）。

「（ひさびさにピンチってヤツ？）」

て、楽しそうに言うなよ、コラ。

こっちはテンパってんだからよ。

『ニョロボンのはらだいこが決まりました！ 体力は半分になりましたが、攻撃力はこれで最大までアップします！』

「ついでにオボンの実で体力も回復。“すいすい”で素早さ2倍だ。どうする、ユウト？ このままだと3タテもしかねないよ？」

「それはどうでしょうかね。そう簡単にいきますかいな？」

「いいだろう。ニヨロボン、じしん！」

「ドクログ、まもる！」

さてさて、考えろ、よく考えろ。

現状、最善の手立てはまだ浮かばない。

いやニヨロボン突破はなんとかなる。

この大会のルールで出場できるポケモンは出場の際にエントリーした6体のみ。

で、この大会でユウキさんが使ったポケモンはデンリュウ、レパルダス、ラグラージの3体。

逆にこっちはドレディア、ドクログ、ラッキー、ジュゴンの4体。準決勝で“きせき”ラッキーを見せたから、“はらだいこ”ニヨロボンが出てきたのだと思う。

とすると水タイプ物理アタッカー2体はユウキさんのことだからあまり考えられない。

となればラグラージは出ないと思われるという点で、水タイプをほぼ完封できるのが1体。

ただ、この子はいろいろと不安が残るから、3体すべて確定するまでは見せたくはない。

とすると、もう次に出せるのはほぼ決まっているようなもの。

でも、この子の突破力には目を見張るものがあるけど、ここでそれを出すのが適当か

と、そんなことを考えている間にも、フィールドを大きく揺らすじしん。

はらだいこで強化されているためか、ところどころでフィールド内

を大きな亀裂が走るどころか隆起や陥没までしてしまう。  
地面タイプなのでドクログには効果抜群のだが、まもるにより  
じしんは不発に終わる。

まもるの壁に覆われていた部分はじしんによる影響は一切見受けら  
れなかった。

「反撃だ、ドクログ！ かみなりパンチ！」

「読めてるよ！ かわせ、ニョロボン！」

しかし、ニョロボンの横合いから繰り出されたかみなりパンチは空  
を切るだけに留まり、ダメージを与えるには至らない。

『ドクログはまもるでニョロボンのじしんを避け、そこからかみ  
なりパンチを繰り出すものの、ニョロボンが圧倒的素早さでドクロ  
ッグの攻撃をかわしていきます！ 素晴らしい攻防！ そしてユウ  
ト選手、今大会初めての苦戦を強いられております！』

くっ、素早さ2倍は伊達じゃないか！

もつどののこの言ってられない。

まずはこのニョロボンをとにかく退けよう！

「悪足掻きの時間は終わりだ！ いけ、ニョロボン！ じしん！」

普通に撃てば避けられる。

ならば普通ではない技を

「ドクログ！ ふいうちからのかみなりパンチ！」

「ドクログッ！」

そうして指示通りに動いた2体のポケモン。

ニヨロボンがじしんを撃つ前に決まる、ドクロググのふいうち。  
一瞬でニヨロボンの前まで移動してみせたドクロググにユウキさん  
たちは驚いたみたい。  
ただ、そこからかみなりパンチを完璧に入れるというのはやっぱり  
甘かったらしくて

『ふいうちがニヨロボンに決まり、かみなりパンチでさらなる攻勢  
をかけようとしたドクロググでしたが、そこでニヨロボンのじしん  
が炸裂ーッ！ ドクロググ耐えきれずにダウン！ ドクロググ、戦  
闘不能です！』

はらだいこ+効果抜群じしんならこうなるのも仕方ないわな。

「お疲れ様、ドクロググ。ゆっくり休んでいてくれ」

ドクロググに劳いの言葉をかけつつ、ボールに戻す。  
さて、次のポケモンは

いまぼくは外面上は努めて冷静に戦局を見定めているフリをしてい  
るが、俄かに内面に湧き上がる興奮を抑えきることは出来なかった。

彼との出会いはもう10年近く前だったか。

一番初めに会ったときはぼくの父さんに紹介されたとき。



「彼、すごいんだ！　ハウエン地方のポケモン図鑑をほぼすべて完成させたんだよ！」

父さんのその一言にはリアルで「は？」と零した記憶がある。

そして見せてもらった図鑑。

そこにはNo.200とまで登録されたハウエンポケモン図鑑があった。

正直驚きを隠せない。

父さんの影響もあり、研究者を目指していたぼくには、ハウエン各地を旅して回ったぼくには誰よりもその困難さを理解できる自信がある。

ぼく自身も旅を通して、ハルカや道中で出会った様々な人にも協力してもらいつつも、ここまで図鑑のページを埋めることは出来なかった。

見てみると、レジ系3体を除いてすべてビッシリ埋まっていた。

ちなみにその3体はぼくとハルカで捕まえたもので、岩盤の点字で明確な場所を示されたものについてはハウエンにはもういないのではないかとも思う。

で、『ハウエンにはこんなにもたくさんの種類のポケモンがいたのか』という思いで完成された図鑑を眺めていると、

「又、又ケニン？　なんだ、このポケモンは？」

まったく知らないポケモンのページがあった。

「ああ。そのポケモンは虫・ゴーストタイプのポケモンで、ツチニンの進化形なんですけど、進化条件が少々特殊なんですよ。具体的に  
は　　」

またさらに、彼はぼくや父さんでも知らなかった知識をこともなげ

に披露。

ついでにレジ系に加え、No.201 ジラーチ、No.202 デオキシスでようやくハウエン図鑑は完成を迎えるのだとか。

こんなぼくよりも年下の何の変わり映えもしない少年に対し、様々な意味で衝撃だった。

そしてぼくはトレーナーとして彼のバトルの腕も見てみたくなった。ぼく自身ライバルのハルカがポケモントレーナーから、ポケモンコーディネーターに転身したとはいえ、一度はリーグ優勝も飾ったこともある彼女とまともに渡り合える一人だ、ということは自負していた。

だが、対戦の結果はボロ負けとは言わないが、いまだかつてない負け方を喫した。

そしてひしひしと感じた。

彼は何者なのかと。

今までは技のパワーに負けるということは多々あれど、ぼくのポケモンの技がほとんど効かない、あるいはほとんど封じられて負けるということはなかった。

何が何だか分からなかった。

二度目だが、こんなぼくよりも年下の何の変わり映えもしない少年に対し、様々な意味で衝撃だった。

これがぼくの彼との初めての出会いだった。

それから彼の知識を教授してもらった。

彼の語ることは何もかもが新鮮、などという言葉では生温すぎて、どちらかというと、新しすぎて時代がいくつも先に進んでいく。

そんな感覚を受けた。

そして彼から教わったことを元にポケモンを改めて育成し直して、研究・フィールドワークに出て、今や、若手研究者の代表の一角と

まで目されるようになってきた。  
彼から教わったことがなければここまででは辿り着くことが出来なかつただろう。

さらにバトルの腕においても、彼はその類稀なる膨大な知識を下に、土が付くことなく数々の無敵と称されたトレーナーを撃破してきた。

今まで、ぼくを含む、彼と戦ったことによつて真にポケモンに目覚めたともいえるライバルたちと共に、彼に勝負を挑んできたものの、勝ちを得ることが叶わなかった。

何度も何度も挑戦した。

しかし、叶わなかった。

だが、それが今叶いそうな、僅かな糸口を見つけることが出来た。

「ぜったいにここでそれを、勝利を手繰り寄せてみせる！」

今、フィールドには雨が打ちつけているのとは反対に、心の熱は熱く滾っていた。

「2番手はハリーセン、キミに決めた！」

ハリーセンか。

ユウトが使うのは初めて見るな。

たしか水・毒タイプでだいぶはつという危険技の使い手。

特性は“すいすい”、“どくのトゲ”、“いかく”だったか。

で、種族値的には物理アタッカーが適している、だったかな。

見てみると、“いかく”をしている様子は見受けられないから、違

う。

となると、この状況で一番可能性がありそうなのは“すいすい”か。こちらも“すいすい”だし、そんなに素早さを気にする必要はない。どちらかというところ、この雨の中で水タイプの攻撃をもらうのが一番痛い（雨天時水タイプ攻撃技1.5倍）。

おまけにオボンの実で回復したとはいえ、はらだいこにふいうち、それからかみなりパンチのダメージも若干ある。だいたいはつなんかは絶対に食らいたくはない。

『ユウト選手、2体目はハリーセンの登場です！ 攻撃力が最大まで上昇し、ドクログの攻撃をかわし切る素早さのニヨロボンにどう対抗していくのでしょうか！？ 注目です！』

できれば、何もさせずにこのまま一気に決着にもって行く！

「よし！ ニヨロボン、一気にいくぞ！ たきのぼり！」

「ニヨロボー！」

ニヨロボンはそのまま微動だにしないハリーセンに向かって突撃していく。

そして

『先程、ドクログをたつたの一撃で下したニヨロボン！ 今度はたきのぼりがハリーセンにクリーンヒット！ これは、大ダメージ確定は必須でしょう！ 果たしてハリーセンは耐えられるのでしょうか！？』

それはムリな話

「今だ！」

なんだって!?

「ハリーセン、じたばた!」

!?

しまった!

きあいのタスキか!?

「ハリーセンツ!」

そうしてきあいのタスキでわずかにHPを残して耐えたハリーセンの威力200のじたばたが決まる。

『これは驚きました! ハリーセン、きあいのタスキで耐えてからの猛烈な反撃! じたばたがニョロボンに決まりましたーッ!』

「ニョロボン……」

そのままニョロボンの身体は仰向けに倒れていった。

『ニョロボン、じたばたには耐えきれませんでした! ニョロボン、戦闘不能!』

ぐっ……!

きあいのタスキの存在を忘れていたなんて……!  
くやしいな……!

『それではユウキ選手、2体目のポケモンをどうぞ!』

……だけど、ニヨロボンだけがぼくの秘策じゃないんだ。

「まかせたぞ、カイリユー！」

まだまだ勝負の行方はわからないぞ、ユウト！

外伝23 雨乞い祭り 決勝（後書き）

夢ニヨロボンは恐ろしいです。そしてハリーセンかわいいよハリーセン。おまけに強いぞハリーセン。

雨パのハリーセンは強いです。その強さは次回に。ハリーセン流行らないかな。

外伝24 雨乞い祭り 決勝(前書き)

今話でストックが切れましたので、次回更新は未定となります。



## 外伝24 雨乞い祭り 決勝

『第8回タテワクタウン雨乞い祭り記念 ポケモン雨乞いバトル大会』！ 決勝戦もいよいよ中盤戦に差し掛かっています！』

いや、中盤というよりもむしろ、終盤に差し掛かっているかもしれません。

『ユウキ選手、ユウト選手、共に残っているポケモンは2体！ 両者、どちらも3体目を明らかにしていません！ そして2体目！

ユウキ選手はカイリユー、ユウト選手はハリーセンです！』

「（カイリユーね。強敵よ）」

（たしかにそうだな、まともにも相手をするならばね）

カイリユー、ドラゴンポケモン。

ドラゴン・飛行タイプのポケモンで、合計種族値600の、所謂“600族”に分類されることもある。

物理特殊問わず、多彩で強力な技を数多く持ち、特性の1つが“マルチスケイル（HPが満タンのときに受けるダメージを半減する）”という恐ろしい特性。

しかも、カイリユー自身、はねやすめ（最大HPの半分回復）を持っているため、何度もそれを発動させることも出来る。

氷4倍ダメージはHP満タンの時、2倍になるし、それと併せてヤチエの実を持っていた場合、一度だけだが、等倍にもなる。

そこからの反撃は凄まじいです。

なぜなら、カイリユーは氷技を打てるようなポケモンに対しては何かしら効果抜群の技を持っていたりします。

氷技で弱点を突いていって逆にこちらが痛い目に会うということに

なりかねません。

うん、今の手持ちでは正直まともに相手にしたくはないな。

『カイリユーはたった今登場したところで、まだまだ元氣100倍！しかし、ハリーセンの体力は残りあとわずか！おまけに相手がドラゴンタイプでは、水タイプの技は効果いまひとつ！これはユウト選手の方が劣勢でしょうか！？』

オレのハリーセンの場合、体力の残り具合は、正直じたばたの威力にしか関わらないから、その点については心配いりません。さて、一応“せいしんりよく（ひるまない）”の可能性を考えて一当てしてみますか。

「ハリーセン、ふぶき！」

「ハリーセンッ！」

掛け声とともにふぶきが吹き荒れ、カイリユーを襲う。

襲うのだが、

「（ゼンゼン効いてないわよ）」

『カイリユー、弱点技のふぶきが直撃しているのにもかかわらず、全く効いている素振りがありません！なんとというカイリユーでしょうか！？』

「ぼくのカイリユーは“マルチスケイル”で耐久型に育ててある。特攻の低い不一致ふぶきなんて効かないさ」

さみしがり（攻撃 防御）、攻撃素早さ極振りで特攻種族値55  
とはいえ、4倍弱点なのに来るで効いちゃいないっばい。

なんですか、オレのハリーセンのふぶきは扇風機の風か何かですか。

やっぱりまともな相手になんか出来ない。

「今度はこちらから反撃だ！ カイリユウ、ぼうふう！」

ぼうふう。

特殊技で威力命中共にきあいだまの飛行タイプ版ですね。

ただ、雨天時はかみなりと同じく必中ですが。

やー、タイプ一致で威力的には180にもなる特殊技なんて未恐ろしい。

ドレディアでは絶対に耐えられませんね。

ん？

なんでこんな他人事そうに余裕ぶっこいているのかですって？

それは言ってみれば雨天時のハリセンだから。

そしてこのカイリユウを退場させる手段があるから。

カイリユウをもっていけるなら悪くない、というよりむしろかなり良い。

「ハリセン、準備はいいな？」

「リーセン！」

そして厄介なカイリユウに仕事をさせずに退場させることが出来そうだから

「（がんばんなさいよ、ハリセン）」

「リーセン！ リーセン！」

体力残りわずかなのに元気のいい返事が返ってくる。

ていうかラルトスに対してはオレより元気がいいな。

あ、そういえばコイツはオレじゃなくてラルトスがモンスターボール投げて捕まえたんだっけ。

この場合、親はひょっとしてお前なのか？

「（当然でしょ）」

とかなんとか言ってる合間にぼうふうが迫ってきた。  
タイミング的にはもう今しかない。

「ハリーセン！ …！」

ぼうふうが止んだ後のフィールドにはハリーセンが目まわして倒れている。

『ハリーセン、残りわずかな体力ではカイリユウの凄まじいぼうふうには耐えられませんでした！ ハリーセン、戦闘不能！』

よし！

これでユウトの手持ちはあと1体で、こちらはあと2体。  
そして、カイリユウは体力満タン。  
これなら

ん、なんだ？

なにか妙な

「カイリユウ？」

するとカイリユートの巨体がゆっくりと傾いて

『え、ええええ！？ カ、カイリユーはいったいどうしたことでしよう！？ いきなり倒れ込んでしまい、ってああーっ！ カイリユー、戦闘不能になってます！ カイリユー、戦闘不能！』

なんだって！？

そんなバカな！？

『いったいどういうことでしょうか！？ 会場内も大いにどよめいています！ 私にもわけがわかりません！』

カイリユーは一度もダメージなんか食らってないんだぞ！？  
ぼつぷつで攻撃して、それで

「みちづれ。知ってますよね？」

そんな言葉が耳を打った

ハリーセン。

ふうせんポケモン。

タイプは水・毒。

特性は“どくのトゲ（接触技を受けると30%の確率で相手をどく状態にさせる）”、“すいすい（雨の時に素早さが2倍になる）”、



いや、そんな連呼しなくても。

「（うるさい実況ね）」

ラルトスに全面的に同意します。

『すごい！ 素晴らしい！ 正直、このバトルがイッショ地方チャンピオン決定戦かと問われれば、私なら迷わずすぐさま頷いてしまふ、そのようなバトルが繰り広げられています！！』

まあ、ただの技の出し合い、パワーのぶつかり合いじゃなくて戦略と戦術を駆使したトレーナーの読み合いも入る高度なバトルですからね。

普段のそれに慣れているとそう感じてしまふかもしれません。

『おっと！ お仕事の方に戻りましょう！ さて、いよいよそのバトルも佳境に入ってきました！ 現在まではユウキ選手がユウト選手を押していました、ここに来てユウト選手が完全なイーブンに戻し、両選手とも残っているポケモンが1体のみ！ この最後の1体同士の勝敗でどちらの選手が勝者となるのか決定します！ はたして両者最後の1体はどのようなポケモンとなるのでしょうか！？』

最後のポケモン。

オレの読みが嵌れば完封、外せば即終了という、正直な話、結構なバクチ（オマケに嵌った場合は、もう卑怯極まりない）。でも、ここまでくれば結構確率的にはいいと思う。少なくとも悪くはないハズ。

「あとは任せたぞ！ 、キミに決めた！」

ユウキさんは驚いてくれるかね？

『両者最後のポケモンが出揃いました！ ユウキ選手はルンパツパ、ユウト選手はヌケニンです！』

やられた！

まさかまさかこんな局面でヌケニンが来るなんて！  
くうっ！

ラグラージだったら、ストーンエッジがあつたのに……！

いや、でもニョロボンを外してたらユウトのラッキーには対抗できなかったし、パーティー構成的にも物理・補完・物理ニョロボン カイリユー ラグラージだったから、物理2体じゃなくて特殊を入れて物理受けが出てきても対応できるようにしたんだよな。

あー、マズイ。

終わっ……いや、まだまだ！

「ルンパツパ、どくどく！」

ヌケニンが厄介な点は効果抜群な攻撃技しかダメージが与えられないという特性“ふしぎなまもり”。

ただ、それ以外ならダメージは通ったりする。

例えば、どくどくで猛毒状態にしてしまえば、ヌケニンのHPは1なのですぐさまヌケニンは倒れる。

「避けながらフラッシュだ、ヌケニン！」



「ンッ！」

ただどくどくをひょいっとかわしてピカーッと光りだす又ケニン。その光をモロに見て、目を固く閉じて悶えるルンパツパ。

『又ケニンのフラッシュが決まりました！ ルンパツパ、これで命中率がやや下がったか！？』

「ルンパツパ、がんばってくれ！ どくどくを撒き続けるんだ！」  
「そうはさせない！ 又ケニン、ちょうはつだ！」

なっ！？  
ちょうはつ！？

「しまった！！」

『さらに又ケニンのちょうはつが成功！ ルンパツパ、これで攻撃技しか出せなくなっていました！』

……詰んだ。

“ふしぎなまもり”を貫通出来そうな攻撃技はルンパツパにはない。あとは変化技だけだけどその変化技もちょうはつで封じられてしまった。

「又ケニン、いばってからつるぎのまい！」

「ンッ！」

「ルンパ！？ ルンパツパツパツ！」

『ルンパツパ、又ケニンにいばるをされて混乱してしまいました！』

あーっ！ 自分で自分を攻撃してしまっています！ 一方その又ケニンはつるぎのまいで攻撃力がグリーンとアップしました！』

わるあがきをしようにも又ケニンは離れたところにいてルンパツパの攻撃は届かない。

おまけに混乱（50%の確率で自分を攻撃）+攻撃2段階アップで自滅ダメージが増える。

ちようはつが解除されるまでユウトも待つてはくれないだろう。これは終わったか

『おや、あれはどうしたことでしょう？ なにやらルンパツパの右手が赤く燃えています！』

えっ？

見ると確かにルンパツパの右手から炎のようなものが上がっている。いったいどういふ……ってまさか！？

「マジで！？ まさかこのタイミングで自力で教え技を習得したとでも言うワケ！？」

ユウトも驚いている。

あれはやっぱり

『ルンパツパ、どうやらほのおのパンチを繰り出そうとしているようです！ しかし、ユウキ選手のルンパツパは混乱しています！ はたしてきちんと技が出せるのでしょうか！？』

いいところで！

こうなったら、もう運に掛けるしかない！

50%の確率

「ルンパツパ！ たのむ、決めてくれ！ ほのおのパンチだ！」

「くっ！ これで決めるんだ、又ケニン！ シザークロス！」

結果は

『ルンパツパ、この土壇場ではおのパンチを使用し、逆転への一手を放とうとしましたが、混乱していて技が出せず、自分を攻撃！

その隙に又ケニンのシザークロスが決まりました！ つるぎのまいで攻撃力がグリーンと上がった又ケニンの効果抜群のシザークロスにルンパツパは耐えられませんでした！ ルンパツパ、戦闘不能！』

くそ！

……惜しかった……。

50%の確率を外したか

……いや

『これにより第8回タテワクタウン雨乞い祭り記念 ポケモン雨乞いバトル大会優勝は 』

詰んだってあきらめた段階で、ぼくはこのバトルに勝てなかったか  
もしれないな

「戻れ、ルンパツパ」

倒れているルンパツパをボールに戻す。

お前はすごいよ

いや、お前だけじゃないか。

「みんな、すごいな。ありがとう」

そんな言葉が自然と口に出た。

「今回も負けたよ」

大会終了後にそんなことをユウキさんが言ってきた。

「でも、とてもいいバトルだったと思います」

「ああ。うまく追いつめたと思ったんだが、まさか最後にヌケニンだなんて思いもよらなかったよ」

「一応、対雨パの部類に入るポケモンですから。雨パで来るなら対策も考えておかないと。ユウキさんがカイリユウ入れたのだからそういうことでしょ?」

「まあそうだな。しかし、今回はラッキーに縛られ過ぎたなあ。それにみちづれも見抜けなかったし。まだまだ勉強も足りないし、実力不足か?」

どうだろうか。

ユウキさんもそうだけど、シロナさんやグリーンさん、コクランさ

んたちを始めとした知り合い全員が全員、一度見せたことは十二分に学習して理解してくる上に、対策もキツチリしてくるのは当たり前で、さらにその上を目指そうとしてくる。

「おっと、長々と話し過ぎた。ぼくはこれで行くよ。ちょっと人を待たせているんでね。じゃあ、また」

次こそは絶対勝ってみせるから　！

そう言っユウキさんは会場を後にしていった。

「いやはや、久々に肝を冷やしたバトルだった」

「（たしかに。今回は僅差だったと思うわ。危ないところもあったし。ドクロッグはうまくやってくれたわ）」

ラルトスの言うとおり、ニヨロボンのところはあぶなかった。

たぶんふいうちとかみなりパンチが少しでも入っていなければ、ハリセンのじたばたでも落ちなかったかもしれない。

そして僅差だったとすれば、ハリセンのみちづれとヌケニンの運用か。

みちづれで厄介なカイリユーを落とせたのは大きい。

そしてヌケニン。

ヌケニンは現実世界するときならば、ヌケニンに対して雨。パは何も出ずに機能不全に陥ることが間々あったりするが、それは『技の4つ制限』、『基本的に技は外れない』といった規則があるため。

この世界では上の2つに関してはまったく当てはまらない。だからこの世界でヌケニンは思った以上に落ちやすくなっていたりする。

今回はラッキーがいたことで、パーティー構成としては予想通りラ

グラージを外してニヨロボン、それから仮にラグを入れたとしたら物理が被るのでそれを外して特殊を請け負うルンパツパ、“マルチスケイル”とはねやすめで耐久は並以上な上、様々なタイプに対応できるカイリユウとしたんだろう。

結果的に、ヌケニンに対抗できるカイリユウを落とせばあとは勝ちの試合で、いかにヌケニンの存在を最後まで悟らせないかという勝負だったか。

とにかくスリルある読み合いで本当に楽しめた。

これこそがポケモンバトルなんだと思う。

それに

「あんなことは初めてだ」

バトルの最中に、自力で覚えるのは難しい教え技をポケモン自らが編み出してしまうなんて

「ルンパツパはあの時点でヌケニンに通用する攻撃技はなくて、補助技もちょうはつで封じられていた。完璧に詰んでいた状態だったんだ」

だが、あそこからほのおのパンチを編み出した。

「（きつとルンパツパはどうしてもユウキを勝たせたくて、あの状態でも諦めずに必死でもがいていたのね）」

トレーナーへの想いが困難を打破したか……。

「ポケモンってオレたちが思っている以上の可能性を秘めているの

かもしれないな」

「（それを言うなら人間だってそうよ。人間だってわたしたちポケモンからは思いもしないことだってやってのける。それらが合わさればきつとわたしたちはどんなことでも乗り越えていけるわよ）」

たしかに。

それはとても素敵で素晴らしいことだな。

「さつて、オレたちもそろそろ行くか」

「（そうね。ついでに今一度、パーティー編成・運用を考え直して勉強し直すたら？ 教えてばかりで錆び付いちゃったらしょうがなし、ユウキたちだって勉強してるのもの。ユウトもしたら？）」  
「だな」

伝説や幻のポケモンを出してごり押しで勝つのはあまり好かない。出来れば、普通のポケモンで、戦略・戦術を練り、相手の様々を読み、勝ちを収めていきたい。

そこに慢心などの入る余地は一片もない、入れてはならない。そして運だけでなくて、完全な実力によって

「ラルトス、協力してくれるか？」

「（わたしはユウトのパートナーなのよ？ 今までだっていつも2人3脚できたじゃない。これからだってそうよ？ 覚えておいてね）」

「ありがとう、ラルトス」

隣りを歩くラルトスを見ながら思う。

今日のバトルはいろいろな意味で今後絶対に忘れることはない

と



## 外伝24 雨乞い祭り 決勝（後書き）

ハリセンのみちづれは結構決まります。雨パすいすいで運用すれば、じたばたと併せてこのSSのように2タテも可能です。ちなみにいかにく耐久型もかなりイヤらしい（ただ、よく奥義あくうせつだんを食らいますが）。

それはさておき、マルスケカイリユウの活躍を期待した方、扱いが結構悪くて申し訳ないです（みちづれで葬ったため、ほぼ良いとこなし……）。

それからユウトの手持ちがラルトス含めて7体になっていますが、たしかアニメでサトシがピカチュウ抜きで6体でパーティー組んでのフルバトル（ピカチュウは客席で応援）していた回があったと思うので、それと同じ理屈ということ。

外伝25 おにごっこ(前書き)

とりあえずあまりに期間が空いたらマズイかと思い、投稿。

しかし、これだけフラグ立ててはたして回収できるのか不安です。

r z

## 外伝25 おにっころ

カントー地方

岩山や洞窟は広大かつ複雑なものが目立つが、基本大部分が起伏の少ない平野で構成されているため、他の地方に比べて『旅をしやすい地方』とされている。

天候が極端に変化するといったことがないということも、その評価の後押しをしている。

そしてこの地方は他の地方とはもう一つ異なるものがあり、それが街ごとにモチーフとなる色が存在することである。

その中で「白」をシンボルカラーとする町、マサラタウン。

ポケモンセンターもフレンドリイショップも存在しない町だが、カントーでは何かと話題に上りやすい町である。

理由としてはいくつか挙げられるが、その中の1つに、本日の話題にも関係する、オーキド研究所の存在がある。

オーキド研究所とはカントーを代表するポケモン研究者であるオーキド博士が私財を投入して建てた、『田舎』という立地条件を生かして広大な敷地面積を誇る、自宅も兼ねた研究所である。

そこにはオーキド博士に縁あるトレーナーたちが捕まえた数多くのポケモンたちが、預けられていて日々暮らしているが、今日はその中で、あるトレーナーのポケモンたちについてを見てみることにする。

\*

オーキド研究所の敷地内のとある一角に、ある種異様な光景が広がっていた。

どのような光景か。

それは大小様々な多くのポケモンたちが一様に、体躯の小さな方から順に整列をしているのである。

地に足を着けられるポケモンは言わずもがな、空を飛ぶポケモンは地上に降り立って、水中を住処とするポケモンは水面の岸边近くまで上がって。

その光景はポケモンの数も相まって、異様であるとともに、上から見渡せば絨毯が広がっているようにも見える壮観なものでもあった。もし外部の人間がこれを見たら、

「いったい何事だ!？」

と口を揃えることは間違いないだろう。

尤も、この研究所の関係者には見慣れた光景でもあるので、今更気にはしない。

さて、そんなポケモンたちだが、今の今までは隣り同士での話し声（鳴き声）があちらこちらから聞こえていたのだが、あるポケモンがこの場に現れた途端、それらが全て止み、1体1体全てのポケモンがそのポケモンを自身の双眼で追った。視線を一手に集める存在。

頭部は薄緑色に赤い突起がやや目立つ白い体躯。

その見た目はおかっぱ頭の小さな幼子にも似るポケモン。

彼女はその自らに集まる視線を全て受けとめ、それでも優雅に、落ち着き払った物腰で、中央に備えられた周りより一段高い高台を指して歩く。

「（みんな、揃ったかしら?）」

「（ああ。新メンバーは?）」

「(ちゃんというわ。今見えないのはちよつとしたサプライズと今日のイベントに少しばかりの華を添えるためよ)」

「(そうか)」

高台の脇に控えるドラゴンポケモン、ボーマンダと軽いやり取りを交わすそのポケモン　ラルトス。

彼女はこの集まり　ユウトのポケモン　の中では一番の最古参であり、並み居る強豪揃いのこのメンツの中でトップの実力を誇る、この集団のリーダーであった。

そして彼女はボーマンダの脇の高台に登る。

「(みんな、ごきげんよう)」

すると返ってくるのはそれぞれのポケモンが、腹に力を入れて出すようなハキハキとした鳴き声。

「(ラクにしてくれていいわ)」

すると一斉に鳴り響く、足を横に一步踏み出したことよって青々としたほぼ垂直に立つ草の先端が地に叩きつけられるときに発する音。

どこぞの軍隊も斯くやというべきの統一具合である。

「(今日はわたしたちの新しい仲間を紹介するわ)」

ちなみにユウトのポケモンたちがこういったセレモニーを行うのは初めてではないが、かといって最初からやっていたわけではない。

最初は新しい仲間が出来れば、そのパーティー内、あるいはここに預けられた同士で勝手に自己紹介等はやっていたが、旅をする地方

が多くなるにつれ、仲間の数がどんどん増えてくる。合計して300も400もいれば、それらの手間と時間は計り知れない。

それをラルトスがユウトに持ち掛けたら、「一遍にやっちゃえばいい」として、『一度で全体に示す』こんなセレモニーを提示されたわけである。

自他共にユウトのポケモンたちのまとめ役を認めるラルトスとしても、自身の立場を改めて明確に示せるということもあり、それを取り入れたのだった。

尤も、ラルトスは普段ユウトと旅に出ているため、ラルトス自身がこれに参加するのは珍しかったりもする（そのときにこれを取り仕切るのはだいたいがボーマンダである）。

「（じゃあ、いらっしやい）」

そんなラルトスの呼びかけと共に、ラルトスの前方の空間がやや揺らいで淡い光を放つ。

テレポートの前兆である。

尤もそれはほんのごく僅かな時間のみ。

次の瞬間にはテレポートによって2体のポケモンが現れる。

「（紹介するわ。今度新しく仲間になったミュウとセレビィよ）」

「（どうも、みなさんよろしく）」

「（チーッス、愚ポケモン共よろしく！ ってアイタアッ！）」

どう見てもおふぎけにしか見えなかったセレビィの挨拶に、思わずシャドーボールを打ち込むラルトス。

「（マジメにやりなさい、マ・ジ・メ・に）」

「（でも堅苦しいのイヤなんよお）。ほら、アンタだってアットホ

ームでいいって言ってたじゃん？」

「（締めるところと緩めるところを間違えないように、と言ったはずよ。これが終われば肩の力を抜いていいから）」

「（ハハ、では改めて。皆様方、わたくしはセレビィ。森に恵みを与える神様として今まで奉られたこともあるのですが、どうぞ普通に接していただけると助かります。よろしくお願い申し上げます）」

「（それでいいのよ。あ、ちなみに2体とも『幻のポケモン』とされてるけど、さっきセレビィが言った通り普段通りに付き合っただけでね。みんなよろしく）」

最初とは打って変わった挨拶に、そしてセレビィにとっては効果抜群であり、かつ、手加減はしているといえど、あのラルトスのシャドーボールをモロに食らっても平然としているその様子に、全員がセレビィに対する印象を改めることとなった。

「（さて、紹介も終わったことだし、これでセレモニーを終わりにします。みんな、本当にラクにしてくれて構わないわ）」

ラルトスのその発言によって一気に場に弛緩した空気が流れる。見てみると、本当にポケモンたちがリラックスした様子を見せていた。

「（そのまま聞いてちょうだい。ここで、ちょっとした交流イベントを開催するわ）」

まったくそんな話を聞いていないポケモンたちは、その話に驚き半分興味半分といった様子になり、ラルトスの言葉を聞き漏らさないように耳をそばだてる。

「（新しく入った仲間の実力を計るにはバトルが一番。でも、全員との対戦は不可能だわ。そこでこういったものを行います）」

そしてラルトスの提案したもの  
それはおにごっこ。

人間の遊びの一つで、逃げる人をおに役の人が追い掛けて捕まえる遊び。

ラルトスはそう大ざっぱな説明を行い、これをわたしたちポケモンにも適用してみようという。

「（ただし、人間のものはおにが逃げている人間に触ればそれで終わりだけど、わたしたちはポケモン。それに少しアレンジを加えましょう）」

アレンジ1つめ、おには逃げるポケモンにバトルを仕掛けてこれに勝つこと。

おにが勝てば終わり、おにが負けるか、逃げられればまだまだ続行ということ。

そしてアレンジ2つめ

「（逃げるのは新入りのミュウとセレビィ、おにはそれ以外の全員よ）」

\*

「おにさーん、こちら 手への鳴る方へ」



セレビィが後ろを向いて飛び、歌いながら手を叩く。

その後ろを追い掛けていくケンタロスやガルーラ、サイホーン、グラエナなどの草原に生きるポケモンたち。

そしてやや視線を上に移せば、チルトリスやクロバット、ピジヨットなどの大空を自由に駆けることのできるポケモンたち。

地上を走るポケモンたちはすてみタックルやはかいこうせん、空を駆けるポケモンたちはブレイブバードやエアスラッシュなどで攻撃を加えてミュウやセレビィの逃げる速度を落とし、是が非でもバトルに持ち込もうとするが、2体はヒヨイ、ヒヨイとアツサリそれらの攻撃をかわしていく。

そうこうしているうちに森林や水辺、岩場や洞窟などを抜けていく。途中、はっぱカッターやむしのさざめき、れいとうビーム、ハイドロカノン、ストーンエッジなどが飛んでくるが、撃墜するか避けるかで被弾は一つもない。

それはちようおんぱやねむりごななどの変化技についても例外ではなかった。

「（ねえ、ミュウ、そろそろ二手に分かれて逃げようか）」

もつと、二人で攪乱しようとし持ち掛けるセレビィ。

しかし、斜め前方を飛ぶミュウは一向に反応しなかった。

「（ミュウ?）」

「（誰に向かって話しかけてるのかしらねー）」

不意に後方から聞こえる声に振り向くセレビィ。

そこには赤と白のコントラストで彩られた、人によっては『とてもかわいらしい』ポケモン、

「（ラティアス）」

「（はじめましてなのねー）」

セレビィは停止する。

後にこのことを振り返ったとき、「なぜだか逃げるよりは戦うべきだと思ったから」だという。

「（いいユメは見れましたかー？）」

「（ユメ？）」

「（そうなの）」

ここで、セレビィはおかしなことに気づく。

自分は止まっているはずなのに、どうして視界に映るミュウは飛んだままなのか？

しかも、振り返って先程とは正反対の方向を向いているのに、どうしてミュウは自分の前方を飛び続けているのか？

すると、セレビィの前方にいたミュウがフェードアウトしていくように消えていった。

これを見て、セレビィは『これは断じてテレポートなどではない』と判断する。

「（今まで見ていたのはお兄さまが見ていた光景。それをそのままあなたに見せていたの）」

人はそれを“ゆめうつし”と言う。

ゆめうつしはラティアスとラティオスのみが見える特技。

時同じくミュウもラティアスのゆめうつしにより幻覚を見せられて

いたことに気づく。

「さあ、いくわよ、セレビィ。あなたを捕まえられればユウトともまた旅に出れるし、おねえさまとも添い寝できるの！」

景品として、おには捕まえられれば、逃げる方は一定時間逃げ切れば、『何か一つ願いを叶えられる』というものになっており、ラティアスはユウトの手持ちメンバーに加えられて一緒に旅に出ることを望んでいた。

また、ラルトスとは個人的に、捕まえられれば添い寝OKの許可も貰っていた。

「(ぜつつつたいに捕まえてみせるのね!)」

ラティアスは手を伸ばせばすぐそこまで届きそうになる現実のために燃えていた。

\*

おにごつこの様子を見るために、ポーマンダがラルトスを乗せて飛んでいる。

眼下にはラティアスとセレビィのバトルが繰り広げられていた。やや離れたところでは、ラティオスとミュウもバトルをしているようだった。

「(まったく、あの甘えん坊さはなんとかならないかしら)」

「(フツ、しかし、お前を見ていると満更でもない様子だが? 常のお前ならタクトのように嫌なものは完全に拒絶するが、ラティア

ス含めてここにいる皆にはいくら強請ねたられても断ることはなかったと思うのだが、違ったかな？」

「(……もう!)」

「(ハハハハハ)」

ラティアスの様子にラルトスは呆れたような溜め息をつくも、ポーマンダにはからかわれてやや膨れた様子。

しかし、どちらからも見て取れる様子として、“全て”を楽しんでいること。

ラルトスは野生として過ごしたことは一度もないが、ポーマンダを含め、仲間たちの中には元は野生だったものも大勢いる。

彼らを含めて皆、自分たちを大切にしてくれるユウトが好きで、ユウトのポケモンになれたことを心から誇りに思っていた。

この先もずっと彼と共にいたい。

彼の隣を彼と共に皆で歩みたい。

そして、できれば暖かな彼の腕に包まれていたい。

「(そろそろ決着がつきそうね)」

「(ではそろそろ止めに入るか)」

「(そうね。いきましょ)」

彼らは幸せをかみしめていた。

〈関係ないオチ〉

【後日】

ユウトが研究所を訪れるとミュウとセレビィがいない。

「あれ、ミュウとセレビィは？」

「（ゲンガーが言うには、ときわたりで修行の旅に行ってきたと。しばらく帰ってこないそうよ）」

「なにそれ！？ 育成できないじゃん！？」

彼らが時系列的にこの先登場することはある……のか???

## 外伝25 おにごっこ(後書き)

ということでもミュウとセレビィは退場させました。

書き始めた当初は伝説・幻はラティ兄妹以外は主人公を除く各人に均等に配置していこうと思っていたのに主人公に集まり過ぎたので、その処置ということ。

次回はおそらく第2部が上がるかと思われます(原作ゲームは全然話が進んでいませんが、外伝にもやや詰まっていますので・・・)

## 第1話 新たな始まり（前書き）

見切り発車な感が否めないのですが、外伝がなかなかうまく書けないので、締まりは悪いですが、第2部開始です。

## 第1話 新たな始まり

はじまりはいつだったのか。

わたしが生まれたとき？

わたしに双子の弟ができたとき？

幼なじみのチェレンとベルと知り合ったとき？

わたしがポケモンといっしょに旅に出たとき？

それともわたしが初めてポケモンバトルで勝ったとき？

ううん、違う。

確信できる。

「なるほど、キミがその子を選んでくれて本当に良かったよ」

わたしがこの子と出会ったときに他ならないんだって

イツシュ地方カノコタウン。

わたしは、いや、わたしたち

わたし：トウゴ、双子の弟：トウ

ヤ、幼なじみのベル・チェレン

はこの町で生まれ育った。

何をするにも常にいっしょ。

どこに行くにも常にいっしょ。



一心同体とまでは言い過ぎだけど、でも、誰が何を考えてどういう人柄かなんてのは当たり前のように熟知している。

「で、ベルはまた寝坊なの？」

「みたいだ。キミたちの家に来る前に立ち寄ったら、「先行つてて」だったさ」

「トウヤもそうだけど、ベルも相変わらずよねえ」

「ポヤポヤして世間知らずな分、トウヤよりもヒドい気がするけどね。まあ今日はさすがに先に来たんだけど」

普段はベルとくつつき、世話焼きなチェレンが常とは違う行動を取る。

つまり、それほど今日は特別な日であるのだ、わたしたちにとってしかし、待つのもヒマだ。

あ、そういえば目の前にカモがいるじゃん。

そう思うと口許がだんだんとつり上がってきた。

「で、いつつも傍にいるわけね。告白はいつ？」

「なっ！ ボクは別にそんな！」

「気づいてないのは当人たちばかりとはこのことね」

「あのね、トウコ！ か、勘違いしてるようだから言っておくけど、ボクは別にベルのことは！」

「あら、わたしっていつ「ベルに告白する」という『言葉』を口にしかかしら？」

「それはキミが！」

「ん？」

「だいたい、あの話の流れから確実に！」

「んんん？」

「……………ぐっ！……………悪女め」

なんていつものごとく、チェレンで遊びながら、わたしはチェレンといっしょにわたしの部屋で二人が来るのを待っていた。

ちなみに普段なら、チェレンの最後の言葉には腕ひしぎ十字固めだとか、チヨークスリーパーを決めていたところだが、今回は見逃した。

それはわたしたちの前に置かれているプレゼントボックス故だ。

これはこのカノコタウンに研究所を構えるアララギ博士から贈られたもので、箱の中には、モンスターボールに入ったポケモンが入れている。

わたしたちにとって初めて、所持することが許されたポケモン。

すなわち、わたしたちは今日からポケモントレーナーになるのだ。

小さな頃からポケモンを連れ歩くことには憧れがあった。

ママやパパに頼み込んでもなんだかんだで、結局は不可能だったこと。

それが今、現実に叶うのだ。

そういうことで少々の些事は見逃しても構わなかった。

「ういゝす、おはあああああゝ」

わたしの部屋に入ってきたのは、目が横線一本でハイ終わりという風な、眠そうな顔をしたわたしの双子の弟。

挨拶なのかデカイあくびなのかビミョーなものも洩れなくセット付きた。

ちなみに普段ならきちんと目は開いている。

「トウヤ、キミは二日酔いのオヤジか？」

「ちがうっつーの」

「どうせ興奮して眠れなかったとかそんなオチでしょ？ あいつかわらず、子供ねえ」

「ばっ！ ちげーよアネキ！」

「ハイハイ」

そういうムキになって言い返すところがまだまだなのよ。  
更に階段をドタドタ上ってくる音。

……人の家なんだからもう少し丁寧に扱ってくださいな。

「ごつめーん！ 遅れちゃった〜！」

「ベル！ まったく。キミはいつもいつも」

「うわあ！ ねえ、それ、博士からのモンスターボール!?」

「ベル！」

「だって〜、チエレンってパパみたいにお節介なんだも〜ん」

「あのねえ、誰のおかげで……」

「ねえ、早く開けようよ〜」

相変わらずのベルのマイペース振りにわたしたち姉弟は苦笑いしながら見ていたが、『ベルの言うとおりか』と思い、箱に添えられていたプレゼントカードを抜き取る。

『ハイ、boy & girl! girl!』

この手紙と一緒に4匹のポケモンを届けます

4人で仲良く分けてね

それじゃあよろしく!

アララギ  
』

紐を解き、中を開けてみるとわたしたち4人に行き渡るのに過不足のない数のモンスターボール。

「まずはキミたちから先に選ばばいい。ここはキミたちの家だから  
ね」

「そうだねえ。トウコちゃんにトウヤくんが先で」

「アネキ先選べよ。オレはアネキの後でいい」

ふむ。

ならば、お言葉に甘えることにして。

とりあえず4つのモンスターボール全てからポケモンを取り出す。  
出てきたポケモン

「タジャ、タージャ」

くさへびポケモン、ツタージャ。

「カブカブ」

ひのぶたポケモン、ポカブ。

「ミジユ、ミジユマ」

らっこポケモン、ミジユマル。

いずれもイッシュ地方で最初に貰えることが多い初心者用ポケモン。  
それからもう1体は

「みんな欲しいポケモンが被らなくてよかったね」

「そうだね、ボクもお目当てのツタージャが貰えてよかった。けど、  
トウコ、いいのかい？」

チエレンの言葉に3人ともわたしを窺うような視線を送る。

「ひよっとしてアネキ、オレたちに遠慮したりとかした？」

ナルホド。

わたしが3人に遠慮してこのポケモンを選んだと思ったわけね。

「そんなことないわよ。全然気にしないで」

遠慮した、というのとはまったくの正反対。

実際、わたしはこの子を見た瞬間、一目惚れとっていいほどの衝撃を受けた。

『この子“で”いい』じゃない。

『この子“が”いい』  
いや、

『この子“じゃないとダメ”』

ぐらい言い放つても構わなかった。

「だから、そんなことは気にしなくていいわ。わたしはこの子が気に入ったんだから」

もちろん、あそこまでは言うのも他の子たちに悪い気がしたので言わなかったけど。

その後、「ポケモンを貰ったんだからやることは一つでしょ!」とバトルをして、一回も勝てなかったけど、そんなことは全然気にな



「お願いします！ 誰か助けてええええ！」

こんな深い誰も立ち入らないような森の真ん中でそんな助けを呼ぶ声を上げたところで返ってくるわけ

「待つてろ！ 今助けるから！」

そんな声がわたしの頭上から って、えっ、あれ！？

わたしの思いが天に通じた！？

「あの、助けていただき、本当にありがとうございました」

「いいっていいって。偶々通りかかっただけだし、それに困ったときにはお互い様って言うだろ？」

散々追いかけて回されて疲れ果てた上に、太陽が真上に上っているよ  
うなお昼にはちょうどいい時間、さらに川縁で綺麗な水がたくさん  
汲めたこともあり、助けてくれた男の人がお昼ご飯をご馳走してく  
れた。

ちなみに今は食後の休憩といったところである。

あのペンドラーについてだけど、ペンドラーはこの男の人のラティ  
オスという非常に珍しいポケモンがバトルをして、弱ったところを  
この男の人の投げたモンスターボールによってゲットされた。

この男の人の名前はユウトさんといって、ホウエン地方出身なのだそうです。

「ところでずっと気になってたんだけど、トウコちゃんって最近旅に出たカノコタウン出身の新人トレーナー？」

「え！？　は、はい。でも、どうして？」

言ってしまうえば初対面の男性にいきなりそんなことを聞かれれば、やはり気になるもの。

「いやさ、コイツが言うには、トウコちゃんが連れてるその子が自分の娘だっていうからさ」

そう言っただけは、彼の足元にいるポケモン　ラルトスを指差した。

「えっ？」

わたしのそんな驚きをよそに、彼のラルトスがトコトコとわたしのラルトスの元に寄る。

「ラル、ラルラルラル」

「ラル」

そして、わたしのラルトスは嬉しそうに彼のラルトスに抱きついていた。

なんでも、彼が言うには、以前アララギ博士に『今回旅立つ新人トレーナーが4人いてポケモンが1体足らないから、新人にも扱いやすい子をなんとか1体融通出来ないか？』って相談されたらしい。

「で、オレがラルトスを提供したのよ。新人トレーナーのためにラ



ルトスを提供したのってカノコタウンのアララギ研究所が初めてだからさ」

なるほど、そういうこと。

これならそれぐらい知っていても不思議じゃない。

「見てるとだいぶあのルトスはトウコちゃんに懐いているみたいだけど、どうだい、あの子は？ 気に入った？ 好き？」

言葉は軽いような気がするがなんとなく居住まいを正さないといけない気がして背筋を伸ばす。

横目ではルトスたちがじゃれあって遊んでるのが見えた。

「そうですね。正直わたしはあの子のことを見た瞬間に気に入ったというか。正直に言ってしまうとあの子のときはあの子以外は眼中になかったんですね。それほどです。そしてその直感というか、考えは間違っではなかった」

チラッとその様子に目を向けるとあの子が本当に嬉しそうにしているのが見え、するとわたしにもその感情が芽生えてくるのが自覚出来る。

「なるほど、キミがその子を選んでくれて本当に良かったよ」

このとき、

『この人とはずいぶん長いつき合いになる』

なぜだかわからなかったけどわたしはそう直感した。



第2話 新しい仲間（前書き）

レベル？ アニメと合体だからいいんです（キリッ

## 第2話 新しい仲間

「さて！ 十分休息もとつたし、そろそろ行くこうか」

「はい！ わかりました！」

片付けも済まし、肩掛けのショルダーバックのショルダーストラップを右肩に掛ける。

「ラルー」

「ん？ あれは？」

ユウトさんのラルトスが何かを見つけたらしく、ユウトさんもそこに何かを見つけたらしく、そんな声をあげたので、わたしも其方のほうに視線を向けてみた。

何やら川の流れとは別の水飛沫がバシャバシャと上がり、水色のブロッコリーのような、何か房のようなものが水面に見え隠れする。

そしてそれはバシャンと一際大きな水飛沫が跳ね上がると、そのブロッコリーのようなものを持つ何かは岸に上がってきた。飛び出してきたのは

「ヒヤッ、ヒユア」

水色の、サルみたいなポケモン（ちなみにブロッコリーは頭部に付いていた）。

それがちょうど川から岸边に這い上がってきた。

「へえ、こんなところで野生のヒヤップとは珍しいな」

「ヒヤップ？」

「アララギ博士から図鑑貰ってるでしょ？ 開いてみ」

あつと、いけない！  
初めてのポケモンを見かけたらとにかく図鑑を開くっていうことを忘れてた。

『ヒヤップ みずかけポケモン』

頭の房に貯めた水は栄養たっぷり。植物にかけると大きく育つ。  
また乾燥した環境に弱いので、その水を尻尾からまいて周りを湿らせることがある。』

「ということはやっぱり水タイプなんですかね？」

「そうだな。ついでにいえば、ヒヤップはヤグルマの森にわずかにしか生息していない、珍しいポケモンなんだ」

「そうなんですか！ よーし！ ゲットしよ！」

結局旅に出てまだ1体も捕まえていない。

ここらでそろそろゲットしておきたいし、そんなに珍しいならなおさらといったところ。

身体の左側に来ているバックを勢いよく跳ねのけ、背中側に押しやった。

「ゲットの基本は大丈夫だよな？」

「バトルしてある程度ポケモンを消耗させてからモンスターボールを投げる、ですよな？」

ポケモンはモンスターボールというボールを使って捕まえるが、捕まえるポケモンが元気なままだと抵抗が激しくてボールから出てしまうことがある。

だから、バトルして相手の体力を消耗させるのだ。

「うん、その通り。じゃあ頑張ってみ」

「はい！　いくよ、ラルトス！」

「ルー！」

するとヒヤップの方もこっちに気がついたみたい。

1対1で正々堂々！

「ラルトス、まずは先手必勝よ！　でんげきは！」

「ラルー！」

水は電気に弱い。

ということ、電気タイプのでんげきはをチョイスしたんだけど

「ヒイユアアアツップ！」

「いいっ！？　うそお！？」

ヒヤップはみずでっぼうのような技で応戦した。

ただ、どう見てもあれは“みずでっぼう”などといった威力なんかではない。

「おお！　あのヒヤップハイドロポンプが使えるのか！？　すごいな！」

わたしがゲットすると宣言していたから、ユウトさんは観戦をしている。

ていうか、やっぱりアレ、みずでっぼうなんかじゃなかったのね。

で、ユウトさんは感心しているっばいけどわたしはそんなことをしている暇はない。

アレは避けないとマズイ。

でんげきははすっかり押し負けている。

「ラルトス、避けなさい！」  
「ラ、ラル！」

ほっ。

なんとか間一髪回避。

でも、避けたところは木々の枝の数々は折れ、地面は抉りかえっている。

威力的にも相当高い。

さてどうしよう……。

おそらく今のラルトスで一番強い技だろうでんげきは押し潰された。

10万ボルトはまだ覚えていない。

とすると、あのヒヤップに効果的な技が見当たらない。

つまりあのヒヤップにダメージは与えられそうにない……。

コレ、けっこうヤバイよね？

「トウコちゃん！」

そこにユウトさんの声が耳に届いた。

「ポケモンバトルは、何も真正面から力技でぶつかっていかなきゃならないわけではないんだ！ 特にラルトスなら、そればかりではなおさらダメだ！ 搦め手でいこう！」

「搦め手って……いったいどうすればいいんですか!?!」

ユウトさんの言う搦め手……はつきり言ってなにをどうすればいいのか全然思い浮かばなかった。

「まずはかなしばりだ！」

かなしばり？  
いったいそれって……？

「早く！」

「は、はい！ ラルトス、かなしばりよ！」  
「ラルー！」

すると前髪らしき（？）部分で隠れているラルトスの目がカッと光った。

「ヒヤッ？」

一瞬その眼光にヒヤッはビクッとしたようだが、すぐさま元の調子に戻る。

「ヒイユアアアップ！」

そしてまたハイドロポンプを発射しようとする。

「ヒヤッ！？！？」

ただハイドロポンプが発動することはなかった。

「えっ？ な、なんで？」  
「ラルー？」

ヒヤッ普通人はもちろん、わたしたちも混乱していた中で、



「落ち着いて、トウコちゃん。かなしよりは直前に出した相手の技を封じる効果があるんだ」

ユウトさんたちだけは冷静だった。

「今度はここえるかぜからのメロメロ！」

「は、はい！」

ユウトさんに言われるがまま、ラルトスに指示する。

ラルトスが放ったここえるかぜにメロメロ。

ここえるかぜは冷気の風による攻撃みたいで、見た目と技名からおそらく氷タイプなのかな。

でも水タイプに氷タイプの技って相性が悪いと思ったけど……。そしてメロメロ。

ラルトスがウインクをするとピンクのハートが発生して、それがヒヤップに向かって飛んでいく。

あまり速いスピードではなかったのに、なぜかそのまま命中（そういえばヒヤップのスピードが落ちていたような？）。

ヒヤップの両目はピンクのハート型に変わり、頬に紅が差し、顔が赤らんでいる。

メロメロ成功のようだった。

「よし、いいぞ！　今度はシャドーボール！」

「ラルトス、シャドーボール！」

「ラー、ルツ！」

ラルトスはほんの僅かに、溜めの動作を行った後、黒紫色をした球体状のエネルギー体であるシャドーボールをヒヤップに向かって発射する。

メロメロによってフラフラしているヒヤップは避けること叶わず、そのまま命中。

「最後にでんげきはだ！」

「でんげきはよ！」

「ルツ！ ルーツ！」

さっきはなんとなく押し退けられたでんげきは、でも、今度はそれを撃墜するものは何もない。

「ヒヤヤヤヤヤヤヤヤヤヤヤ！」

今度は、水タイプのヒヤップに効果的な電気技を当てることが出来た。

でんげきはの直撃を受け、びりびりと痺れているみたい。

「ヒヤ~~~~」

ヒヤップはどつやら今のでメロメロとはまた違うフラフラ状態に陥った。

ところどころに痣が見受けられ、焼け焦げ、そして目はグルグルと回っている。

「ヒ、ヤ~~~~」

そのままボテッと倒れた。

どつやらダウン寸前みたい。

「今がチャンスだ、トウコちゃん！」

“なにが”とは言わない。

もうここまでくればユウトさんが何が言いたいのかもわかる！

わたしは既にバツクからあるものを取り出していた。

それは赤と白のツートンカラーのまるい球体状のボールで、大きさはピンポン玉よりもやや小さい部類のもの。

真ん中の部分には白いボタンが付いている。

それを押し込むと、大きさが手のひらよりやや大きく、すべてが手のひらには収まらない程度の大きさにまで膨れ上がった。

「いけえっ、モンスターボール！！」

サイドスロー気味に、最先端科学技術が詰まったそれを目標に向かって投げつける。

それは自身に回転を加えながら突き進み、そしてダウン寸前のヒヤップについて命中。

するとボールが勝手に口を大きく開き、赤いレーザー光のような光とともにヒヤップをその開けた大口の中に取り込んだ。

ボールは地面に落下、小刻みに揺れる。

また、その揺れに連動するかのようにボタンの部分も赤く点滅する。それが5秒、いや10秒くらい続いたのか。

たかが、5秒10秒。

でも、わたしにとってはそれが1時間にも2時間に持感じられたような長さだった。

そして赤の点滅が「ポッオン！」という音と共に消える。

それと同時に揺れも収まった。

わたしはただただ呆然としていた。

その意味は知っていても、理解出来ていても、実感がわかなかったから。

「ラル！」

ラルトスが嬉しそうにわたしの胸に飛び込んでくる。

「やったな、トウコちゃん！ おめでとうー！」

「ラルラル」

ユウトさんと彼のラルトスもわたしをお祝いしてくれた。  
わたしはラルトスを抱えたまま、ボールの佇む場所へと歩く。  
しゃがむ。

拾う。

立ち上がる。

右手には今までとは違うズッシリとした感覚広がる。  
いや、モンスタールボールの重さ自体は変わらない。

そのはずなんだけど、わたしにはとても重く感じた。  
するとジワッと背筋を駆け上がるなにか。

心地よい感触。

それがいつのまにか全身に廻り廻っていた。

「いやったー………!!!!!!」

よろこびが爆発した。

「ヒヤップ、ゲットだぜい！ー！」

「おめでとう、トウコちゃん。ホント、よくやったよ」

「あ、ありがとうございます」

今日の前にいるトウコちゃんは先程のヒヤップを捕まえて全身を使って喜びを表していたときは異なっている。

具体的には、初ゲットの喜びはもちろん大勢を占めているが、その中にわずかにやや微妙な感情が見て取れる。

「トウコちゃん、最初から誰でもうまく出来るわけじゃないんだ。

今は初ゲットできたことだけでも十分。反省すべき点があっても今は脇に置いておこう」

「はい……」

まあ、自分のポケモンなのに自分ではない他人の方が上手く扱えていたら、ある意味こうなってしまうのも仕方がない……のか？

んー、でも、オレと今の彼女じゃキャリアも知識も全然違うからなあ。

比べられて、逆にオレに彼女が比肩されてたら、それはそれでオレが傷つくし、オレがヘタレすぎだし。

彼女の向上思考というよりもプライド（？）が許さないのかな。

「ラルー、ラルー」

「ありがとう、ラルトス。でも、ごめんね。わたしもっと頑張るか  
らね」

ラルトスが、見兼ねてか、彼女の肩をポンポンと叩いている。

……うん。

やっぱりさすが主人公なだけあるかな。

ダメな人はさっきのバトルで自分ではなくポケモンを責める。実際に言えば、ポケモンの方でももつと強ければ技を押し切られるなんてことはなかった、という見方も出来る。

ポケモンの方にも非はあるといえはあるとはいえ、彼女はポケモンではなく自分自身を悔やんでいる。

悔やむということはそれを省みて、直すべきところは直し、向上していこうという意志の表れでもある。

もし、ここで彼女がポケモンを責めていれば、彼女には才能もなく、また“ポケモンと共にいる”ために必要な、ポケモンとの信頼関係も生まれない。

(やっぱり主人公は主人公か)

ゲームとは全然違う。

ゲームはプレイヤーが動かしているから。

しかし、ここは現実。

現実に行くらゲームの主人公と似ているキャラがいるからといって、果たしてそのキャラゲームのキャラと同格であるということは一切ない。

ないはずだが、実際にはなるのに必要なモノは持ち合わせている

「ねえ、トウコちゃん？」

「はい？」

強いポケモン、弱いポケモン、そんなの人の勝手。

トレーナーなら、自分の好きなポケモンで勝てるよう頑張るべき。

「あ、その言葉知ってます。いい言葉ですよ。わたし、初めて聞いたとき感激しちゃいましたよ、なんて奥が深い言葉だろうなあつ

て」  
「そう」

いいね。

なら、オレはこの子を今までよりも遙か高みにまで至らせようかな

ゲーム通りの、まさに英雄に相応しい存在  
尤もまだ候補止まりだけだね。

## 第2話 新しい仲間（後書き）

すみません。なんだか中途半端なところで終わっている感じなのですが、2話は終了です。

そしてトウコは2匹目ゲット。彼女は、イツシユリーグ後まで、ラルトス以外はイツシユ縛りでいこうかなと考えているので、水タイプは貴重です。初心者なので、バトルもこの具合がちょうど良いかと。



### 第3話 対決！ ジムリー……え？

「着いた！ ここがシッポウシティだ！」

あれから、あそこら辺から一番の最寄りということで、シッポウシティに案内されたわたしたち。

どうやら2番道路から三角形でいう斜辺に当たる部分を通り切ってこの町の近くにいたみたい（昔は街道のようなものが通っていたっばいけど、サンヨウシティを通る方の人の流れが大きくなって、今はだいぶ廃れていたけど、でもそこそこの道でした）。

このシッポウシティは観光ガイドによると『100年ほど前の倉庫が再利用され、活気づく町』と銘打たれている。

実際、古い倉庫や機関車の線路跡など、昔の町並みをこの町は残している。

「元々は倉庫街だったらしいね。隣りにヤグルマの森があるとはいえ、スカイアローブリッジのような大きな橋がかかるほどの河川があるんだ。海上輸送の拠点としてはちょうどよかったのかもしれないね」

「そんなところに何人かのアーティストが来たと。なんとというか随分と奇特な人たちですね」

「まあそういう人種はどこか普通の人の感性とは変わってるものというのが世の常だな」

ただ、その奇抜な人たちが倉庫をオシャレに改造したら、それに釣られてだんだんと住民が増えていったとか言われているらしい。

「じゃあ、この町のジムがどこにあるか一旦確認しておこうか。もうすぐ夕方だし、ポケモンセンターにも寄らないといけないからジ

△戦は明日以降だろうしね」

「はい！」

わたしはこの町に来たことがなく、どこにジムがあるのかは知らないけど、ユウトさんの案内でどんだん町の中を進んでいく。

聞くと、この町に何度も立ち寄ったことがあるらしいため、この町をめばしいものはだいたい知っているとのこと。

尤も、わたしからすれば勝手知ったるなんとやらといった風に、まるで元からこの町出身です言わんばかりに見えてしまった。半歩先に行く彼。

そのほんのわずか手を伸ばせば彼の右肩に届いてしまいそうな、そんな距離にあるユウトさんの背に視線をやりつつも、それを他に向けてみる。

近代的な建物もチラホラ目には付くけど、殆どは、彼が『倉庫街』と言ったが、外見上は本当に『元倉庫』といった感じの建物ばかり。

「この町は考古学の研究も盛んなんだ」

考古学ってというと昔のことをよく知るための学問（で合ってたっけ？）。

「は、温故知新なんて言葉がありますけど、それを実践してるって感じなんですかね」

「意識はしてないんだらうけどね。で、ここがその最たるところ、そしてここにイツシユ地方を代表するポケモンジムの1つ、シッポウジムがある」

そうして案内された場所は――

「え？　ココにジムがあるんですか？」

その外観からはどうにもここにポケモンジムとは思えなかった。どちらかというと、

「博物館の方がしっくりときますが？」

石造りのゴシック建築なそれは正に『古くからある時代を感じさせる博物館』という様相を呈していた。

「うん、まあ実際は博物館も兼ねてるからね。何しろこの町のジムリーダーはジムリーダーであると同時に、この博物館の館長でもあるから」

「はあ。つまり、博物館館長とジムリーダーの二足の草鞋わらじを履いてるわけですか。すごいですねえ」

「この地方のジムリーダーはジムリーダー以外の仕事にも就いてるからね。思わぬところにジムがあるって場合もあるから、知っておいた方がいいよ」

ユウトさんが言うには、レストランや遊園地の中にジムがあったり、掘削現場となる地下にジムがあるといった場合もあるそうで。

「なんていうか、変わり種過ぎですね」

「まあそうだな。さて、ジムも見たことだし、ちょっとあそこに寄っていかないか？」

ユウトさんの指差す先、そこには――

「『カフェ ソーコ』、ですか」

そんな木製の看板が掲げられたこの町特有の倉庫を改造した建物。だけど、オシャレさはひょっとしたらこの町一番かもしれない。

その建物の傍にはテラスが設けられ、まるいテーブルにデッキェア、その上をパラソルが覆うというような形で、外での飲食も可能としている。

ちょっとした花壇も各テーブルの周りに配置され、そこには綺麗な赤い花が咲いていた。

いい感じに時代を経て味を出す木造製の元倉庫に、同じ色目の木材を使ってつくられたテラスを初めとして、効果的なインテリアの数々はオシャレさと同時にどこか心地つかせる、そんな気がした。カランカランというドアベルの音とともに中に入ると、大きな開放感を感じる。

どうやら2階部分まで吹き抜けみたいになっているらしい。さらに地下への階段もあるが、地下を覆う屋根もなく、階段以外はただ1階からの転落を防ぐ木製の手すりがあるぐらいだった。

「いらつしゃい。あら、久しぶりね」

「ども、ご無沙汰してます」

「ラル〜」

ユウトさんとラルトス（ずっと彼の肩に乗ってました）はカウンターの中間にいる美人さん（たぶんこのお店のマスター。他に従業員らしき人は今は見当たらないし）と顔見知りみたい。

「いつものにする？」

「ええ、それで」

「ラルラルト〜」

「はいはい、ラルトスもね」

うん。

どちらかという顔見知りというよりは常連さんですね。

あ、わたしはミックスオレを頼みました。

で、空いている適当なカウンター席に2人で並んで腰を落ち着けてから、ほどなくして

「はい、おまちどうさま」

まずわたしのミックスオレが届けられた。

「ところで、ユウト君はまたアロエさんのところで調べ物？」

「ん、最初はそうしようかと思ってましたけど、今は違います」

「ふうん、じゃあ、隣りのかわいい女の子関連かな？」

「さあ、どうでしょう？」

ユウトさんはマスターの言葉に何も動じず、返している。

お、大人だなあ。

わ、わたしなんて、か、かわいって言われただけなんだけど、ちよつと顔が熱くなっちゃった。

でも、ユウトさんは本当に何も感じてないっばいけど、わたしってそんなに魅力ないのかな………っていったい何を考えているんだわたしは！

「そんなこと言っというてヒカリちゃんやシロナに知られたらどうするのよ？」

「大丈夫ですよ、彼女たちなら」

「まあ、ほどほどにしときなさいよね。フラグ男」

「いや、そこまでは……」

「いやいや、いい加減自覚しなさい」

……ヒカリっていう人にシロナって人は誰だろう？

ユウトさんの知り合い？

何か気になるなあ。

「ああ、そうそう。今日は水曜日だから、これはサービスね」

その話はおしまいとばかりにマスターがサイコソーダをもってきた。わたしはそれを一気に半分以上飲み干した。ふう。

あ、ユウトさんのラルトスがストローで飲む姿はなんというかムチヤクチャ愛らしいなあ、思えたくらいなんだから、これで若干ほてりは取れたかなっと思う。

さらにサイコソーダの他に

「あの、この箱は何ですか？」

ユウトさんの言葉の通り、わたしたちの目の前には何の変哲もない箱。

いや、上部に穴があいていてそこから腕を入れることは出来そうな真っ白い箱。

「いやね、このカフェも開店してからもうすぐ10年になるのよ。で、いま、ありがとう感謝記念ってことで、くじを引いてもらってそこに書かれているアイテムをプレゼントしちゃうっていうキャンペーン中なの」

「なるほど。ということはオレたちも引いても？」

「もちろんよ。ただ1人1回ね」

そういうことなら遠慮なく引いちゃおう。

ということ、箱の中に腕を入れ、くじを1枚取り出す。  
ユウトさんもわたしの後に続いた。  
くじは三角に折られていてそれを開くと

「あ、わたし、水の石って書いてあります」

「あら、あなたそれ大当たりじゃない！ よかったわね！」

「そうだな。水の石ならヒヤップを進化させることも出来る。実用的な当たりだな」

やっぱり当たりなんだ！

ラッキー！

「ユウトさんはなんだったんですか？」

「ルトー？」

「オレは“ねらいのまと”って書いてある」

ねらいのまと？

いや、そんなの全然聞いたことないんですけど。

「あら、そんなの入ってたんだ。知らなかったわ」

いや、それはマスターとしてはどうなんでしょう？

自分のお店でやってることなのに。

「何が入ってるか把握してなかったんですか？」

「だって私だけではなくて従業員全員で用意してるのよ。おたのしみってこともあるから全部は把握してないわ。で、それってどんな効果のあるアイテムなの？」

「たしか『持たせたポケモンが受ける技のタイプ相性のうち、『効

果がない」を無視されるようになる『っていう感じだったかな。具体的にいえばゴーストタイプにノーマルタイプの技は全く効かないけど、ゴーストタイプにこの道具を持たせれば、ノーマルタイプの技が当たるようになるっていうふうだね」

え？

なんですか、それ？

それって道具の意味なくない？

だって、ポケモンに持たせられる道具ってバトルを助ける役目になるはずなのに、それじゃあデメリットしかないじゃない。

「マスター、それ思いつきりハズレアイテムじゃないですか？」

「そうね。そんなアイテムはさすがにどうかと思うけど」

わたしたちの話が聞こえていたらしい2席隣りに座っているエリートトレーナーの男女も会話に加わってきた。

他にも聞こえていたらしいどこぞのおじさんたちも揃って苦笑いを浮かべている。

「そうよねえ、さすがにそんなアイテムはまずいわよねえ」

「いえ、オレは別にかまいませんよ、これで」

でも、ユウトさんはいたってそんな様子はなく満足している。

「でもねえ、そんな欠点しかないアイテムじゃさすがに……。あ、じゃあ特別にもう1回引かない？」

「いえいえ、ホントにこれでかまいませんって」

「いいのいいの！ キミの場合は特別よ。ほおら、早く！」

H u r r y H u r r y ! と急かすようにマスターがカタカタと箱



を揺さぶる。

ユウトさんは「やれやれ」とそれに苦笑いしながらも、もう1回力  
サカサと紙がこすれるような音を立てながらくじを引いた。  
そして、くじを開く。

「今度はどうでしたか？」

この店にいる全員がユウトさんに注目する。

「うん、“だっしゅつボタン”って書いてあるね」

だっしゅつボタン？

またまた初めて聞くような名前のアイテムだ。

「そのアイテムの効果は何なの？」

先程と同じように代表でマスターがその効果を聞く。

「だっしゅつボタンっていうのは『持たせたポケモンが技を受ける  
と強制的に交代する』っていう道具です」

うん……。

「またなんともビミョーなアイテムね……」

「私、一応エリートトレーナーやってるけど使いどころがさっぱり  
思い浮かばないわ」

「ぼくも」

周りがさっきより一段とユウトさんの引いたアイテム、そしてクジ  
運のなさ苦笑いを浮かべていた。

かく言うわたしもその1人なのは言うまでもない。

「まあ何度も言ってますけど、オレはこれで全然かまわないですよ、ホント」

それでも、本人は気にせず　むしろ一段と満足したような　そんな表情を浮かべていた。

「はあ、あ、キミのクジ運のなさには同情するわ。今回は一段とサービスしとくね」

そうマスターはくじの箱を閉まって、その場を締めくくった。

「別にデメリットだけじゃなくて『ここ』なら最強の一角にもなることもありそうな持ち物なんだけどなあ」

そんな呟きが聞こえたのはきつとこの場でわたしだけだろう。

翌日。

「キダチさん、ご無沙汰してます」

「ラルラ」

「やあやあ久々だねえ、ユウトくん。ラルトスも元気そうだ」

博物館に行くと、すぐさまこの男の人と出会った。

フレームの下半分が黒ぶちの眼鏡をかけた優しそうな人。

「紹介するよ、この男性がこのシッポウ博物館の副館長をしているキダチさんだ」

「よろしくね」

「はい。わたしはカノコタウンのトウコっぺいいます」

「そうかそうか。ところでキミはユウト君の助手かな？」

は？

助手って？

「いえいえ、違いますって。オレは彼女の付き添いで、彼女はアロエさんに用があるんです」

「ああ、そうかそうか。最近は考古学の件ばかり、ここに来るからてつきりね。うんじゃあ、せっかくだから僕が案内しよう。いいよね、ユウト君」

「ええ」

そうしてキダチさんがわたしたちを連れて博物館内の各所に展示されている展示品を案内してまわった。

「隕石とかドラゴンポケモンの骨格標本とかすごいですね！」

「それがこの博物館の売りだからね。」

「いろいろあるんですねえ。あつ、あれはなんですか？」

そこにはなんだか古そうではあるけど、とてもキレイな石が展示されていた。

今まで宇宙の神秘を想像させる隕石や、カイリユーやアーマルドのような全身骨格の標本があったりと、スゴイものが展示されていたから、当然これも期待が高まる。

「ああ、それはただの古い石です」

「……………え？」

「砂漠辺りで見つかったのですが、古いこと以外には全く価値がなさそうなものでして……………。ただ、とてもキレイですので、展示しております」

「あ、そうなんですか……………」

なんだろう。

なんとなく、ガツカリしたような釈然としたような。

これを展示しようと思った人に若干聞いてみたくなったりもした。

そう思っていたところで、キダチさんが足を止める。

目の前には中2階へと続く一見豪華なお屋敷にでもありそうな階段が目についた。

階段の先には銅像　ポケモンリーグ関連施設を指し示す　が厳かに立っていた。

「この先ポケモンジムとなっております。一番奥で強くて優しいジムリーダーが待っています。ちなみにジムリーダーのアロエは私の奥さんなのです！」

「あ、それ知ってます」

わたしのその言葉にその後しばらくキダチさんは肩を落としていた。なんでも、毎回毎回トレーナーの驚く顔が見てみたかったとのこと。意外にオチャメな一面もあるんですね、キダチさん。

その階段を上った先の奥の部屋で、女の人と会った。

「アタシがシッポウシティ、シッポウジム、ジムリーダーのアロエだよ！ よろしく！」

エプロンの似合うキレイな女の人だった。

というより、何だか“肝っ玉お母さん”という感じの安心感がある。

「さて、ジム戦でことideいいんだね？」

「はい！」

とにかく一度挑戦！

もし仮にダメなら何度でも鍛え直して挑めばいい。

絶対勝ってバッジをもらう！

わたしのポケモン、ラルトス、ヒヤップも気合十分だ。

「ジャッジはこの不肖キダチがしましょう。それでは、ルールの確認です！」

・バトルは2VS2のシングルバトル

・道具の使用はなし、ただ持ち物（ポケモンに持たせる道具）の使用はあり

・ポケモンの交換は挑戦者のみOK

つまりはわたし

そしてキダチさんが提示されたルールは以上の3つ。

「さて、トウコ！ アンタの相手はアタシ、アロエがやる……つもりだったんだけどね」

アロエさんは、なにやらキダチさんの隣、つまり、審判の立ち位置から一歩も動こうとしない。

？

え、どういふこと？

「アロエさんがバトルをやらないんですか？」

「あたしじゃないね」

え、意味がわからない。

「ジムリーダーが相手せずにジム戦なんて出来るんですか？」

「できるさ……」

わたしの声に答えたのは、昨日出会って、でもさんざんお世話になっている声。

もう耳に記憶してしまった声。

その声の主は

「オレがキミの相手だ、トウコちゃん！」

「ユウトさん!?!」

いつのまにかフィールドの対戦者が立つポジションに立っていた  
ユウトさん。

そしてキダチさんがバトルフィールドのあるホール全体に響き渡る  
ような声を張り上げた。

「それではこれより、シツポウジム臨時代理ジムリーダーユウトと  
挑戦者トウコのバトルを始めます!!」

### 第3話 対決！ ジムリー……え？（後書き）

なんだろう。書いていて思ったけど今までとはまるっきり違うような。

一応おことわりしておきますが、今までの話もこの話もすべて同一人物が書いていますからね。

ちなみにユウトが零した『ここ』とはこの世界という意味です。ただ現実においては結構わかりやすかったり。



## 第4話 立ちはだかる壁

「安心しな、トウコ！ ちゃんとアンタがアタシやユウトを認めさせることが出来たらジムバッジはアンタのもんだからさ！」

うーん、ジムリーダーがああ言ってるから良いの、かな？

でも、気になるのは、ジムリーダーに『あそこまで言わせてしまうユウトさんって何者？』っていう感じの方が強いかも。

「さてトウコちゃん、まずキミが相手をするのはこの子だ」

ユウトさんは構わず、持っていたモンスターボールを、掬い上げるように宙に放り投げる。

放物線を描くような軌道で、その頂点のところで、パカリとボールがその大口を開ける。

中からは白い光が、泉が溢れ出すかのように現れ、それがフィールドのある1箇所に注がれた。

ポケモンがボールから出てくる前兆だ。

そして現れたポケモンは

「タブンネタブンネ」

ポケモンセンターのジョーイさんの看護師としてイッシュでは有名なポケモン、タブンネ。

『お預かりしたポケモンはみんな元気になりましたよ』

『タブンネー』

『いつでもいらしてください。お待ちしております』

『タブンネー』

といった皆が信頼するジョーイさんの仕事を「タブンネ」の一言で台無しにするのはイッシュのポケモンセンターでは当たり前な光景として定着している。

『タブンネ ヒヤリングポケモン

桁外れの聴力を持つ。微かな音で周りの様子をレーダーのようにキャッチする。また、耳の触覚で相手に触れると心臓の音で体調や気持ちかわかる』

凶鑑をかざすとそんな電子音声が聞こえてくる。

「ちなみにだ。ここはノーマルタイプのジムだから、オレの残りの1体もノーマルタイプ。ついでに言えば、飛行タイプも入っていない」

なんでも、ノーマルタイプには飛行タイプを併せ持つものも数多くいるみたいだけど、それらもなく、全員が地に足をつけているものだけみたい。

初心者わたしでも、飛ぶ方に対して、飛べない方が対処していくのが、相当難しいことぐらいはわかる。

その点の心配がないのはわかるけど、でも、あくまでそれだけ。気を引き締めていかない！

わたしは一際新しいモンスターボールの方に手を掛けた。

そうして腰のボールポケットから取り出したそれをサイドスロー気味にフィールドに投げつける。

「わたしの一番手！　いくよ！　ヒヤップー！」

ボールからは、ポンッ！　という音と共に、

「ヒヤッ、ヒヤッ〜プ！」

ヒヤップが元気な姿で躍り出た。捕まえたばかりのこの子だけど、威力の高いハイドロポンプを使える。

さらには、ノーマルタイプに有利な、ローキックやいわくだきといった格闘タイプの技なんかも使えるようなので、先発としては十分（ちなみに使える技についてはタベに、ユウトさんと一緒に確かめました。ラルトスについてもです）

「用意はいいですか！？ では、試合開始！」<sup>バトル</sup>

キダチさんの掛け声と共に振り下ろされた手がバトルの開始を告げた。

「先手必勝！ ヒヤップ、ローキック！」

「ヒヤ！ ヒヤヒヤヒヤヒヤ〜！」

トウコちゃんの指示を受け、突進してくるヒヤップ。

「タブンネ、ねがいごとだ」

「タブンネ〜」

オレのタブンネは両手を組んで、まるで何かに祈るような仕草を見せる。  
直後、タブンネの頭上に流れ星のようなものが煌きながら流れていった。

「よし、ねがいことは成功だな。さらにめいそうー！」  
「タツブン」

そのめいそうを決めている間にヒヤップはタブンネに接近。

「ヒーヤップ！」

そしてまるで回し蹴りにも似た雰囲気のローキックを繰り返した。

「タブンネー！」

蹴られたタブンネはフィールド上を、仰向けに滑空することく吹き飛ばされる。

「起きろ、タブンネ！」  
「タアブンネ！」

しかし、タブンネもそのまま流されず、クルツと1回転して、足からのきれいな着地を決めた。

「まだまだ！ 追撃するわよ、ヒヤップ！ いわくだき！」  
「避ける、タブンネ！」

タブンネに追撃を入れるべく、追いつがっていたヒヤップのいわくだき！

「ヤップ！」

「タブンツ！」

しかし、ローキックの追加効果により、動きの鈍っていたタブンネは避け切ることが出来ず、直撃を受けて体勢を崩す。

「もう一発！ いわくだき！」

「ヤアツプ！」

さらに追撃とばかりに、トウコちゃんはいわくだきを指示し、ヒヤツプは拳を振りかぶる。

しかし、あたかも酔拳のごとくフラフラとタブンネが体をひねったことにより、文字通り、岩をも砕くエネルギーを貯め込んだ赤く光る拳は、空振りに終わった。

「ヒヤツプ！ その勢いのままにローキック！」

ヒヤツプは空振りした勢いを利用してその場でクルリと横に1回転。

そして遠心力も合わさったローキックが、タブンネに決まった。

「タツ、ブンネ！」

タブンネは今度は吹き飛ばされることなく、しかし、そのローキックの勢いも殺すこともすぐには出来ず、ズザザザと足がフィールドを擦っ<sup>す</sup>っていたため、タブンネの近くには少量の土煙が上がっていた。

「うん。ローキックの威力といい、ハイドロポンプを使えることと

いい、なかなかレベルの高いヒヤップだね。おまけに捕まえたばかりなのに、トウコちゃんとの息もピッタリだ」

昨日、少し手ほどきをしただけなのに、捕まえたばかりのポケモンの力をここまで引き出せるのはある種の才能だ。オレでさえ、ここまでは難しいかもしれない。

「ありがとうございます！ ヒヤップ、このままガンガン行くわよ！」

「ヤップ」

勢いづくのはいい。

けども、やはり初心者。

知識が圧倒的なまでに足りていない。

おまけに攻撃技だけで補助技の一つも使わない。

ここはひとつ、彼女のために洗礼を施そうか。

「トウコちゃん、ポケモンバトルはそううまくはいかないよ。オレのタブンネ、よく見てみな？」

するとどうだろう。

タブンネの周りに、宝石が光を反射したかのような輝きを持つ緑のキラキラした光が現れた。

「い、いったいなんなの!？」

「うん、グッドタイミングだ」

彼女の顔色は、驚きの中に訝しんでいるようなものが、見て取れる。彼女からすれば、口許がややつり上がっていそうなオレの顔色から、オレが計略を成功させたととっているに違いない。

「タブンネ」

そしてその光は、ヒヤップのローキックによって受けたダメージを回復させていく。

タブンネの声から判断するに相当心地いいのだろう。

「ウソでしょ!?!」

一方やはりトウコちゃんの方は、今度は驚き一辺倒に塗り替えられる。

まあ、そうだろう。

タブンネは今現在は何もしておらず、それなのに、ダメージが勝手に回復していくのだから。

「ねがいごとっていう技があるんだ」

「ねがいごと?」

「そう。この技は一定時間経過後に、受けたダメージをある程度回復させるという効果がある」

時間差のある回復技だから、こういった「ダメージを負ったから回復する」という行動を取らなくても済み、その「回復する」という行動を別の行動に置き換えることも可能になるというメリットがある。

ちなみに、タブンネは種族値的にはもともと耐久が高く、努力値も耐久よりに振ってあったおかげか、様子を見てみると、弱点技を3回も受けたとはいえ、ほぼ全快の4分の3ほどまでは回復しているようだった。

「でも、ローキックって確か素早さが下がるんですよね!」

「まあね」

「なら、まだわたしの優勢ですよね！」

確かにトウコちゃんの言うとおり、タブンネのもらったローキックという技は相手の素早さを一段階必ず下げるといって追加効果がある。それをタブンネは2回受けたため、タブンネの素早さは元の素早さの半分になっている。

だから、彼女の言うとおり、完全に五分に戻したわけではないが

「発想の逆転だな」

前提条件が異なれば、そんな要素はいとも容易くひっくり返る！

「タブンネ、ここからオレたちの反撃を始めるぞ！」

決める、トリックルームだ！

直後、周りの時空が歪み始める

「な、なに？ いったいなにが起きたの……？」

わたしたちの目の前、そこにはフィールド全体を包み込む限りなく



透明に近く、しかし波打つように少し揺らめいている奇妙な空間が広がっていた。

「ヒヤ？ ヤーッブ？」

ヒヤッブは突然わけのわからない空間の中に入ってしまったているせいか、辺りをキョロキョロと、そして自らの手なども見まわしている。

「さて、トウコちゃん」

そんな中、やっぱりというかユウトさんもユウトさんのポケモンもいたって冷静に落ちつき払っている。

「さっき言ったよね、『ポケモンバトルはそう簡単にはうまくいかない』って？ それを今から披露してあげよう。タブンネ、ヒヤッブに接近だ！」

指をパッチンと鳴らすと同時に、タブンネは猛然とヒヤッブに走り寄ってくる。

「くっ！」

これはユウトさん、何か企んでたってことかしら！？  
マズイけど、でも！

「なにかはわからないけど、そうそううまくはいかせませんよ！  
ヒヤッブ、ハイドロポンプ！」

2体の間はわずかに距離が離れている。

接近しての攻撃もいいけど、何をしてくるのか分からない以上、離れていた方が何かといいハズ。

ただ、わたしのヒヤップはハイドロポンプ発動までにどうやらほんの少しのタイムラグがあるみたい（それは、ユウトさん曰く、今後のトレーニングで改善していった方がいいみたい）。

でも、それと引き換えに最高威力での攻撃が出来るなら！

「タブンネ、避ける！」

「タブンネ！」

すると、その言葉に従ってタブンネはいつもアツサリとハイドロポンプをかわした。

「うそッ、なんで！？ さっきまでとスピードが全然違うじゃない！」

先程まではヒヤップの方が明らかに素早くて、おまけにローキックで相手の素早さは下がっているハズだから、こっちの攻撃が当たらないはずがない！

「ヒヤップ、今度はみずでっぼう！ 連射よ！」

「ヤップ！ ヤアアップ、ヤアアップ、ヤアアアップ！」

威力ではなく、技の繰り出す速さで勝負の、連続みずでっぼう。でも、タブンネにはあたららない。

「なんで、どうして……！」

そうこうしている内にタブンネはヒヤップに接近して

「そのまますてみタックル！」

「よ、避けるのよ、ヒヤップ！」

でも、あんなにも攻撃をアッサリとかわし続けたタブンネと、かわされ続けたヒヤップ。

どちらに軍配が上がるかは

「ヤアアアッ！」

明確だった。

重たい一撃を食らって吹き飛ばされるヒヤップ。

「とどめだ、タブンネ！ チャージビーム！」

今度はさつきとは逆にあちらが追い討ちとして仕掛けてきた。

でも、ヒヤップはまだあの技の影響から脱し切れず、これを避ける手段なんかない。

そして

「ヒヤップ、戦闘不能！ タブンネの勝ち！」

わたしは「お疲れさま」と声をかけつつ、ヒヤップをボールに戻すしかなかった。

「ラルトス、戦闘不能！ これにより挑戦者トウコのポケモンがすべて失われたため、このバトル、臨時代理ジムリーダー、ユウトク

んの勝ち！」

そのとき、キダチさんの声がフィールド内に響き渡っていた。

わたしはもはや呆然とするしかなかった。

バトルはその後はもう、『一方的』というしかなかった。

ラルトスも向こうの素早さと高い攻撃力に終始翻弄されていた。

ふと、目の前に広がっていた奇妙な空間が今、まるで溶けてなくなるかのごとく、消えていった。

そういえば、さっきのフィールドを覆う奇妙な空間が現れたかと思うと、何もかもが変わったんだっただけ

「さて、どうだったかな？」

いつのまにフィールドを横切ったのか、ユウトさんが目の前にいた。

「なんとというか……。とにかく、ユウトさんがすごかったとしか……」

「そっ?」

「はい。あんな状況からあそこまで完膚なきまでに逆転されるなんてビックリです。たしか“トリックルーム”っていう技でしたっけ、あそこからですな? なんていうか、バトルの“前提”みたいなのがひっくり返った気がするのですが?」

「ほう……! うん、そうだね。よく“それ”に気がついたものだ」

ユウトさんは一瞬目を見開いた後、なんだか嬉しそうに目を細めて解説してくれている。

トリックルーム。

ポケモンのパラメータ(?)の一つに『素早さ』というものがある

らしい。

そのパラメータはいかに速く動けるかや、技を出すまでの速度に関係してくるのだとか。

当然、相手より素早さのパラメータが高ければ、相手より速く動くことが出来て、相手の技も避けやすくなるなどの恩恵もある。

しかし、このトリックルームは『相手との素早さの効果・関係を逆転させる』という技らしい。

つまり、通常は『相手より速ければ速いほど、速く動ける』という“前提”を『相手より遅ければ遅いほど、速く動ける』という関係に引っ繰り返すというものなるほど。

それなら、それまではスピードで優っていたヒヤップが、それ以後、タブンネを捕えることが出来ずに、さらにローキックの影響で余計に素早さの差が開いてしまっていたため、ラルトスも追い切れなかったってことね。

……なんだか負けたのがあっさり納得してしまった。

「知らなさ過ぎですね、わたしって」

ポケモンのことに関して何もかも。

少なくとも、トリックルームに関して、その技の効果を知っていれば何か対処法があったのかもしれない。

でも、やっぱり

「くやしいなあ

」

負けたのには納得した。

でも、やっぱりくやしかった。

少なくとも、わたしにもっと知識があれば、もっと別の展開にもっていったかもしれない。

勝つことも出来たかもしれない。

「でもま、それに心底気づけて良かったんじゃないかな。知識なんてこれからいくらでも蓄積させていけばいいしね。オレがコーチしよう」

「ほ、ホントですか!？」

「ああ!」

「よろしくおねがいします!」

「ちょっと! なんだかいい話にまとまっているようだけど、ユウト! アンタはジムリーダーとしてはてんでダメみたいだねえ!」

そこにアロエさんも加わった。

アロエさんは何やらユウトさんに「初心者にトリックルームを使って一方的な展開にもっていくなんてどうかしてるね!」とか「もっと挑戦者をいろいろと試すようなことをやってくれないと! ただ、バトルしてるだけじゃダメさね!」といった感じになにやら不満が相当あつたらしいけど、わたしは気にせず、ユウトさんに「お願いします!」と頭を下げていた後、今後の旅への期待に胸がいっぱいであつた。

と同時に、『この人を目標としたい』、そしていずれ

この人を越えていきたい !

そう強く意識した。

ピロリローリロロロー、ピロリローリロッ

ふと近くで、2種類のライブキャスターの呼び出し音が聞こえた。見てみると、それはどうやら、アロエさんとユウトさんのもの。

「わかりました、2人ともわざわざありがとうございます」

「こっちの用事は今ちようど終わったところだからいいタイミングだね！ 待ってるから、早くおいで」

通話自体はこんな感じですがすぐ終わったけど、その後のアロエさんの言葉が意外過ぎた。

「さて、シッポウジムジム戦、第2部といこうか！」

## 第5話 目指すべき頂き（前書き）

おそろくこれが年内最後になります。みなさま、よいお年を。



## 第5話 目指すべき頂き

「アロエさん。なんかあたしもお呼ばれされたらしいので、来てみましたーって、なんでここにユウトさんがいるんですか!？」

「お久しぶりですね、アロエさん。それにユウトくんも。あら、その子はどなたかしら？」

アロエさんがまたジム戦を始めると言っすぐ、といったそんなときに、入口の方から上がった2つの声。

振り向くと、わたしより幾分年上のようなお姉さんというべき女性が2人いた。

一方の背が幾分低い女性は、モンスターボールらしきものが描かれた薄緑色のバンダナを頭に巻いていて、そこからこぼれおちる特徴的な紺の髪は透き通るようにきれいだった。また、それだけでなく、黒のスパッツに身体にぴったりフィットするオレンジを基調とした上着は、その女性のスタイルの豊かさと共に活発さを表しているかのようだった。

もう一方の女性はイメージカラーは黒だと言わんばかりに、黒のロングコートを羽織り、黒のベルボトムを穿き、黒いハイヒールを履いている。コートはその豊かな胸が圧迫されるのを拒むがごとく、胸元が開いている。さらに、膝まで届くような長さで、向こう側が透かして見えるほどの金糸のごとくの髪を特徴的な髪留めでとめていて、それがアクセントとしてはとても映えていた。

「ヒカリちゃん、久しぶり。それにありがとうございます、シロナさん」

ヒカリにシロナ。確か聞いたことがある。

「で、ヒカリちゃん、その格好はなに？」

「いつも同じなのはつまらないので、ちょっとハルカさんを意識した服装にしてみました。どうですか？ 似合ってますか？」

たしか昨日『カフェ ソーコ』でマスターの言ってた人だっけ…

…。

「うん、よく似合ってるね」

「わぁ！ ありがとうございます！」

「あら、ユウトくん、私には何か一言ないのかしら？」

「もちろんシロナさんもいつも以上にイイですね」

……なんだろう、しばらくぶりの再会って感じで楽しそうなんだけど、あんまり見てなくないな。わたしってば、いつからこんな感じになっただろ……。

「ハイハイ！ いちゃつくのもいいけど、とつととジム戦やるよ！」

すると、手をパンパンと叩きながら、アロエさんが彼らの中に割って入っていき、空気を変えた。入れ換わった空気にわたしは少しホッとした。

「えっ？」

アロエさんがわたしの方をチラッと見てウインクを送ったのが見て取れた。

わたしは思わず、その心配りに感謝した。

さてさて、今後のトウコちゃんのためにと仕組んだ今日のジム戦。最初のオレとトウコちゃんとのバトルは、『自分の持っているポケモンの知識が、いかに足りていないかを強く実感してもらおう』ため。これに関してはうまくいった。おまけに、上手い具合にトウコちゃん自身の観察力の高さといった、彼女の才の一端も垣間見ることが出来た。

続いで第2戦目。これは、いわゆる世間一般でいう“ハイレベル”に該当するバトルを見せるため。そして願わくば、ここ、あるいはそれ以上を目標に据え置いてほしい。

それらを望んで設定したバトル。相対するトレーナーあいたいの位置には、いつもの格好のシロナさんに、ハルカさんの格好（分かりやすくいえば、ポケモンエメラルドの主人公の格好）をしたヒカリちゃん2人とのダブル（タッグ）バトルはおそらくシンオウと一緒に旅してきた以来。というよりも2人とのバトル自体、久方ぶりな気がする。

直接オレに師事されたのは彼女らだけ。

なので、トウコちゃんに魅せる以外にも、いったいどれほど彼女らが実力を伸ばしてきたのかも気になるところ。

ちなみに2人とのバトルのためにポケモンの入れ替えを少しばかり行った。

「ではこれより、シッポウジムジム戦、第2戦目、ヒカリ・シロナVSユウトのタッグバトルをはじめます！」

わたしはフィールドの中央、さらに、ジャッジであるキダチさんの顔が見えるような、観客席の中央に移動した。フィールド全体をよく見渡せるようにするためだ。

「ねえ、ここいいかしら？」

その声はわたしの頭上にほど近いところで聞こえた。

「こんにちは。ね、隣りいいかしら？」

見上げると、モンスタースポールが描かれた白いニット帽の両脇からこぼれおちるダークブラウンの髪に、紺のノースリーブにピンクのミニスカート、首元に巻かれる赤いロングマフラーが目につく女性が見えた。

「ええ、どうぞ」

「ありがとうございます」

特に誰か来る予定なんてないので、遠慮なく勧めた。

「わたし、ハルカ。よろしくね」

「あ、わたしはカノコタウンのトウコって言います。この前旅立つばかりの新人トレーナーです。こちらこそよろしくお願いします」

「うん。ね、あなたもユウトやヒカリちゃんたちのバトルを見に来たの？」

「うーん、見に来たというには、やや語弊があるような？」

「ふーん、ま、いつか！ それよりもよく見ておいた方がいいかも。こんな豪華なキャストのバトルそうそう見れないからね！」

豪華って……。ユウトさんのトレーナーとしてのバトルを見るのは初めてだけど、そんなにすごいのだろうか。というか、

「そういえばユウトさんたちって何者なんですか？ 特にユウトさんなんてアロエさんの代わりに臨時でジム戦なんかもやっちゃうし」

よくよく考えてみれば、普通の人がそんなことできるはずがない。どんな人物なのかすごく興味をそそられる。

するとハルカさんは「うっそ……」と驚いた顔をしていた。尤もすぐ、「あ、そっか」と納得していたけど。

「トウコちゃんは“全国チャンピオン”って知ってる？」

全国チャンピオン。

『旅をしたすべての地方のリーグはすべて完全制覇して、チャンピオンマスターの称号を得る。』

しかし、すぐさま辞退していつの間にか忽然と姿を消す。

チャンピオンになって以後無敗で、誰をも寄せ付けないほどの強さを持つ。

そして彼が旅をした地方では、彼への憧れからバトルにおいての変化が起こる。

実際、このイッシュ地方も彼は旅をしたみたいだが、バトルの質が変わってきている。』

わたしがたしか、よく聞く話ではたしかこんな感じだったかな。でも、それがいいたいどう関係してくるのか。

「ユウトってあれよ、その“全国チャンピオン”だったりするのよ、これが」

……。

なんだろう……。

今聞こえたのって空耳よね……？

「……えつと……？」

「うん。まあ全然そう見えなさそうだけど、彼が世に名高い“全国チャンピオン”なのよ」

「……マジっ？」

「うん、マジもマジ。大マジかも」

……うん……。

吃驚仰天おどろきおぼろけとはこういうことを言うんでしょうね。

まさか、こんな近くにそんな有名な人がいたなんて……。

「でも、今のユウトさんの顔は、わたしの知ってるものではありませんけど？」

「ああ、今のあれは変装よ。彼、有名だから、周りにやたらと注目されるんだけど、そういうのがものすごく苦手なんですって。だか

ら、変装」

「……うまく化けてますねえ」

「ふふ、そうね」

「……ていつかさつきから、ハルカさんくつくつ笑い過ぎじゃないですか？」

「だって、トウコちゃんの顔が面白すぎるんだもん。笑いこらえるのがもう大変！」

ブルブルと肩が震えてそんなにアレですか、わたしの顔は面白かったと？

「そんな変顔していたつもりはなかったんですが」

「ゴメンゴメン。で、ユウトの相手の2人だけど、シロナさんはシンオウ地方のチャンピオンマスター、それから考古学の権威でもあるかな。ヒカリちゃんの方はユウトと似たような感じかな。ユウトみたいにいるんな地方でチャンピオンマスターになるけど、すぐ辞退して旅に戻ってるみたい。尤も、最近はライモンシティのバトルサブウェイでサブウェイマスターみたいなのをやってるっぽいけど」

「……なんだろう。とりあえず思ったことは、

「ごくごく一般的な、ふつうの人は誰もいないんですね」

「かもね！」

「まったく、何を言っているんです、相変わらず失礼ですね」「コンテスト荒らし」さん？ あなただって似たようなものでしょうに、「コンテスト荒らし」さん？ それに旦那はどうしたんですかあ、

“コンテスト荒らし”さん？  
「スミマセン、ハルカさん。こら、クリス、そういう言い方はないだろうが。俺たちよりも年上なんだぞ。で、ユウキさんはどうしたんですか？」

またまた知らない、今度は男女の2人組。ヒカリさんとは違う明るい青の髪が黄色いベレー帽の下から左右に跳ねている、少し毒舌チックな女の人と、それを宥める黒と黄色のキャップを逆に被り、赤いパーカーをはおる男の人。

「久しぶりね、ゴールド君。ユウキは何か今は手が離せないそうであれぬいそうよ。それにあらあら、どこの馬の骨かと思えば、礼儀も弁えず、口の利き方もなっていないこっすい猫じゃない」

「おやまあ、ボクの名前もすら出てこない様じゃやぶいぶん年老いたのねえ。それに馬なのか猫なのかはつきりしてくれませんか、お・ば・さ・ま？」

「あら、随分お安い挑発ね？ お釣りが出るほど高く買っていていいかしら？ あ、でも、釣りはそっちが取っついていいわ。どう、お得でしょう？」

ハルカさん、さっきまでとは違いますよ……。

「すまないな」

「は、はあ」

2人の言い争いをよそに、わたしに声をかける男の人。様子から察するに、

「結構苦労してるんですね」

「わかるか？」



「なんとなくですけど」

わたしたちは思わず、ため息を零した。同じタイミングだった。

「こんなので、バトルちゃんと見れるのかなあ」

少し不安だった。

「それでは、<sup>バトル</sup>試合開始！」

キダチさんの合図により始まったこのバトル。

「あたしの一番手はサクラビス！ あなたよ！」

「ニョロトノ、あなたの力を魅せなさい！」

「デスマス、ルカリオ、キミたちに決めた！」

フィールドに出揃う サクラビス、ニョロトノ、デスマス、ルカリオ 4体のポケモン。

すると、フィールド上にのみだが、ポツリポツリと円形状のシミが発生し、その部分の土が色濃く染まり始める。それらがやがて全体に広がり始め、フィールド上の土は水という半透明な液体にぬれ始めた。そしてザアーツと周りを包む音。雨が降り始めたのだ。

「なるほど。そのニョロトノは“あめふらし”なわけね」

さすがはユウトさん。造作もなく見破ってくれるわね。

尤も、今シロナさんが出したニョロトノは、バトルの前にシロナさんのポケモンと一時的に交換しただけ（というのもこのバトルは、6on6のフルバトル形式なんだけど、あたしたちはそれぞれ3体ずつしかポケモンを繰り出せない。だから、パーティに余裕があるシロナさん雨を降らせる役をやってもらったのだ）で、この子自体は、以前ユウトさんからもらった子だから知ってても当然だし。

「ありがとう、ニョロトノ。今は戻って！ ラッタ、頼んだわよ！」

シロナさんはニョロトノをボールに戻して、代わりにラッタを繰り出した。その間に、あたしのサクラビスは、

「からをやぶるよ、サクラビス！」

「なる！ デスマス、シャドーボール！」

防御・特防が1段階下がる代わりに、攻撃・特攻・素早さが2段階上がる補助技、からをやぶる。その爆発力は凄まじいものがある。これを決められるのはやっぱりユウトさんでもイヤなのか、妨害しようとしている。

けど

「ラッタ、さきどりで迎撃なさい！」

サクラビスに向かって放たれようとしたシャドーボール。

しかし、それを相手の使おうとした攻撃技を先にこちらが使ったという効果のさきどりで、見事にデスマスのシャドーボールを撃墜させる。

そして同時にからをやぶるが成功。

これで、サクラビスの能力は相当強化された。  
さらに、

「なるほど、やっぱり持ち物は白いハーブか」

そう。ユウトさんの言うとおり、この子の持ち物は白いハーブ。  
白いハーブは下がった能力を元に戻すという効果をもたらす。こ  
れで、からをやぶるのデメリットが消え去った。

でも、気になったのは“やっぱり”と言ったところ。ユウトさん  
のことだからあたしのとうとうとしている戦法を見破っているのは間  
違いないと思う。

それを積極的に妨害しないのはなぜかと思わなくもないけど、ど  
っちにしる、こっちがバトルの流れを掴んでるのに変わりはない。

「いいわ。いい具合よ、ヒカリちゃん。それにもうすぐ私のラッタ  
もかえんだまが発動するわ。そのときが好機よ」

「ハイ！ でも、今は援護をお願いします」

「当然よ、任せて。ラッタ、デスマスにちょうはつ！ その後にル  
カリオにもよ！」

うまい！

これで、こちらはほぼ安全にサクラビスにボタンタッチをさせる  
ことが出来る。

仮にダメージを食らったとしてもこの子は普通のサクラビスとは  
全然違うし、ましてや、からをやぶるをボタンさせるドールとも  
違う。

いける。今のところすごく順調だ。これなら……！

彼に勝てるかもしれない！

「ルカリオ、このゆびとまれだ！」

しかし、ルカリオのこのゆびとまれ（少しの間、相手の技をすべて自分に引きつける）により、ちょうはつはルカリオにしか当たらなかつた。

「サクラビス、今のうちにバトンタッチよ！」

そしてバトンタッチは見事に成功。

さらにシロナさんのラッタに変化が起こる。ほんのわずか数秒だけだが、全身を炎が包み込んだのだ。

「んっ！ シロナさんのラッタ、どうやらかえんだまが発動したよ  
うよ」

「ということはあのラッタの特性は“こんじょう”ですか。となると、おそらく今、流れは完全にあの2人に行っていますね」

バトルが始まる前とはまるで別人じゃないかと思うほどに、この2人 ハルカさんとクリスさんは息がぴったり合っている。

「ホントは別に仲が悪いわけじゃなくて、単にじゃれあってるだけだから」って男の人、ゴールドさんが言ってたけど、少なくともポケモンに関しては超全力投球なんだとわかった。

そうそう、バトルが始まる前に来た2人の男女はこのゴールドさんにクリスさん。ゴールドさんは元ジョウトチャンピオンマスター、

クリスさんはジョウト四天王候補と、2人ともやはり凄腕のトレーナーのようです。

つくづく普通の人がいねえ。つーか逸般人しかいねえとかどうなってるの？

と、思ってたのは最初のうち。バトルが始まってしまったら、もうそんなことはすつかりとどこぞに置いてきてしまったかのように、そのバトルに見入っていた。

いや、魅入っていた。

「ふむ。トウコちゃん、かえんだまは持たせたポケモンを火傷状態にする持ち物なんだが、なんでそんなものをラッタに　　つてやっばダメか。まあどうせ、ここに来れないみんなのために映像撮ってるからそれを後で見せればいっか」

なにかゴールドさんに言われていた気がしなくてもないけど、よく聞き取れなかった。

このバトル、それまでわたしが懐いてきたもの、見てきたもの、考えてきたもの、それらとはまるつきり一線を画していた。

同じ『ポケモンバトル』って言葉なのに、どうしてこれほどまでに違うものなのか。

わたしと彼らとの間には存在する違いは何なのか。

わたしは彼らと同じような、この今にも血が沸騰しそうなほどのワクワク感を覚えるバトルをわたしのポケモンたちといっしょに演じることが出来るのか。

わたしはただそれだけを考えていた（と思う）。

「「「「えっ？」「」「」

今にして思えば、このときだったのだらうと思う。  
このバトルの流れが大きく変わっていったのは

「よし！ ちょうはつはルカリオにしかかからなかったけど、かえんだま発動に、バトンタッチ成功！ 今が絶好のチャンスね！ ラッタ、まずはルカリオにいかりのまえば！ その後からげんきよ！」  
「ラッタッ！」

シロナさんの指示により、ラッタがルカリオに向かっていく。  
一方こちらは、

「いけるわね、ドテッコツ！」  
「ドツ！ ドツテッコツッ！」

ドッコラーの進化形のドテッコツ。サクラビスのからをやぶるを引き継いだのはこの子。持ち物がしんかのきせき（最終進化前のポケモンなら防御と特防が1.5倍）なので、進化後のローブシンよりも耐久は上。ローブシンより低い攻撃はビルドアップで補えるし、しつぺがえしがローブシンよりもさらにうまく扱える（尤も、からをやぶるを引き継いだからその必要はないし、素早さが上がったから、しつぺがえしは弱体化が避けられないと思うけど）。

さて、一気にたたみかけちゃいましょうか！

「えっ？」

「はっ？」

それはあまりに不自然過ぎる光景だった。不自然過ぎて、いや、何がどうなってるのか分からなくてと言い直した方がいいかもしれない。

いったい何が起きたか。

まずラッタがルカリオに特攻をかけた。その際、デスマスがラッタにくろいまなざしをかけていた。しかしラッタはそれを気にすることなく、ルカリオに向かって突き進む。だが、このときルカリオはしんそくで以ってデスマスを抱えるよう指示され、それを実行。そうなるこれは、いわば、ノーマルタイプのいかりのまえばで、ゴーストタイプのデスマスに攻撃するような状況。当然、不発に終わると思っていた。

だけど、成功した、ラッタのいかりのまえばが。

ノーマルタイプの技がゴーストタイプに当たった。

さらに、ノーマル技のからげんきまでもがデスマスに直撃した。

なにか。

なにかがおかしい。

「え……あ……デ、デスマス、戦闘、不能です……？」

キダチさんやアロエさんも呆気に取られている。

なにかが変わったような気がした。

特別バトル

ヒカリ・シロナVSユウト

シロナ手持ち：ニョロトノ・ラッタ（火傷状態）・残り1体

ヒカリ手持ち：サクラビス・ドテツコツ・残り1体

ユウト手持ち：デスマス（戦闘不能）・ルカリオ・残り4体



## 第5話 目指すべき頂き（後書き）

ポケモンWikiの『ダブルバトル』の項目によると  
2人のトレーナーに同時にバトルを仕掛けられたとき。

タッグバトル

こちらも相手も2人ずついる場合。

マルチバトル

ということだそうです。

とある画像を参考にヒカリとハルカの服装を入れ替えてみました。

・ヒカリ エメラルドの女主人公の格好

・ハルカ ダイパの女主人公の格好

と想像してみてください。

そしてゴールド・クリス初登場。

ただ一言

「どっつてこうなった……orz」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1655p/>

---

ポケモン世界に来て適当に(ry

2011年12月18日06時47分発行